

友人が能天気な紅白饅頭なんだがキレても良いか？

オテンテイン大明神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

轟の中学生時代にオリジナル要素ぶっ混んで馬鹿やらかす話です。

なんか高校生活を楽しみにしてくれてる人がいるっぽいので同時進行していきます。

優しい人から連載にした方が良いという意見を貰ったので連載になりました！連載になっても一話事の文字数は変えるつもりはありません！ごめんね！

目次

特別編

特別編 1年B組 引合石くん! 1

地獄の中学生生活

紅白饅頭と俺達 6

少し速めな秋模様と将来の夢 11

ファツキンモチ男 17

地獄の荷物点検 24

全校集会 30

動物園 34

お〇〇い 39

シヨートの家 44

過去編

過去編 1 50

過去編 2 57

過去編 3 61

過去話 4 68

過去話 5 73

過去話 6 80

過去話 7 86

過去編 8 90

過去編 9 95

Origin 轟焦凍 Rising 101

閉話 入試試験

入学試験 ver 引合 109

合格発表	115
祝 雄英高校ヒーロー科	
初めましての自己紹介	120
グラウンド	125
個性把握テスト 上	129
個性把握テスト下	137
昼食、ヒーロー基礎学(オールマイト)	144
戦闘訓練 チーム分け	149
戦闘訓練 上	154
戦闘訓練 中	159
戦闘訓練 下1/2	165
戦闘訓練 下2/2	171
講習会 引合くん知り合いに会う	176
H R 学級委員長 上	181
H R 学級委員長 中	186
H R 学級委員長 下	190
食堂 上	197
食堂 中	201
食堂 下	205
動乱 USJ編 チキチキ地獄絵図とキチガイ引合仕立てく魔王様 を添えてく	
バス 上	211
バス 下	217
ウソの災害や事故ルーム 1	221
ウソの災害や事故ルーム 2	228

ウソの災害や事故ルーム	3
ウソの災害や事故ルーム	4
ウソの災害や事故ルーム	5
ウソの災害や事故ルーム	6
ウソの災害や事故ルーム	7
ウソの災害や事故ルーム	8
ウソの災害や事故ルーム	9
ウソの災害や事故ルーム	10
閉話 魔王	273
閉話 プロヒーロー	277
閉話 相澤消太とオールマイト	284
ワンフオーオールを継ぐ者&地獄の体育祭	
グラントリノ	289
臨時休校 相澤消太と引合石の憂鬱	293
臨時休校 終	299
桃園の誓い (桃園ではない)	304
危機 退学 回避方法	312
特別講師 空彦	318
個性 『ハイスペック』	324
緑谷出久の恐怖 理解不能な引合石	329
馬鹿とマリモと魚と爆発小僧	333
爆豪勝己 RESTART	338
爆豪勝己 START 緑谷出久 omen	343
緑谷出久 ①	351
緑谷出久 ②	357

緑谷出久 1 / 9	③	362
緑谷出久 1 / 9	④ 闇の王	368
緑谷出久 1 / 9	⑤	372
ちよつとした間話		378
雄英体育祭 当日		383
第一種目 開幕		388
第一関門 1		394
第一関門 2 鼠の憂鬱		399
第一関門 3		404
第一関門 4	今世紀最悪の職員席	412
第一関門 5		418
第一関門 6		423
第一関門 7		431
第一関門 8		436
第一関門 9	第二関門 開幕	443
第二関門 1		451

特別編

特別編 1年B組 引合石くん！

雄英高校に合格した俺はショートと共に学校へと向かったのだが、どうやら俺とショートは別のクラスらしく俺がBでショートがAに行く事になった。

「……昼休み行くから」

クラスが離れる事により危惧していた事態が発生しそうになっていた為、笑いながらそれを止める。

「アホ。この際友達作りでも頑張ってみろ、凝山時代を思い出せ。だいたい何とかなる筈だ」

そう言いながらデコピンを1発かましてやると此方をジト目で見ながら頷くショートが出来上がった、そんなショートに手を振り俺はB組へと入っていく。憧れの高校生活、大和もショートもない。恐らくの俺のフィーバータイムでモテモテな時代が眼前で待っている。この扉を開けば、俺の樂園が待っているんだ。

「おはようクラスメイト諸君！ 俺の名前は引合石！ 今をときめく至高の大天才であり！世界が羨むちよーイケメン！ よろしく頼むぞ！」

扉を開けながら自己紹介をかまし教室を見渡す。その瞬間、俺の視界に理解し難い光景が広がっていた。

「ハハハハ！ やあ君もB組かい!? 僕は物間寧人、これから僕達でこの雄英に新たな風ヴオツ……!?!」

「……まーたコイツみたいな濃いキャラが来たのか。あたしは拳藤一佳、よろしく」

俺のテンションについてきながらも尚それを凌駕する逸材、そしてそれを手刀で抑えるツツコミ役的女子。

「うーん……心にガシツつとくるね！ 良いね！ グワーツときてガーツと盛り上がってきたよ！」

なんか擬音で喋る奴に

「朝から元気良さそうだな！　そういうの俺好きだぜ！　俺は鉄哲徹鐵、よろしくな！」

熱血系の熱い奴。他にも厨二病の体現者とかキノコの擬人化とかリアル美女と野獣の野獣がいたりした。後、ついでにポンドマンもいた。一通りのキャラは把握した、取り敢えず一言で纏めさせてもらう。

「……いけるぞお前ら！　お前らとなら天下を撮れる！　中学時代に引けを取らぬ奴らばかりだ！」

「いや。別に天下取るつもりないから」

少々野暮なツツコミが入ったが全く気にならない、一緒にいればキレキレのツツコミに成長するだろう。その時をゆつくりと待とう。クラスを見渡す、そして俺は自分の幸運に涙した。

こんな逸材が集まる環境が凝山以外にあっただろうか、涙が止まらない。コイツらとなら絶対に退屈しない学校生活が送れる。俺が先導しなくとも絶対に楽しい展開が待ってるに違いない。

一人一人性格の濃さが俺好み。叫ばざるをえない、神がいるなら感謝する。俺をここに入れた事を。

「最っ高だB組イイイイッ！　お前ら最っ高だアアッ！　俺達なら英雄に伝説を築き上げれる！　この俺が言うんだから間違いない！」

伝説と聞いてまっくろくろすけがソワソワし始める。そして急に褒められたクラスメイト達の目に悪感情は宿っていない、困惑と喜悦。それが目に見えた。

いける、そう確信し俺は声を張り上げた。

「ここにいる俺達はまだヒーローの卵！　だが！　俺達はあの最難関の壁を通り抜けたエリートの中のエリート！　つまりこの時点で俺達は優秀だ！」

そう、俺達は優秀だ、当たり前前の事だがこれを言い張るのは大切な事だ。人間ってのは褒められるのが基本的に大好きな生物だ。特別な事情を除いて褒められて嫌な奴はいない、だからこそ俺の贅辞に皆

が耳を傾けていた。本心から放たれる言葉には力がある。だからこそ俺は言葉が続ける、これから始まる伝説の為に。

「自分の力に自信がない奴がいるかあ!? いないだろう! なあ鉄哲!?!」

恐らく熱血系であろう鉄哲徹鐵、彼にそう言えば返す返事は決まり切っている。

「あつたりまえだ! 俺達は自分に自信があるしやれば出来ると思ってる! だからここに居るんだろうが!」

100点満点の回答に俺は満面の笑みを持って返事を返す。素晴らしい馬鹿だ、こういう系の馬鹿は非常に好ましい。

「生きる伝説オールマイト! 彼はここで様々な伝説を創り出した! 俺達ならその伝説を超えられる! いや超える! 俺達が超えるんだ!」

オールマイトを超える。その言葉に端の方で倒れていた物間がピクリと動いた。今のところ、このクラスで俺はお前を1番評価している。お前なら俺達を先導して面白い方向へと導いてくれる筈だ。信じてるぞ。

「俺達B組ならどんな壁だって超えられる! 目指すは体育祭! 表彰台にクラス種目! 全てを俺達で染め上げるんだ!」

俺が掲げた目標を考えたのか聞いていた者達の目の色が変わる、空気はもう完成した。後は突き進むだけだ。

「お前らアアアツ! 伝説に成りたいかアアアツ! 誰もが羨むスーパーヒーローになりたいかアアツ!」

言葉の返答は咆哮で返された。一人一人の熱の籠った声、それを超える声で俺は再び叫ぶ。熱を絶やさないように。

「声がちいせえ! お前ら天下を取りたいかアアアツ!」

俺の叫びをかき消す咆哮がクラス中を響き渡った。叫んでいない者もいるが、それにしろ全員が目が上昇志向に満ち溢れ、留まることを知らないと言っている。良く見れば倒れていた物間も立ち上がって吠えていた。最高かよお前ら

「俺達の伝説はここから始まる! どんな辛い事も悲しい事も俺達が

一致団結すれば超えられる！ 行こうぜ皆！……ここが俺達の……」
「ヒーロー『うるさく……いへっ！』」

文字通り空気が叩き壊される音がした、教台に頭を叩きつけられ意識が一瞬だけ吹き飛ばされる。誰だ！空気をぶち壊した馬鹿野郎は！

「先生が入りずらそうにしてるじゃない。ほら皆も落ち着いて席に座る座る！」

そう言われ横をみれば大きな巨体を隠して入りずらそうにしていて先生の姿があつた。申し訳ない、けど良いところだったんですので許して下さい。

空気をぶち壊した下手人。拳藤一佳はそう言いながらクラスメイトにキリキリと指示を出していく。

おのれ……あと少しだったのに
「大丈夫か引合！」

「物間か……俺はもうダメだ、正直テンションガタ落ちだ。ヤツの物理的なツツコミで半分燃え尽きた」

俺を揺さぶる物間へそう返事を返す、というかここで俺の所に来るとかお前ほんと面白い奴だな。

「なんだと……!?! おのれ…… 暴力の化身めッ！」

「駄目だ物間……奴に逆らうなッ！ 力によるツツコミに俺達は適わない。奴は俺達に対する絶対的な抑止力、つまりはこのクラスの防衛装置なんだ……ガハッ！」

まっくろくろすけが俺の言葉にソワソワしだし、ポニーテールツツコミ美少女が顔を真っ赤にして俺達を睨み付けるが俺は心を鬼にして言葉を続ける。彼女には素晴らしいツツコミ役になれる才能がある、俺はその才能を引き出す手伝いをしなければならぬ。

「拳藤一佳……まさかそんな存在だったとは……ッ！」

俺の言葉にノリながら拳藤へと視線を向ける物間。さてはコイツ他人弄るの大好きな生物だな？

俺もだ。

「物間……栄光を……掴め。俺の代わりにB組の皆と共に伝説を築き

あげるんだ」

「任せろ……僕が君の代わりにB組の皆と伝説を掴む！」

そろそろ席に座ろう。と小声で物間に言いアイコンタクトで了承を得る。へんな劇をやっていた俺達に顔を真っ赤にした拳藤が襲い掛かる。が、その瞬間に俺達は蜘蛛の子を散らすように席に座り先生が入るのを待つ。

「拳藤さん！早く席に着いてください！」

「そうだよ！全く……暴力に支配されているのかい君は？」

俺達の有難い言葉に拳藤の身体が幽鬼の如く揺れる。その瞬間、俺の意識は何処かへと吹き飛んだ。

「……あー……入っても良いか？」

「どうぞ」

「……レイザーの言う通りに引合はAにすべきだったか？」

これは俺達B組が伝説を築き上げる物語の序章、拳藤を煽ったり物間を虐めたりA組を煽ったり青春を楽しんだりする俺の人生の1ページだ。

地獄の中学生活 紅白饅頭と俺達

青い空、白い雲。こんなに天気が良いと何か良い事が俺を待ってるに違いない。素敵な彼女の出会いとか、ちよっぴりエッチなトラブルとか下駄箱のチョコレートとか屋上で待っている美少女とか。

「誕生日占いは…最悪、ついでに星座占いも最悪。血液型占いも最悪…糞以下だな」

占い結果に唾を吐き捨て学校へと向かう。今日は2月14日、つまりバレンタインデーである。男の子が大好きなこの日は今日がこの学校で最後のワンチャンス、これまでの自分を信じる。きつと叶う

「あ、あのー…良いですか?」

「うん…?どうしたの?」

後ろからの声に振り向く。その相手は後輩の女子、顔真っ赤にしなからこちらに話し掛けてくる姿は大変愛らしくでグッド。だがここでがつついたらドン引きされごめんなきいが関の山、それを知ってる俺はここで己の欲望を絶対見せない

去れ! マーラよ! お前の出番は攻略してからだ!

「これ!」

「…うん。これがどうかしたのか?」

そう言いながら俺に渡してきたのは可愛く包装された小さな箱。心の中でガツツポーズして冷静に相手の言葉を待つ、真っ赤な顔はトマトのように真っ赤になりボソボソと小さな声を紡いでいく。

「引合さんって轟さんと仲が良いんですね…?」

俺のなかで女子の口から今日一番聞きたくない言葉が飛び出してきたことに意識が半分飛びそうになりながら言葉を続けるように促す。

「それ…轟さんにわたしてくれませんか?」

「分かった。死ぬまで殴ってやるから安心してね」

「えっ…いや…あの?」

良し、あの紅白饅頭野郎。顔面ボコボコになるまでぶん殴ってやる。ついでにこのチョコはアイツの顔面に叩きつけおいてやろう。

そう心に決め俺は校門をくぐった。

一つが二つに二つが三つに三つが…と、ドンドン増える贈り物（別人宛）に今日の俺は怒り狂っていた。これは許されぬ事だ、神がいるのならばこの現実には可笑しい、神は死んだ！ついでに俺の純粋な心も死んだ！

「引合さん！これ！轟さんに！」

「分かった。キツチリ殴り殺しておくからね」

困惑する女子から糞野郎宛のプレゼントを預り先に進む。学校に入ってからひっきりなしにプレゼントを預かっている。

少し遠くにいる後輩男子が血涙を流しながらこつちを見ていたが泣きたいのは俺だ。なんでプレゼントを渡す仲介役を俺がせにやらないのか。死ぬ、死ぬとは言わんからブサイクになれ！

「おはよー引合！お前相変わらずモツテモテだなー！」

「殺すぞ大和」

「ジョーダンだつてジョーダン！こんな事で個性使うなよ!？」

今の俺に話し掛けてきた愚か者は俺の友人の一人、信条大和。簡単に説明すると明るい男だ。どうでも良いがコイツの個性は

「あの大和くん…これ。貰ってください！」

「ありがとう。大切にするよ」

「死にやがれ個性『フェロモン』」

「僻みか？うん？」

もう分かっただろう。フェロモン、異性を虜にするエキスを汗と一緒にばらまくモテ男だ。正直殴り殺したい。個性を使えばコイツを塵一つ残さないレベルで消し飛ばしてやれるというのに

「そーかそーか。大和くんはそんなに死にたいか？」

「悪かったって！早く轟に渡してこいよそれ！」

ため息を吐きながらモテ男に別れを告げこのプレゼントの受取人がいるであろう教室へと脚を運ぶ、全く不愉快だ。俺だつて顔は悪くないし性格も悪くない筈。回りのモテ男共に比べたらまだマシだと

自負しているのだが何故かモテない。

何故だ。やっぱり顔か？それとも個性か？

「うーすーうちのプリンス様はもう来てるか!？」

そう言いながら教室に入るとクラスメイトが俺の持ち物を察して苦笑いをする。そしてクラスメイトの一人が後ろの端の席で読書している紅白饅頭を指差し小声で話し掛ける。

「…それ一つ貰っても良いか？」

「取り敢えずお前が一つも貰えなかったのは分かった」

そう言うときとクラスメイトはガクリと足をつき男泣きを始める。安心しろ俺も何一つ貰えてないしそんな素振りすらなかったよ。

「…なに読んでるんだ？」

「…ん」

取り敢えずそう話し掛けると読んでいた本を閉じこちらに渡してくる。

タイトルは…オールマイトの百の言葉。今日から君もヒーローだ！か…元氣の出そうな本だなうん。

「今年もお前宛のプレゼントが来たから受け取ってやれ」

そう言い山のようなプレゼントを机の上に下ろしてやると心底嫌そうな顔をして俺に押し付けようとする。なんだこいつまじで顔面不細工になるまで殴ってやろうか

「毎年の事だけど…こんなになんか食えねえよ。石もこんなに貰ってくな」

「毎年言ってるけどなあー！お！ま！え！に！渡すように言われてんだよ！つちはー！」

「…?」

不思議そうに首を傾げる紅白饅頭の頭の中には何が入っているのかが心底気になりながら隣に座り一つ一つ開けて渡していく。

「いいから食え！そんでラブレターも読め！」

「…石にやる」

「何が悲しくてお前から施し受けなあかんのじゃ！いらんわアホ！」

俺に押し付けようとする馬鹿に中身のチョコを口に無理矢理振じ

込みながらラブレターを音読する。こうでもしないと食べないし読みもしないのは長い付き合いで良く知っている。ラブレターを音読されてる少女よ、許してくれ。

「…だとよ。返事は？」

「…甘え。茶くれ」

「うるせえ次食え次。そんでラブレターで気になったやつがいたら教えろ、キープしておくから」

「…いねえから全部やる」

「…お前さあ…せめて相手が一生懸命書いたラブレターくらいさあ…」

そう言いながら全部の箱を開封し付属していたラブレターだけ抜き取り渡す。心底嫌そうな顔をしてたが無視だ無視。残りの本命チョコの山を轟の鞆に押し込んでいく。上から嫌そうな声が聞こえるが無視して作業を進めていく。帰って綺麗なお姉さんと食べボケ

「…んで気になったやつはいたか？」

「…いや」

「はい。うちのプリンス轟焦凍様のお眼鏡に適う子は今年もいませんでしたー！知ってるかお前！これから毎日のように女子から結果報告せにやならんのだぞ！いつそ看板にでもはってやりたいわ糞が！」

「…駄目なのか？」

「当たり前だろこの馬鹿」

そう言いながら頭を小突く。すると萎縮したような顔をする馬鹿な友人を見て笑いながら言葉を続けていく。

「…まあ気にすんな。成り行きで俺がこんな事してるがお前がモテモテな以外なんとも思っていないから。

…これで大和みたいに女をとつかえひつかえしてたら殺してたかもしれないが」

「…別にモテたくてモテてる訳じゃねえよ」

「まあ！聞きましたか皆さん！この子ったらついにこんな事を言い始めましたわよ！ついに思春期到来!?!」

近所の伯母さんみたい言いながら頭を撫で回すとクラスメイト（男子）が集まり近所の伯母さんみたいな話し方をしながらもみくちやにしていく。

「まあまあまあ！うちの轟がついにそんな事を!？」

「昔は『俺に触れるな』だの『邪魔だ』だのと冷たかった轟がついにそんな事を言うように!？」

「羨ましいですわ！チョコーっ下さいませ！」

「テメエはシャー芯でも齧りあそばせ！」

そんな馬鹿な事をしてしていると予鈴のチャイムが鳴り響き30代半ばのおっさん担任がノシノシと教室に入ってくる。そしてその後ろを大和がコソコソと入り込み注意される。

「おいゴラ大和オ！モテモテなのは分かったから席に座れえ！」

「ちっ！担任が女ならワンチャンあつたんだが…」

「おら！轟の回り集まつてる馬鹿共も散れ散れ！席に座ってないやつは遅刻扱いだからな！」

その言葉にバラけていくクラスメイトに笑いながらもみくちやにされて机に突っ伏す轟。

「…おいショート」

「…なんだ？」

いかにも私不機嫌ですというオーラを出しながらこちらを見てくる姿に笑い、そういえばまだ挨拶をしてなかったと思ひ話し掛ける。

「おはよう」

「…おう」

これは超絶最強イケメンである俺、引合石様が能天気な紅白饅頭、轟焦凍。通称ショートの尻拭いをしながら一緒に馬鹿をやる物語である。

少し速めな秋模様と将来の夢

拝啓、馬鹿野郎。現在如何お過ごしでしょうか？今後ろに隠れていることは知ってますが俺は心底やってられません。何故なら俺の眼前に泣きながら俺を睨み付け女子がいるからです。

「…さいつていー」

頬に炸裂したビンは今の季節には少し早い紅葉を作り出しており、俺の頬つぺたはジンジンしています。痛いですが、なぜ俺がこんな目にあわなきゃならんのか

「轟さんに伝えてください！『貴方なんて大嫌い』だと！そして貴方も嫌いです！」

そう吐き捨てるように言いながら立ち去っていく女子の背中を見ながら後ろから心配そうに駆け寄ってくる馬鹿の気配を感じとり涙を流す。

「…今年は何と何回これを繰り返したら良いんだろうなあ…」

「わりの…大丈夫か？」

「大丈夫…うん。ぶっちゃけ痛いのは心だから個性使って冷やそうとしなくて良い」

バレンタインデーより一週間、俺の顔が真っ赤に腫れる事を約束されているのだ

「…で。今回は何と言って叩かれたんだ？プレイボーイさん？」

「ミンチにするぞモテキング」

大和、シヨート、ついでに俺で弁当を食べながら話をする。当然話題は俺の顔面だ。シヨートは申し訳なさそうに俺を見て大和はニヤニヤしながら聞いてくる。ミンチするぞお前

「…『正直に言おう。轟は君の事を知らないしどうでも良いと言っていた。残念ながら諦めたほうが』って言ったなら

『自分で言いに来ないなんて見損ないましたわ！さいつていです！』と顔面叩かれて今年初めての紅葉第1号が完成した」

「…すんげー正論。だけど轟に任せたらなあ…」

「…すまん。俺が言ったら何故かいつも了承した事になるから…」

「ばーか、気にすんな。慣れたもんさ」

大和の声に心の中で同意しながら謝るショートにデコピンして弁当を食う。ショート、別名女たらしの天然モテプリンス、この名前を知らないものはこのクラスにいない。というか俺が言いまくってるから皆覚える。

このモテプリンスはいちいち女をその気にさせるいわばたらしスキルを持つている。しかも全て無自覚、それに泣かされた女の数は：なんだかんだあんまりいな：うん。

付き合う気もないのにその気にして困り果て、最後に俺に泣き付いてきて俺が説明して叩かれる。昔、何故俺を叩くのかと聞くと

「だって…轟くんの顔を叩くなんてそんな酷いこと出来ない！」と言われた。関係ない俺は良いのかと小一時間問い詰めてやりたい。

「大和、お前ショートに女の扱い方教えてやれよ」

「いや無理。だって何しても相手許してくれるから対処方法分からんぞ俺」

「ナイフで刺されて死ね」

そう言いながら髪をたなびかせるアホに一言吐き捨て母親が作ってくれた美味しい弁当を噛み締める。

うめえよ…母ちゃん…卵焼き、甘くてふんわりしててうめえよ。

「…旨そうだな。それ」

「うちの4番バターが欲しいだど？…その旨そうな鮭の切り身とならトレードしてやらんこともない」

「鮭トレだろそれ!？」

「この条件が飲めないなら話はご破算だな」

俺の卵焼きに目をつけた大和がトレード要求を仕掛けてきたから向こうの弁当の鮭を要求する。鮭と卵焼きどちらが腹を満たすのかといえば確実に鮭、動き盛りの俺達にとってこのトレードは利害の一致しない鮭トレなのは火を見るよりも明らか

となると当然結果は

「…くっそ！旨そうに食いやがって！」

俺は当然のように母の味を堪能したのであった。うめえよ…母ちゃん。

「そーいやお前らどこの高校受けるつもりだ？」

弁当も食べ終わり話に花を咲かせていると大和からそんな話題が飛び出した。中学三年生である俺達にとって高校はもう目と鼻の先にまで近づいていて。

「因みに俺は雄英の普通科を受けるつもりだぜ？」

「…理由は？」

「…あの学校女子の顔面偏差値くっそ高いんだよ」

と欲望にまみれた言葉を聞き思わず笑ってしまう。流石校内一のモテキング。雄英でも伝説を作るつもりか

「そんで轟はどこにするつもりだ？お前なら雄英のヒーロー科余裕で狙えそうだしな」

「…ヒーロー科に行くことは決定してるが何処かまでは決まってるいい」

「あー…うん。まあお前なら選り取りみどりだし問題ないか。んじや引合はどこにいくつもりなんだよ？」

ショートの話はそこそこに切り上げ俺に話を促す大和。宜しいならば聞かせてやろう。俺の進学先を！

「ふふん。聞いて驚けよ、めっちゃ驚けよ」

「なんだよ。焦らすなってワクワクすんだろうが」

少し焦らしクラス中の奴等が俺の言葉に耳を傾けたのを確認しおもむろに椅子の上に立ち上がりながら宣言する

「年間倍率300越え！史上最難関と呼ばれるあの！雄英高校ヒーロー科だあああッ！」

「な、なんだってーッ！」

サンキュークラスメイト、ノリが良くて大変結構。

「お前マジか！マジで受けるつもりか!？」

「マジもマジ。大マジよ」

「お前定期テストで真ん中くらいの頭なのにマジで言ってるのかそれ

!？」

何故皆が驚いてるのか。ノリも理由の一つにあるだろうが、恐らく驚いている理由の9割はこれ、俺が勉強が得意ではないという事だ。倍率300越えの超名門校に定期テスト真ん中の男が行くと宣言したらそらビックリするだろう。俺が皆の立場ならビックリすると思う。

「マジ」

「…マジかよ。正気か？」

「正気に決まってるんだろ馬鹿か？」

「馬鹿はお前だろ」

「喧しいわ」

混乱する教室。ドヤ顔の俺、呆然とする大和。目を開いて驚くショート…色々失礼だが、取り敢えず大和にデコピンをする

「いつて!…いやでもさあ!」

「行くと言ったら行く!俺は絶対に行く!」

「子どもか!轟も何とか言ってるやれよ」

突然話題を振られたショート。ショートの言葉をクラス全員が待ち、暫くしてから返事をした。

「…俺も雄英にする」

「本当か!よっしゃ!これでショートに受験で出そうな所教えてもらえるな!」

ショートのトンデモ発言にさらに教室は荒れ、この騒動は教師が怒鳴り混んでくるまで続いた。そして俺は成績優秀者であるショートという教師を手に入れた。どちらにせよ頼むつもりでいたから丁度良かったと言ったところか

「 早速ですまんが助けてくれ」

「…どこが分からないんだ？」

「()と()」

「()はだな…」

——時は流れ放課後。俺とショートは二人しか残っていない教室で勉強をしていた。どうやら俺は結構な馬鹿だったらしく即座に助けを求めた。大和がこの場にいたなら絶対に煽ってきただろう。ア

イツはあれでも成績上位者だ。ぶっちゃけ凄い

「あーなるほど。つまりこーゆー事？」

「そこはそれじゃなくてこっちだ」

「あり？俺としたことが」

ショートの教え方は的確だった。馬鹿な俺ですら希に間違うことがあってもすぐに理解出来るほどであり舌を巻かざる得ない。長い付き合いだが勉強を教わるのは初めてだなと心の中で思いながら目の前の問題を解いていく。

「…なあ石」

「どーしたショート。どこか分からない所でもあるのか？」

「…分からない。確かに分からないんだ」

その言葉に何やら大切な話だと感じとり顔を向ける。すると思いつめた表情をしたショートがこちらを見ていた。

「…なんでヒーロー科を選んだんだ？俺とは違ってお前ならもつと別の選択肢があつただろ？」

何故、ヒーロー科を選んだのか。金、名誉、女。色々理由はあるだろうがデカいのが一つ

「皆の夢だろ？オールマイイトみたいなスーパーヒーローになるって」

「…オールマイイト」

「そ。格好いいじゃんスーパーヒーロー」

あらゆるヴィランを一撃粉碎。絶対的な勝利の象徴、希望の星オールマイイト。その姿に憧れないものは絶対にいない筈だ、いるのならソイツはヴィランファンに違いない。間違いない

「ショートも好きだろ？オールマイイト」

「…嫌いではない」

「オールマイイトの名言集とか持つてる癖に良く言うよ。好きなんだろう」

「だからさ、一緒に目指そうぜスーパーヒーロー」

「俺とお前なら最高のコンビになれるだろ？」

と締めくくり、さっきまでやっていた問題に意識を戻し勉強を進める。取り敢えずショートに教えて貰ってるんだから確実に合格しな

いと気を引き締めた。

フアツキンモテ男

暗闇の中、黒衣を纏う男達は話し合う。天誅を、裁きを、役に立たない神ではなく我々自身の手でヤツを裏庭に埋めんと燃えに燃えていた。

「大和：アイツがこの学校にいるから：俺達はモテないんだ！」

「そうだ！俺達がモテないのはアイツのせいだ！」

「アイツさえいなければ！」

大和、個性「フェロモン」を持つこの学校が誇るモテモテキング。落とした女は数知れず老若関係なくそれら全てを落とすとした怪物。この存在こそが彼等がモテない原因である。そう彼らは確信し排除せんと息巻いている。

「静粛に。我らアンチ大和団。『糞モテ男死ね団』の活動は誰にも悟られてはならぬ。それを忘れたか」

「しかし議長！アイツのせいで俺達は辛酸を舐め続けているんじゃないですか！もう限界です！俺は一人でも戦います！」

「落ち着けと言っている！」

議長と呼ばれる男の声で皆が静まり返る。その姿を確認した議長は諭すようにゆっくりと語り出す。

「確かにアヤツのせいでモテモテ天然プリンスを除く全員が辛酸を舐める結果に陥っている。それはあの男、引合ですら変わらない」

「引合石、名誉会員000にして前議長を務めていたあの男ですら耐え難きを耐え、忍び難きを忍んでいるのだ！」

議長の涙を堪えながら放つ言葉が男達の心を穿つ。いつもあの憎たらしい男と共に笑いあの轟の尻拭いしていると彼がこの「糞モテ男死ね団」の一員だったとはここに誰もが知らなかったのだ。

「前議長として彼はそんな姿を何一つ見せず定例議会で『リア充死ね。大和死ね。死ねとは言わん消え失せろ』というスローガンを作りその言葉は今も根強く残っている。そんな彼が何故議長の座を降りたのか理解出来るものはいるか!？」

「それは一体…?」

「彼にとつて、いや私達とつてもうこの会は必要なくなったからだ！」
その言葉に激震走る。必要がなくなつたとは一体どういうことなのか、何故自分だけではなく私達も入っているのかと

「簡単に言うなら彼等は今も三年生。つまり後数カ月で卒業する。そして前議長はこう仰つていた」

「『今年のパレンタインデー。去年と何一つ変わらなかつたら、俺は議長を止める。高校生活に全てをかける』」

「『そして俺は真にアイツの親友として残り少ない学生生活を共に過ごす大和死ね』と仰られたのだ！」

それは諦め、華のない中学生生活でも構わない。だが、どんなに憎くても大和との友情を大切にしたいという心の叫びだったのだ。

「前議長がそんなに苦しんでいたなんて…」

「ぶつちやけ俺達みたいにならだ大和が嫌いなだけかと思つてた…」

と思ひ思ひの感情を吐露する男達。それを見た議長は大きく頷くと高らかに宣言する。これからこの「糞モチ男死ね団」が必要がなくなる意味を。

「だが、そんな苦しい時代はあと数カ月もしないうちに終わりを遂げるのだ！奴等の中学生生活はもうすぐ終わる！つまり奴等との縁はもう直ぐ切れるということだ！」

「おお…！そうだ！もうすぐあの悪魔はこの地を去る！世界に平和は訪れるんだ！」

その宣言に喜びを隠せない男達。議長はそんな男達を睨み付け肅々と言葉を続けていく。

「前議長は辞める前に私にだけこう仰られた。『これを設立したのは圧倒的な理不尽である大和の愚痴を話すための場所だ。表だつて話せば女子の攻撃の的になつてしまふ、そんな皆の為の場所なんだ。だから理不尽が去つた後は大人しく解散し皆で男を磨くんだ』と！」

「『この場は理不尽を耐える場所であり出来る事をせずに喚く場所ではないのだ』と！」

「前議長は己が卒業した後この『糞モチ男死ね団』が変容するのを恐れたのだ！我々の心は一つ！」

「モチたい！イチャイチャしたい！おっぱいもみたい！」

一子乱れぬ叫び声、それは彼等にとつての絶対の指針。性欲猿と言われる年齢の男にとつて揺るがない絶対の願い。

「その為に我らは己を磨き、目指すは来年のバレンタインデー！そこでチョコを手に入れる事！その為にも議長権限によりこの『糞モチ男死ね団』は解散する！」

「だが忘れてはならない！我らの心は常に一つだということを！」

それは長い時間共に過ごした仲間との別れ。だが、それを悲しむこととはない。何故なら皆の心は一つである限りこの『糞モチ男死ね団』は永遠であり。また彼等の絆は不滅だということ。

「我々の絆は不滅だ！」

「オオオオオオオオオオオオ！」

男達は黒衣を脱ぎ捨てる。そこにいるのは哀れな嫉妬者ではない。明日のため、未来の為に己を磨き抜くと決めた漢の目そのものだった。男達は歩く、未来への栄光のロードを。果てしなく長いモチ男への道を。

「…そういえば前議長と大和の野郎の進学先被ってなかったか？」

唐突な一人の男の言葉に皆が止まる。確か前議長である引合石は雄英高校ヒーロー科、そして忌まわしき存在大和は同じく雄英高校普通科だと噂されている。

「…」

「偉大なる前議長に敬礼！」

「敬礼！」

彼等は思わず敬礼の形を取っていた。それはこれまでの感謝の気持ちもあるが、それだけではない。恐らく起こりうる前議長の苦難の道に幸あらんと願いを込めているのだ。

「…俺達は雄英高校は止めておこう。身の程を知ってるし、何よりアソコにはやつがいる」

「やっぱすげえよ前議長は…」

「ぶえつくしよい！あーくそ！なんか調子悪いな」

「無理はするなよ。無理をして身体を壊したら元も子もないからな」

「大丈夫だ。俺は超優良健康男児だからな」

「女にでも恨まれてるのかもな」

「だったらお前が先に変死体にならなきゃおかしいだろ」

氣遣つてくれるショートとここぞとばかりに人を煽る大和にそれぞれの対応をしながら勉強をする。俺がいうのもただ俺と大和はいつも煽り合いしかしてないような気がする。コイツらには内緒だが『糞モテ男死ね団』を設立した時くらいから大和と友人になって、コイツのど畜生ぶりとモテっぷりに何度血涙を流した事か。

「いやいや、俺は恨まれないから」

「俺も恨まれる要素ないっつーの」

これだ。大和は女をとつかえひつかえしてもぜんぜん恨まれない。それはこいつの個性のお陰なのか、それともこいつの人となりが編み出せる技なのか未だに理解が出来んが兎に角コイツらは恨まれない。代わりに俺が恨んでいたが

「…俺は恨まれてるんだろうな」

「あー…それはないな」

そう言いながら落ち込むショートを俺と大和が否定する。何故つて？俺は実体験があるからな。

「仮に恨まれてても実行に移される事はないな。間違いなく被害は全部引合だ」

「うーん…困った。全く否定できる所がない」

ぶっちゃけショートにマトモな対応が出来るようになったら俺が割りを食う必要はなくなるのでさっさと対人スキルを成長させて欲しいというのが俺の切なる願いだ。多分叶うことはないけど。

「すまねえ…」

「だから気にすんなって。というか大和、こうなること予測してただろ」

「煽れるときに煽つとけが家言なんだよ俺の家」

「捨てとけそんな糞の役にも立たない家言」

そう吐き捨て勉強に取り掛かる。ショートの教えの上手さ、そして

俺の天才的頭脳により学力はグングンと伸びつい最近行われた模試ではまさかのA判定をとる事態となった。やはり俺は天才である。これは知的イケメンへの第一歩と言えよう。

「…おい。そこ違うぞ」

「何を馬鹿な…あつ」

「やつぱ馬鹿だわコイツ」

…ほんの少しケアレミスがあるがそれを克服すれば俺はさいきようになれる。

俺つてば天才な上にイケメンなのね！

「…お前つてほんと頭は回る癖に変な所でポカやらかすな。入試試験でやらかすなよ?」

「おいおい、今の俺は模試判定Aの天才くんだぞ?余裕で合格してやるから見とけよお前」

「そう言えば引合は一般で行くらしいが轟は推薦入試だっけ?やつぱすげえなお前」

「無視かおい」

当然の如く俺の言葉は無視され、ショートの話題になる。ショートは賢い、そりやもう俺が模試Aになるくらい教えるのが上手いくらいだ。友人として鼻が高い事この上ない、色々足りないこの友人はなんかかんや優秀なのだ。

「俺は受かるからどうでも良い。それより石が心配だ」

そう自分の事を切り捨てるショートに二人揃って近所のおばさん(ver2)になり井戸端会議を始める。

「まー聞きましたか大和さん!この子ったら『俺は受かるからどうでも良い』ですつてー!」

「ほんとビックリですわね引合さん!この子倍率300に喧嘩売ってますわー!」

「喧嘩とか売ってねえよ」

そう馬鹿正直に返すショート。判りづらいが半分不貞腐れた顔になってるのを見て二人して笑う。昔はここまで会話してくれなかったが色々あつて今ではここまで出来るようになった。正直ショート

の成長ぶりは目を見張るものがある。

「すまんすまん！お詫びに引合がなんか奢ってるやるから許せ！」

「別に良いけどお前も金出せやゴラ」

「蕎麦食いてえ」

「お前の蕎麦は高い」

「…なんでも良いって言ったじゃねえか」

奢るといってもお前が大好きな数千円する蕎麦を奢れるほどの財力を俺達中学生が持つてると思わないで欲しい。

「あー！モテてーなー！金欲しーなー！キャワイイ女の子侍らせてえなー！」

「おいおいこんなイケメン二人侍らせて何言ってるんだよ」

「蕎麦食いてえ…」

その後俺達三人はレストランの安い蕎麦を啜り、これから女と会うとか抜かした馬鹿と別れ家路へと足を進めた。

「…あんまり旨くねえ」

「そりやお前のお気に入りと比べたら天と地の差があるに決まってるわ」

「後辛かった」

「それは大和に言ってくれ」

味に満足していないセレブ様の言葉に苦笑いをしながら足を進める。帰りながら話す話題はいつも学校での出来事から始まり終わる。

「ーんで大和の奴が『女とか侍らすもんだろ』とか言うもんだからクラスの男共がぶちギレてジャーマンぶちかましてたわ。アイツマジで妬みで殺されそう」

「ーんで俺が模試のA判定取った事をクラスの奴等に報告したらアイツらなんて言ったと思う？」

『脅迫は犯罪だぞ！』って酷くない!?こんな優しい俺が人を脅迫してA評価取るように見えるか!」

いつものように俺が一方的に話してショートがそれに相槌を打つ。そんな何時も通りの帰り道を進み途中で別れる。

「じゃーなショート！明日は体育あるから体操服忘れんなよ！」

「分かった。じゃあな」

「おう！」

今日も良い日だった、明日も良い日でありますように

「ただいま」

「おかえり焦凍。今日はちよつと遅かったね」

「…アイツらと一緒に蕎麦食べてきた」

「そう…美味しかった？」

ここで辛党の俺が七味とワサビを大量に混入したらどうなると思
う？

ぜってー不味いわそれ

うるせえ見とけよ絶対旨いから…

…どうよ？

…辛いし痛いし味が分からん。お前も食う？いや食え。

ばっかお前そんなの劇物人に食わそうと…かつら！なにこれかつ

ら！くつそシヨートも食え！食って三人で苦しめ！

辛え…

だろ!?もつと食べても良いんだぞ。

だろ!?じゃねーよボケ！それ自分で食べるよ！絶対に残すなよ！

「蕎麦はあんまり旨くないし辛かったけど…楽しかった」

「そっか…晩御飯食べれる？」

「…食う」

地獄の荷物点検

「——これから荷物点検を行う」

朝のHRが始まるや否や担任がそんな事を抜かした。

：抜かったッ！最近してなかったから完全に忘れていた。この学校の荷物点検は非常に不味い：不要物は没収されたら最後卒業後まで帰ってくる事はない！今日の鞆の中には大和のゲームが：ッ！

ちらりと大和の方を見る。どうやら大和も完全に忘れていたらしく目に見えて動揺しているのが見て取れた。

「因みに俺の個性は分かっているだろうが説明しておこう。俺の個性は」

「——ッ！ウオオオオオオッ！」

担任が説明を始めた瞬間、一人のクラスメイトが荷物を持ち教室からの脱走を試みる。馬鹿がッ！アイツの個性を忘れたってのか！アイツの個性は！

「新島：動くな」

「——ッ！糞ッ！糞ッ！糞ッ！」

「…この通りだ。俺の個性は『停止』。目に見えた者の行動を一時的に停止出来る。さて：お前から検査してやろう」

「やつやめろお：やめてくれえ…」

幽鬼の如くユラリとクラスメイト（新島）に近付きおもむろに身体検査を始める。

「：ポケットの音楽再生機器は授業に関係あるのか？」

「これは毎朝当校する際のルーチンワークの一つなんです！登校中は何か聞いてないと俺調子が」

「生活音でも聞いてろ。没収だ」

「あつ：ああ：ああ」

その瞬間停止が切れその場にガクリと膝を突く新島。そしてそのまま俺達の方を振り向くと、

「信条と引合は前に一杯食わされたからなア：今回は最後にしてやる。いくら隠そうとしても無駄だ。徹底的に調べさせて貰うぞ」

思わず悲鳴をあげたくなるような声色でそう言い地獄の荷物点検を始めた。

「先ずはお前だ、佐藤…」

「くっ…今日に限ってっ！」

二番目の犠牲者となったのは窓際の端の席に座る女子、佐藤。イベント好きな明るい奴だ。いつもは不要物を持ってこないのか没収経験はいまだ0。だが今日は違うようで

「化粧道具は学業に必要なは…?」

「ない…です！」

「没収だ」

とバッグの中から出てきた化粧道具を没収された。ガツクリと俯く佐藤、惨い。幸いだが俺と大和にはまだ時間がある。そしてこちらは前に担任を騙した経験者。今回も前と同じ手で余裕…

「その馬鹿二人。前にやった点検済みの奴に預かってもらう戦法は通じんからな。預かった奴は反省文を書いてもらう、それも一枚や二枚ではない。百枚だ」

作戦を考えなければならぬ事態になってしまった。緊急事態、エマージェンシーというやつだ。

その後何人ものクラスメイトが不要物を没収されていった。今回はその阿鼻叫喚の中で酷いものを没収された奴等をお送りしている。

山内…このゲーム機はなんだ？

…これは計算機です！

ゲームも出来る計算機を持つてくる必要はない。没収だ

山内、ゲーム機没収

斎藤…このディスクはなんだ？

…流行りのアイドルのCDです

嘘つけ。どうみてもAVだろうが

…アイドルのイメージビデオです

没収だ。これはお前の親に即日返してやる

それだけは何卒御容赦を！

斎藤 A V 没収

吉原：お前：これ。いや、え？
絵本です。

いや：お前この表紙：男同士：

絵本です。絵本なんです。

：没収だ

：はい。もう返さなくて良いです

：処分しておいてやる

吉原：名状しがたき物体没収

そして次々に没収されていき次はショートの番となる。そして
ショートの前におもむろに立ち

「轟：お前、鞆の中に何が入ってる？」

「：オールマイトの自伝小説と教科書と筆記用具。あと弁当」

「その馬鹿二人から何か預かったか？」

「まだ預かってない」

「ならいい。次だ」

と、隣の俺を無視して次の列の奴等の荷物点検を始める。荷物点検
すら行わない暴挙に他のクラスメイトが異議ありと大声で喚きたて
る。もちろん俺と大和もだ。

「轟だけ点検しないとかズリイぞ！」

「そうだそうだ！これはもう荷物点検を中止にすべきだ！」

「ついでに没収品の返却をすべきだ！」

沸き起こる野次を担任は鼻で笑う。まてやコラそれでも教師か貴
様

「逆に問おう。轟が不要物を持ってきて、それを隠す人間だと思っ
か？」

「俺が『その馬鹿二人から何か預かったか？』と聞いて『まだ預かっ
てない』と返してしまうコイツにそんな事が思い付くと思うのか？」

圧倒的な論破に俺達は何も言えなくなる。確かに天然で色々と抜
けているショートなら自分から暴露する姿が目に見える。これは完
全論破、ぐうの音も出ない。

「分かるかその馬鹿二人。これが『信用』というものだ。大人しく首を洗って待つているがいい」

そして荷物点検を進めていく教師を尻目に俺は大和からゲームディスクを預かる。どのみち大和の個性では隠しきる事は不可能だが、俺の個性ならば隠しきる事が可能だ。

担任、あんたは確かに強い。「停止」という個性はプロヒーローが持つていても遜色ないものだ。だが、この場においては俺の個性の方が強い！

「…やれるか？」

「…俺はイケメン天才な引合君だぞ？出来ない事はない」

まだ担任はこちらを見ていない。それを確認した瞬間、俺は個性を発動した。

—そして時は流れ俺達の番になる。

「さて、信条と引合。取り敢えずお前らは学ランを脱げ、そして鞆の中身を全部出して何度も揺さぶれ」

「そこまでやるか…？」

「下着の裏に隠した経験のある貴様らに言われる筋合いはない。本来ならばここで体操服に着替えてもらいたいレベルだ」

「なんだこの変態教師…！」

二人して言われた通りに学ランを脱ぎ鞆の中身を出して揺さぶる。当然何も入っていない。当然の結果だ。

「…ならば次はボディータチェックだ」

「キヤー！痴漢！変態！ホモ！」

「やかましい！きつさと大人しくしろ！」

言われた通りに大人しくなり二人してボディータチェックの餌食となる。何度も何度も確認されるが当然ブツは出てこない。当然である。

困惑する担任、その姿をみて当然だと云わんばかりの表情をする俺達。盛り上がってきたと騒ぎだすクラスメイト。

「コイツらが持つてきてきていないわけがない！何故だ！なぜ見つからないー！」

「失礼な、俺達だって持ってこない日くらいありますよ。なあ大和」
「全くです。なんなら他の人の荷物を確認してもらっても結構ですが？」

「…コイツらを庇っている奴は出てこい！今なら反省文はなしにしてやる！これから確認して出てきたらどうなるか分かるな！」

その言葉にクラスメイト達が自分達は持つていないと言い担任に対してまだ終わらないのかと野次を向け始める。

「そんな馬鹿な！…糞ツ！轟！荷物確認をさせてもらうぞ！」

『信用』とはなんだったのか」

「黙れ信条オ！さあ見せて貰うぞ轟イ！…」

「どうぞ」

そしてショートの鞆を漁るも結局出てこない。困惑に困惑を重ね混乱する担任。

「馬鹿な…本当に持ってきていないだと？この二人がか？この中学が誇る知能の高い馬鹿二人がか？」

「なんとという失礼。俺は清く正しく真面目で誠実なイケメンですよ」

「俺も清く正しく真面目でイケメンでモテモテですよ」

「死ぬモテキング」

その後も何度も何度も繰り返し探すがブツは結局見つからず。H Rが終わる予鈴がなるまで探した後、朝の報告を一言話し教室を後にした。

「…いったか？」

「…いったぞ！」

大和に担任が階段を下りるのを見張らせいなくなるのを確認するとクラスメイト連中全員が俺達の元に駆け寄ってきた。

「やったな引合！お前達くらいだぜ！あの荷物点検を回避するのは！」

「まっさかあんなところに隠すなんて予想外だよ！」

「ほんつと便利な個性よねー『磁力』正確には磁力関係なく引き合わせてたり反発させたりしてるんだっけ？」

「フハハハハ！もつと誉めろ！やっぱり俺は天才でイケメンだ！」

高笑いをしながら机の上とブツを反発させていたのを解除する。すると天井からゲームソフトが落下し、そのうちの一つを大和へと渡す。

「ほい大和。これ返すわ」

「サンキュー。しっかし今回は焦ったな」

「全くだ。こんな事はこれつきりにして欲しい。心臓が何個あっても足りんわ」

お互いにソフトをバッグの中にいれながら胸を撫で下ろす。今回は心底焦った。もしも担任がショートにブツの行方を聞いていたら即死だった。混乱して無駄に探したのが貴様の敗因だ担任！

「しっかしうちの担任の焦りよふときたら笑えるよな」

「右も左も探したって無駄に決まってるんだろ。なんたって上だからな」

「そうか、それは俺のミスだな。次からは気を付けるとするか」

「気を付けろよ！ハハハハハハ：ハア？」

突然の背中越しに聞こえてくる声に困惑する。よく見るとクラスメイトのやつらはとつとと席に座り授業の準備を始めている。おかしい、まだ本鈴は鳴っていない。いつもならまだ騒いでいる筈、まして今日はこんな事があったんだ。なのに何故？

「どうした？俺がなんなんだ？」

背中に視線を向けず大和とアイコンタクトでお互いに覚悟を決めた事の確認をする。

今だっ！

「信条オ！引合イ！止まれエ！」

こうして俺達の大切なソフトは卒業まで返ってくる事はなかった。

全校集会

突然だがうちの学校の校長は変だ。

「えー。皆様、おはようございます。季節の変わり目により最近は気温の変化が著しく、体調を崩す生徒もチラホラみられます」

言ってる事は全くもってマトモなのだがやはり変なのだ。何が変だということ。

「まあハムスターである私には毛皮があるので寒くないんですけどね」

この学校の校長先生はハムスターである。いくら個性社会と言ってもやはりこれは可笑しいのではないのだろうか。

今日の朝は全校集会の日。体育館にミチミチに生徒が集まり、長つたらしい教師の話を聞かなくてはならない拷問に等しい日だ。

「それではカゴの中から失礼して話を続けたいと思います」
何故カゴの中に入ったハムスターの話を聞かなくてはならないのか。それで良いのか校長先生。貴方一応人間ですよね？

「三年生の皆様は学業に精を出し、自分の行きたい志望校への試験対策を行っている事でしょう。あと一年もない中学校生活。勉学に励むのは大変素晴らしいですが、友達と絆を育むのも忘れてはなりませんよ？」

「友情というものは大切です。育まれた絆はどんなことがあると切れる事はありません。例え十年間あつてなくともお互いに覚えているものなのです」

「関係ありませんが最近お歳暮でひまわりの種を貰いました。さすがのこれには先生も友情を疑いましたが、きつと私の事を思つて送つてくれたのでしよう」

相手はなんでひまわりの種を送ったんだよ。校長先生人間扱いされてないですよ。ただのハムスター扱いですよそれ。

「二年生はまだ自分の将来をイメージ出来ていない子も多くいるでしょう。安心してください。その気持ちは皆一緒なのです。これか

らまだ時間はたっぷりあります。焦らずゆっくりと自分の夢を見つけてください」

「人生何があるか分かりません。私が学生の頃はケースに入ったまま皆さんにお話する大人になるとは想像もしてませんでした」

後ろの大和が「当たり前だろ」と呆れたような独り言を呟き、俺も確かにと頷く。人生何があるか分からない。イケメンで天才な俺が全くモテない事もあるのだからこの言葉には驚くほどの説得力を感じた。流石は校長先生、この学校の長であると言えよう。

「次に一年生ですが。貴方達はまだこの中学校に入ったばかりの新人です。貴方達は先輩の姿を見て、その姿から様々な事を学んでください」

「名を伏せますが先日私のカゴの近くにマタタビを大量に置いた三年生の馬鹿二人のようにはならないで下さい。こんなことを言いたくありませんが、馬鹿をやるのは結構ですが度を越すとただの馬鹿です」

「ショート、大和。お前ら言われてるぞ」

「いやいや引合と轟だろ？俺はそんな事をした覚えないんだが？」

「俺はそんな事した覚えない」

即座に犯人に気付いた俺は下手人共にそう言うも全員が全員自分はやっていないと言い張り、この事件ははやくも迷宮入りした。

「さて、話は変わりますが。最近学校内でいじめがありました。校長先生は非常に悲しいです」

その言葉に体育館のあちこちでざわめきが聞こえ始め。先生陣も聞かされていなかったのか絶句し、生徒を注意出来ずにいる。

「非常に悪質で下手をすると命に関わっていました。校長先生は非常に悲しいです」

正直この学校でそんな事態が起こると思わなかった俺達は固唾を飲んで校長先生の言葉を拝聴する。イジメ、どの学校にもあって不思議ではないがまさかこの学校で、しかも命に関わる事態になる事が起きていたなんて。

「怒らないのでネズミ取りを置いた人は後で正直に名乗り出て下さ

い」

多分それで死にそうになるのは校長先生だけだし、イジメでもなんでもないと思います。そして先生の一人が顔を真っ青にしているのは何故なのかさっぱり分からないが、あの先生は後でこっぴどく叱られるのだろう。そう思った。

「それでは生徒指導の怒江洲先生。お願いします」

校長先生の話が終わり、カゴが降ろされ別の先生が俺達の目の前に立つ。生徒指導の怒江洲先生。通称ドSババアだ。その特徴は見るだけで幼児が泣き叫ぶような鋭い三白眼。その目で生徒を一望すると新しく入ったばかりの一年生の誰かが怯えて泣いてしまう事が良くある。

今日も誰かが泣いていた。正直可哀そう。

「えー生徒指導の怒江洲です。最近個性を使って学校に登校する馬鹿をよく見かけます。禁止されているので止めましょう。次に見たら生徒指導室で指導します」

そう言いながら俺を見るドSババアの視線から逃れる為に横を向く。俺は毎朝、個性の鍛練と登校時間の短縮の為、個性を使い。大ジャンプして登校している為定期パトロールをしているプロヒーローに良く注意される。やめるつもりは毛頭ないが。

「まあ…反骨精神、私は好きよ」

ネットリとした声を出しながら言葉が続ける。

「イキッてる子どもに指導するの、私大好きだから」

あつまた悲鳴が。

「じゃあ次。信条大和くん。ちよつと聞きたい事があるから後で生徒指導室に来るように」

後ろから声のでない悲鳴をあげた馬鹿にお悔やみ申し上げる。可哀そうなモテキングはこのドSババアに気に入られている。前に呼び出されて地獄をみたらしいが今回はどんな目にあうのだろうか。ザマアみやがれ。

「それと…もうすぐ遠足ですが、もしも遠足で馬鹿をやらかしたらその場で指導するつもりなのでそのつもりでお願いね？」

そういえばそんな時期だったなと思ひ出す。毎年恒例の遠足、去年は植物園で写生大会で、大和が蚊に刺されまくり大惨事になっていた事を思い出し思わず吹き出してしまう。後ろの大和がそれに気付き睨んでいるのが分かったが無視して小さく笑う。確か今年は動物園。異性にモッテモテナ大和くんはいつたいどうなってしまうのだろうか。楽しみである。

「あー…後。みんなに内緒で校長先生にひまわりの種をあげてる子は校長先生にエサをあげすぎたらブクブクに太るのでやめるように」

いや誰だよ。校長先生にエサをあげてる猛者は。ケースの近くにマタタビ置きまくった俺と大和でもそんな真似出来ねえわ。

「…今日もあげたかった」

お前かよショート。

うちの校長先生は可笑しいと始めに言ったがあれは訂正する。大体皆可笑しい。

「…家でハムスターでも飼えば？」

「糞親父が許してくれない」

「あっ…」

動物園

青い空、白い雲。きつとこんな日は良い事があるに違いない。そんな事を考えながら、手に遠慮なく噛みつく問題児を抱き抱え俺は目の前の惨状を眺める。

「くそっコイツら全員メスかよ！ベロベロ舐めるな！離れろ！」

「モテモテじゃねえか。なつかれてて羨ましいな」

「好きでモテてるわけじゃねえよ！」

触れ合い広場のメスの兎にベロベロに舐められてる大和と本気で羨ましがっているショート。

俺には人の手に噛みついて離れない問題児。コイツは俺の手を人參とでも勘違いしているのではないだろうか？

「流石はモテキング、動物すら落とすとはたまげたなあ。ついでにどっちでも良いからコイツを預かってくれ」

「流石に噛みつくのは抱きたくない」

「俺よりダメージを食らってるお前を見てると俺、幸せになれるわ」

「控え目に言って死ぬ」

こんな空は綺麗なのに俺の心は悲しみに満ち溢れていた。

今日は遠足の日である。

「あの兎。外で出会ったら丸焼きにしてやる」

「まあまあ落ち着けよ手のひら人參」

「全身人參野郎は言うことが違うな。ベロベロ舐められて獣臭いぞお前」

「…ッ！」

「子どもが怯えてるから落ち着け」

俺達が胸ぐらを掴んで睨みあつてると、ショートの間で言うとおりの家族連れの少年が怯えきっていた。許せ少年、大体目の前のモテキングが全部悪い。

最初に赴いた兎とのふれあいコーナーから退散した俺達は次の動物探しの旅に出た。入る際に貰ったパンフを眺めつつ次に見る動物を物色し、三人で次の場所を決めようとすると

「なんか見たいやつあるか？」

「危なくない檻の中にいる動物」

「全部」

と馬鹿共は返してくるので俺がプランを考えて行動していた。どうやらこの動物園には何カ所かスタンプを押す場所があるらしく、そこを全部押すとこの動物園のシールが貰えるしくみになっているらしい。

最初のふれあいコーナーでのスタンプを貰ったので俺は他のスタンプを貰える場所に行きたいのだが。

「…キリン見に行きてえな」

「キリン…おいおいこれ餌やりあるじゃねーか！ここはスタンプもなしに行くの止めとこうぜ！」

餌やりという単語にさつきまでの地獄を思い出した大和が反対する。確かに個性のせいで動物のメスにすらモテてしまうお前はふれあい系が嫌いだろう。だが俺はお前の嫌がる事が嫌いではない。

つまりは

「多数決によりキリンに決定！右を抑えろショート！」

「任せろ」

「冗談じゃねえ…ッ！俺は…って放せ！」

二対一の多数決により俺達はキリンのエリアへと足を進めることになった。

「デカいな…流石地上最長動物」

「…餌がなくなった」

「お前それで四回目だからそろそろ餌あげるの止めとけ」

「金ならある」

「そうじゃなくてだな…」

ショートが何度も餌を買ってキリンに餌を貢ぐのを諫めながら俺も買った餌を一つキリンに渡す。キリンはあれだけ貢いで貰ったにも関わらず食い足りないのか俺の餌をその長い舌で絡めとりモリモリと食べていた。

「…あと一回だけ」

いくら貢ぐ気だお前は

「うえー…ベロベロすんなって。顔中ベタベタだろうが」

因みに俺達の隣でベロベロに舐められて心底嫌そうな顔をした大和がいた。コイツが飴だったら今頃なくなってるのではないだろうか。

「ここまでモテるといつそ清々しいな。流星は個性『フェロモン』」

「…お前。犬、猫、その他もろもろに発情されてみる。マジで動物と触れ合うの嫌になるから」

「…すまん」

そう言う大和の顔は半分死んでいた。すまん大和、次の場所は餌やりとかなないから許してくれ。

「取り敢えず次はスタンプのある場所に行くぞ」

「触れ合いはなしで頼む。冗談抜きにマジで」

「冗談抜きのマジだから安心しろ」

「信じるぞ…それじゃあ轟！次に…ッ!」

取り敢えず次の場所に行く為にショートに声を呼ぼうとした大和が絶句し動かなくなる。その姿にとてつもないほどの嫌な予感を感じながら恐る恐る振り返ると

「まだ食べるのか？分かった。買ってきてやる」

「あの…一人で餌をあげすぎるのは…他のお客様の迷惑になりますので」

「…？金ならあるぞ？」

「いえ…そういう事ではなくてですね？」

作業員にドン引かれるほど餌をあげてた馬鹿が一人いた。というかショートだった。

それから従業員に平謝りをし、ショートを無理矢理引き連れてその場から離れた俺達は次なるエリアへと足を進めていた。

それからは

「知ってるか？虎って発情期になると1日中文尾するらしいぞ」

「何故、虎の目の前でそれを俺に言ったのか教えてくれるか？」

虎が入ってる檻の目の前でそんな話を話す俺と大和。因みに交尾

の事を話した理由に特に深い意味はない、本当だ。

「…」

「…そこで目をキラキラさせながら虎の子どもをガン見してる馬鹿をどうにかして、そろそろ次の所に行かないとな」

「…かれこれここに20分はいるな」

シヨートが虎に夢中になったり

「おっ見ろ。メスの孔雀が求愛行動してるぞ。珍しい事もあるもんだ」

「俺は孔雀にすら求愛されるのか…」

大和が孔雀に求愛行動されたり

「ごらんシヨート。あれがメスを大和に取られた哀れなライオンだよ」

「…オスが吠えながら檻にぶつかってるな」

「大丈夫だよなこの檻!?壊れないよな!?めっちゃガタガタ鳴ってるけど大丈夫だよな!?!」

大和が肝を冷やしたりしていた。

楽しかった時間は直ぐに過ぎ去り、帰る時間となる。帰りのバスの中でスタンプラリーの景品であるシールを眺めるシヨートと話をする。因みに大和は疲れてダウンした。正直すまんかったと思う。

「楽しかったか?」

「小学校の遠足で何度か動物園に行ったことはあったけど今までの中で一番楽しかった」

「そりゃ良かった」

嬉しそうな表情を見せるシヨートにそう返事を返し、夢見が悪いのか唸る大和の額に貰ったシールを貼り付ける。俺の目の前で寝てる奴が悪い。

「…ありがとな」

何故か俺にお礼を言うシヨートのデコに一発強いのお見舞いする。何故叩かれたのか理解できず驚くシヨートに呆れながら話をする。

「楽しかったなら『ありがとう』じゃなくて『また行こう』で良いんだ

よ。俺達は友達だろ？」

「…そういうものなのか」
「そういうものなのです。」

お〇〇い

女体とは神秘である。男では持たざるものを持ち、本来ならば触れることの出来ぬ聖域。一部の特権者のみはその神秘を堪能でき、それ以外の者は特権者のおこぼれにあずかりその神秘を見ることが出来るのだ。

「なあ引合…今日は恒例のアレだが用意は出来てるか？」

「あつたりまえだろ。俺が考えうる至高の逸品を用意した。楽しみにしておけ」

「なら今日の放課後。いつもの所に集合な」

「おう。じゃあな」

そしてそのおこぼれを人は『AV』という。

中学生は性欲の塊だ。自慰行為を自然と覚えアホみたいに自慰をするオナ猿だ。俺はどうなのかと問われるならば当然俺も性欲猿。そんな性欲猿である俺達に欠かせないものといえばAV、エロ本。これに尽きる。

生身のエロスには縁はなくともビデオや本ならば俺達でも女体の神秘、つまりはエロに触れ合えるのだ。

素晴らしきかなエロティズム。ぶつちやけた話、男はエロという共通の話題で話した事のないクラスメイトと即座に分かり会える事すら可能だ。因みにショートは心が小学生なのでエロでは分かりあえない。残念だ。あと大和は死ね。

そして俺が長々とAVについて語ったのには訳がある。先程話した恒例のアレがそれだ。俺達のクラスは月に一度己の至高の逸品を持つてとある場所に集まる。昔から存在する部活だが、今となっては人が殆ど集まらず半分形骸化した部室、「地域歴史研究部」という場所だ、そこに俺達は集まる。

部室のドアを捻ると先客がいたらしく、薄暗い明かりはついているが部室は固く閉められていた。

「…合言葉は？」

「セツ〇スー！」

「…正解だ。入りな」

合言葉を言つて中に入る。この合言葉は俺達の悲願である四文字だ。因みににつきき大和にとっては当たり前の行為らしい。やはり奴は許しがたい存在だ。

「来たか爆乳好きの引合」

「そういうお前は貧乳好きの新島」

部屋に入ると新島がいた。荷物点検で逃走を凶ろうとした愚か者だ。あの担任から逃げられると勘違いした馬鹿とも言う。

「お前だつて逃げようとしただろうが」

なんのことやら。

「まあ良い。まだ今日来ると予定していたメンバーが揃つてないし、今は大人しく布教活動にでも取り掛かろうか」

「はっ！逆に布教し返してやる。その貧乳のように薄っぺらい性癖を去勢してマトモな巨乳好きに変えてやるよ」

俺と新島はおっぱいが好きだ。愛していると言つても過言ではない。だが、俺と新島では好きなおっぱいの形が天と地と変わつていた。

俺は巨乳が好きだ。あの母を思い返すような包容感と滲み出るエロス。揺れた時に発生するあの現象は世界を救うエネルギーすら産み出しているに違いない。

だが、新島の好きなおっぱいは駄目だ。貧乳、つまり乳がない。女としての象徴であるおっぱいが無い、つまりは邪道、おっぱい教にあつての異端者だ。俺は何度も新島を異端の道から救おうとしていたがコイツは今信じるものが絶対だと疑わず俺を逆に勧誘してくるのだ。

「巨乳は神。微乳は分かる。美乳は国宝。しかし貧乳、貴様はダメだ」
「大ききだけが全てと断じるロートルが。これからはフラットこそが主流の時代なんだよ」

「何故幾重にも時を重ねて巨乳が愛されてきたか分かるか？その大きな胸に優しさと美しさとエロスがあつたからだ。貧乳、お前にそのどれか一つでも持ち合わせる胸はあるか？」

「その考えが古いと言っている！貧乳はステータスであり希少価値がある！脂肪を信仰する時代は終わったんだよ！」

「分かん奴め！」

「貴様こそ！」

胸ぐらを掴み合い睨み合う。馬鹿は馬鹿だと思っていたがまさかここまでの馬鹿とは思わなかった。ここで一回殴り合いでも始めようとした瞬間、部室のドアが叩かれる。比較的扉の近くにいた俺が合言葉を問う。

「…合言葉は？」

「セ〇クス！」

「正解だ。入りな」

入ってきたのはクラスメイトである斎藤。荷物点検の際にAVを没収された哀れな男だ。

「来たかロリコンの斎藤」

「来てしまったかツルペタ信者の斎藤」

「そういうお前らはババア好きの新島と引合」

この男。斎藤はロリコンである。しかも幼稚園児が大好きなもう手におえない程の異端者だ。

百歩譲って貧乳は許そう。だがロリコンだけは許されない。ロリコンとは未来の巨乳美少女の心に傷を付ける蛮行、世間ではロリ巨乳なんていう邪神が信仰されてるらしいが到底許される行為ではない。「何故お前らは若さの無限大の可能性を理解できない？若さとは力だ。つまり幼女は最強なんだ」

「それは暴論だ！若さだけを望んだ先に何がある。そこに包容力も母性もおっぱいもない。あるのはただの幼女だけだ！」

「…最近の流行りは母性系ロリだ」

母性系ロリ。その言葉に耳を疑った。斎藤はロリコンだが、ロリに母性を求めてなんていなかった。コイツは斎藤ではない、斎藤であったナニカ。ロリに母性を求めた男以下の存在だ。

「貴様…ロリを守ってやりたいと言っていた頃の心をどうした！ロリに甘えるなんて言語道断と言い放ったお前は何処に行った！」

「忘れちゃったよ…そんなもん。俺はロリに甘えたいんだ」

「——ッ！墮ちたな斎藤。墮ちる所まで」

最早語る事はない。目の前にいるのはただの獣。己の大切なものを捨て去った愚か者だ。

「という訳で今回の俺の至高の逸品なんだが…趣向を変えて無理矢理系を持ってきた」

そう言い懐から逸品を出した斎藤から即座に奪い新島に放り投げる。受け取った新島は即座にそれをゴミ箱に叩きこみ蓋をする。

「何見せようとしてんだテメエ…そういう無理矢理系は可哀想だから無理だって決めただろうが」

「それよりもお前らが人の逸品をゴミ箱に叩き込んだ事の方が俺にとって可哀想だとは思わんのか？」

「お前におっぱいはない。故に何とも思わん」
「同じく」

「くっそこのおっぱい馬鹿共め！ならお前らの逸品を見せろよ！」

「そんなに言うなら見せてやるよ！俺の至高の逸品をな！」

俺は懐に手をやり至高の逸品を出す。この逸品こそ俺がこの1ヶ月お世話になった最高の作品。凡百のお前らですら泣いて今までの己を恥じ、巨乳を崇拜するであろう一品を！

「…いや奇形じゃん。デカすぎじゃん」

「こんなんババアだろ」

パッケージを見た瞬間にそんな事を抜かす馬鹿共。本当にコイツらは本当に救いようのない奴らだ。

「お前ら馬鹿二人ではその程度よ。これが俺の持ってきた至高の逸品
！」

「おっぱいがないじゃん」

「ババアじゃん」

「…」

「死ね！異教徒共が！」

エロで人は分かり会えると言ったが、あれは訂正しよう。性癖が同じじゃないと俺達は分かり合う事は出来ない。高校では俺と同じ性

癖の持ち主がいることを願うばかりだ。

ショートの家

遅刻遅刻ー！俺、凝山中学三年。引合石！昨日夜更かししてゲームをしていたせいですっかり寝過ぎしたの！遅刻したら生活指導のドSババアに心身ともにフルボッコにされちゃう！個性を使って何時ものように登校していたらプロヒーローが俺を怒って追いかけてきてるの！

「こらー！あれだけ個性を使って登校するなど言ってるだろうが！」
「げっバードマン！くっそんな日に限って！」

プロヒーロー、バードマン。個性は鷹、鷹のように凄まじい速度で空を飛ぶ事が出来るヒーロー。ついでに鉤爪で相手を捕まえる事も出来るヤベーヤツだ。

「今日は捕まえて説教してやるからな！一時間コースを覚悟しておけ！」

「冗談じゃねえ！そんな事されたら遅刻しちまう！」

電柱に飛び乗り、個性を使い空を舞う。後ろからドンドンと近寄る悪魔に声の出ない悲鳴をあげそうになりながら俺は学校への道を急いだ。

「捕まえたぞー！」

「ヒエッ」

全くもってついてない。遅刻するわバードマンに捕まるわ、今日は厄日だ。

「——聞いているのか引合！全くお前という奴はいつもいつも」

「ウツスすいませんでした。これからは気をつけて個性を使います」

バードマンに捕まった俺は近くの公園に下ろされそのまま説教をくらう。希にある光景なので遠くから俺達を見た人は

「ゴイツまたやってるよ」といった顔をして通りすぎていく。見せ物じゃねーぞ散れ散れ。因みにうちの学校の奴も俺の事を見ていた。これは学校中の噂になる、間違いない。

「そうだこれからは…じゃなくて！個性を使うなど言っているだろうが！色んな人が、外でむやみやたらに個性を使うと大変な事になる！そ

れを未然に防ぐ為にだな……！」

「良いじゃん。悪いことには使わないんだから」

「その考えが悪いと言っているんだ！」

「知らん。皆隠れて個性使ってるんだからそこら辺気にしなくても良いだろ。」

「良いじゃん別に、皆隠れて使ってるんだから問題ないだろ。力仕事のおっちゃんだって異形系とか増強系の個性とか念力系の個性を使ってるじゃない」

「設計図書く時に精密に動ける個性がある人は当然使おうし俺が登校する為に個性を使ってる何が悪い」

「バードマンの話は何時もう長い。なので俺は何時も完全論破する時に使う『皆使ってるから良いじゃん』を言い放つ。」

この話題はクリーンヒットするらしくバードマンがいつも返事に困っている。

「いやー……国が法律で決めているから本来は使っちゃ駄目なんだがな？本来はそんな事で個性を使っちゃ駄目なんだが……」

「でも皆使ってるじゃん。知り合いのおばさんだって個性を使ってるぞ」

「……駄目なものは駄目だ！ちゃんと分かってる癖に言い逃れをしようとしても無駄だ！」

「ちい！後少しで言いくるめたものを！思わず舌打ちしそうになるのを我慢して話を続ける。」

「分かりましたーこれからは個性を使いません」

「……絶対使おうつもりだろ？全く……お前のお父様やお母様がどんな思いで」

「……父ちゃんと母ちゃんを知ってるのか？」

「……あー！いや！うん！ほら！そろそろ学校の時間だろ？」

顔を歪ませ、しまったと言わんばかりに突然話題を変えるバードマン。なんだこいつ凄く怪しい。怪しすぎてヴィランに見えるレベルだ。

「いやもう完全に遅刻してるからどうでも良い。それよりもさっきの」

話の続き」

「おーっと！そろそろパトロールの時間だ！サラバだ少年！これからは気をつけるよ！」

「ちよっ…待て！ストップ！止まれ！」

その言葉を残し空中へと飛び立つバードマン。凄まじい速度で大空に消える背中、届かない俺の声。ポツンと取り残された俺は鞆を背負い直し、ため息を吐きながら学校へと急いだ。

「――それで学校に遅刻してドSにこっつり絞られたと。ハッ！ざまあみやがれ！」

「…今度ドSに大和が告白しに行くって言ってやる」

「やめろ、やめてくれ」

「『子どもは三人作りたい』もプラスしてやる」

「すいません調子のりました」

「…今回だけは許してやる。次はないからな」

人を煽っていたかと思えば即座に手のひらを返す大和。コイツは煽ったら倍になって返ってくるかと分かっていて何故煽るのか

「煽れる時に煽つとけがうちの家訓でな」

だから捨てちまえよ。そんな糞の役にも立たない家訓。

「とういか今日はショートいないな。休みか？」

「おう。なんか風邪引いたらしいぜ」

「あの個性でも風邪引くのか」

「あんな凄い個性持っても風邪引くみたいだぞ」

今日はショートは風邪で休みらしい。俺達からすれば眼から鱗が出るほどの衝撃だ。ショートの個性的に考えて風邪とか引きそうにないとはかり思っていた。

ショートの個性は『半冷半燃』熱と冷気を操る個性。熱と冷気でどんな温度状況下でも体温が乱れる事はない。つまりは

「…疲れてたのか」

「いやーないだろ。あのショートだぜ？どれだけ走り回っても息一つ切らさないお前並みのタフネスがある奴なのに疲れる訳がないだろ」
「ほら。お父様の事とかで…心が」

「あー…」

俺の言葉に納得したのか、微妙な表情を浮かべる大和。シヨートは父親と仲が非常に悪い。シヨートの人との付き合い方が変化しても、これだけは全く変わらない。色々事情はあるみたいなので俺からシヨートには何も言うつもりはないが。

簡単に言うならシヨートがマザコンを拗らせてる。そりやまあ酷い具合に。

「まあ俺もマザコンみたいなものだしな！」

「…これほど笑えない自虐ネタがあっただろうか」

「…正直言って後悔した」

大和の何一つ笑えない自虐ネタで空気が死んだり何時ものように馬鹿をやったり授業を受けたりして時間はドンドン過ぎ放課後となる。

「おい引合。お前轟にプリント渡しに行け」

「ウツス分かりました」

「あー…信条…お前は…うん」

「ウツス女と遊びに行くつす。まだ死にたくないつす」

「…まあいいか。任せたぞ」

大和に行かせたらその家の女性を軒並み落とすから担任も行けとは言えず大和も察して普通に女と遊びにいくと返す。これがモテ男の宿命、俺には少々荷が重い。だが、学校中の女子にモテモテと考えるとちよっぴり羨ましいと思わん事もない。

中学生男子故致し方ない、男は誰だつてモテたいんだ。シヨート？
アイツは心が小学生だから。

「じゃあな引合。女とイチヤイチャしてくるわ」

そう言いながら煽ってくる屑。次はないと言った筈だが？

「怒江洲せんせい！大和が呼んでますよー！」

「やべっマジでやめろ！死ね屑！」

ドSババアを大声で呼びながら俺は教室を後にした。因みにこれは余談だが、大和は俺が大声で怒江洲を呼んだ瞬間。ダツシユで教室を出て、俺が学校を出る頃には既に町で待たせた女の元まで辿り着い

ていたらしい。

アイツの逃げ足の速さは最早個性ではないのだろうか？

「…相変わらず糞でかい家だな。俺の家二つは入るぞこれ」

ショートの家は糞でかい武家屋敷みたいな造りをしている。俺の家もそこそこ大きいけどショートの家はそれが二軒は軽く入るくらいの大きさだ。正直デカ過ぎて掃除に困るのではないのかと何時も思う。

「あれ？もしかして引合くん？」

「あつ冬美さん。どうもつす」

インターホンを鳴らそうと思っていたら後ろにショートのお姉さんがいた。

「はい、お茶どうぞ」

「有難うございます」

「どうぞ。お菓子もあるからね」

ショートのお姉さん…冬美さんにプリントを渡して帰ろうかと思っていると折角だからと言われ、家に入れられお茶とお菓子を出され完全に歓迎ムードになる。やべえ前にもあったぞこれ。間違いなくショートの学校生活の様子を根掘り葉掘り聞かれるやつだ。

「それで…焦凍の事なんだけど。最近学校で何か思い詰めた様子はなかった？」

「うーん…特になかったですね」

ショートが思い詰めていた様子…ないな。

「そう…良かった。焦凍ね、学校で何があったのかを楽しそうに教えてくれるの」

「はあ…」

「君と出会う前は学校に行くのが嫌だったのを隠してたけど、今では毎日元気に学校に行くようになったの」

「そうなんですか」

そんな事俺に言われても、としか思えないが取り敢えず相槌を返す。

「最近一緒にお蕎麦を食べたんでしょ？その時のお蕎麦が凄いい辛かつ

たとか、ほんと楽しそうに話してたの」

「あー…あの時ですか。大和が蕎麦に七味やらなんやらぶちこんで兵器を作った時ですね」

あれは本当に凄かった。次の日の尻が使い物にならなくて座る事すら拷問だった。

「焦凍と友達になってくれてありがとうね」

「シヨートと遊んでて面白いから一緒にいるだけなんで…そんな事言われましても」

「私が言いたいだけだから。気にしないで」

この後は予想通りシヨートの学校生活を根掘り葉掘り聞かれた。聞かれ終わった後、風邪っぴきのシヨートにプリントを渡し家に帰ろうとすると、帰ってきたばかりのシヨートの父親と玄関で力チ合う。

「あつどうも。おじやましました」

「ああ…君か。気をつけて帰ると良い」

「うっす」

「…一つ聞きたいんだが。親御さんは息災か？」

「…何時も通りピンピンしてますけど」

「…そうか。引き留めてすまなかったな」

相変わらず筋肉ムキムキの巨体。シヨートと全然似てないなと考えつつ、俺は帰りの道を急いだ。

過去編

過去編 1

「…レイズ。五枚ベット!」

「正気かよお前!ここで全額ベットとかマトモなやつがする事じゃねーぞー!」

「無茶を通すべき場所が存在する…ッ!それがここだ。さあ大和…降りるか乗るか選べッ!」

昼休み俺と大和は暇潰しにトランプをしていた。因みにトランプ等の私物は没収対象、担任にバレたら即死まったなしである。

「…そう言いながら実はブタでしたーってのに俺が何回騙されてきたと思っただけ?今回はもう騙されねえ!その勝負乗った!」

その言葉と同時に大和の手が開帳、Qが3枚のスリーカード。俺の手がブタだと思ってるならその手でも良いだろうが、残念ながら今日の俺の手はブタではない。

「Kのフォーカードだ。残念だったな負け犬」

俺の手にはキングが四人鎮座しており、その手を見た大和は全身から力が抜けたように机に突っ伏しボソリと呟いた。

「…おまえほんと嫌い」

正直いつもいつもボロ勝ちして申し訳ないが、毎度毎度騙されるお前にも責任があると思う。

今日もシヨートは休みだ。

「…今日もシヨートが休みだな」

「今日の朝に風邪が引かないって電話が来たわ。風邪薬飲んで行くとかアホな事を抜かしたから布団で養生してるとキツク言っておいた」
「普通休めてラッキーって考えるもんだと思うけどなあ。少なくとも昔のアイツなら風邪薬飲んでも行くなんて考えにはならないだろうな」

「あー…昔はスゴかったからなシヨート」

ぼろ負けした大和にシャツフルを任せ、俺はショートと初めてあつた頃を思い出していた。今ではあんな奴だが昔は凄かった：特に初対面の時が。

「確か：トランプに誘ったのが最初だったか？」

「あー：そうだったなあ：確か俺達以外の面子を適当に揃えようとした時に引合がショートに目を付けたんだっけ」

「そうだ。確かあのときは」

「あーまた負けた！お前強すぎ！ハンデくれよハンデ！」

「男から慈悲貫つて勝利したいと？慈悲を貫つて手に入れる勝利は旨いか？」

「：勝つたことないから勝ちたいに決まってるだろうが」

俺と大和が何時ものようにトランプをしていた時だった。入学したてのピカピカ中学生だった俺達は、皆が皆お互いに知っている人や仲良くなった人同士で集まり昼休みを過ごしていた。

「ハンデあげたら負けそうなので別のゲームにしようぜ！」

「くつそ堂々と言いやがって憎たらしい。まあいいけど。何するんだ？」

「：大富豪？」

「：それ二人でやりたいか？」

自分で言つてなんだが大富豪を二人でやるのは少々面白くない。そう思った俺は人を集めるために暇そうにしている奴を見つける旅に出た。

「ちよつと適当に人集めてくる」

「：お前本当に遠慮とか知らないな」

「んなもん猿にでも食わせとけ」

大和にそう言い残し暇そうにしている奴を探した。だが、大体の奴等が自分達の世界を作っており話し掛けたら野暮みたいな空気を作り出している。俺がそんな事気にすると思つてんのか？遠慮なく誘うぞ？

「一人でなにやってんだ？」

「：お前に関係ないだろ」

皆樂しそうに話している中、一人心底つまらなそうにしている奴を見付けた。つまらそうにしている…つまり暇な奴という事であり

「あるから来い。俺達とバトルだ」

「はっ…？」

俺がそいつを無理矢理引き連れたのは自明の理であろう。今ながらに思う、あの時のシヨートの目付き、物凄く悪かった。

「んで…お前が誘ってきたのが轟だったんだよな。あの時はビックリした、目付きやべー奴を笑顔で連れてきてるしコイツ頭可笑いんじゃないかと心配したわ」

「よせよ。馬鹿と天才は紙一重って言うだろ？つまり俺は天才って事だ」

「いや…ただのキチガイだろ。それで轟をお前が無理矢理参加させて…あの時のシヨートには驚かされたな」

確かに驚かされた。だってアイツたった一つのゲームを除いて、ゲームをしたことがないと言ったからな。

「マジで連れてきた…つて。なあ引合、お前そいつの承諾ちゃんと貰ったか？目がヤバイぞそいつ。お前マジで睨んでるぞ？」

「なーに。一緒に楽しんだら事後承諾でいけるだろ」

そう言いながら椅子を近くの席から拝借し、そこに新たな参加者を座らせる。立ち上がろうとするので個性を使って無理矢理座らせた。すまない少年、少し俺達に付き合っつて貰うぞ。

「…これを解除しろ」

「俺にこれで勝つたら解除してやろう」

睨むシヨートに俺はそう言い放ちトランプを配る。まあ負けるつもりは毛頭ないんだが

「大富豪だがルールは知っているか？」

「知らねえ。とつととこれを解除しろ」

「あー大富豪知らない子か…なら皆知ってるババ抜きで良いか？」

どうやら大富豪を知らないタイプの子だったらしい。そう思った俺は皆が知っている万能ゲームババ抜きへと舵を変えた。

「知らねえ」

「は？」

冗談にしてはタチが悪い。こうなったら無理矢理にでもババ抜きをさせてやると思っていたら、その次に発せられた言葉に俺は何も言えなくなつた。

「知らねえ。というよりトランプをした事がない」

俺は人を見る目があると自負している。

相手が嫌で冗談を言っているのならば分かるくらいには自信があつた。

だが。その目と言葉に一切の虚偽はなかつた。

絶句した。だが、トランプをしたことがない子は希に存在する希少種だ。ならばトランプ以外のゲーム類を鞆から取り出す。

「ウノで良いか？」

「知らねえ」

「オセロで良いか？」

「知らねえ」

出しても出しても知らないの一点張り。ここまで来るとゲームを何一つしたことのない絶滅危惧種の可能性が浮上してくる。鞆から出された遊び道具が積み重なり、ついに最後のひとつとなる。

「…なら将棋はどうだ！」

「知ってる」

どうやら将棋は知っていたらしい。俺とその様子を見守っていた大和でガッツポーズをとる。

「なら将棋やるか。勝利数が一番多い奴の勝ちな」

「将棋ならまだワンチャンあるな。引合は飛車抜きな」

「ハハハコヤツめ。抜かしおるわ」

呆れたような視線を向けてくる絶滅危惧種に俺は言い放つ。今思えばこの言葉はあの頃のショートに良く利く言葉だった。

「という訳で、先ずは俺とお前だ」

「やってられるか。俺はやらねえ」

「おつ逃げるのか？逃げちゃうのか？負け組なのか？」

負けるという言葉に大きく反応し、いきなり負けてたまるかと闘志

を燃やし始めたのを確認した俺は、個性を解除し身体を自由にする。「さて、やるまえに自己紹介をしよう。俺は引合石。これから負けるお前の名前は？」

「轟焦凍だ。俺は絶対に負けねえ」

そして将棋が始まった。簡単に結論を言おう。シヨートは将棋がくつそ弱かった。飛車角をハンデで使わなくても勝てるレベルで弱かった。

「もう一回だ」

「よかろう。ハンデとして飛車角をお前にくれてやる。精々あがくんだな」

「ラスボスみたいな事言い始めたぞコイツ」

そして第二局も圧勝。正直勝ちすぎて有頂天だった俺は大和とバトンタッチし高みの見物を始める。

「さあ見苦しい試合を始めるが良い。雑魚共よ！」

「やっぱ俺天才だわ」

「勘違いするな。お前は馬鹿だ」

失礼な。ここまで圧勝してるんだから俺が天才でない訳がない。コイツの価値観は逆転しているのだから？

パチリ。パチリ。等間隔で駒が盤面を進んでいく。盤面はどちらに傾いているのかを確認してみればやや大和が有利側、轟が不利な状況へと進んでいた。

「どうしよう…将棋見てるだけってくつそつまんねえな。しかも試合展開遅いし早く決着つけろよ。というか轟負けそうだな」

「…負けねえ。俺は絶対に負けねえ」

うわ言に呟く轟だが盤面はどうみても大和が有利な展開。悪手に気付かず罠に気付かず駒を進める姿を見るのは少々忍びなく感じるものがある。

「…なあ。なんかこれ弱い者虐めしてる感じなんだが？」

「雑魚狩りとか大和さん人として恥ずかしくないんですか？もしかして…手加減とかご存知ない？」

「いやこれもうアレだろ。猪と将棋打ってる気分だわここまで食いつ

かれるといつそ清々しい」

轟の打ち方を大和はそう結論付けた。確かにその通りだ。轟は直情的に打っているのか見え見えの罠すら踏み抜き未だ自分が打った悪手にすら気付いていない。勝ちたい気持ちが出過ぎて焦っているように俺には見えた。

だが、ぶつちやけ轟も大和も俺から見れば。

「んじゃ大和と同じくらい強さか。ふん雑魚め」

大して変わらん。

「…神は何故このバカを有能に仕立て上げやがったッ！ どうせなら俺を完璧超人にしてくれれば…ッ！」

慟哭しながら積み1歩手前まで轟を追い込む大和。遂に己の状況を悟った轟が駒を動かす手を止める、それと同時に俺の能力を解除した。

「おつかれ轟。また将棋でもやろうや」

「待て！俺はまだ負けて…」

「今日の将棋は終わりだ終わり！UNOする奴ー！いるなら集まれ！」

異議申し立てをする轟を無視しクラス中に大声でUNOの参加者を募る。先程まで遊んでいたのを見てた者達が我こそはと参加を表明してきた。

「今思えば…あの時の轟の目付きヤバかったな。半分人殺しの目だったわ」

「もう半分は？」

「負けて悔しくて仕方ない奴の顔」

確かに。そんな顔をしていたと互いに笑い大和がトランプもシャッフルし始めた。大和の無言の次のゲーム要請だ。2人だと流石に限界があるので人を集める為、声を張り上げた。

「次は大富豪でもやるか。おーい！大富豪するやつ集合しろ！集合！」

俺の掛け声でクラス中の馬鹿共が我こそは声を上げ近付いてくる。

「今日は轟のやついいねえのか。んなら金賭けてやろうぜ！金！」

「ぼつかお前金より女のほうが良いに決まってる！大和！お前負けたら女紹介しろよな！ロリで頼むぞ！ロリで！」

「俺が勝ったらご飯奢ってください……」

「お前何時も金ないよな」

馬鹿共が集まったのを確認しカードを配る。配ってる最中、馬鹿共の1人がこちらを見ながら口を開く。

「……轟の奴がいなかったらお前らってなんか違和感あるよな」

「そりやいつも一緒にいる奴がいなかったらなんか変に見えるだろ」

「轟は馬鹿共のお目付け役だからな」

「確かに」

余談だが、この後そりやそうだと馬鹿笑いしてる馬鹿共をカモしてケツの毛まで筆りとしてやったのはシヨートの奴には内緒の話だ。

過去編 2

『なーんか轟って何時もつまんなそうな顔してるよな』

初めて言われた言葉だった。アイツが絡んでくるようになって暫く経ち、クラスで俺が完全に浮いている中、アイツは何故か俺に構ってきた。何時もの様に無理矢理座らされ将棋を打っていた中で言葉、俺はあの時、初めてアイツの顔をマジマジと見たのかもしれない。『スマイルだよスマイル。あっプリ○ユアじゃないからな』

冗談交じりに両手を俺の口元に当てて上へと向ける。表情筋を無視して作られた笑みを見てアイツは満足そうに笑った。

『これは母ちゃんを受け売りなんだけど……世の中、最後まで笑ってる奴が勝つらしいぞ』

オールマイトも似たような事言ってたし間違いないな、と言うアイツの顔には笑顔が溢れていた。今思えばアイツが笑顔じゃなかった時なんてなかった。冗談交じりに怒ってる時もあったが何時もただ楽しそうに笑っていた。

『だからさ、お前も笑えって。肩肘張らずに生きてた方が人生楽しいぞ』

だから、とりあえず笑っつけ。

あの時の……クソ親父の復讐の為にただ生きていた俺にはその言葉の意味が分かってなかったが、その言葉は深く胸に刺さった。アイツは何時も俺に構っていた……今、何故かと聞いてもきつと笑いながらはぐらかすのだろうか、アイツの本質はきつと……とんでもない程のお人好しなんだと思ってる。

俺は自分が誰よりも好きだと公言しながら、自分に対して無頓着な部分があつて。他人が困っていたら何だかんだ言いながらも力になってやろうとする男、あんな奴だから凝山の奴らは惹かれてたんだ。

これを大和に言ったら『オイオイ。アイツを神聖視しすぎだろ』と笑われたが、俺にとってはアイツは……石は底にいた俺を引き揚げて

くれた大切な親友だ。

『——クラスメイトを守るのは委員長様の特権だ！ 分かったらどけカス共！』

『なんで来た……？ お前本当に馬鹿だな。あのなあ……お前は知らなかったかもしれないが友達つてのは助け合うのが当たり前なんだぞ？』

『それに俺はクラス委員長様だからな。お前らを守るのは俺の仕事だ』

——思い出す、今の俺を作り出す原点の一つを。親友との大切な思い出の一つを。

あの時の俺は周りの視線を気にする余裕がなかった。誰にどう思われようが知ったことではない、クソ親父を超える為にはこんな事をしてる暇はない。と思いついていた。

「轟つてさ……なんか近寄りづらいよな」

「あー……なんか分かるわ。エンデヴァーみたいだよな、確か身内なんだっけ？」

いつもの様に聞こえる雑音。エンデヴァー、不動のプロヒーローN.O.2。悪くいえば永遠の2番手、それが俺の父親であり、何奴も此奴も俺を通してエンデヴァーを見ていた。正直不快ではあったが気にする事でもない、そんな輩は無視すれば良い。そしたら俺に近寄ることは無い。

「マジ!?俺エンデヴァーのサイン欲しいな」

「やめとけやめとけ。お前、轟と関わりたいか？」

「……そりゃ無理だ。俺は引合みたいなの好きじゃない」

そう言つて雑音は聞こえなくなる。いつもの様に下らない学校が終わるのを待つ、すると。また雑音が聞こえた……何時もの奴らだ。

「おーす轟！ デュエルしようぜ！ デュエル！ 俺ブルーアイズデッキ使うからお前ブラマジデッキな！」

「……将棋しか知らない奴に何やらせようとしてんだよ。馬鹿か？ 馬

鹿だったな。すまん」

コイツらはこの中学校に入ってから毎日のように俺に関わってきた。関わった最初に無理矢理将棋をやらされて、そこからずっとコイツらはずっと俺に関わろうとしていた。

「将棋で俺に勝てない雑魚がなんかほざいとるわ。というかお前ってゲーム全般くつつつそ弱いよな！」

「……デツキ貸せオラアアツ！」

「ふうん。貴様ら凡骨デユエリストが何人束になろうとも最強デユエリストである俺に勝てると思うな！」

「……デユール！」

今日は何時もとは違う事をするらしい。馬鹿馬鹿しいと思い、俺は本へと意識を落とす。耳に高笑いする声が聞こえるが無視する。

「ルーアイズよ！眼前の敵を粉碎しろ！ 滅びの爆裂疾風弾！」

「甘いぜ引合！ トラップカード発動！ 『攻撃の○力化』その攻撃は無効だ！」

「おのれえ……カードを2枚伏せターンエンドだ」

「いくぜ。最強デユエリストのドローは

……」

暫く俺が本を読んでいると、俺の周りが盛り上がっているのか歓声が湧き上がっていた。何事かと思ひ顔を上げるとそこには信じられない光景が俺の視界に広がっていた。

「無窮の時……その始源に秘められし白い力よ！ 鳴り交わす魂の響きに振るう羽を広げ、蒼き深淵より出でよ！」

「デイクプ○イズホワイトドラゴン！」

アイツらがカードを広げていた机の上で小さな怪物達が出てきて戦っていたのだ。いや正確には知らない男子の目が光り、そこから放たれた光が虚空にその映像を映し出していたというべきなのだろうか。兎に角良く分からない状況だった。

「甘いぜ引合！ 『異次元からの帰還』だ！ 来い三幻神！ オシリスの天空竜！」

三口を持つ赤い竜が机の上に降り立つ。その竜を見ていたアイツ

は笑い、声高らかに叫んだ。

「来るが良い！我が魂の下僕。ブルーア○ズホワイトドラゴンよ！」

「召 雷 弾 ！」

「貴様ア！」

兎に角良く分からない状況だった。クラスは湧き立ちアイツらの一手一手に合いの手を入れ、その中にいた俺はただ困惑するしか出来なかった。

「今……ファラオの名の元に神を合わせる！ 光の創造神。ホルアクテイ！」

『ジュゼル！』

「イワアアアクツ！」

どうやら終わったらしい。盛り上がっていた奴らはここから離れていき、残ったのは机に突っ伏す奴と変なポーズをする奴だけだった。

「……どうだ？ やりたくなかったか!?」

「やらねえ」

「……ウツソだろお前。リアルソリッドシステムだぞ？ 全男の子の憧れじゃないのか？」

荷物の整理を行い席を立つ。こんな無駄な事に付き合ってもらえない、そう思い帰る為の準備をしている中、アイツらは何かを話していた。

「だーかーらー。知らない奴に見せても無駄だって言っただろうが。そこら辺がお前は駄目なんだよ」

「失礼な。何も知らなかったとしても俺ならウキウキで参加するぞ」
無視して教室を出る、そんな俺の背中にアイツの声が掛けられた。

「じゃあな轟！また明日な！」

明日になればまたこれの繰り返し。この現実にはウンザリして俺は家へと向かった。

「……しっかしアイツ。何をしても笑わないなあ」

そんな声が聞こえた気がした。

過去編 3

「ねえ……焦凍。学校は楽しい？」

答えることが出来ない姉さんの言葉に俺はただ無言で返事を返す。クソ親父の訓練があるからと一言だけ言って姉さんから逃げる、本当の事を言えない自分に腹が立つ。

「うん……そっか、困った事があつたら何時でも言ってね。お姉ちゃんが何時でも相談に乗るから」

笑顔でそう俺に語りかける姉さん。あの時の俺はきつとクソ親父と同じような顔をしていたんだと思う。自分が嫌っていた存在に近づいていく、それに自分が気付かずに。ただ我武者羅に憎悪と怒りを自分の中に溜め込んで。

「来たか、焦凍」

「お前が呼んだんだろうが」

俺の親父、N.O. 2ヒーローエンデヴァー。コイツは俺にとって不幸しか呼び寄せない男だ。本当なら視界すら入れたくない程憎いし、殺せるならば殺してやりたいとさえ思う。

「そうだ、中学になりお前の身体は成長期に入っている。この時期こそが強い身体を作るに最適なのだ」

「……で。どうしろって言うんだ？」

また何時ものように血反吐吐くまで訓練するんだろう。と視線で問うとクソ親父はそれを鼻で笑い言葉を続けた。

「いい加減『左』を使え。今まで使わない事を見逃してきたが、この時期から使い始めないと炎をお前では扱いきれなくなるかもしれない」

そろそろ下らぬ反抗期はやめろ。と言葉を纏めたクソ親父の言葉に苛立ちを隠せず舌打ちをする。冗談ではない、誰が『左』を使うものか。

「お前から受け継いだ力を使うつもりはない。俺は母さんから引き継いだ『右』だけでN.O. 1ヒーローになる」

「焦凍！」

「……お前の言う通りにN.O. 1ヒーローにはなってる。だけどお

前の力なんて使うつもりは毛頭ねえ」

そうだ。クソ親父の力を使わずに、アイツがなりたくて仕方ない存在。NO. 1ヒーローに俺はなる、それで俺は初めてこの血に流れている『左』を否定する事が出来る。母が疎み憎んだこの『左』を俺は否定する。

「……強情な。誰に似たのか」

「……少なくともテメエじゃないなら誰でも良い。お前以外なら喜んで受け入れてやる」

「貴様ア！ 親に向かって何だその口の利き方は！」

クソ親父の炎が俺の頬を掠める。掠めるだけだ、当てないことは分かっていた。俺はクソ親父を無視して『右』の力の訓練を始める。後ろでクソ親父が何をほざこうが知ったことではない。

「分かっているのか焦凍オ！ お前は俺の理想を継ぐために産まれてきたのだ！ お前は最強になれる力を秘めている！ 全てを歯牙に掛けない程の才を、お前は秘めているのだ！」

「俺はお前の力を使わねえ。そのせいで死んでも後悔はない」

死んでも使うつもりはない。そう言い切るとクソ親父は憤慨し、この場を後にする。

「ふん！ 今日好きにしろ！ その右で精々頭を冷やすが良い！」

クソ親父の気配が去った後、俺は訓練を始める。その過程で血反吐を吐こうが苦痛で身体中が悲鳴をあげようが知ったことではない。

「『左』はいらねえ……ッ！ 俺は母さんの力だけで……アイツをッ！」

その日は結局倒れるまで訓練をした。目が覚めた時には自分の寝床にいたのだが、あの時の俺は何故、自分の寝床にいるのかすら考える余裕がなかった。

「……おはよう焦凍！ ごはん……用意してるけど……食べる？」

「……今日は良い」

「でも……ちゃんと食べないと身体が大きくならないし。成長期なんだし……少しくらいは……ね？」

成長期。その言葉を聞いて何故か機嫌を悪くした俺は姉さんの言葉を無視して家を出た。

「……焦凍」

後ろから聞こえた声を無視して。

昨日の訓練が後を引いていたのか、未だに疲れていた俺は窓の外をぼんやりと眺めていた。それを注意する奴はいない、当然だ。アイツら以外は先生ですら俺にマトモに関わろうともしない。既に俺はこのクラスでいてもいなくても変わらぬ存在になつていたので。

「……じゃあクラス委員長を決めるがなりたい奴は手を上げろー」

クラス委員長、俺には関わりが無いことだと考える。こんな事をする奇妙な奴はいないだろうと思いつながら空を眺めているとあの不快な声が俺の耳を穿いた。

「はい！ 先生はい！ 俺！ 天下無双の大天才であり全世界イケメンコンテスト優勝予定のこの引合石がクラス委員長に相応しいと自己推薦をします！」

「よーし……引合しかいな。それじゃあ……任せても……良いのか？」

引合石、それがアイツの名前らしい。そう言えば初めて将棋をした時に自己紹介をしたなと思った。

思っただけだった。その後、俺はそのまま参加する事無くただぼんやりと空を眺めていただけだった。

そうして1日が過ぎた。何も変わらない一日、何時ものようにカバンを持ち教室を後にしようとして。

「なあ轟！ 今日将棋をしようか！」

あの不快な声の持ち主が俺に話しかけきた。

「……お前、引合石だったか？」

「おっ！ ついに名前でも呼んでくれたか、いやあ……ここまで長かった。そろそろ次のステップに進んでも『消えろ』」

長々と話す目の前の男を睨み付ける。邪魔だ、消え失せろ。と視線に乗せて睨み付けければ何奴も此奴も俺の眼前から避けるようになる。

初めからこうすれば良かったんだ。と思いながら俺は目の前の男の側を通り過ぎようとして。

「……ふーん。へー。ほー……なるほどなるほど。つまりお前はそういう奴なのか」

男が俺の前に出てきて、じつと俺の目を見詰めてきた。何秒か分からないが俺の目をじつと見詰め、笑った。

「……迷惑だったな、ごめんな。じゃあまた明日学校で！ 明日こそ将棋やろう！」

突然の変わり身に驚くも男は笑いながら教室を出る。一体なんだったのか、そう思いながら俺は教室を後にした。

……その次の日からだった、アイツは一日中、俺に構うようになった。

朝も

「おはよう轟！ 今日良い天気だな。あつ今日は体育があるからな、ちゃんと体操服持ってきてるか？」

昼も

「へー……轟って弁当なのか。美味そうなの入れてるな」

放課後も

「将棋やろうぜ！ 因みに拒否権はない」

毎日毎日。学校にいる間はいつも構われるようになり、俺の機嫌は悪くなる一方だった。

「あー……こうなると思ったがやっぱこうなったか。予想ついてたわ正直」

あの不快な声の持ち主といつも一緒にいる存在が俺に話し掛けてきた。

「俺の事は大和と呼べ。後輩」

「……同級生だろうが」

誰が後輩だ。馬鹿馬鹿しいと思い横を過ぎようすると、大和と名乗った男は俺に聞かせるように話し出した。

「いんや……ある意味、馬鹿に『救われる』であろう後輩に経験者である俺が話してやろうって言うんだ。感謝しろよ」

「アイツがこうやって深く接している奴は……基本的に終わりかけている奴が多い。俺もそうだった」

足が止まった。

「アイツは案外人思いでな。困った奴がいたら手を貸す奴なんだよ」

「……騙されたと思つて今日、アイツとゆつくり話してみる。良いことあるぜ」

何をとまでは言わず、この場を後にした男の背中をただ見詰める。下らない、そう一蹴する事は出来た筈だった。

「おう……轟か。すまん今先生から雑用任されてしまつてなあ……将棋は少し待つてくれないか？」

気付けば俺は何故かアイツの元に向かっていた。

「ああ。待つ」

俺の言葉にアイツは目を丸くすると。

「……そっか。よっしゃ！ 先に将棋するか！」

と、雑用を机の中にしまい込み。折り畳み型の将棋盤を出した。

——パチリ。夕焼けが入り込む教室に小さな音が鳴る。

「……で。どうしたんだ？」

「……どうしたも何もお前が呼んだんだろうが」

「……そうだったか？」

記憶にないと笑いながらアイツは駒を進めた。それに俺は対応するように駒を進め返事を返す。

パチリ。パチリ。パチリ。パチリ。

「……俺の顔を見て何か思わねえか？」

何故か俺の口はそんな事を口走っていた。何故なのかさっぱり理解出来ない、だが……俺の口は確かにそう言っていたのだ。

「……イケメンにはなんでも似合うとは思うが……それ以上に何を言つて欲しいんだ？」

何を言つて欲しい……俺はコイツに何を望んでいる？ 何故あんな事を口走つてた？

「……俺の父親はNo. 2ヒーロー。エンデヴァーだ」

やめろ、これ以上話すな。

「そうか」

パチリ、盤面が動く。

「……俺の父親は人として、屑同然の男だ。母はそんな父親のせいで狂った」

「そうか」

パチリ、盤面が動く。

「母は俺に煮え湯を浴びせた『お前の左側が憎い』そんな理由だった」
やめろ、もう止まれ。

「そうか」

パチリ、盤面が動く。

「俺は母さんから離され、母さんは病院へと叩き込まれた」
「そうか」

止まってくれ。

盤面はまた進んだ、パチリパチリパチリパチリパチリ。盤面はどんどん進んでいく。止まらない、俺の口も止まってくれない。一度吐き出した言葉は盤面に連鎖するように止まらなかった。

「俺はクソ親父が憎い」

盤面が遂に止まった。

「それと同じくらい俺の左側が憎い。母さんを苦しめた自分自身が憎くて仕方ない」

「姉さんを苦しめた自分が憎い」

「俺は俺自身が憎い」

言葉が重なり合った、条件反射で俺はアイツの顔を見る。
「自分を憎むな。お前は悪くない」

笑っていた、俺は直感的にこの笑みがなんなのかを理解した。

『……困った事があったらお姉ちゃんに相談してね？』
それは姉さんの笑みと同じだった。

『——焦凍。良いのよ、貴方は……』

■さんの笑みと

「……取り敢えず。大体分かった」

アイツはそう言うと言棋盤を片付け、俺としっかりと向き合う。思わず視線を逸らしてしまうが、その度にアイツは俺を見てこう言った。

「逃げるな。俺を見ろ」

「大丈夫だ、お前の■はお前を恨んではない。お前の姉はお前に愛想を尽かさない」

「家族の絆は絶対に壊れない」

「だから、大丈夫だ」

今日はお姉さんとゆっくり話した方が良く。自分の思いを少しでも良いから出してあげ

アイツはそう言うと言帰りに支度を始める。

「おい……まで……」

「また明日。学校でな！」

何時ものような笑顔でアイツはこの場を後にする。残ったのは震える右手を虚空に突き出す俺だけ。

「何を話せば良いんだよ……ッ！ それだけは教えてくれても良いだろうが！」

俺はアイツがいた場所にそう言うしか出来なかった。

過去話 4

あの時の俺は石の言葉を受け止めきれずにいた。『お姉さんとゆつくりと話した方が良い』俺は姉さんになんと言えば良かったのか分からなかったんだ。

「おかえり……焦凍？」

「……ただいま」

何を話せば良い。何を言えば良い、それすら分からない俺はただ返事を返して部屋へと向かう。また何も出来なかった、そんな自分に苛立ちを感じながら俺は足を進めた、その後は毎日のようにしている訓練をする。我武者羅に、訓練をしている時は他の事を考えなくてすむ。

いつその事、もう明日が来なければ良いのにと。そんな事を考えた。

『家族の絆は絶対に壊れない』

アイツの耳障りな言葉が頭の中で響いた。

朝は望まなくても必ず来る、俺は何時ものように学校へと向かう。学校に行く前にすら姉さんに何も言えず、そんな自分にまた苛立ちながら俺は足を進めた。苛立ちを隠せずにいると耳障りな雑音が俺の耳を穿いた。

「よお轟イ……俺の事を覚えてるか？まあ……スカした面で俺を見下してたお前が俺を覚えてる訳がねえけどな」

知らない声だ、アイツの声じゃない。顔を見ても覚えがない。俺はその声の主を無視して足を進める。ただでさえ機嫌が悪いのに、こんな奴と関わってる余裕はない。

「……やっぱりお前はそういう奴だよなあ！なんにも変わらねえ！他人を見下したその目！全てを拒絶するその背中！てめえは本当にお前の親父に似ているよ！」

その言葉に思わず振り返った。他の全ては受け流せるが俺にとつて唯一認められない事を言われた気がした。

「……何だテメエ。何の用なんだ」

要件をさつきと聞いてこの場を去ろう。そう思い要件を問うと声の主は肩を竦め言葉を続けた。

「……まあ、そうだろうな。他人に興味のないお前にとって俺はモブにすらなれない男だ」

「宣戦布告だよ。轟焦凍、いやNo. 2ヒーロー。エンデヴァーの息子」

「俺はお前の事が心底憎い。世界中の誰よりもお前が嫌いだと言っても過言ではない、だから俺はお前を殺す」

それまで震えて待っていやがれ。そう言い残し声の主は去っていく。殺す、そう宣言されたのに俺の心に何も感じるものはない。どうでも良いと結論づけ俺は止めていた足を進めた。

考えるべきだった。己が憎まれる原因を、何故殺したいほど憎まれていたのかを。だが、たった一つの復讐の為に全てを顧みず突き進んでいたあの時の俺に、それを出来る訳がなかった。

「——なーんか轟って何時もつまんなそうな顔をしてるよな」

放課後。俺はアイツと一緒に将棋をしていると、突然そんな事を言われた。いきなりの言葉に眉を細める俺の顔をみながらアイツは言葉が続けていく。

「それだよそれ、眉を細めてニコリとすら笑わない。んな顔ばっかしてると表情筋が固まってそれ以外の顔が出来なくなるぞ」

「スマイルだよスマイル。あっプリ〇ユアじゃないからな」

笑いながらアイツは言葉を続ける、俺の口元に指を当てて上に向けて。表情筋を無視して作られた歪な笑みが俺の顔で作られた。不機嫌そうに寄せられた眉根を親指でグリグリと指ですられる。思わず指から顔を離す。何をする、と視線に乗せ睨みつけるとアイツは何時もと同じように笑っていた。

その時、俺は初めてアイツの顔をマジマジと見た。誰かに似ている笑み、見ているだけで何か胸の奥が熱くなるような、そんな笑顔。

その時、俺は完全に察してしまった。この顔を俺は何時も見ている。

俺を見つめる姉さんの笑みだ。

昔、俺に煮え湯を浴びせる前の母さんの。

「これは俺の母ちゃんを受け売りなんだが……世の中最後まで笑って
る奴が勝つらしいぞ。まあ……オールマイトも似たような事を言っ
てたし間違いないな！」

「だからさ、お前も笑つとけ。肩肘張らずに生きてた方が人生楽しい
ぞ」

「だから。お前も笑つとけ」

意味が分からない。けどその最後の一言だけは俺の胸に深く突
き刺さった。

だからだろうか、聞いてしまった。コイツなら教えてくれるかもし
れない、そんな事を思つて聞いてしまう。

「……俺は何を話せば良いんだ？」

要領を得ない言葉足らずな俺の言葉にアイツはまた笑つて

「なんでも良いさ。今日学校であつた事でも良いし。空が綺麗だつた
ら、今日は青空が綺麗だつたでも良い。そんな単純な事で良いんだ」
「嫌な事があつたらそれを話せば良い。そういうのは溜め込み過ぎる
と身体に毒だ。出さないと狂つちまう」

そうだなあ……とアイツは頭を捻り窓から景色を見る。そして俺
に語り掛けるように言葉を続けた。

「見ろよあの雲。ウンコみたいじゃね！」

そうアイツが指を指す先に見える雲は夕暮れの色に染められて確
かに糞に見えない事もなかった。下らない、聞いた俺が馬鹿だつたと
思い席を立つ。そのまま家へと足を進めた。

「おかえり焦凍……焦凍？」

姉さんの言葉に俺は動きを止める。何か話さなきゃならない、一体
何を話せば良い？

「……今日ウンコみたいな雲を見た」

本気で自分が嫌になった。いきなり俺は何を言ってるんだ、そう思
い頭を振る。

「悪い……違う」

「フフツ……ウンコって……焦凍がウンコって……フフツ」

否定しようと言葉を続けると姉さんは顔を逸らして肩を震わせていた。失敗した、自己嫌悪の波に取り込まれる。頭の中でグルグルと自己嫌悪を吐き出す俺の身体が引き寄せられる。

「……違うって事は他にも何かあったんだよね？ お姉ちゃんに教えてくれない？」

姉さんは嬉しそうに笑っていた。抱き寄せられた姉さんの体温を感じながら俺は言葉を続ける。

「……アイツが変な事を言ってたのをそのまま言っちゃまったただけだ。それ以外に何にもねえ」

その言葉に姉さんの動きが止まった。何時もの笑顔が顔が呆気に取られたようになる。何秒か分からなかったがその顔がまた笑顔に戻った後、姉さんは言葉を続けた。

「あるじゃない、他の事がいっぱい。今日は洗いざらい話してもらわないと怒っちゃうんだから」

今日は訓練サボっちゃいなさいと笑う姉さんに引つ張られ居間へと連れていかれる。

「それじゃあ教えて？ そのアイツくんの事」

俺はアイツの事を話した。幸いアイツは毎日のように俺に構ってきたから姉さんに色々と話す事が出来た。

無理矢理将棋をやらされる事、アイツは強くて俺は未だに勝てない事を。

弁当の中身を無理矢理交換させられた事、人の魚を卵焼きと無理矢理交換させられた事。

無理矢理トランプをやらされた事、何度も何度も最後までジョーカーを握っていた俺を見てアイツは笑いやがった事。

話し出すと止まらない。そんな中、姉さんは何時もの笑みで俺に語り掛ける。

「……アイツくんは焦凍のお友達なんだね」

即答出来なかった。アイツは俺に無理矢理関わってくるだけ、友達ではない。その筈だ。それに俺はウンザリしている、その筈。

「……分からねえ」

だが、口から出た言葉は肯定でも否定でもない。そんな言葉を聞いても姉さんは笑っていた。

その日は姉さんと話した、沢山話した。夜になり寢床につく。

明日は何を姉さんと話そう、そんな事を考えながら。

俺は優秀だった、あらゆる面で成績を残した。誰もが俺を褒め称えた。

アイツが出てきてくるまでは。

俺の個性は一般的に強個性と呼ばれるものだった。性質がヴィラン向きだとしても、誰もが俺の個性を褒め称えた。

アイツが出てきてくるまでは。

俺は優秀だった、アイツが出てきてくるまで俺は勤勉で善良な人間だった筈だ。あんな奴が出てくるまでは、俺の王国にあんな異物が出てくる迄は。

「死ぬ……轟焦凍。死ぬ。アイツのせいでアイツのせいでアイツのせいで」

全てはアイツが出てきて狂った。常に頂点だった成績はアイツの登場で常に2番手となり、母は1番になれないのは勉強が足りないからだと俺を罵った。

俺は母の期待に応えようとした。寝る間も削り日々机に齧り付いた。だが……そうしてもアイツに追い付けない。

『今回も轟が一番だな！ 惜しかったな■■■！』

先生は俺を見て笑う。1番を取れない俺を嘲笑っているのだ。

『■■■！ アンタの努力が足りないのよ！少しは轟くんを見習ったらどうなの!?!』

母はそう俺を蔑み、無能だと吐き捨てた。

『轟の個性すげーな！ ちよーかっけえー！』

周りの奴らは俺の個性を褒めなくなつた。アイツの個性はヒーロー向きで超がつくほどの強個性だった。他の奴らは俺を見て笑う、褒め讃えていた筈なのに。

『■■■の個性もすげーけど……やっぱヴィランみたいだよな』

俺の王国が瓦解する音が聞こえる、時間を掛けて造り上げた筈の王国が崩壊していく。

そして……その下手人は全てに興味が無いようにこう言い放つのだ。

『消えろ。邪魔だ』

なんなのだコイツは？ 俺の国を滅茶苦茶にして、乗っ取るでもなしにただ無関心だと？ お前には俺達がゴミ屑にしか見えないのか？

お前から見たら全てがゴミ屑なのか？この俺ですら塵芥でしかないと言うのか？

絶望が俺を蝕んだ、そこから俺は転げ落ちた。悪い事は大体やった、俺の個性ならどんな奴だって俺の配下に来た。年上だって俺の配下にしたし、大人だって俺の支配下にしてやった。

そうして俺は新しい王国を造り上げた。誰もが俺を褒め讃える、素晴らしい世界だ。だが……何かが変だ、俺の胸に何かシコリが残っている。

「轟焦凍……アイツだ。俺の楽園を壊したアイツが生きてる限り、俺に真の平穏は訪れない」

だから殺す。そして……アイツを殺す前に、嘲笑いながらこう言うてやるのだ。

ゴミ屑はお前の方だと。

パチン、駒が進められる。その瞬間に自分の敗北を悟る。また負けた、そう思い対戦相手を見ると、アイツは如何ともし難いと言わんばかりに複雑そうな顔でこちらを見ていた。

「轟……お前本当に弱いな。テスト見る限り頭は悪くない筈なのに……実はお前って勉強出来ないからガリ勉で補うタイプ？」

「……うるせえ」

何度やつても勝てない。もう百はやっている筈なのに、未だに飛車と角をハンデとして此方に渡されても尚勝てない。

「んじゃ罰ゲームな。携帯かせ」

「……は？」

始める前に罰ゲームなんて話はなかった筈、そう思い睨み付けるも

アイツは気に返した様子もなくただ携帯を要求するように掌を此方に出す。

諦めて携帯を渡すとアイツは俺の携帯を触り納得したように呟く。

「……まあこんな事だろうと思っただが、こりゃ駄目だわ。壁紙は初期設定&電話帳は家族のみ&画面シールすら外してないとかここまで来るといつそ笑えるな」

「デメエ何見てやがる。返せ」

俺がそう言っただけで携帯を取り返そうとすると、アイツは避けながらも片方の手で自分の携帯を取り出し2つの携帯を動かし始める。取り返そうと躍起になっていた俺に携帯が渡される。

「取り敢えずアドレス帳に俺のメアドとケー番入れといたから」

「……ケー番？」

初めて聞く言葉に首を傾げると電話番号の事だと笑いながらアイツは話した。なんの為に入れたのか、それを聞くとアイツは笑い言葉を続ける。

「俺がお前の電話番号知りたかったから。この際ここで交換しておこうと思っただけ」

俺のついでに大和の番号もいるか？と笑うアイツに何か言おうと考えたが口で勝てそうとは思えず口を閉じた。

「それと……おいモチキング！」

「どうした童貞！ 何があった!？」

「殺すぞ貴様。チンコもぎ取ってやろうか？アアン？」

「やれるもんならやってみろよチェリー？あつ一生チェリーだったか？」

確か……大和と名乗っていた筈の男がアイツに呼ばれ近付いてくる。その際に2人が胸ぐらを掴み合い睨み合うが俺の視線を感じお互いに腕を下ろした。

「……お前を殺すのは後だ後。おら写真撮るから集まれ」

そう言いアイツは俺の隣に立つ。そして俺のもう隣に大和を呼ぶようなジェスチャーをした。

「あん？男3人で写真とか頭に蛆湧いてんのかこのカス」

「お前……ほんつとーに。良いからやれ」

「へいへい。分かりましたよ」

飄々と俺の隣に立った大和を確認すると、アイツの手にあった筈の携帯が宙への浮かぶ。

「ほら笑え笑え」

「せんせー。ここに個性を悪用してる童貞がいまーす」

「青少年のくせに毎日やりまくりの屑に言われても先生は困惑しか出来ないだろうなあ」

カメラのシャッターが切られた音がして携帯のライトが光る、そして携帯はアイツの手元に戻り、アイツは携帯を動かし驚いたような声を上げた。

「うっわ……轟めっちゃ仏頂面」

「マジかよ……うっわマジで真顔じゃん。正直ウケるわ」

アイツが持っていた携帯を覗き見た大和が面白いものをみたように笑う。そして笑いながら俺に携帯を見せてきた。

そこには真顔の俺の顔があった。それを見せながら大和は笑い言葉が続けた。

「コミュ障極めすぎだろ正直ウケるわ。俺レベルとは言わんけど顔面偏差値結構高いのにもったいねえ」

「お前本当に煽るの好きだよな」

「煽れる時に煽つとけが家の家訓でな。分かったかブサイク君？」

「だから捨てろって何時も言ってるだろうが。性根ブサイク野郎」

言葉の応酬からそのまま睨み合う2人。先に折れたのはアイツだったらしく、そのまま携帯を操作しながら俺に話し掛けた。

「取り敢えずさっきの写真送っといいたから壁紙にしなさい。強制な」

「は？」

ポケットに入れていた携帯がバイブで揺れる。取り出して確認するとメールに画像が送付されていた。

馬鹿馬鹿しい。そう思いメールを削除しようとするアイツは大和に声を掛けた。

「大和。やれ」

「おつとコミュ障ボーイ。何をする気なんだ？」

後ろから動きを封じられた俺の手から携帯が奪われる。アイツは何度か操作すると俺へと携帯を返した。

「ちやーんと壁紙変えといたから」

携帯を確認すると確かに変わっていた。壁紙を変えるために携帯を操作するも何故か変えられない。変えるためにパスワードが必要だと出てきた。

「あつ。因みにパスワードは18桁だから」

「鬼かお前は」

苦笑いする大和の声を聞きながら適当にパスワードを入れるも、現実は無情らしく、全て外れる。

「……パスワードを教えろ」

「明日教えてやる。明日な」

そう言いながらアイツと大和は教室を出ていく。

「じゃあ明日な！」

「……そんな片意地張つても正直無駄だからそろそろ諦めた方が気が楽だぞー」

そんな声を聞き、俺も帰り支度を始めた。荷支度をしていると突然教室の扉が開く。

「……」

そいつは見たことのない奴だった。だがこの学校の制服を着ているからこの学生だとは分かる。無言でこちらを見ながら、ただ佇むソイツを訝しんだ俺は距離を取りながら返事を返した。

「……なんか用か？」

「……」

俺の言葉に何も言わず、そいつは携帯を操作し始める。すると何処かに電話をかけたのかプルルルとそいつの持つ携帯から音が鳴り、ガチャリと音が鳴った。

『よお……轟イ。元気にしてたか？ 約束の時間だぞ』

「……誰だ」

覚えのない声に緊張が走る。約束、一体なんの話だと思っている

と、その声の主は声のトーンを下げ言葉を続けた。

『そうかそうか……つい最近の事だったがもう忘れたか。いやあの時のお前の眼中に入ってたなかつた俺のミスだな。詫びよう、俺のミスだ』

『お前から見れば俺はただのモブ野郎だよ。存在すら覚える価値のないモブさ』

「下らねえ……帰る」

まるでピエロを彷彿とさせる話し方に苛立ちを感じ俺は目の前の存在を無視してこの場所を後にしようとする、通り過ぎて扉を潜ろうとした瞬間。

『……轟冷って知ってるかア？』

足が止まった。

「……なんで母さんの名前をテメエが知ってる」

俺の反応が気に入ったのか声の主はトーンをあげて盛大に笑う。

『ピーヒツヒツヒツ！ それだけじゃねえぞ！ 轟冬美だったか？ 美人なお母さんとお姉さんだなア！ 正直羨ましいよ、あんな綺麗な身内がいるなんて！ 俺も欲しいなあ……欲しいなあ』

『両方……欲しいなあ』

底冷えする声が俺の背中を伝う。そして理解する、この声の持ち主は俺の姉さんと母さんに害を及ぼすかもしれない存在、つまりウイルスン。

「……目的はなんだ」

『本日以内でのお前の生命の断絶』

即答だった。俺の命が欲しい、正確には死んで欲しいと、この声の主はそう言ったのだ。

『お前がいたら俺は幸せになれないんだよ。だから死んで欲しい、できるだけ惨たらしく、苦しんで死んで欲しいんだ。頼むよ』

「……拒否すればどうなる？」

『……』

その瞬間、携帯を持っていた生徒が泡を吹いて倒れる。慌てて駆け寄ると携帯から愉快そうに笑う声が聞こえた。

『ヒヒツ……ヒーツヒツヒツ！ だいじょーぶ死んでない！ 倒れただけさア！ 殺したら犯罪者だからな！ まだ殺してない！ コイツを殺したってなんの意味もないからな！』

『……言いたい言葉の意味。賢い賢い轟焦凍さんなら分かるよなア？』

言外に俺が断れば姉さんと母さんを殺すと言ってきた。怒りのままに唇を噛んでしまう。唇からタラリと血が流れ、地面へと落ちる。

『安心しろ！ お前が死ぬ場所はぜーんぶこの俺が用意してやった！

俺の王国にお前を招待してやるんだ！ 咽び泣いて感謝してくれ！』

『だから……この携帯を持って、俺の誘導通りに進んでくれ』

それで話は終わりだと思っていたら、忘れていたと言わんばかりに、その声の主は言葉を続けた。

『あつ。ヒーロー呼んだら二人とも殺すから』

これが俺の運命の日、恐らく人生の中で一番長い日の始まりだった。

過去話 6

『なあなあ轟焦凍くん。目的地に辿り着くまでちよつとしたゲームしようぜ』

『ゲーム……?』

夕暮れ時でも街の喧騒を変わずに賑わっている、そんな街を歩く1人の少年がいた。少年の手に握られているのは写真が沢山貼られたピンク色の携帯、第一印象でこの携帯の持ち主が彼だと思おう者はいないだろう。実際、これは彼の物ではない。

『そう……単純なゲームさ。俺の正体が誰なのか、それを当てる簡単なゲームさ』

彼は今、母と姉を人質に取られてとあるヴィランに脅され行動しているのだ。ヴィランは笑う、まあお前が俺を覚えているわけが無いと確信に満ちた声色で。

『お前の小学校は■■小学校。さて……俺の出身校は?』

『……知る訳がねえだろうが』

確かに自分が卒業した小学校は■■■だ。だが、ヴィランの出身校なんて知るわけがない。そう吐き捨てるヴィランは愉悦が抑えられないように嗤う。

『ほんとお? まあ良いや。じゃあ次の問題にいこうか』

コホンと咳をしてヴィランは次の問を出す。

『君が初めて俺に会ったのは何時でしようか?』

また意味不明な問題だ。だが、出題者がそういうのだ。恐らくこのヴィランは俺を知っている奴だ。

『……俺はお前と会った事があるのか?』

そう聞くとヴィランはおどけるように笑い言葉を発した。

『あるとも! もしかして思い出してきた? いやあこんな無駄な事もやってみるものだねえ! やっぱ最初の問題が良かったのかな!』

『いや……お前なんて知らねえ』

電話の先で何かが壊れる音が聞こえた。

『あのさあ……なんなのお前。俺に喧嘩売ってんの？ 次同じ事やったら覚悟しとけよ』

あつ次の角は右ね、という言葉に従い道を進んでいく。裏通りを進みながらヴィランの言葉に耳を傾けた。

『俺は何歳でしようか？』

『ヒントはお前と同じ年齢さ』

「……答えじゃねえか」

ヒントと言いながら答えを言い出すヴィランに呆れながら俺は脳を回す。

1つ 俺とヴィランは同年代

2つ ヴィランは俺の出身校を知っていた

3つ 俺はヴィランとあつた事がある

ここから編み出される答えは一つしかない。

「……お前。小学校の頃の同級生か？」

『せーいかーい！ 詳しく言っただけはお前の他人を覚えないくソミたいな人間性を考慮して今回だけは特別だ！』

そう言いヴィランは無言になる、互いに話さなくなり暫く歩いた後。ヴィランはゆっくりと話し始めた。

『……良いよな。選ばれた人間って』

『俺は優秀だった……個性も強くて勉強も出来た。正直あの時代の俺は神に等しかった。何奴も此奴も俺を讃えていた』

『楽しかったなあ……本当に楽しかった。毎日が輝いていたよ』

『友達は俺が選ぶ立場。気に食わない奴がいれば俺が何かいうだけでソイツをハブる事が出来た。隠れて何人も虐めたよ……楽しかった。優越感に浸れて明日が来るのが毎日楽しみだった』

『ああ……明日を何をしようかって布団に入りながら明日の予定を建てるのさ』

思い出すように語られる言葉に耳を傾ける。屑同然の行いをしむじみと語る声色は自分に非がある事を何一つ気づいていない。正しく屑、畜生そのものだった。

『正しく英雄になる運命の子って感じ？ 全てが俺の為にあつたん

だ。これ以上に幸福な日々はなかった』

『毎日が俺の笑顔で溢れていた。俺は充実していた』

お前が現れるまでは。

空気が変わる。電話越しですら感じる変容に轟は思わず身構えた。

『更選ばれた子が出てきたんだ。親はN0.2ヒーロー、個性は超強力でヒーロー向き、ついでに俺よりも勉強ができるとききた』

『そうだな……ソイツは正しく神に愛されて産まれた子供だったよ』

お前の事だよ、轟焦凍。とヴィランは吐き捨てる。困惑する、俺が神に愛されて産まれた？ それはない。なぜなら俺は

「……俺の存在は母さんを傷つけた。そんな俺が神に愛されてる訳が無い」

そう、俺のせいで母は狂った。もしも神に愛されていたとしてもそれは疫病神かなにかだろう。

『ハアアアアツ？ お前の存在が母さんを傷つけたア？ んな事、お前が神に愛されているのとなんの関係性があるんだよ馬鹿か？』

『日本中がお前という存在に嫉妬するぜ！ 父親はN0.2、持つてる個性は超強力、自分を含めた家族は皆美形とききた！ これを神に愛されたと言わずになんという！』

『母親を傷付けるだけでお前になれるなら皆親の1人や2人ぶつ殺すに違いねえよ！』

理解不能だと笑うヴィランに果てしない不快感を感じる。思わず顔が不快感で歪むが電話越しにそれが伝わる事はない。

『あーあー……あの屑を殺して俺もお前になりてえよ。俺が努力しても全部否定したあの屑を殺してお前になれるなら一石二鳥なのになあ』

『ああ……もう殺した後だったわ』

その言葉に思わず手に力が入る。このヴィランは今、なんと言った？

「……殺したのか？」

『ああ！ 俺がお前に壊された楽園を新しく作り直す際に必要ないものは全部処分しようと思ってな！』

『手を汚さずに殺す方法なんて俺の個性を使えば幾らでもある。あの屑は死んで当然なんだよ』

理解不能な言葉に思わず足を止める。これが自分と同じ年齢が考える事なのか？ 母を殺害して一切の罪悪感を感じていない、それどころかして当然だったと言い出す始末。

「なんなんだ……お前は」

『ん？俺は??だよ。お前は覚えてないだろうけど』

聞き覚えのない名前に眉を顰めているとヴィランはつまらなそうに言葉を続けた。

『……というかお前が名前を覚えている奴とかいんのか？ いないだろ』

だつてお前、この世の全てを見下してるし。

簡単に吐き出されたその言葉に困惑するしか出来ない俺の態度が気に入ったのかヴィランは電話越しに言葉を続けた。

『え!?!もしかしてお前！ 自覚なかったの!? マツツツジデ!? おいおいおいこれなんていうギャグ？ 下手なコメディイより面白いぜ！ お茶の間大爆笑間違いなしだ！』

『そっかー自覚なしかー。マジで屑だなお前、社会のためにさつさと死ねば良いのに』

『あの全てを見下す目！ あれを見せられて俺と同じことを思わない奴はいない！ どう考えてもお前は全てを見下していた！ 全部がくだらないんだろ!? 全部が邪魔なんだろ!? 違うか!?!』

人すら通らない裏路地で俺は立ちすくしていた、電話越しに聞こえる声が遠く感じる。

『おいおい……聞こえてマースか？ ちっ……つまんねえ。無視しやがって』

「俺は……見下していたのか？ 姉さんも？ 母さんも？」

『おつ聞いてんじゃねえか！ そうだよ！ お前は人を見下していた笑う糞野郎だ！ お前みたいな奴はさつさと……』

ヴィランが何かを言い切る前に目の前の小さなマンションから1人の男が降りてくる。男は轟の顔を見ると驚いたような顔をして近

付き話し掛ける。

「ん……お前。轟か？　なんでこんな裏路地にいるんだ？　ここはお前が来る場所じゃねえぞ。お前は無駄に顔が良いんだからさ。ほれ、回れ右しろ回れ右」

「……お前は」

その男の名前は信条大和。轟焦凍の同級生であり引合石と共に轟に構ってくる2人のうちの1人だ。

「おいおい後輩。俺の事は大和と呼べと言っただろうが……んで……あー……」

ジロジロと轟の姿を見た大和は頭を抱えたため息を吐く、ヤバイものに出くわしたと言わんばかりの態度で天を仰いだ。

「……電話してんだろ？　取り敢えず話したい事があるから1回終わらせてくんね？」

『……無視しろ。お前お得意のアレをしろ』

電話越しのヴィランの言葉に従うしかない轟は眼前の存在に助けを求める事すら出来ない。

「……邪魔だ」

さっさと退け。そう視線に乗せて睨みつけると大和は苦笑いをし言葉が続けた。

「……オーケーオーケー、その前にちよつとだけ待ってくれ。先生がお前に伝言があるって言ってた事、今ちようど思い出したわ」

そう言い、大和は辺りを見渡した後。おもむろに轟のポケットに腕を突っ込み携帯を取り出した。

何かを操作したかと思えばまたポケットに携帯を突っ込む。

「プリント、お前提出してないから出させてよ。んじやな後輩、頑張れよ」

「……同級生だろうが」

「ばっか……お前俺は先輩だぞ。色んな意味でな、じゃあなチエリー。明日は引合に勝てるの良いな」

そう言い、この場を去る大和を見送るとヴィランは楽しそうに声を上げる。

『いやあ！相変わらずの氷点下だ。マジでクズだなあお前。アイツお前なんかにあの態度とかマジで良い奴じゃねえか』

「……そうだな」

その後も会話は続く、ポケットの携帯は小さく光り続けていた。

過去話 7

『焦凍……お姉ちゃんね。本当は少し心配していたの。焦凍が学校で辛い思いしてないかって。辛くて学校に行きたくないって考えるんじゃないかって』

また……姉さんと話し合えるようになったんだ。

『でも。安心した……今の焦凍ならきつと大丈夫。ううん、絶対に大丈夫』

そう笑う姉さんの笑みはいつもと違っていた。俺はその笑みを守りたい、もう二度と姉さんを苦しめたくない。

あの笑顔を守りたい。

『おいおい。どうしたよ轟焦凍、黙りくさつちまって。俺はお前の人最後の会話相手、もつと色々と話そうぜ？』

だが……コイツがいる限り姉さんを守る事が出来ない。姉さんだけじゃない、俺のせいで苦しんだ母さんの生命も危ない。

『——良いのよ、お前は……』

ノイズまみれの記憶にある母さんの姿。鮮明に覚えている俺に恐怖する顔じゃない、それよりももつと昔の母さんの姿。

姉さんと母さんを守りたい。その為なら……俺は。

「ああ……そうだな」

『そうそう！人生最後なんだし色々話しておかないと損だぜ損！』

今日、ここで死んでも良い。

「やっぱりか……可笑しいと思ったんだよ。色々と」

夕暮れ時の凝山中学に1人の少年の声が響く。その少年は自分のクラスの教室の前で納得し、怒気を隠せない声色で言葉を続けた。

「あの後輩が沙織の携帯を持っていたのが可笑しいと思ったんだ……しかも彼処は底辺オブ底辺が集まる裏路地、後輩が通るような場所じゃない。しかもあの時の後輩の顔、確信した」

脳裏に映るのは泣きそうな顔で此方を見る後輩で、俺を睨みつける

姿は見ていて痛ましかった。少年は眼前で倒れ付す少女を抱き抱え言葉を続ける。

「誰だ……俺の愛するキティの1人を使つて轟を操っていた奴は。誰でも良いが覚悟しとけよ、俺は自分の物が勝手に使われて、しかも傷つけられるのに堪えられる男じゃねえ」

「お前だけは絶対に破滅させる」

そこに何時もの信条大和の姿はない。今のクラスメイトが彼の姿を見れば驚愕の余りに後退りしてしまうだろう。

溢れんばかりの殺意。端正な顔を怒りに歪ませ、少女を抱き締める彼は最早別人の域に達している。

携帯電話を取り出し大和はとある人物へと電話を掛ける。相手が電話に出た瞬間、声色を変え大和は言葉を発した。

「ねえ俺のキティ。ちょっと頼みたい事があるんだけど」

先に要件を言う必要は無い、彼女達が大和の願いを断る訳が無い。大和自身もそれをよく理解しているからこそ言葉を続ける。

「俺のキティ達の中に最近沙織が何処に行つていたのかを知っている奴がいたら教えて欲しい。出来るだけ早く、これをグループLINEで流して欲しい。頼めるかな？」

当然の如く返事を返す電話相手の声を聞き大和は柔らかな声で返事を返し通話を切る。

「ありがとう。愛しているよ」

通話を切り、大和は少女を抱き抱え歩き始める。

「俺の物を傷付けた代償はキツチリ支払つて貰うぞ。ゴミ屑」

引合石が彼のこの姿を見れば困つたように笑いながら彼の事をこう表現するだろう。

あの頃のお前、全開だな。と

そして彼の携帯に返事が入る、先程頼んだ事の結果がもう届いたのだ。別に可笑しい所は何も無い、彼の持つネットワークの力があればこの程度は容易い事。その結果内容を読み込み大和は笑う、口元を裂ける程に歪ませて。

「ほお……なるほど。最近そこに沙織は……なるほどなるほど。つま

り此処が奴さんの拠点って事か」

そこは裏路地の奥にある1つの小さな空き家。そこならば誰かが何かをしていても誰も気に留めないだろう。昔からチンピラが屯している場所の1つだ。なるほど。と大和は納得し携帯を操作する。

「よお童貞野郎。轟の奴がやべえ事になってやがったぞ」

電話先の相手はそれだけで現状を理解し、大和へと情報を求める。知りうる情報を全て話し、相手の声色が段々と低くなるのを感じ大和は薄く笑った。

「(流石は俺の知りうる最強の存在だ。プロヒーロー共に頼るよりも圧倒的に頼りになる)」

電話越しに感じるこの圧倒的な安心感。渡した情報から既に幾重にも可能性を潰し正答へと近付いているこの圧倒的なスピード。

『……相手が何かを盾にして轟に何かを要求しているのは火を見るよりも明らかだな』

「その通りだ、アイツはあの時泣きそうな顔で俺を睨み付けやがった。恐らくアイツが最も大切な物を盾にされたんだろう……つまり」

『『家族』』

電話越しの相手の声が氷点下よりも下がった、大和はそう感じた。コイツは最も家族を大切にする男。家族、コレが使われたとなれば、コイツの逆鱗に触れたと同義。

『大和……轟の家族の情報分かるか?』

「おう。1から100までゼーンぶん分かってるぜ。なんならスリーサイズもいるか?」

『いらん、さっさと相手を詰ます。戦う前に終わらせる』

何時もなら通じる軽口すら反応しない相手に大和は笑う。思った通りの反応、いや、それ以上だと。

「エンデヴァーを除いて家に住んでいるのは轟とその姉、ちなみに姉は××小学校の教師。後3人いるが1人は行方不明、1人は母親で病院、もう1人は大学生で今は大学近くのマンションだ」

『全員安全な場所に纏める』

「どうやって?」

現在、全員が全員同じ場所にいる訳では無い。俺も流石に轟の家族の電話番号まで分からないと言うと相手は言葉が続けた。

『数だけは有り余っているヒーロー共を使う。こんな時だ、精々俺の手のひらで踊って貰う』

『何時もは給料泥棒してる余り者なんだ。ここで働かなくて何時働かせる』

時折コイツが見せる姿。何時もの飄々とした姿でもなければ友情に熱い姿でもない。ただ冷徹に敵を追い詰める姿。

これだ。と大和は背中冷や汗が流れたのを感じた。自分の怒りすら消し飛ばす程の圧倒的な圧力、電話越しに感じるこの存在感。これがコイツなんだ、大和は感じていた。

最後に確認事項があるとアイツは語る。

『任せろ、全ては俺の為にある。それで……確かめたい事があるんだが』

「ほんつとーにお前が親友で良かったよ。俺は……どうした？」

『轟の電話はまだ繋がっているな？』

「当たり前だろうが、携帯なんぞ腐るほどある。欲しけりゃくれてやろうか？」

そう軽口を叩くと電話越しの相手は即座に返事を返す。電話越しに空気が流れる音が相手の声と混じりながら聞こえてきた。

『直ぐにでも取りに行く。そこを動くな、お前のいる場所はお前を『触っている』から分かる』

「……マジでお前が敵じゃなくて良かったわ」

その瞬間、圧倒的な存在感を感じた。景色全てが歪んだような威圧感を放つ存在が空から大和の眼前に降り立つ。

「来たぞ」

「……素早いご登場で」

そこに何時もの笑顔はなかった。

「なに……俺に電話？」

荘厳な部屋に1人の男がいる。その男は日本社会に置いて頂点の知名度を持つヒーローの1人、NO. 2ヒーローエンデヴァー。その男に1つの連絡が届いた。

「はい……ただ『お前なら聞けば全て理解する。火急であり機密ゆえにこのような連絡しか取れない』……との事です」

その言葉に眉根を細める。プロヒーロー故に火急の案件、そして機密事項だというのは理解出来る。だが、それならば真つ先に己のヒーロー名を伝える筈。それが無い時点でこの連絡は恐らくイタズラの類いの可能性が高い。

だが……もしもイタズラでなかった場合は未曾有の重大事件を止められるチャンスを失う可能性も秘めている。

厄介な事だため息を吐きエンデヴァーは電話を引き継ぐ用意をする。

「はあ……分かった、預かる。もう下がって良い」

そう言うのと女性社員は頭を下げて執務室から出ていく。その姿を見送った後、エンデヴァーは電話に出た。

「こちら。エンデヴァー、何があった」

『急がないとお前の血は今日滅ぶ』

時間が止まった。理解出来ない言葉に脳が追いつかない、俺の血が滅ぶ。意味をそのまま捉えると俺の血族の滅亡、つまり今日、俺の一族は全員死ぬと電話の主はほざいた。

「なに……？」

『お前は自分の嫁を守れ、後の手筈は全て整えてある。お前らが俺の手のひらで踊っていた方が此方としても非常にラクで済む』

「貴様！ 待て！ 何のことだ！ 話せ！」

慌てて電話の主にそう呼び掛けるも既に切られたのか電話越しに回線が切れた音が無情になるだけだった。

「糞ッ！」

思わず受話器を力づくで叩き付ける。そしてそのまま立ち上がり携帯で家族へと連絡を取る。まずは長女の冬美、直ぐに出た事に安堵して状況の確認を取る。

「冬美！ 無事か!?!」

『えっ……おとうさん？ えっ……これってどういう……キャッ?!』

その言葉を最後に電話は切れた。

「冬美!? 待て！ 冬美!?!」

その後も何度か電話をかけるが一方に繋がる気配がなく、慌てて他の者へと連絡を付ける。次男である夏雄、それもまた直ぐに電話に出た。

「夏雄！ 現状を報告しろ！」

『はあ……? 現状ってアンタの考えてる通りだよ。意味わかんねえけど……ってちよつまっ』

電話が切れる。

「夏雄!? ええいどういう事だ！ 夏雄!? 待て！ 繋がらんかこのポンコツ！」

スマホに有らん限りの悪態を付きながらエンデヴァーは何度も連絡をかけるが一向に電話に出る気配がなく、背中に嫌な汗が流れる。

もしや……焦凍も。

そう考え、急ぎ連絡を取るも焦凍と一向に連絡が通じない。何度掛けても相手が通話中だと無機質な音声伝えてくる。

「焦凍！ 出ろ！ 焦凍オオオツ！」

携帯が己の熱で焼ききれる。使えなくなった携帯を放り捨てエンデヴァーは慌てて執務室を後にする。

『己の嫁を守れ』……糞ッ！ なんだ！ 何が起こっている!?!』

己の嫁。今は病院にいる筈の女の事を考えて思わず舌打ちを打ちそうになる。出来れば会いたくない存在だ、焦凍が大切な時に狂った拳句煮え湯を浴びせた女。エンデヴァーからすれば己の後継者として相応しい息子を育成してた時の蛮行、到底許し難い。だが、愛して

いない訳ではない。

ただ……己の後継者である焦凍の教育に狂ったままでは邪魔だっただけだ。

個性を使い急ぎアレが居るはずの病院へと向かう。本来面接時間は過ぎているがNO・2ヒーローとしての体裁を持つエンデヴァーからすれば大体の事は多少無茶はつく。

「またですか!? 今日の面会時間は過ぎていきます! だれであろうともって……エンデヴァー!?!」

「退け!火急の案件だ!」

途中で止められるが知ったことではない。全力で階段を駆け上がり、アレがいる個室へと向かう。そしてアレがいる部屋を見つけると力づくで扉を開けた。

「おい! 無事か!?!」

己の嫁、轟冷の無事を確認する為に病室を見る。そしてその先にある光景に理解が及ばずエンデヴァーの思考回路はフリーズした。

そこには夏雄と冬美が困惑した顔で椅子に座っており、ベッドから此方を驚いた顔で見る冷と。

「えー……つと。どういう状態でしょうか?」

「……まったく分からん。この千里を見通すイーグルアイを持ってしても、正直現状が見えん」

プロヒーローであるバードマン、そしてシンリンカムイが説明を要求するような顔で此方を見ていた。

現状を理解した瞬間、エンデヴァーの脳裏に1人足りない事実が駆け巡る。

「一体何処にいるんだ……焦凍オオオツ!」

病院にエンデヴァーの怒号が響き渡った。

「……これで詰みだ」

携帯をポケットに入れながら少年は呟く。2個ある内の1つを片付け、もう1つ持ってあった携帯へと意識を集中する。電話の先から聞こえる声と鈍い音に心底苛立ちを覚え、思わず唇を噛み締めている

と、後ろから少年へと声が掛けられる。

「……『個性』は分かったか？」

「……分かん。アイツはただ暴行を加えているだけだ……恐らく罫り殺しにするつもりなんだろう、さつきから聞くに耐えん言葉ばかりだ。まるで餓鬼の駄々だな」

視線の先にある空き家を底冷えする視線で少年が睨みつけていると、携帯の先から聞こえた言葉に目を丸くした。

「……本当に俺が死ねば姉さんと母さんの生命は助けてくれるんだな？」

『ああ！ 約束は守るさ！ 俺はお前とは違うからな！』

少年は声色で全てを察した。片方は本気でここで死ぬ覚悟がある事を、もう片方は約束を微塵も守るつもりがない事を。

『やれお前ら！ もっと痛めつけろ！』

『……テメエがやるわけじゃないんだな』

『俺の『個性』じゃお前を殺せねえ！ 俺の個性はコイツらを動かす事が出来るくらいさ！ まあ！ それだけでも今のお前くらい簡単に殺せるけどな！』

「……簡単に自分の手の内を晒す馬鹿が。大和、後は任せた」

「……あれで分かったのか？」

「発動条件、能力は恐らく3パターンに絞れた。後は見て把握するだけだ」

あの程度の知能しかない奴ならこれくらいの情報で事が足りる。そう言い残し少年は大和と呼ぶ男へ先程まで持っていた携帯を渡し、その場を後にする。

「人間……切れたら人が変わるって言うが。アイツほどガチで怒らせたらヤベえ奴はいねえな」

俺のキティを傷付けた罰だ。有難く受け取って苦しんで死ねと笑い、大和は携帯を取り出し連絡をかける。

「先ずは王手の第一歩……いんやチェックはしていたか。やあキティ、少し頼みたい事があるんだけど……ああ、その件だよ。有難う。じゃあ、お願いね」

電話が終わり携帯をポケットをしまい込み大和は笑う。

「取り敢えず……結果は明日だな」

そのまま彼は裏路地の奥へと消えていく、約束された勝利に胸を踊らせながら。

過去編9

裏路地の奥にある小さな一軒家、そこには一人の少年の王国があった。とある事が切っ掛けで失った己の楽園、それをこの一軒家で作った直した少年は、嘗て己の楽園を壊した存在をこの場所で殺す事を決意していた。

新たな楽園を作り出したのだから、少年はもう過去の事を忘れてしまえば良かったのだ。その小さな王国で未来永劫、王様をしていれば救われていた。

だが。彼の肥大化し、小さな王国では収めきれない莫大な自尊心は悲鳴を上げていた。

過去の決算をしなければ己は幸せになれない、そう思ってしまった。

「轟イ！ 分かっているとと思うがお前が抵抗すればお前の家族がどうなるか分かってるよなあ!？」

感情の赴くままに己の手駒に命令をし眼前の下手人をいたぶり続ける。下手人が呻き、蹲る姿を見るだけで少年の心は少しずつ、少しずつ愉悦に変わっていくのを感じた。

昔。自分の楽園で行っていた遊び、適当な誰かを槍玉に上げて心を壊す遊び。あの時の愉悦感と自尊心を満足させる感覚が甦ってきたのだ。

「そうだよ、これが正しい姿なんだ。お前が下で俺が上なんだ。お前みたいな他者を見下す糞野郎が俺の上に居て良い訳が無い」

矛盾した言葉に気付かず少年は下手人をいたぶり続ける。彼の気が済む、つまりは下手人が死ぬ時まで。

「……約束しろ。絶対に姉さんと母さんに手を出すな」

下手人の目が少年を貫く。傷まみれで弱々しい姿でありながら揺るがない決意に満ちた目を見て少年はウンザリしたように言葉を続けた。

「……あー。当たり前だろ？ 俺はお前と違って約束は守るんだ。だ

から……安心して死ぬ」

嘘だ、少年は快樂的で破滅的な性を持っている。そんな少年が見目麗しい存在を放っておく訳が無い。

「歳上ってまだ味わった事なかったんだよなあ……気になるなあ」
下劣に満ちた思考回路を隠し切れず愉悅に満ちた笑みを浮かべる。もしも下手人を殺したとして、それから起こる展開を彼は微塵も想像出来ていない。日本で2番目に強いヒーロー。エンデヴァアの逆鱗、下手をしなくとも彼は煉獄の炎に焼かれ死すら生易しい地獄に向かうかも知れないというのに、下劣な想像を繰り返していた。

取らぬ狸の皮算用、ここに極まれり。と言った所だろうか。だが、少年は幸運だ。ここにそのエンデヴァアは来ない。

代わりに別の存在が近付いている。その存在がエンデヴァアと何方がマシかと言えば大多数の存在はその存在の方がマシだと言うだろう。だが……彼を知る者は頭を振りこう答えるだろう。

俺からすればどのヒーローよりもアイツが最も怖い。と

蹲る下手人に自ら手を下そう。そう思い玉座から立ち上がり、近付こうとした瞬間。爆音が王国の中で響き渡った。

扉が突然吹き飛んだのだ。突然の事に困惑する少年の視界に一人の男が姿を現す。

「……俺はさあ、別にお前のしている事に文句を言うつもりはないんだよ。嫌いなら嫌いで行動に移す。うん、隠れて陰口叩く奴らよりは好印象だ」

「基本的に大体の事は許容出来るんだ。だけど……これだけは許容出来ないって奴がいる」

男は己と同じくらい歳の年齢だった。眼前の下手人と同じ制服を着ている、つまり。この下手人と同じ学校の者かと辺りをつける。

「1つ、家族を大切にしない者……これは駄目だ。家族とは絆であり、宝。これを大切に出来ない奴を俺は信用出来ない」

男が近づくと。馬鹿な奴だと少年は笑い己の駒に命令を下す。眼前の愚者を殺せと。

「2つ、家族を使つて脅す存在……これも駄目だ。この世で最も大切

な物、だからこそ効果がある。確かに合理的だ、だからこそ俺はその行為を行う存在を忌避する」

駒の一人が投げ飛ばされる。愚者が駒に触れた瞬間に壁へと吹き飛ばされ、そのまま壁を突き抜けて外へと飛ばされた。

「3つ、俺の友人に手を出す奴。俺は友情と家族の絆が何よりも尊い物だと思っている。それだけは大切にしているし、それを大切にしない者と相入れるとは思えない」

男が近付いている。不味い、少年はそう直感し駒へと司令を出す。個性を使つてでもコイツを止めろ。

駒達が個性を使い愚者へと飛び込んで行く。火を使い、雷を纏い、身体を硬化させて愚者をうち滅ぼさんと有らん限りの攻撃を仕掛ける。

「こんな事を本心で言うのは初めてだ。多分……今生でこうやって言うのはお前だけだと思うよ」

駒が吹き飛ばされる。吹き飛ばされ磁石のように惹かれ合い、身動きの取れない1つの塊になる。

「俺はお前が嫌いだ」

「何なんだ……何なんだよお前は！俺の王国に土足で踏み込みやがつて！一体お前は誰なんだよオ！」

理解出来ない、俺の王国は轟焦凍以外に壊される訳が無い。そう思い少年は叫んだ。その叫びを無視して男は轟を見て笑う、酷く穏やかに。善行を行った子どもを見る大人のような顔で。

「良く耐えたな轟。後は俺に任せとけ」

「俺を無視するなア！やれえお前ら！アイツを殺せエ！」
「少し黙ってろ」

その瞬間、駒達が全てを吹き飛ばされた。何があったのか目が追いつかない。なんだこの男は……なんなのだ。俺は平穏を取り戻したいだけなのに。何なのだこの男は。

「なっ……なんで……お前が」

轟の驚愕で呂律の回っていない声を聞き男は笑う、そんなのは当たり前だと心底愉快そうに。

「なんで来た……？ お前本当に馬鹿だな。あのなあ……お前は知らなかったかもしれないが友達つてのは助け合うのが当たり前なんだぞ？」

「お前の家族は無事だ。だから安心しろ」

家族、その言葉を聞き轟の肩が上がる。轟が心の底から守りたかった物、失くすくらいなら自分が死んでも良いと思えるくらいに大切な者達。

「……本当に無事なのか？ 本当に、信じても良いのか？」

「信じろ。俺はクラス委員長様だからな。お前らを守るのは俺の仕事だ」

震える声で問い掛けられ男は笑う。そして、轟のポケットから携帯を取り出し耳をあて話し始める。

「おい。青少年保護育成条例から外れた淫行腐れ野郎……あつすいません、人違いです。ハイ。いやあ……違うんですよ？ 誤解です、ハイ」

やつちまった。と苦笑しながら男は動けない少年の耳元へと携帯を当てる。

『焦凍！ 聞いている!? 大丈夫!?』

『焦凍！ 何が起きてんのかさっぱり分かんねえけど大丈夫なのか!?』

聞こえてきたのは自分の兄弟の切羽詰まったような声、だが。その内容は此方を心配するような事ばかり、その事実安心して轟は震える声で返事を返す。

「うん……大丈夫。身体中痛いけど大丈夫」

『全然大丈夫じゃないじゃない！ 今どこにいるの!? 直ぐにお父さんがそっちに行くから!』

スピーカー越しの声に反応して少年は大声でそれを制止する。

「おっつとお!? もしもヒーローをこの場に呼んでみな！ お前の大

切な者がどうなるの『出来るものならやってみるが良い』……か？』
地獄の業火を彷彿とさせる声がスピーカー越しに響いた。まるで大罪を起こした愚者を今にもうち滅ばさんと唸りを上げる地獄の軍勢、地獄の釜が開いたような威圧感が込められた声。その声に少年は震え上がる。

『息子が世話になっているようだな。聞こえているだろうか？ 小物とやら』

「エツ……エンデヴァー……ッ！ 糞っ！ だがお前がここに来ればお前の嫁と娘は死ぬ事になるぞ！ それで良いならこっちに来てみる！」

悲鳴じみた虚勢を聞きエンデヴァーは笑う。そして、言葉が続けた。

『……安心しろ。俺が行く必要もないらしい。そうだろう、小僧？』
『まあ……そういう事っすね。貴方がここで家族を守っている限り、アイツは轟を守り、しかも小物を無力化してくれますよ』

エンデヴァーの事に反応するように一人の少年の声がスピーカー越しに響く。

『……どんなヒーローよりもアイツは信用出来ます。餓鬼の言葉と決めつけるのも有りですが、アイツに任せればこの件が表に出ることなく此処だけで終わらせます。まあ……どうするのかは貴方次第です』
『ふん……本来ならば個性の不正行使、ヒーローへの虚実を含めた救援要求で嚴重注意は免れぬが……必死に考え抜いたであろうその浅知恵に免じて目をつぶってやる……で、お前は部屋に入らないのか？』

『入ったらアイツにボコボコにされそうなんで……それはちよつと』
『……身の丈に合わない程の強力な個性故の苦悩か、難儀な物だ』

それを最後に携帯は切れる。電池が切れたのだろう、轟の携帯から光は既に失ってしまった。だが、轟の胸に光は宿された。希望、約束された家族の安全に涙を流す。

「……マジでビビったが……エンデヴァーが来ないなら別にどうって事ねえ！ てめえらぶち殺して逃げれば良いだけだ！」

そう言い張る少年の声を無視して轟は男へと語りかける。いや、それは語り掛けるというよりも嘆願のそれと似ていた。

「……信じても良いんだよな……ッ？」

「任せろ。俺は今世紀最高の天才で誰もが羨むイケメンの引合石様だぞ？」

「……頼っても良いんだよな!？」

「おう！俺は頼られるのが大好きだからドンと来い！ 全部受け止めてやる！」

無視され続ける少年。無視され続け、最早存在すらしていないように扱われ、未熟で激昂してしまう彼の精神の限界は直ぐに来た。

「……テメエら全員死ぬエエツ！」

全ての駒を総動員して、眼前の愚者共をうち滅ぼさんとする少年の姿を見た男は笑う。そして轟に触れ、笑った。

「……取り敢えず、家族の安全な姿を確認してこい」

轟の身体が宙を舞う。そして……そのまま壊れた扉を超えて一直線に空を舞う。

「……ッ！ 待て！ オイ！」

轟の声に返事を返すかのように男は背中越しに手のひらを振る。軽く行われる別れの挨拶をする姿に轟は有らん限りの声で叫ぶ。

「……引合イ！」

思わず呼んでしまった名前が男の耳に届いたのか、それは分からないが。引合へと襲いかからんと迫る人達、そしてそれを眼前に捉えながら引合は吠えた。

「クラスメイトを守るのは委員長様の特権だ！ 分かったらどけカス共！ ここです全員ノックアウトだ！」

それを最後に轟の身体は暗闇に支配された大空を舞い、何処かへと飛ばされていく。

轟焦凍、彼の人生の中で一番長い日の終わりが近付いていた

闇夜の中を駆け辿り着いた場所は彼が良く知っている場所だった、知っているが彼は今までここに来たことがない。彼にとつて此処は自分の罪の象徴そのもの、自分が存在したせいで狂ったしまった者がいる場所なのだ。

「ここは……母さんが入院している病院？」

全身が傷みで悲鳴をあげる中、轟はフラリと立ち上がる。ぼんやりと病院を見上げ何故この場所に飛ばされたのかを思い出し駆け出す。

「姉さん……ッ！ 母さん……ッ！」

大切な家族。自分が死んでも守りたいと願った者達の無事の確認、その為に轟は走りだす。身体の痛みなど忘れる程に。電話で無事は確認したが、目で確認しなければ気が済まない。人がまったくいない病棟を、母がいる筈の病室へと1秒でも早く行くために走り続ける。

「まーたですか！ これ以上は……って君!! 酷い怪我じゃない！大丈夫!!」

横から掛けられた声に気付く事なく轟は走り続け、遂に目的地の目の前に辿り着いた。そして、病室の扉を開けようとした瞬間、頭の中で悪魔が囁いた。

「……本当に母さんに会っても良いのか？ 俺の顔なんかを母さんに見せても良いのか？ 俺のせいで母さんは狂ってしまった。そんな俺の顔なんて……」

何を馬鹿な事を頭を振るが一度考え始めたらもう止まらない。堂々巡りのように考え始め、身体の動きが完全に止まった。

「……帰ろう。 姉さんも母さんも無事なんだ……だから大丈夫だ」

そう考え扉から手を離す。そうだ、俺なんかの顔を見せたら母さんにとつて良いことなんて何一つない。踵を返し、この場所を後にしようとして動き出す。

『家族の絆は決して壊れない』

足が止まった。頭の中にアイツの声が響く、何時も笑っているお節介なアイツの笑顔が脳裏に蘇る。

『だから、大丈夫だ』

扉に手を掛ける、手が震え、恐怖で扉から手を離したくなる。大丈夫、だから会ってこい。脳裏で笑うアイツがそんな事を言っている気がする。

震えが止まった。

「……焦凍？」

その姿を見た瞬間に考えていた事が全部吹き飛んだ。昔と何一つ変わらない白くて長い髪、目を大きく広げて此方を見るその姿、あの時から1度も会ってなかった。見ただけで涙が溢れて止まらなくなる。

「母さん……ッ！」

色々話したい事はあった。クソ親父の特訓は辛くて、昔のように母さんに慰めて欲かった。

俺のせいで苦しめた事を謝りたいと思っていた。ごめんなさい、その一言を言い出せずにいた。会いに来るのがずっと怖くて、来れなかった事。

それから、それから、それから、いっぱい話したかった事がある筈なのに言葉にならない。

「俺ッ……信じてるんだ……ッ！ 怖かったけど信じてみるんだ……ッ！」

俺の姿を見て駆け寄る姉さんと兄さんに身体を預けながら母さんへと近づいていく。

「焦凍!? ひどい怪我! 夏! 早く!」

「大丈夫か焦凍……って馬鹿! もう動くな! 身体中傷まみれじゃねえか! おい! 聞けって焦凍!」

ズルズルとゾンビのように近づいてくる俺の姿を見て母さんは泣きそうな顔で此方を見た。分かっている。母さんが俺の事が怖いって、だけど信じてって決めたんだ。

『家族の絆は決して壊れない』

あの言葉を信じたいんだ。

母さんの眼前まで近付く、姉さんと兄さんの声が聞こえない。怯える母さんの手を握り、俺は笑う。アイツがやっていたような笑顔を頑張って真似する。だが……出来上がるのは歪な笑顔だけ。

『それだよそれ、眉を細めてニコリとすら笑わない。んな顔ばっかしてると表情筋が固まってそれ以外の顔が出来なくなるぞ』

アイツの言う通りだ。もっと笑っていられたら俺はアイツのように笑っていられた筈なのに。

「ごめんなさい……母さん。今まで怖かったよね？」

「……違うの。違うの。違うの」

うわ言のように呟く母さん。ごめんなさい、俺のせいで苦しんだよね。でも……一つだけ許して下さい。

「それでも……俺は母さんが好きなんだ。あの時から変わらずに……ずっと」

母さんが此方を見る。目に涙を浮かべて、怖い……拒絶されたくない。でも信じるって決めたんだ、だから……

「俺が母さんを好きでいても許してくれますか……ッ！ 大好きでいても良いですか……ッ!?」

その言葉に返事はなかった、ただ昔感じた温かさに俺の全身は包まれた。

「ごめんね焦凍……ッ！ 私が悪いの……ッ！ 貴方は何も悪くないの！ 私のせいでッ！ 私のせいでッ！」

涙で母さんの服を汚していく、止めなきゃならない。分かっているのに止まらない、止められない。

「こんな私が貴方の母でいても良いのか分からなかった！ 貴方を傷付けた私が貴方を愛する資格があるのか分からなかった！ 怖かったです！ けどそれは焦凍じゃない！」

「浅ましくこうやっている私自身が怖かった！ 貴方を傷付けた罪悪感を忘れてしまおうんじゃないかって！ 貴方に謝らなきゃならないのに、あの人の言葉に甘えて謝りに行かなかった私の性根が！ 貴方を許すだなんて愚かな事を言い出すかもしれない私が！」

「母さん…ッ！ 母さんッ！ 母さんッ！」

母さんの思いを初めて聞いた。互いに互いを恐れていたんだ、初めから話し合えば良かった。

「焦凍！ ごめんなさい！ 痛かったよね…ッ！ 怖かったよね…ッ！ 私のせいで一生残る傷を…ッ！」

「一緒に居て欲しかった！ クソ親父が怖かった！ 母さんがいない夜が怖かった！」

涙と共に今まで押し留めていた思いが放たれていく、止まらない。ただがむしやりに叫びながら俺は母さんに抱き着く。母さんがそれに呼応するように抱き締めてくれる事実にも、また涙が溢れた。

長い一日は終わった、彼は今まででなくしていたもの全てを取り戻したのだ。母の愛、姉の思い、兄弟の絆。その全てを。

轟冬美と轟夏雄はそんな2人の姿に涙が溢れ思わず抱き着く。初めて家族が一つになった、そんな思いすら感じていた。

「……ふん」

そんな姿を見てエンデヴァーは鼻を鳴らすとこの場所を後にする。まるで自分はこの場所にいる資格がないと言わんばかりに。

扉に手を掛け、出ようとした瞬間。声が掛けられる。

「待てよ……クソ親父」

「……なんだ」

その背中に声を掛けたのは轟焦凍だった。ボロボロの姿でしっかりと立ち上がり決意に満ちた顔で睨み付ける。

「……俺はアイツを信じる事をした」

「……何を『黙って聞け、クソ親父』」

言葉を遮られエンデヴァーは押し黙る、その姿を見ながら轟焦凍は言葉を続けていく。

「俺はアンタが嫌いだ。母さんを追い込んだアンタが憎い、殺してやりたいときえ願っていた」

「『家族の絆は決して壊れない』」

「アイツの言葉は本当だった、だから俺は信じる事にする」

言おうか言うまいか、何度か悩む素振りを見せ、勢いに任せるかの

ように吐き捨てた。

「俺はアンタが嫌いだが、残念ながらアンタが俺の親父であるのは事実らしい。アイツの言葉に従ってアンタを親父である事を俺は認めるよ」

「クソ以下のゲス野郎だが、それでもアンタは俺の……俺達の親父だ」
不服と言わんばかりにそう吐き捨て轟焦凍は先程まで一緒にいた母親の元に駆け寄る。それを見届けエンデヴァー……轟炎司は返事を返した。

「ふん……下らぬ反抗期が終わったのなら『左』を使うのだな」

その言葉に冬美が声を上げ、夏雄が冬美を宥めながら炎司を睨みつけた。

「お父さん！ そんな言い方ないじゃない！ 焦凍が少しでも近寄ってくれたのに肝心のお父さんがそれじゃ何も始まらないじゃない！」

「姉さん……コイツはこんな奴なんだ。焦凍が頑張って歩み寄ってもコイツは自分の事しか考えてない屑野郎、失敗作の俺達なんていなくても変わらないんだろ？ 今……凄いい良い所なんだ。さっさとここから出て行けよ」

出て行け、と意志を込め睨み付ける夏雄の目に押されるように炎司はこの場所を後にする。ピシヤリ、と扉が締められる音が部屋に響いた。

「焦凍……」

「大丈夫。それでも……あんな奴でも俺の親父だ。認めたくはねえが、そういう事なんだ」

姉の心配するような声。だが、轟の目に憂いはない。覚悟の灯った眼で吐き出すようにそう返事を返した。

「俺さ……焦凍と遊んだ事とか全くなかったけど……夜、毎日のように泣く焦凍に何かしてやれる事はないかって考えてたんだ」

夏雄がポツリ、ポツリとまるで眩くように言葉を吐き出していく。
「毎日のように啜り泣く焦凍、焦凍を庇ってあのクソ野郎に手を出される母さん。何かできる事はないのか……ずっと考えて、何もなかつ

た」

「失敗作の俺達はあの糞野郎に何かされる事はなかったけど……焦凍は毎日のように……そして母さんがいなくなつてから焦凍の隣に母さんがいなくなつて……」

「ああ！ くつそ何を言いたいのかさっぱりわかんねえ！ けど！ これだけは言わせてくれ！」

頭を掻き毟り夏雄は焦凍を抱き締める。

「俺はお前の事が好きだからな！ 昔の俺はアイツが怖くて何も言えなかつたが、今の俺なら庇つてやれるから！」

「糞野郎が住んでる家に耐えられなくなつたら俺が住んでるマンションに來い！ 一緒に暮らそう！」

兄を抱き締められ轟は心地よさそうに目を細める。初めて聞いた兄の本心、そして抱擁。嬉しくない訳がなかつた。

「そうじゃなくて……夏、そろそろアンタは家に顔を見せなさい。彼女が出來たからつて向こうばっかにいて」

「うええ!? 姉ちゃん！ それは言わないつて約束したじゃん！」

「してないわよ……つたく。ほら、母さんも！」

夏雄の言葉に呆れたような顔をした冬美は母親の背中を押しながら抱き合う兄弟に被さる。

「夢みたい……こうやって家族で一緒に笑い合えるなんて……」

涙混じりの冬美の言葉が3人の胸に深く染み入る。轟を中心に家族全員で抱き締める姿を見る者は今、何処にもいない。

今日、彼等は本当の家族になつたのだ。

『家族の絆は決して壊れない』

轟焦凍にとつてこの日が始まりの日。父親をただ憎み、復讐の為に力を付けていた己から一歩進み出せた日だ。

「……夢？」

「起きたか寝坊助……まあ。熱も下がつたようでも何よりだよ」

目が覚める、確か自分は風邪を引いていて学校を休んでいた筈。そう思い辺りを見渡すと、呆れたような顔で笑う親友の姿がそこにあつ

た。

「石……来てたのか」

「おう、先生様から言われて来てやったよ。2日連続とはよつぽど調子が悪かったんだな……つと、プリントは置いてるからな。もう少し寝てろ」

そう言い部屋を後にする石の背中に言葉をかける。

「悪い……携帯。そこにあるから持ってきてくれ」

「ん？元気になったからって携帯を触るのは良くないぞ……冗談だ。ほら」

そう言いながら渡された携帯はあの時の一件でボロボロになっている。あの時から変わらずに使い続けている携帯、誰に何を言われようとも買い換えなかった携帯。

「……んじゃ、おやすみ」

背中越しに手を振る石を見送り布団の上で携帯を触る、触ると言っても電源を付けるだけだ。

そこには、笑顔の石と大和に囲まれながら仏頂面で映っている自分の姿。その写真を見て轟はまた夢の中へと落ちていく、明日こそ学校に行こうと思いつながら。

次の日、轟が教室に入ると何時ものように石と大和を中心に男子達が盛り上がっていた。

「トウーンワールド！ 無駄デース引合ボーイ！ トウーンは無敵ナノデース！ ペペロンチーノマンマミーヤ！ ターンエンド！」

「色々混じってないか？……俺のターン！ ドリラゴ召喚！ そして死者蘇生！ 墓地から再び甦れ不死鳥よ！ ラーの翼神竜！」

「無理だぞ」

「ラー……の」

「このモンスターは特殊召喚出来ないぞ。現実を見るろ」

「ラー……俺の……三幻神最強の神……ラー……」

どうやら遊戯王をしているらしくまた色屋がリアルソリッドヴィジョンとやらの代わりをしていた。

「おはよう。石、大和」

そんな2人に挨拶をする。すると2人は此方に気付いたのか元気よく挨拶を返してくる。

「おう轟！ 調子は良くなったか？」

「おはようショート！ お前はラーの翼神竜は特殊召喚されるべきだと思っよな!?!」

「悪い……ラーは使わねえからわかんねえ」

自分が使っているカードでは無い為分からない。そう言うと引合は悔しそうに吐き捨てた。

「ちいE・HERO使いめ！お前なんてガツチャガツチャしてれば良いんだ！」

「まあ……取り敢えずトゥーンブルーアイズでトドメデース！」

「イワアアアツクツ！」

騒がしい日常。他のクラスメイトにも挨拶をして自分の席に座る。あの時の俺に今の生活を言っても信じないだろう。

すぐごと自分の席に座る石にカバンからあるものを取り出し話し掛ける。それを見た石は笑い、カバンの中から別のデッキを出す。

「ふうん！ 貴様のような凡骨デュエリストが幾ら束になろうとも適わない事実を教えてやる！」

「色屋ア！ デュエル開始の宣言をしろお！」

「……2回目は100円ね」

「アツハイ」

2人で50円ずつ出し色屋がデュエル開始の宣言をする。

「デュエル開始イーツ！」

「デュエル！」

今日もきつと楽しい1日が待っている。

閉話 入試試験

入学試験 ver 引合

「今日は俺のライブにようこそー！エヴィバデイセイハイ！」

「ヨーコソー！」

「ハイ！サンキュurisナー！初めて返事を返して貰って正直ビビったぜー！」

今日は今まで準備に準備を重ねた雄英高校ヒーロー科への一般入試の日、俺は大和とシヨートからの激励を預り必ずや合格せんと息巻いてこの場にいる。

プロヒーロー。プレゼントマイクに合いの手を返すも、返したのは俺一人だったらしい。誰もが緊張し静まり返る中で響く俺の声には能天気さがあつたのだろう。隣の生真面目そうな眼鏡君の顔がぶちギレていた、正直すまんかった。

「ボイスヒーロー…プレゼントマイクだ！凄い…ラジオ毎日聞いているよ感激だなあ。雄英高校の教師は皆プロヒーローなんだ！」

「うるせえ」

どうやら後ろの席にいる奴がかなりのファンらしい。ブツブツとプレゼントマイクについて呟いており、その声にまた隣の眼鏡君は機嫌を悪くしていく。

「入試要項通り！リスナーにはこの後10分間の模擬市街演習を行って貰う！」

「持ち込みは自由！各自指定の演習会場へ向かってくれよ！」

自らの個性を駆使する為の配慮なのか、持ち込みは自由。流石は名門、やる事が違う。

「演習場には仮想ヴィランが三種、多数に配置してある！それぞれの攻略難易度に応じてポイントをもうけてある！」

「デンジャラスなやつからイージーなやつとどれを倒すかはリスナーしだい！自分の個性を駆使して仮想ヴィランを行動不能にしろ！」

「勿論！アンチヒーロー的な行為はご法度だということを留意しておいてくれ！」

「質問よろしいでしょうか！」

「勿論オーケーだリスナー！分からない事は今のうちに聞いた方が良いから、皆も真似しろよ！」

そう締めくくるプレゼントマイクに待ったを掛ける男がいた。俺の隣に座ってる生真面目そうな眼鏡君だ。

「プリントには四種類の仮想ヴィランが記載されております！プレゼントマイクのお言葉が正しければ仮想ヴィランは三種類の筈！誤載であるなら日本最高峰の雄英において恥ずべき痴態！」

「我々受験者は模範となるヒーローのご指導を求めてこの場にいるのです！」

生真面目そうという印象は撤回しよう。コイツ馬鹿がつくほど生真面目だ。俺達の中ではないなかったタイプ、コイツに一番近いのは恐らくシヨートではないだろうか。俺と大和？察しろ。

「後後ろの君と横の君！君達は物見遊山でこの受験に赴いているのか！」

「あのような大声をあげる者とボソボソと呟く者、貴様らのような者は即刻雄英から立ち去るべきだ！」

「…すみません」

「まあまあ落ち着け。あれはちゃんと理由あつての事だから、後で説明してやる」

謝るボソボソ君に自信満々な俺。眼鏡君は俺を睨み。俺にだけ聞こえるように呟く。

「…勿論納得のいく説明をしてもらえるのだろうか？」

任せてくれ。屁理屈を捏ねるのは俺の得意分野だ。

「オーケーオーケー、受験番号7111くん。素敵なお便りをサンキューな。四種類目のそいつは0ポイント。ぶっちゃけたただのお邪魔虫。」

「各会場で一体。大暴れしているギミックだ」

「有り難うございます！失礼致しました！」

ピッチリ90度で礼をする眼鏡君。なんて礼儀正しいんだこの子は。

「俺からは以上だ。最後はリスナー達に我が校、校訓をプレゼントしよう！」

「かの英雄、ナポレオンボナパルトは言った。『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者』だど！」

「plus Ultra!それではリスナーの諸君。善き受難を」

その言葉を締めくくりとして説明会は終わる。受験生達が早めの行動を取り自分達の会場へと足を運ぶ中、俺は隣の眼鏡君と話をしていた。

「それでは説明してもらえるのだろうか？何故、あの場であのような発言をしたのか。そしてそれに理由はあるのかを」

「まあ待て。まずは自己紹介から行こう。俺は凝山中学の引合石だ」

「僕の名前は飯田天哉。聡明中学校から来た」

「ナイスネーム。カッコいい名前だな」

「当然だ。両親が考えに考え抜いて決めた素晴らしい名前だからな」

この生真面目眼鏡君の名前は飯田天哉というらしい。取り敢えずは飯田と覚えておこう。

「俺がああの場所であんなことをした理由は、最初に俺という存在を覚えて貰う為だ」

「君という存在をか？何の為に…いや、そうか！雄英高校ヒーロー科の倍率は300倍超えの超名門！その為受験者も7000人は当たり前！そんな中自分をアピールするとなれば至難の業！だが、真つ先に自分という存在をこれでもかとおアピール出来ればその場にいる教師に君という存在を覚えてもらえる！」

「おっ…おう。そうだな。それで」

「そして、その後の実技試験で印象深い君という存在を良く見てもらえる可能性がある！あの場は試験前、あの場での印象が悪かったとしても成績には何一つ関わりがない！いやそれどころかプレゼントメイクの言葉からして印象は良かった可能性がある！」

「いや…まあそうなんだが」

「確かに、自分の印象を塗り替えられる自信があるのならばあの場所でのあの行動は正解かもしれない。そして君は見事にそれに成功したということか…ッ!」

「…やられた。試験をする前から既に戦いは始まっているという事か! 引合君。君の意図に気付かなかった自分が恥ずかしい! 次の試験、お互い頑張ろう!」

「…おう! 頑張ろうな!」

俊足の手のひら返しを貰いお互いに熱い握手を交わす。俺の話の間聞く前に勝手に自分で納得する要素を考え出した飯田は将来詐欺に引つ掛かりそうだと思いつつ、実技試験会場へと歩き出した。

実技試験だが、簡単にいうならば地獄だった。絶えず鳴り響く爆音、吹き飛ばされていく仮想ヴィラン達。

「あのボンバーマンの動きを止めてやりたい」

目の前で暴れまくる奴にそんな事を思いながら、俺も個性で仮想ヴィランを吹き飛ばしていた。

自分の服を十、触れた仮想ヴィラン十に設定して反発させる。吹き飛ばされた仮想ヴィランの進行方向には他の仮想ヴィランが蠢いており、反発させて発射したヴィランが着弾したと同時に周りと共に崩壊する。

そのまま次なる犠牲者である仮想ヴィランに触れ、反発させて発射する。何度かそれを繰り返していると俺の発射したのが暴れていた奴の獲物にぶつかり爆発する。

「あーすまん! 怪我はしてないか!」

「—— テメエなに端役が出ばってんだオラア!」

「…大丈夫そうだな! じゃあ俺はこの辺で!」

地面と靴の裏側を反発させて即座にその場から離脱。試験中に喧嘩吹っ掛けられたらいくら天才でイケメンな俺でも辛い。

地上から鳴り響く爆音に申し訳程度の罪悪感を感じながら俺は別の場所で仮想ヴィランの狩りを始めた。

「—— またテメエか!」

「折角場所譲ったのにまた遭遇するとかお前俺の事好きだろ」

「気持ち悪いこと抜かしてんじやねえぞオラア！」

その後何度も何度も出会う俺達。二度ある事は三度あるというが何回も合流してまうのはこれはもう相手が俺にストーカーしてると言わざるを得ない。俺は男にモテても何一つ嬉しくない。クーリングオフだ。

「てめえ端役！どこ中だ、ああ!？」

「凝山中学だストーカー！お前こそどこ中だ！」

「知るかそんなモブの集まる中学！俺は折寺中学だオラア！」

「知るかそんな所！どうせ偏差値低い所だろ！」

「喧嘩売ってんのかテメエ！」

「喧嘩なんて売る暇があると思ってるのかこのボケ！さっさと仮想ヴィランを狩りに！」

そう言い捨てこの場から離れようとした俺の目にとんでもないものが現れた。それは今までの仮想ヴィランを遥かに凌駕する巨体、試験会場にある建物を片腕で粉碎し吹き飛ばす。

「あれは…何点だ？」

「…0だな。倒すだけ無駄なギミックだ」

さつきまでの喧嘩を止め一気に冷静になる俺達。0点、倒すだけ無駄な存在。確かにプレゼントマイクも言っていたし皆あの巨体から逃げ回っている、俺は結構点数を稼いでいる。ここは逃げの一手が最適格だろう。

しかし倒すだけ無駄な存在を試験に出すだろうか？倒したらボーナス点が存在しているのではないのだろうか？

隣のストーカーも神妙な顔で何かを考えていた。不味い、こうなれば先手必勝。

「アカブツは貫ったアアアッ！」

即座にその場から緊急離脱を行い巨体に飛び乗る。巨体に着地し、身体と腕の関節部分を反発させ腕を吹き飛ばす。暴れまわっていた片腕が地面に落下し、その腕を個性でこちらに引き寄せ巨体の顔面をぶつける。

「自分の手に殴られる感想はどうだ！」

ひたすらに顔面を殴打する。使用している腕がひしゃげ壊れるのと同じく巨体の顔面もまたグチャグチャにひしゃげていく。

ひしゃげ、壊れかけた腕をもう片方の腕に叩きつけ巨体から両方の腕を奪い取る。

「顔、腕、次は足だ！」

巨体から離れ落ちたもう片方の腕を反発させ足にぶつける。足に腕を何度もぶつけ巨体が倒れるのを狙う。巨体が倒れたら立ち上がることすらもはや不可能。行動不能、つまり俺の勝ちである。

その巨体がグラリと揺れ、倒れようとした瞬間

「——ッ！端役が調子乗ってんじやねえええッ！」

辺り一体を揺るがす爆音と共に巨体が爆発に包まれ、完全に動作を停止させた。

轟音の後、辺り一体は沈黙に包まれ

「終了オーツ！」

「…なあストーリーカー。お前横取りとか恥ずかしくないの？」

「だれがストーリーカーだ。死ねモブ野郎」

お互いに罵声を浴びせつつ、プレゼントマイクの終了の合図を聞いた。

合格発表

「いやあ…うん、何て言うんだらうね。この何とも言えない感」

「…これまでアレに立ち向かった者はいたけどまさかここまで蹂躪した者は後にも先にも彼くらいでしようね」

「いやあ…ほんとどうしようか。彼？」

これは一般入試がつつがなく終了した後の雄英高校。現在教員陣が集まり入試結果を鑑みて合格者を決めている。

倍率300倍の超名門たる雄英高校ヒーロー科、その倍率の中から選ばれた者こそが雄英高校のヒーローの卵として相応しいのだが…

「…試験番号7246番、引合石。実技は文句なし、それどころか実技だけで見ると彼は最上級の才能を持っている」

「優れた個性、そしてその応用力。強いて問題点をあげるとするならば受験者爆豪勝己とのトラブルとレスキューPが0という所。力だけで言うならば次代を担うヒーローの卵でしようね」

と評価される引合。どうやら彼は好評価らしく他の者達もその意見には異論はないらしい。

「お前がそこまで言うとは珍しいじゃねーかイレイザーヘッド。まあ俺もこのリスナーは気に入ってるが…うん」

「僕も実技に関しては非常に素晴らしいと思うよ。ヒーロー科に相応しい技量と伸び代が彼にはある…あるんだけどねえ」

「…あの戦闘センスと個性の応用力は目を見張るものがあるわ。アレは将来化けるわね」

「…ミッドナイト。それは皆分かってるんだ…良く分かってるんだが…」

その言葉で皆が溜め息を付く。実技がそれほど良いのならば合格まったなしだろう。普通はそうなのだ。普通ならば

「…筆記がなあ…」

引合石、どうやら彼は筆記試験の結果のせいで皆の頭を悩ませているらしい。

「いやあ…まさか筆記の成績のせいで合格ラインギリギリの受験者と同率になつてるなんて想像もつかないよね」

「彼と同じ点数の受験者。両者共に素晴らしいヒーローの卵だ。ならどちらを落とすのかを考えると…」

「…あのリスナーが筆記でマトモな点数をとれてさえいればこんな事には…」

「はあ…」

ため息をつけど結果は出ず。彼等は一先ず一般入試の合格者を決めるのを後回しにして別の問題の解決へと切り替えた。

「…取り敢えず。今回の推薦入試の合格者を先に決めようか」

「今回の推薦入試はどいつもこいつも最高にホットな奴が多かった！俺的に一番良かったのは夜嵐イナサと轟焦凍だな！アイツらのレーヌは最高にデンジャラスでホットな展開を見せてくれた。例年のタイムを大幅に更新しやがったアイツらは確定しろ」

「個性の万能性と高成績を収めた八百万も捨てがたいな。彼女は知識をつければつけるほど強くなる。これからの成長に期待だ」

「骨拔柔造も素晴らしい成績を見せてくれた。彼も合格者に相応しいだろう」

一般入試とは裏腹に、推薦入試の合格者は比較的直ぐに決まる。だが合格者が決まらずにすぐ終了という訳ではない

「それじゃあ先に推薦組のA組とB組の振り分けと行こうか」

その言葉に再び教師陣の動きが止まる。どうやらこれは引合並みに難しい問題みたいだ

「成績だけを見たら夜嵐と轟がAで八百万と骨拔がBだろうな」

「おいおい待てよ！総合成績だけで言うなら骨拔以外の三名はほぼ同じ！実技で轟と夜嵐は最高にホットな試合を見せたが、それとこれとは話は別だろ！」

「だが推薦者の合格者は一クラス二名ずつに分ける必要がある」

「…八百万の個性には目を見張るものがある。ここは彼女の才能を伸ばす事を考慮して」

「…なら轟か夜嵐をBにするのか？それは少し違うだろ」

あーでもない、こーでもない。

喧々囂々と会議は続き、結局全て決定したのは深夜近く。これに参加していた教師であるプレゼントマイクは後にこの会議をこう語る。

「正直今年は異例な存在が多過ぎて校長先生が例外を認めざるを得なかった。まあそれだけ今年の新入生がホットだったって事だけではない！」

そして、それから数週間の時が流れた。

「石ー！雄英から封筒が届いたわ！薄っぺらい封筒じゃないしこれはワンチャンあるわよ！」

「落ちるの前提みたいな考えは良くないぞ母ちゃん！」

「落ちたら土傑行けば良いのよ」

「土傑の扱いがびっくりするほど軽い！土傑も名門校だから！本来なら第一志望で受けるのが当たり前前の所だから！」

家でノンビリとしていた俺に母さんが何やら固いものが入った封筒を渡してくる。どうやら雄英らしい。薄っぺらい封筒だったらガチで泣いていたが確かにこれにはワンチャンを感じる。筆記はそこそこ。実技は完璧、だめ押しにあのデカブツも倒して取り敢えずは合格しているだろうと自分を鼓舞して封筒を開けた。

「…なにこれ？」

「お母さん機械苦手なのよねー…取り敢えずボタン探しましょうボタン」

封筒から出て来た謎の機械を二人して弄りはじめる。押すボタンもないし一体どうすれば良いのかと二人して頭を悩ませていると

「んっん」…マイクテス。マイクテス」

謎の声と共に鼠が機械から写し出される。

「やあ引合くん！始めまして雄英高校の校長を務めさせて貰ってる根津だ。気軽に根津校長と呼んでくれたまえ！」

また校長が鼠なのか。俺はそんな事をぼんやりと考えながら謎の機械から投影された鼠を見ていた。

「本来ならばオールマイルト先生に頼みたい所だったんだけど…」

おいなんつったこの鼠。オールマイルトが先生って物凄い事を言わ

なかったか？

「ちよつと君の合否は色々と物議をかもしたからね。今回は特別に僕直々に発表さ！君みたいなタイプは初めてだったから皆して頭を抱えたよH A H A H A H A！」

「あと君と同じ学校の轟くんも僕がやることになつてゐるからね！」

それはうちの校長と齧歯類的な繋がりというか、鼠繋がりで特別に結果発表をしてくれたのだろうか？

「それじゃあ先ず合否から言うね。引合石くん！君は…」

突然、何処からか鳴り響くドラム音、そしてそれに合わせて身体を揺らす鼠。そしてドラムの音が止まったと同時に

「ごうかーくー！おめでどうー！これで君は晴れてヒーローの卵になった！これから大変だろうが頑張つてくれたまえよ！」

「全く…実技は素晴らしい成績だと言うのに筆記で点数を落としたりや駄目じゃないか。普通は逆の子が多いのに、君みたいな子は初めてだよ」

「総合点数が君と同じ点数の受験者がいて、その子と君どちらを取るかという事で話し合ったんだけど…」

「まー結論が出ない出ない！君もその彼も、両者共に落とすのは大変惜しい存在だった。という訳で僕の権力を使って今回だけ特例、君とその子を二人とも合格にしたのさ！」

「全く！君はたくさん親に感謝しなさい！君の個性と応用力。そして優れた戦闘センス。これらが見込まれたからこそこの今回の特例なのだからね！」

濁流の如く放たれる言葉に耳を傾ける。どうやら俺は筆記が駄目だったらしい。模試A判定を取るくらい頑張ったのだがそれでもまだ足りなかったのだろうか。流石は雄英、格が違う。

そしてありがとう根津校長。貴方にマタタビなんて絶対に仕掛けません。なんなら靴の裏を舐めても良いくらいだ。

「まあ、兎に角にもおめでどうー！雄英は君を待っているー！」

「それじゃあ僕は轟くんの合格発表があるからここで終わるとするよ！それじゃあplus Ultra！これから訪れる君への受難に幸

あれ！」

その言葉を最後に映像は消える。何はともあれ無事雄英に合格した。この喜びを誰に伝えようか、そう考えながら近くにいる母さんの方を向くと

「石……あんた校長先生が鼠になる運命でも背負ってるの？」

母さんは俺が雄英に受かった事より校長先生がまた齧歯類である事に驚愕していた。どうやら俺が喜びを誰かに伝えるのはまだ少し後になるようだ。

祝 雄英高校ヒーロー科 初めましての自己紹介

春、それは新たな生活の始まり。

「しまった寝過ぎした！俺の魂よ燃えろおおおっ！」

「高校生になって早々個性を使って登校とは喧嘩を売っているのか引合イー！」

「今日だけは許してバードマン！」

桜が舞い散る中、俺は何時ものようにバードマンに追われながら新しく通う学校、雄英学校へと足を進めていた。

因みに今日は見逃してくれたのか途中で追わなくなった。ありがとうバードマン、是非これからも追わないで欲しい。

「ーという訳で俺達のクラスの前に辿り着いた訳だが、非常に嫌な予感がする」

「気のせいだろ」

途中でショートと合流した俺は無事、これから俺達の教室となるA組の前に辿り着いた。大和？普通科の女漁りをする為に俺達よりも先に学校に着いてるが何か？学校に入ると女子がキャーキャー言ってたから間違いない奴だろう。死ね。

「良いかショート。ここでの印象が学校生活の全てを決めると言っても過言ではない。つまりここでインパクトのある登場を」

「…個性でも使えば良いのか？」

「ノンノン。まあ俺がお手本を見せてやるからしつかりと学習しておけ」

そう言つてショートを下がらせると、ドでかい教室の引き戸とその引き戸が収まるであろう場所に引き合うように個性を使い自動で開くように設定する。

「トウツー！」

出力は高めで個性を使う。大きな音を立て開く引き戸。その音にこちらを見るクラスメイト達。その視線を一身に受けながら俺は空

中で何回転も回りながら教室へと入った。

「凝山中学から颯爽参上！俺の名は引合石！よろしくな！」

どうやら俺の登場シーンは最悪だったらしい。困惑した視線を向けるクラスメイト。困惑した顔をしながら俺を見る飯田。合格したんだなおめでとう。

そして

「テメエはあのときの糞端役！」

「貴様はあの時のストーカー！」

「誰がストーカーだ！ぶつ殺すぞ糞端役！」

俺の言葉にぶちギれるストーカー。どうやらコイツも合格していたらしい…まああれだけ暴れたら当然だと思うが。

「…両手が爆発してるな」

「アアン!?誰だテメエどこ中だ！」

「凝山中学の轟焦凍だ。そんなにキレてるとハゲるぞお前」

「誰が禿げるか！生涯フサフサに決まってるんだろが！」

何事もなく入ってきたシヨートがストーカーをナチュラルに煽る。流石シヨート、これが天然煽り芸というものか。

「いや禿げるな。俺の知り合いの叔父さんもキレやすいせいでデコが後退してたし」

「…やっぱりキレると禿げるのか」

「殺すぞ糞端役共！」

キレすぎて顔が凄い事になっているストーカー。そろそろ煽るのを止めようかと思っているとシヨートが言葉を続けた。

「というかお前誰なんだよ」

「アアン!?お前らに名乗る名前なんてないわ！」

「…そう言われると石の言うストーカーと呼ぶしかないんだが」

「…ぶつ殺す！」

天然の煽りに耐えられなくなったのか、ストーカーの顔が表情筋の使いすぎで大変な事になる。阿修羅か何かと問われても納得できるレベルだ。こんななん子どもが見たら泣くぞ。

「落ち着け。取り敢えず自己紹介をしよう」

「テメエがストーカー呼ばわりしなかったらこうはならなかっただろうが！」

「でもお前も人の事を糞端役呼ばわりしたじゃん。取り敢えずはお互いに自己紹介をだな」

「…チツ！折寺中学の爆豪勝己だ。名前を呼んだら殺すぞ糞端役共」

「おう！よろしくな爆豪！」

「よろしくな爆豪」

ちゃんと自己紹介をしてストーカー改め爆豪勝己、略して爆豪と別れる。後ろから爆発音が聞こえたが恐らく幻聴だろう

「あんたが轟の言っていた引合か！俺は夜嵐イナサ！よろしく！」

「おう！よろしく夜嵐！」

夜嵐イナサという坊主頭の熱い男と自己紹介からの熱い握手を交わしその場を後にする。しかしショートに俺達以外の知り合いがいるとは思わなかった。きつと受験の時に話す機会があったんだろう。良いことだ。うん。

「無事だったか引合君！喧嘩が始まるかと思つて心臓を冷やしたぞ！」

「おつ飯田！お前も合格してたんだな。おめでとう！」

「ああ…ありがとう。君も合格おめでとう。これからよろしく頼むぞ」

「よろしく飯田！」

受験の時の糞真面目君。飯田天哉と挨拶をする。相変わらずの糞真面目さだ。是非これから仲良くしていきたい。

爆豪？アイツも面白いから是非仲良くしていきたい。

色んな奴と自己紹介をして席につく。最後に俺の名前が書かれた紙がある席にたどり着くと

「…なあお前。おっばいは好きか？」

前の席の小柄な少年に突然そんな事を聞かれた。おっばいが好きかだど？そんなもん決まってるだろ。

「この世で最も信仰するべきものに決まってるだろうが」

「やっぱり…お前を見た瞬間ビビッと来たぜ。オイラと同じ同志だと

な」

同志と出会った瞬間やることは一つ、それは確認。もしも俺と違う神を信仰しているのなら弾圧対象となる。お互いにそれは分かっている。故に俺から俺が信じる神を伝えた。

「巨乳は好きか？」

「…大好きだ。あの豊満な胸にはエロスと母性が詰まっている」

即座に握手を交わす。エロは偉大だ。初対面であろうとも信じる神が同じならば俺達は言葉を一つ交わしただけで分かりあえる。

「オイラの名前は峰田実。お前の名前は引合石だったよな？よろしくな兄弟」

「よろしくな峰田。今日から俺達は魂の兄弟だ」

「…さっそくだが兄弟。あのおっぱいをどう思う？」

そう兄弟が指差す先に見えるのは素晴らしいおっぱい。それは美乳であり巨乳。この世の乳の良さ、その全てを網羅せんと言わんばかりに大きく突き出た胸だった。

正直に言おう、俺はその乳と出会う為に産まれたのかもしれない。そう思うほどにその乳は美しかった。

「…美しい。あれこそが至高の美。俺がエロ本やAVで見てきた乳なんて凌駕している。あの乳の為なら死ねる」

「オイラもあのおっぱいを触るまでは絶対に死ねない。絶対にだ」

どうやらその素晴らしいおっぱいを持っている女神の名前は八百万らしい。スタイル抜群顔は美少女。この場に大和がいなくて本当に良かった。いたらアイツを山に埋めるのが大変だったからな。

「だが兄弟。無理矢理女神に触れようなんて考えてはならんぞ。愚かな蛮行で女神の心が傷付いたら俺はお前を埋めなきゃならん」

「汚してこそ。そこに汚れぬエロスがあるんだろが！」

「何故至高の美を無理矢理汚そうとする!? エロスに近道はなし！俺達は自らを磨きそこにたどり着かねばならんだ！」

「へっ…どんな手を使ってでも触ってこそそのエロスに決まってるんだろ」

その言葉に兄弟のあくなき性への欲望を感じた。俺と同じ性欲だ

が向いている方向が全然違う。兄弟は無理矢理にでも触り一時しのぎのエロスを追求する者。

俺は己を磨き相手の持つ全てのエロスを欲す者。俺達の在り方は正反対、まるで鏡のようだった。

「…兄弟のエロスはその場しのぎに過ぎない。求めるならば永遠のエロス。故に男は己を磨く、違うか？」

「…どうやら信仰するべき神は同じでも、オイラ達の信仰の仕方は正反対みたいだな」

「…残念だ。初めて心から分かり会える存在だと思っていたのに」

兄弟が頭の丸い玉を握り締め、コチラを睨む。残念だ：俺達ならばきつと分かりあえると思っていたのに。

「ここで沈め。即物的なエロスを追求する異端者」

「じゃあなチキン野郎。来世では自分に正直になるように祈るよ」

一触即発、その場にいる誰もがそれを感じた。どちらかが身動き一つすれば始まる。それほどの緊張感が両者を包み込み

「お友達ごっこがしたいなら…なにしてるんだお前ら？」

「これから異端者を聖罰します」

「目の前のエロスから目を逸らすチキン野郎の目を醒ませます」

「…後にしろ」

後に、この光景を見た男は語る。

「あの時のアイツら。目がマジだった」と

グラウンド

「はい。皆さんが静かになるのに8秒もかかりました。時間は有限、君達は合理性に欠けるね。特にその男子二名」

そう言いながらコチラを呆れた顔で見る謎の存在。ボサボサの髪の毛は海草類を想像させ、その髪の毛の奥に見える眼光は胡乱。なんとうか胡散臭さを感じさせる人だった。

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

訂正しよう。胡散臭いこの人は俺達の担任の先生だった。担任：相澤先生は自分が入っていた寝袋から体操服を出し、

「早速だがこれに着替えてグラウンドに出ろ」

「男の人肌で暖められた服を着ろだと…ッ!?!」

先生のとんでも発言に異端者、峰田が信じられないと言わんばかりに小声で悲鳴をあげた。ついでに俺も心の中で悲鳴をあげていた。なんでおっさんの人肌で暖められた服を着なきゃならないのか。

「いや、これは着なくて良いから。君達の席に用意されてるのを着てちょうだい」

机の横掛けにぶら下がっている紙袋を確認すると、確かに体操服が用意されている。その体操服を見て胸を撫で下ろしていると、先生は寝袋を肩に担ぎ教室を出る。それに待ったを掛けるように飯田が拳手をするも

「それじゃあグラウンドで集合な」

「質問よろしいでしょうか!?!」

「自分で考えろ。以上」

生徒の質問をガン無視し教室を出る教師ってどうなのだろうかと思う。拳手をした飯田が呆然としているぞ。

「取り敢えず着替えるか」

「何やってんだ轟!まだ女子がいるだろ!」

「…着替えろって言われただろ?」

うちのシヨートが女子を気にせず着替え始め、それを夜嵐が止めようとしていた。シヨートが着替え始めたのを見て女子勢が教室から

出る。すまんコイツそこら辺全く気にしないんだ。

「…教室で隠れていたら八百万のヤオヨロツパイ見れるのでは？」

「マジで埋めるぞ」

峰田が名案だと言わんばかりに眩き、俺が真顔で宣告する。俺はやると言ったらやる男だぞ？

「お前だってヤオヨロツパイ見てえだろうが！」

「…そりや当然見たい！舐め回すように見たいさ！だけど。それで女神の心を傷付けたら…俺は死ぬしかないだろうが！」

「いや…死ぬなよ」

宗教上の問題で俺は無理矢理手を出す事が出来ない。『可哀想なのは抜けない』これこそが真理であり、女神を怯えさせてしまったら俺はあの至高の胸に辿り着けず死ぬという事だ。それだけは死んでも避けたい。いや、あのおっぱいを触る前に死にたくないけど。

「なあ峰田。お前、女神に怯えられても抜けるのか？」

「抜けるね。あの顔がオイラという存在で恐怖するとかそれなんていうAV？」

ここまで分かり合えないといつそ清々しい。yesおっぱいNOタッチの心を知らないとは。

「——二人とも！女子を待たせてはいけないぞ！」

飯田の声を聞き俺は峰田を引きずりながら教室を出る。教室を出ると女子勢が俺達を何とも言えないような顔で見ているのはきつと見間違いだと思いたい。

「個性把握テストオ!?!」

体操服に着替えてグラウンドに出た俺達に掛けられた言葉は予想外なものだった。今日の日程が書かれた紙には入学式とガイダンス云々が書かれていた筈。だが、俺達は高校生活の始まりたる入学式に出れないらしい。流石雄英、やる事が違う。

「入学式は!?!ガイダンスは!?!」

「ヒーローになるならそんな悠長な行事に出る時間はないよ」

至極当然な意見はそんな一言で切り捨てられる。なら最初から個性把握テストをすると書いておいて欲しいと思ったのは俺だけだろ

うか？

「雄英は『自由』な校風が売り文句。そしてそれは『先生側』もまた然り」

つまり『教師がルールだ』という事なのか。逆らったら除籍がありえると笑えない冗談だ。入学して早々除籍だけは勘弁して欲しい。「どうやら一人気付いた奴がいるみたいだな。安心しろ、さつきまでの事は見逃してやる」

俺の表情から思考を読んだのか、そんな事を言う先生。心底有難い御言葉だけど逆に俺の考えに確証がついてしまい正直ドン引きして。それで良いのか雄英高校ヒーロー科。

「ソフトボール投げとか五十メートル走とかやってただろ？個性禁止の体力テスト」

「国は未だに画一的な記録を取って平均を作ってるが：合理的じゃない。まあ簡単に言うなら個性社会についていけない文部科学省の怠慢だよ」

「爆豪。お前中学の頃ソフトボール投げの記録は何Mだった？」
「67m」

そう答えた爆豪に先生はボールを投げ渡し、投げるようにジェスチャーする。

「じゃあ個性を使ってやってみろ。円から出なきや何しても良い、はよ」

「思いつきりな」

そう締め括った先生の言葉に爆豪は子どもに見せられない顔をするとボールを投げる構えをする。

「んじゃまあ…」

「死ねえ！」

爆音と共に空へと消えていくボール。グングンと空へと飛び立ち先生の手握られていた機械が計測を終えたようにピピッと鳴る。

「先ずは己の最大限を知る。それがヒーローの素地を作る合理的手段」

そう言いながら先生の手元の機械に映し出された数字は705.

2 m。個性を使ったテスト、その結果の一つを見せられて盛り上がらない奴はいない。

「なんだこれ、すげー『面白そう!』」

「705 m ってマジかよ!」

「個性思いつきり使えるんだ! 流石はヒーロー科!」

『面白そう!』その言葉を聞いて先生は先程までの胡散臭い雰囲気から怒気を混じらせボソリと呟く。あつ嫌な予感が。

「面白そう…か」

「ヒーローになる三年間。そんな腹積もりで過ごす気なのかい?」

先程までの喧騒は聞こえなくなる。先生の雰囲気を変化したからだ。正直俺も嫌な予感を感じ始めている。さつき確信したアレが現実になりつつあるのだ。

「よし。トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し」

除籍処分とするとしよう

その言葉と共に喚き立つ俺達を嘲笑うように笑い、先生は宣言する。

「生徒の如何は俺達の『自由』」

「ようこそ。これが雄英高校ヒーロー科だ」

家にいる母ちゃんへ。どうやら俺は凄い学校に入学したみたいで

個性把握テスト 上

始まりは中国。軽慶市。そこで発光する赤子が生まれたというニュースだった。以降、個性は様々な場所で発見され、何故発生するのか、何を原因とするのかも一切不明のまま時は流れた。

人は様々な個性を持って産まれる。ここは、その一例を出して説明しよう。

「そこ、あぶねえぞ」

熱と冷気を操り、氷塊を高速で生み出し続け高速移動を可能とする個性。生み出した氷塊により、辺りの気温は極寒と化す。

「四人の熱い勝負！絶対に負けねえ！」

暴風をその身に纏い大地を駆け抜ける事を可能とする個性。その暴風は高速で生み出されていく氷塊と冷気を吹き飛ばす。

「やるからには負けるつもりはありません！」

生物以外の全ての物を生み出し、それによりバイクすら創造する事を可能とする個性。前者二名が生み出す被害をドライビングテクニクにより避け続け、道を駆ける。

「俺が最速でナンバーワンのイケメン天才、引合石だ！」

引き寄せと引き離しを可能とし、地面と自分を引き離し高速移動をする事を可能とする個性。地面と己を引き離し、誰一人すら己が前を進むなど言わんばかりに愚直に突き進む。

このように人々は多種多様な個性を持って産まれる。そんな彼等が己を個性を全てを持って行って行っている事こそが

「俺が持久走最速だ！」

「負けねえぞ！引合！」

持久走。絶賛、個性把握テスト中である。

「一位は八百万、二位は同着三名。はい次の奴らはさっさと走れ」

そう言いながら俺達を片手で厄介払いをするように手を振り、次の奴らが走るように促す。

「くっそー惜しかった！だが良い勝負だったな！次の種目は負けねえ

ぞ！」

「次も負けるつもりはありませんわ」

走り終わったのにまだ気分が昂っているのか、全身に微弱な風を纏う熱血少年、夜嵐イナサ。そしてスポーツマンシップ全開の笑顔を見せる一位の女神、八百万百。横目で見たバイクに乗っている時の胸の揺れはこの世で最も素晴らしいものだったと記憶している。これは後生大切に覚えておこう。

「分かってたけど俺の個性が万能すぎてヤバイ」

「八百万の方が万能だと思うけどな」

そして俺が自分の個性の素晴らしさを噛み締めていると、横から冷や水を掛けてくる我らがショート。天然は齒に物を着せずにズバズバ言うから困る。

「いやまあ…確かにあんな簡単にバイク作り出せるとか、逆立ちしても勝てる気がしないレベルで万能だけどさあ…八百万様は他に何をお作りになられるので？」

「八百万で結構ですわ引合さん。何を作れるのかと言われましても…構成の全てを知りうる生物以外なら何でも作れますが」

「生物以外なら何でも!？」

「えっ、ええ…そうですけど」

女神に八百万呼びを許され歓びの中にいた俺は、女神の強力過ぎる個性に思わず大きな声を出してしまい女神を驚かせてしまった。猛省しなければならぬ。

「…例えばダイヤモンドとかは？」

「炭素の集合体ですし分子配列も覚えてますから比較的簡単に作れますわ」

「…ガソリンは？」

「バイクを作った時点でそれを動かすエネルギー源も作れるに決まっています」

「…ニトログリセリンとかは？」

「構造は理解してますので作れますけど…」

「大丈夫か石？顔が物凄い事になってるが」

そりや物凄い顔もするだろう。生物以外創造可能、そしてその作れる物も多種多様と来た。この個性はあまりに強力過ぎる。俺の個性すら霞んで見える程の強さ、もうこれ女神一人だけで良いんじゃないかな？

「俺の個性はどうだ!？」

「すまん夜嵐。八百万の個性を聞いた後だと多分どんな個性も全部霞むと思う」

この後、色々な事を話したり他のクラスメイトの活躍を見て次の競技になるまでの時間を潰した。

「握力測定か。まあ個性を使えば俺の独壇場だな」

握力測定では、握力計の引っ張る所と持つ所を引き合わせ上限オーバーの数値を叩き出す。

ドヤ顔で近くにいたショートにその結果を見せ付けると対抗意識が沸いたのか俺から握力計を取り全力で握り締める。ショートの個性は、握力を計るのに使用出来ないから仕方ない。

「…素で60超えて、そのボディの何処にそんな筋肉があるんだ？」

「鍛えているからな」

「…素の握力でリング握り潰せるようになるのも近いな」

ショートに結構握力がある事を知ったり

「…このくらいで良いでしょう」

「万力とか反則でしょ」

造り出した万力を使い人間じゃ足元にも及ばない記録を出す女神。やっぱあの個性チートでしょ。

「反復横跳びはオイラの独壇場だぜー!」

「凄いボヨンボヨンしてるな」

ボヨンボヨンと小粋な音を響かせながら反復横跳びをする奴がいた。というか峰田だった。頭のよく分からんボールを地面に大量に引っ付け、そのボールで跳ね飛びトランポリンの要領で高速移動をしている。

「どうだ引合！オイラの記録を超えられるかあ!？」

「端で反射すれば良いのか。なるほど」

峰田がやっていた事を個性で応用する。反復横跳びの両端のラインを。靴裏を―にして峰田と同じように反射して飛ぶ。

「…コイツ何でも出来るのかよ」

「フツ…これがイケメン天才引合石くんの力だ」

「…言うほどイケメンか？」

うるせえ自称で何が悪い。

因みに俺の次にやった緑髪の少年の顔が真っ青に染まっていた。体調でも悪いのだろうか？心配だ。

「ぜんつりよおおおく！」

「1745m」

「よつしやあああつ！」

「静かにしろ夜嵐」

「すいませんでした！」

夜嵐の投げたボールは暴風と共に大空へと吹き飛んでいく。先生のやる気を感じられない結果報告に夜嵐がガッツポーズを取り、騒がしいと注意される。あの先生と夜嵐は相性悪そうだ。

「夜嵐スゲーな！1745mって今の所一番じゃねーか!？」

「爆豪の705mもスゲーけどやっぱ風を操れる奴はあれくらい飛ばせられるんだな！」

「チツ。でしゃばるんじゃねえよ端役が」

夜嵐の出した記録に盛り上がるクラスメイト、近くにいた爆豪が不愉快そうに舌打ちをする。大方自分の記録を超えられて腹立たしいのだろう。次は俺の番、ここで俺が凄い記録を出して皆の注目を浴び、本日の主役になってみせる。

「次は引合だぞ！」

「任せろ！」

夜嵐からボールを預りボール投げの円の部分に立つ。

「投げ方は完全自由なんですよね？」

「取り敢えず円から出ずに記録が出たら何でも良い。さっさとしろ」「うっす」

さつきと投げろと言われ準備を始める。まずはボールを―に設定し地面を―に設定する。そしてその地面の上にボールを置き

「おい。何して…」

「発射―」

出力全開、個性のコントロールを放棄し全力で反発で吹き飛ばす。目視出来ない距離まで吹き飛んだボールが飛んだ先を眺めながら結果が出るのを待つ。

「凄い飛んだな!?!」

「まだ落ちてこないけどどこまで飛んだんだよ!?!」

「あの変態の個性凄いな!」

思い思いに好きな事を話すクラスメイト。一人俺の事を変態扱いしてる奴がいたが朝のおっぱいトークのせいだろう。反省してるし後悔もしている。そう考えると、あんな話をした後に普通に対応してくれた女神はやっぱり女神だ。

「…コントロール放棄の全力全開なんでどれくらい飛ぶのか分からないです。軽ければ軽いほど良く飛ぶんで結構いいと思うんですけど」

「そうか」

先生と結果が出るまで話をする。しかしボールが落ちてこない、一体何処まで飛んだのだろうか？

「落ちてこないっすね」

「…もう戻って良い。次、麗日!」

「一人二投だった記憶があるんですけど…?」

「二回投げて二回このザマになるなら計る必要がない」

けんもほろろに返され元の位置に戻ると峰田に何mだったのか聞かれる。さつきの俺と先生の話聞いてなかったのか貴様は。

「ボール帰ってこない。結果でない。二投目必要ない。つまり俺の結果はなし、0mだ」

「ドンマイ」

因みに触れたものを無重力にする個性を持った麗日という少女の記録は∞という扱いで幕を閉じた。俺のボール投げの結果? 0だよ

0。

「ボールが粉微塵になるかと心配しましたが…大丈夫そうですね」

「1800m。次、緑谷」

女神が大砲でボールを打ち飛ばし素晴らしい成績を叩き出す、流石です女神。

そんな女神の次は緑髪の少年らしい。他の競技の際にも顔が真っ青だったが今も顔色が優れていない。大丈夫だろうか？

「緑谷くんはこのままだと不味いぞ…?」

「飯田。アイツ調子でも悪いのか？顔色ヤバかったが」

「ああ…彼は試験で見せた実力を全く活かしていない。このままだと最下位が彼だと確定してしまう」

心配そうに呟く飯田と話をする。どうやらあの緑髪の少年の名前は緑谷というらしい。そして緑谷は自分の実力を今まったく活かしていないとかなんとか。

「…やっぱ体調悪いのか?」

「ああ…それも大いに考えられる。無理をしてこの個性把握テストをしているのだとしたら…」

そんな事を話していると爆豪が横槍を入れる。

「体調不良?あるわけねーだろそんなん。あれがクソナードの全力に決まってるんだろ。無個性の雑魚だぞ雑魚」

「無個性!?彼が入試時に何を成したか知らんのか!」

「は?無個性のクソナードに何か出来るとでも思ってるのか?」

どうやら爆豪と飯田で情報の齟齬が発生しているみたいだ。

「…いや無個性はないだろ。無個性がどうやって雄英入るんだ?あの試験を無個性が乗り越えるのは無理ゲーだろ?」

「どうせ試験官を金で買収したんだろ。それ以外でクソナードが合格する訳がねえ」

ステージに溢れかえる仮想ヴァイラン達に建物より巨大な0点ギミック。あの地獄絵図をクリアするのは戦闘能力が高くないと不可能。したがって雄英に合格している時点で緑谷は強い。

それに雄英の試験官を金で買収とか絶対に有り得ない。倍率30

0倍の天下の名門雄英高校ヒーロー科、試験官は勿論教師である。プロヒーロー。プロヒーローが袖の下を貫うとは思えない。

考えれば馬鹿でも分かる事だ。つまり爆豪は馬鹿以下なのか。

「…んだその人を哀れむ目は」

「何でもないぞ馬鹿豪くん」

「喧嘩売ってんのかテメェー！」

そんな馬鹿豪くんを哀れんでると緑谷がボールを投げる。ボールは山なりに飛び普通に落ちた。

「46m」

「えっ…なんで？確かに今使おうって」

「個性を消した」

困惑する緑谷にそう言い放つ先生。先生個性消せるんだ。それなら俺が投げたボールも何とかが出来ないのだろうか。

「つくづくあの試験は…合理性に欠けるよ。お前のような奴も入学出来てしまう」

「消した…？あのゴーグル…ッ!?!」

「抹消ヒーローイレイザーヘッド！」

イレイザーヘッド？ぶっちゃけオールマイトとバードマンとエンデヴァー以外殆ど名前覚えてないからさっぱり分からん。

「イレイザーヘッド？飯田知ってる？」

「いや…知らないな」

俺達がそんな話を話していると、先生と緑谷の話が終わったらしく緑谷が二回目のボール投げの構えに入る。

「話が終わったみたいだな」

「指導を受けていたようだが…」

「どうせ除籍勧告だろ」

緑谷が腕を振り上げる。ここで失敗すれば最下位から脱出する事は不可能。

「とっとと現実を見て諦めろよ。無個性がヒーローになれるわけねえ」

緑谷の放った最後の一投は山なりにではなく、天を貫かんと空へと

一直線に飛び立った。

個性把握テスト下

「えー先程緑谷さんが素晴らしい成績を出しましたが…彼が無個性だと言いつけていた爆豪さん。何か意見は御座いますでしょうか？」

「…んだありやあ。あり得ねえ」

「…駄目です。俺の話がまったく聞こえていません。半分壊れたラジオです」

緑谷がボールを天より高くかつ飛ばした直後。彼が無個性だと言いつけていた爆豪くんが今の心境をお聞かせ願おうかと思つていたらかなりショックだったらしく、茫然自失。ブツブツと何かを呟いていた。背中を叩いてもうんともすんとも言わない。大丈夫かコイツ？

「先生…まだ動けます！」

「コイツ…！」

そんな爆豪を尻目にどんどんと現状は進んでいき、指を真っ赤に膨れ上がらせた緑谷が涙目で先生に虚勢を張り、先生もその姿を見て、何やら驚いたような顔をしていた。

「指…折れてね？」

「指が膨れ上がっているな…入試の件といい。不思議な個性だ」

ここまで入試入試言われると入試で緑谷は一体何をしたのかが気になってくる。

「そう言えば…緑谷って入試で何やったんだ？」

「ああ…君はあの試験会場にいなかったのか。彼は0点ギミックに襲われている受験者を助ける為に、あれに立ち向かい顔を吹き飛ばしたのだ」

「おー…中々男気があるな」

飯田によると、緑谷はあの巨大ロボットに立ち向かい顔を吹き飛ばしたらしい。さっきの投げる姿を見るに筋力増強系の個性なのだろうか。俺以外にアレを倒した奴がいるとは思わなかった。これは思わぬライバル登場かもしれないな。

「ただ…その代償に手足が折れていたみたいだが」

「個性発現したての赤ん坊かな？」

前言撤回、アレを倒す為だけに手足を犠牲にしてたら何の意味もない。普通個性が発現したら使いこなせるように訓練するのが当たり前だろう。俺も訓練してここまで自由に動かせるようになったんだ。まさか人生で一度も個性を使った事がない訳がないし。

だが、現実問題目の前で指を真つ赤に膨れ上がらせた緑谷がいる。これはつまりそういう事なのかもしれない。

「指が腫れ上がってるのは…そこに力を集中させたからか」

「確かに…入試の時と良い、それなら納得が出来る。身に宿る個性があまりにも強力故に、彼は今まで個性を使う事がなかったのかもしれない。それ故に個性を扱いきれず自傷してしまう…」

「多分だけだな。余りにも身体に負担が掛かる個性だから親が使わせたくなかった。だが、今回の入試に受けるに当たって使う必要が出来、自分を省みず個性を使った」

我ながら中々に筋が通っていると思う。名探偵引合を名乗っても良いのではないだろうか。

「…親御さんも彼が個性を使うのには心配しているだろうな」

「緑谷がヒーローになりたいんだから仕方ない」

「…彼が個性を使いこなせるようになったその時、初めて彼の实力が見れるということか」

飯田がそう結論づけ話を終わらせる。指先だけであるパワー、それをノーリスクで使いこなせるようになれば俺もドン引きするくらい強い個性になるだろう。

今はただの自爆特攻だから何とも言えないけど。

「どーいうことだ…こらワケを言えデクてめえ！」

「うわああああ！」

隣から爆音が聞こえそちらを見ると爆豪が緑谷に向かって特攻をしかけていた。あの個性を見て特攻するとか返り討ちで殴り殺されるぞお前。

「落ち着け爆豪」

流星に超パワーに殴り飛ばされてミンチより酷いのは見たくない

ので茫然自失となっていた時に触れていた爆豪の背中を――に俺の真下の地面を＋にして引き寄せる。

「ア？身体がこれ以上進まねえ!?これをやってんのは…テメエか糞端役!とつとと解除しやがれ!」

「命の恩人に失礼だなお前。あの威力見て特攻するとか自殺志願者でもやらないぞ」

両手から爆発音を出し空を浮く爆豪。俺が引き寄せてるというのにそこから動かないという事は抵抗出来てるといふ事だ。もつと出力をあげるべきか？

「…ガアアアッ!」

「結構出力高いけどまだ拮抗するのか…ッ!」

中々に強情な爆豪に頭を悩ませていると俺の個性が突然解除される。それと同時に爆豪も個性を使えなくなったのか音を立てて地面に落下する。先生が個性を解除したんだろう、流石先生だ。出来れば爆豪が動き出した瞬間に止めて欲しかったけど。

「…二度も三度も俺に個性を使わせるな!」

「俺はドライアイなんだ!」

そんな先生のカミングアウトに、目を使う系の個性でドライアイは大変そうだと少し同情した。

「時間が勿体ないからさっさと次、準備しろ」

その言葉に動き出すクラスメイト達。因みに次は尻尾を持った少年だったらしく、尻尾でボールを横薙ぎに吹き飛ばしていた。

「指、大丈夫?」

「うん。なんとか」

ボール投げで∞の記録を叩き出していた麗日という少女が緑谷を心配そうに接する。思わず嫉妬しそうになるのを堪え、緑谷を睨む爆豪に話し掛けに行く。何やら緑谷に思う所があるようだ。

「…そろそろ落ち着いたか?」

「有り得ねえ…どういう事だ?アイツに個性はなかった筈」

「…駄目だこりゃ」

俺の存在に気付いてないのか、ただ緑谷を睨み続ける爆豪。そんな

に緑谷に個性があつたのが嫌だつたのだろうか？謎が深まるばかりである。

その後も俺の個性が使える競技しかなくやはり俺の個性が万能であるという証明がされた。女神の方が万能で有能？そうだね。あれを越える万能な個性は存在しないと思うよ。

「ーんじゃパパッと結果発表」

「ドキドキするな轟！」

「夜嵐。静かにしろ」

「すいません！」

夜嵐が先生に注意されていると峰田が顔を真っ青にして俺に話し掛ける。一体どうしたというのか。

「ヤベエよ引合。緑谷の成績に誤魔化されてるけど…オイラの成績も反復横跳び以外酷いんだよおお！」

「このままじゃ最下位かもしれないねえ！」

小さな声で悲鳴をあげる峰田の肩を優しく叩き返事を返す。短い間だったけど楽しかったよ。

「除籍になっても、元気でな」

「嫌だアアツ！オイラは絶対に最下位にはならない！プロヒーローになつて女の子にモテるんだあつ！」

無心で祈り始める峰田を無視して先生の話は続く。

「トータルは単純に各合計種目の評点を合計した数だ。口頭で説明するのは無駄だから一括開示する」

「除籍は嫌だ除籍は嫌だ除籍は嫌だ除籍は嫌だ除籍は嫌だ」

峰田が祈る中、先生の機械から結果が空中に投影される。そして結果が投影された瞬間

「因みに除籍は嘘な」

「君らの実力を最大限に引き出す為の合理的虚偽」

「はあああああつ!?!」

「…良かった」

とんでもない爆弾が先生の口から落とされ、クラスメイトを困惑の渦に叩き落とした。

あつ、峰田が安堵で白目を剥いた。

「あんなのウソに決まってるじゃない。考えれば直ぐに分かりますわ」

女神が困惑するクラスメイトを見て呆れたように言い放つ。いきなり個性把握テストとかやらすからマジでやると思っていました。流石は女神、俺が分からなかった事に平然と気が付ける。

俺も見習わなくてはならない。

「そゆこと、これにて終わりだ。教室に戻ってカリキュラム等の書類に目を通しておけ」

「…その前に緑谷はリカバリーガールに傷を治して貰ってこい。後、引合はここに残れ、少し話がある」

「以上。解散」

その言葉で思い思いに動き始めるクラスメイト。グラウンドに残るように言われた俺に峰田が良い笑顔で話し掛けてくる。

「除籍になっても、元気だな」

絶対ならんわ。土下座して靴の裏舐めてでも回避してやる。

「取り敢えずお前に聞きたい事が」

「取り敢えず土下座するので許してください」

「待て、いきなり土下座するな。俺が土下座を強いる鬼畜教師と思われるだろうが」

グラウンドに残された俺は即座に土下座を敢行した。母ちゃん直伝『困った時は土下座しろ。正し連発するな』だ。俺の綺麗な土下座に困惑したのか、先生は止めるように言う。

こちらら除籍があるかもしれないのに土下座を止められる訳がないだろうが…ッ！許してもらえらるまで土下座するぞ！

「いや、お前の事を除籍処分にするつもりはない」

「先生。話とはなんなのでしようか？」

「…変わり身早いなお前」

処分されないなら土下座をする必要はない。結局何の用なのだろうか？

「ボール投げの件だが、何故制御を手放した？」

何故手放した？それはドデカイ記録を

叩き出す為以外に存在する訳がない。

「そりゃボール投げの成績を出す為ですけど」

「…俺はあの時、お前に何と言った？」

確か…

『取り敢えず円から出ずに記録が出たら何でも良い。さっさとしろ』
でしたっけ？」

「そうだ。お前はそれでどうした？」

「凄い記録出す為にぶっ飛ばしました」

「…テストで確信つかない事をする馬鹿が何処にいる？」

「あっ」

確かにその通りだ。最下位が除籍になるテストであんな事をする必要がない。自分のコントロール出来る全力で問題ない。注目されたいからと言ってあそこまでする必要はなかったのだ。

「…既に成績が出てくるからもう記録にはならんが、コントロール出来る限界で投げてみる」

そう言われ投げ渡されるボール。もう一度投げろと言われたら投げるしかない。地面を―にボールを―にして反発させる。今度は完璧にコントロールを利かせ天までかつ飛ばし、ちゃんとグラウンドに落とす。

「良し…お前も教室に戻れ」

「どのくらい飛びました？」

「記録にならないものを知る意味はないだろ。大人しく教室に戻れ」

「うーす」

言われた通り諦めて教室に戻ろうとする。すると先生が何かを思い出したように俺に話しかけてきた。

「ところでなんだが…お前の両親は今どうしてる？」

「…確か父ちゃんが一般商社のサラリーマンで母ちゃんが専業主婦してますけど」

「…ヒーロー業をしてるわけではないんだな？」

何を言っているんだこの教師。俺の親がヒーローな訳ないだろ？

「両親二人とも無個性なんでヒーローになれる訳がないっす」

今時珍しい無個性の両親がヒーローになれるわけがない。何をどうしてヒーロー業をしていると思っただのか。

「…そうか、引き留めて悪かった。さっさと戻れ」
「うーす」

その言葉を最後にグラウンドを後にする。こうして俺の一日目の学校生活は幕を閉じた。明日からの授業が楽しみだ。

昼食、ヒーロー基礎学（オールマイト）

「んじゃ次の例文で間違っているのは？」

勉強は正直言って好きではない。雄英高校入ったのはヒーローになりたいから、でもヒーローになる為には勉強も必要。したくないからしないでは通らないのだ。

「おらエヴィバディヘンズアップ！盛り上がれーッ！」

「はい！先生！はい！」

「ナイスボイスだ引合！それじゃあ答えて貰おうかセイヘイ！」

「3番！」

「うーん…見事に引つ掛かったな。それでもナイスファイト！正解は4だ。4番だけ関係詞の位置が違うだろう？」

それでも日本から出るつもりはないから英語の一つや二つ知らなくても問題はないじゃ駄目だろうか？

「午前中発言したの大体間違えてたけど…もしかして引合って勉強出来ないのか？」

馬鹿をいうな。天才でイケメンな引合君が勉強出来ない訳がないだろ。全く失礼な奴め、これは敢えて間違え事により先生の深い解説を聞く為にだな

「…今やっているのは中学校の頃の復習みたいなものでしてよ」

えっ

「—午前中にクラスの皆から馬鹿だと思われた場合の打開策はあるのだろうか？」

「ないから諦めろ。お前は馬鹿だ」

「校庭に埋めろぞモテキング」

昼食。この雄英高校の食堂には全ての学科の生徒が集まる為、人が溢れる。呑気にシヨートを誘い食堂に来たのは良かったのだが、あまりの生徒の数で座るところが全く見当たらず困っていた所を現在普通科の信条大和、別名モテキングの誘いに乗り、一緒に食事を取っている。

「わざわざ俺達の席とっておくとか聖人かよお前。何が目的だ？」

「この信頼のなさよ。まあ目的があるからこつちに呼んだんだけどな」

コイツが態々俺達と食べる為に前の席を用意するなんて考えられない。そう考えていたらやはりその通りだったらしい。

「お前らにコイツの紹介をしたくてな。新しい俺の友達、心操人使つて奴だ。よろしくやってくれ」

「…ども」

「よろしく！渾名はスーパーひとし君で良いか？」

「それは止めてくれ」

「蕎麦うめえ」

どうやら大和に男友達が出来たようだ。全く信じられん、だが一緒にいるという事はそういう事なのだろう。心操人使、めんどくさいから『人使』と呼ぼう。そして一人優雅にざるそばを啜るショート、コイツほんと人の話聞かねえな。

「良し。引合にはコイツの個性の事を聞いて貰いたいんだ」

「おい、待て大和。本気で言ってるのか？」

「安心しろ。コイツ全然気にしない馬鹿だから」

本当に失礼な男だ。人使の個性は心底どうでも良いけどお前を校庭に埋めたくて仕方ない、この感情は一体どうしてくれようか。

「コイツの個性なんだが…俺達の中で一番すごい」

「それは聞き捨てならんな。早く話したまえ」

前言撤回だ。俺の個性より凄いや言われたら聞くしかない、俺よりすごい個性は女神の個性以外認めるつもりはない。因みに中学校の頃の担任は別次元の存在だからカウントしていない、停止とかマジチートだろ。これで弱い個性なら大和を鼻で笑ってやる。

「コイツの個性は『洗脳』コイツに返事を返したら人を操れるんだとさ」

…はっ

「大和のフェロモンも似たようなもんだろ。俺達からすれば普通だな」

「お前ならそう言うと思ってたよ馬鹿」

「よし放課後中学校に電話してドS召喚してやる。楽しみにしてろ」

「マジで止めろ。すまん、俺が悪かった」

「分かれれば良いんだよ。分かれれば。」

「…なあ。引合とか言ったか?」

「どうかしたか?一緒に大和埋めるか?」

「どうやら新入りの人使も一緒に大和を埋めたいらしい、なんて将来性のある少年なんだ。今度一緒に奴を埋めよう。」

「いや…埋めるつもりはないが…怖くないのか?」

「…何がだ?なんか怖いものでもあるのか?確かに大和のモテっぷりは慣れている今でも怒りと妬みと恐怖を感じるがそれほど怖くはないだろ。ここまでとは言わんがメチャクチャモテる奴とか世の中には山ほどいる。気にしてないぞ」

大和がモテモテなのは全く気にしてないぞ、いつかは俺も彼女を作ってイチャイチャする。聖夜を彼女と一緒に過ごすんだ。

「…な?こんな奴なんだよコイツは」

「…いるんだな。こんな変な奴が」

このイケメン天才を捕まえて変とはなんだ変とは、失礼な。

この後人使とSNSを交換し、昼食を食べながら普通に話をした。大和と友人になるという行為をしてしまった人使のこれからの灰色の青春に幸あれ。俺はヒーロー科だから大和の世話は君に任せた。因みにシヨートは我関せずでひたすら蕎麦を堪能していた。そんなに旨かったのか、その蕎麦。

そして、そんな昼休みは終わりを告げ午後の授業となる。午後は英語だのなんだのと普通の授業ではない、ヒーロー科だけの唯一無二の科目『ヒーロー基礎学』の時間だ。

そしてその『ヒーロー基礎学』の教師は

「わーたーしーがー!」

「普通にドアから来た!」

H A H A H A H Aと高笑いしながら教室に入ってきたのはあの生きる伝説。唯一無二のNo.1ヒーロー『オールマイイト』だ。TVで

何時も見えていた存在が目の前にいるとは感動である。後で絶対にサインを貰おう。

「オールマイトだ……！すげえや本当に雄英で教師やってるんだ！」

「銀時代のコスチュームだ……！画風が違って鳥肌が……ッ！」

俺と同じような感想だったのかクラスメイト達は口々にオールマイトが来たことを喜ぶ。オールマイトはとにかくカッコいい、筋肉ムキムキで背も高い。そして、プロヒーローの中で圧倒的な実力を持つ希望の象徴。簡単に言えばオールマイトは凄しい強くてカッコいいのだ。

「ヒーロー基礎学！それはヒーローの素地を作る為、様々な訓練を行う科目だ！」

「早速だが、今日はこれ！」

そう言うオールマイトの手にあるのはfightと書かれた小さなカード。つまり戦闘、もしかするとオールマイトと戦闘訓練を行えるのかも、そう考えると俺の気分は昂る。憧れの人に教えてもらえるなんて正しく夢のようだ。

「戦闘訓練！」

「そしてそいつに伴って……こちら！」

ピツという音にあわせて教室の壁から沢山のトランクが出てくる。流石雄英高校、こんな所でも金を掛けてて素晴らしい。倍率300倍の日本一の超名門校というのは伊達ではないのだ。

「入学前に送って貰った個性届けと要望に沿ってあつらえた……」

「コスチューム！」

「うおおおおおっ！」

要望は送ってある、単純なものだからきつと完璧に作られているのだろう。俺の理想のコスチュームがそこにある、そう考えるだけで胸が踊る。

「着替えたら順次グラウンドβに集まるんだ！」

「はーい！」

オールマイトに大きく返事を返しトランクを開く。そこには俺の要望通りのものが鎮座されていた。

「要望通りだ。素晴らしい！」

「引合はどんなコスチュームにしてるんだ？」

「見たいか？見たいよな！見せてやろうこれが俺のコスチュームツ
！」

「いや：興味本位だから。男なのに男のコスチュームが気になって仕方ないとかそれももうホモだろ」

前の席で自分のコスチュームを確認していた峰田が俺にそう問いかけてくる。見たければ見せてやる。これが俺のコスチューム！

「指抜き手袋！」

「：だけ？」

「指抜き手袋だけだ！というかこれ以外必要ない！服なんて体操服で上等！」

呆氣にとられる峰田を無視してトランクに体操服と手袋を詰め込みオールマイトが去った方向へ走り出す。暫く走ると悠然と前を歩くオールマイトを発見する。チャンスは今しかない。

「オールマイト！」

「：君は」

「引合石です！お願いします！」

神妙な顔をしながら俺の名前を聞くオールマイトに自分のヒーロー基礎学の教科書を渡す。

「この表紙に『未来のプロヒーロー引合君へ』でサイン下さい！」

「…え？」

その時俺は、テレビで見た事がないオールマイトが心底困惑する顔を見た。

戦闘訓練 チーム分け

「出来た…これこそ俺の最強のコスチュームであり最強の武器」

被服控除。それは入学前に『個性届け』と『身体情報』を提出すると学校専属のサポート会社が素敵なコスチュームを用意してくれる素敵なシステム！

「素材は…伸縮性抜群で耐久性が高いのが良いな。後…手の甲の部分にちよつとしたギミックを」

「なーに小学生みたいにウキウキで描いてるのよ。ちよつとお母さんに見せなさい」

「キヤー！痴漢！変態！エッチー！」

要望を添付する事で便利で最新鋭のコスチュームが手に入る！

「あー…なるほどなるほど、流石は私の息子。考える事がド畜生だわ」
「戦いに勝つためのコスチュームなんだから、この考えは当然じゃね？」

人のコスチュームの要望を覗き見した母ちゃんがそんな事を言い出す。コスチュームに見た目とかどうでも良いだろ。ヒーローは絶対に勝たなくちゃならない、その為の戦闘服なんだから。後、自分の息子をド畜生とか言うのはどうかと思う。イケメン天才で可愛い愛息子をそんな扱いとか酷くない？

「まあ…がんばりなさい。色々」と

そうしてコスチュームは俺の要望通りに送られてきた。制服から体操服に着替え、送られてきた指抜きグローブを手に装着する。素晴らしい着け心地、これで俺は完璧、今の俺は無敵だ。

先程貰ったオールマイトのサインを見て気分も高めてきた。俺は未来のプロヒーロー、絶対に負けない。

「始めようか有精卵共！」

グラウンドβにクラスメイトが集まりオールマイトが高らかに宣言をする。

「戦闘訓練の始まりだ！」

雄英高校ヒーロー科に入学して、初めてのヒーロー基礎学の始まり

だ。

「良いじゃないか皆！カッコいいぜ！」

このグローブの良さが分かるとは流石はオールマイト。最高のヒーローは観察眼も一味違う。

「ムム!？」

クラスメイトを眺めたオールマイトは何かを見つけたように一人を凝視すると、嘔き出すのを堪え始める。一体誰を見て笑ったんだ。

「おい。見ろよ引合：女子のコスチューム」

「素晴らしい：特に八百万のコスチュームが最も素晴らしい。あの為なら死ぬる」

「分かる」

親指を立てながら話し掛けて来る峰田に同意を返し、そのまま熱い握手を交わす。

このクラスの女子は皆美人だ。そんな彼女達がコスチュームに纏う姿は美麗の一言につきる。特に女神のコスチュームは素晴らしい、遠慮なく開いた胸元。大きく露出された足、肩から全部見える腕。思わず凝視したくなるその全てが、黄金比で作り上げられている芸術。現代に産まれた女神そのものだった。

「…その気持ち、良く分かるぜ」

俺と峰田が頷き合っていると突然横から同意が飛んでくる。

「引合だっけ？昨日ボールかつ飛ばしてたよな。俺は上鳴電気、よろしく」

そう言いながら話に入る上鳴電気。こんなに気さくに話し掛けるが俺には分かる、コイツは俺の不倶戴天の因敵。大和と同じ臭いがする、つまりコイツはチャラ男でモテ男だ。

「すまん、モテ男を見たら地面に埋めたくなるんだ。本当にすまん。後で埋める」

「待て待て待て！埋めるな！落ち着け！」

目の前にいるのはイケメンでチャラ男でモテ男。つまり俺の敵、お前とは必ず争わなければならない時がくる。ならば先に埋めるのが合理的だろう。

「三人とも！今は授業中だぞ！ところで先生！ここは入試の演習場ですがまた市街演習を行うのでしょうか!？」

拳手をしながら俺達を注意し、オールマイトへ質問をする飯田。コ
スチュームがロボットみたいで中々カッコいい、ロボットは男の浪漫
だ。

「いや！今回はその二歩先に踏み込む！屋内での対人戦闘訓練さ！」

「ヴィラン退治は屋外で見られる事が多いが…統計で言えば、屋内の
ほうが凶悪ヴィラン出現率は高いんだ！」

「監禁、軟禁、裏商売。このヒーロー飽和社会…」

そこで一回区切り、オールマイトは声色を変えて説明を続けた。

「真に賢しいやつは室内…闇に潜む！」

「これから君達にはヴィラン組とヒーロー組に分かれて」

「2対2の屋内戦を行って貰う！」

基礎訓練もなしにいきなり屋内戦を行うという言葉に驚愕が走る、
だがオールマイトが言うのだ。必ずそこには今の俺達の計り知れない
理由がある。

「基礎訓練もなしに？」

「その基礎を知る為の実践さ！」

カエル顔のクラスメイトの言葉にオールマイトがそう説明する。
なるほど基礎を知る為の実践、流石はオールマイトだ。

「た、だ、し。今回はロボットをぶっ飛ばせば終わりという訳ではない
！」

そう言い区切ったオールマイトにクラスメイト達から質問が襲い
掛かる。

「勝敗のシステムはどうなりますか？」

勝敗のシステムの説明を求める女神。

「ぶっ飛ばせばいいんですか？」

取り敢えず敵はサーチアンドデストロイで良いのかと聞く馬鹿豪。

「また相澤先生みたいに除籍とかあるんですか…？」

怯えた顔をしながら問う者。

「分かれるとはどのようなように分かれれば良いですか!？」

馬鹿真面目な性格らしく、チーム分けの方法を聞く飯田。と皆が口々にオールマイトに質問をする。これにはオールマイトも堪えたらしく、顔を天に向け腕を震わせ

「ウーン…ッ！聖徳太子！」

関係ないが聖徳太子は10人の話を聞けたらしい。これはもう殆ど個性ではないのだろうか？

「では設定状況の説明だ！『ヴィラン』がアジトに『核兵器』を保有し！ヒーローはそれを処理しようとしている！」

中々ユニークな設定だ。アメリカの映画でありそう…というか絶対あるな、こんな設定の映画。主人公オールマイトで。

『ヒーロー』は制限時間以内に『ヴィラン』を捕まえるか『核兵器』を回収する事！『ヴィラン』は制限時間以内まで『核兵器』を守るか『ヒーロー』を捕まえる事！」

勝利条件はお互い同じらしい。だけどこれはヴィランの方が圧倒的に有利だろう。取り敢えずヴィラン役をしたい。

「コンビ及び対戦相手は…くじだ！」

「適当なのですか!？」

おもむろにクジの入った箱を取り出すオールマイト。何処に置いてたんですかそれ。

「プロは他社の事務所と急造チームを組む事が多いらしいから…つまりそういう事じゃないかな？」

「そうか…先を見据えた計らい…失礼しました！」

全身緑色のスーツを纏った緑谷から説明を受け、納得したように頷く飯田。これで全員がルールを把握した、なら次は

「いいよ！さあ始めよう！一人ずつクジを引いてくれ！」

チームメイトを決めるくじ引きの時間だ。

「——オイラと八百万は同じチーム！残念だったな引合！」

「…手を出してみる。その時お前を壁の染みにしてやる」

「へっ！脅迫が怖くて痴漢が出来るか！」

簡単に現状を説明しよう。峰田が女神と同じチームになった。もしも峰田が敵となったらその時は真っ先に峰田を行動不能にしてや

る、絶対にだ。

「ああ。君がチームなのか」

「そういう君はボール投げで面白い投げ方をしていた尻尾少年」

「尾白猿夫、今回はよろしく。後…君の方が面白い投げ方をしていたと思うけど」

「フハハこやつめ」

俺のチームは尻尾を持った少年、尾白猿夫。長いので尾白と呼ばせて貰おう。

「運が良かったな尾白。コスチュームを着た今日の俺は強い、そりやもう向かうところ敵なしレベルで強い」

「…普通の体操服に甲に出っ張りのある指抜きグローブを付けてるようにしか見えないけど？」

そういう尾白こそ普通の柔道着を来ているだけだと思いが機嫌が良いので追及しない事とする。運が良かったな尾白少年。

「ただの指抜きグローブに見えるだろこれ？チームメイトには教えておこう。耳貸せ」

そう言いながら尾白の耳元に口を近づけ他の人に聞こえないように話す。

「——ってわけだ。どうだ？」

俺のスーパー指抜きグローブの性能を聞いた尾白は口元をひくつかせ

「…えげつなっ！」

と、失礼な事を言い放った。解せぬ、誰もが称賛するスーパー指抜きグローブなのだが何が不満なのだろうか？

戦闘訓練 上

人は個性によりさらなる存在へと進化した。超常が現実へと変化した今、昔ならばただの少年少女だったであろう彼等はどうか変化したのだろうか？

「無駄無駄ア！俺に触られた時点で終わりなんだよお！」

嘲笑を響かせながらゆつくりと歩く男。皆様ご存知、引合石がそこにいた。体操服に指貫きグローブというある意味奇抜な格好をした男は悠然とビルの中を歩く、そこにあるのは絶大なる自信。自分が絶対有利だと確信している姿がそこにはあった。

「逃げる口田！当たれば終わりだ！」

「分かっているよ砂藤くん！」

「逃げる逃げる！このスーパーイケメン天才ヴィラン。引合石の前に敵はなし！」

引合の敵、正確には哀れにも彼の秘密兵器の実験役となってしまう砂藤力道と口田甲司。彼等の背に近づくもの、それは

「お前らを追いかけるその針！それには刺されば一瞬で眠れる麻醉薬がたっぷりと染み込んである！そしてその針はお前らを永遠と追い続ける！」

「恨むなら俺をヴィラン役にした運命を恨むんだなあ！」

「ハーツハツハツハツ！」

超常が現実へと変化した今、個性は少年に絶大なる過信と慢心を与えてしまった。そしてそれが事実だと言わんばかりに引合は高笑いを続ける。そこにいたのはN.O. 1ヒーローオールマイトに憧れたヒーローの卵ではない。ぶっっちゃけたただのヴィランだった。

「ハーツハツハツハツ！ハーツハツハツハツハツ！ハーツハツハツハツハツ！」

…こんな事態に陥ってしまったのには理由がある。そこでそこで時間で時間を戻そう。

「第1回戦は引合&尾白チーム対砂藤&口田チーム！引合少年と尾白少年はヴィラン役なので先に戦闘場所であるビルの中で待機してい

るように！」

「因みにトラップを仕掛けてても問題ないからな！自分がヴィランになつたつもりで行動してくれ！」

「任せて下さい！ヒーロー役が泣いて懇願するまでポッコボコにしてやりますよ！」

「ウーッン！この問題児！」

オールマイトから最初の戦闘訓練のメンバーが発表された引合は仲間である尾白にアイコンタクトをとりヒーロー役のクラスメイトに近付いた。

「へい！対戦相手！俺の名前は引合石。そしてこのイカした尻尾ボーイが」

「尾白猿夫だ。よろしく」

「おつ：おう、元気だな。俺は砂藤力道、よろしく。そこで俺の隣にいるのが」

「口田甲司。よろしくね」

砂藤力道、口田甲司と名乗った彼等は引合のテンションに押され流されてしまう。今思えばここで勝敗は半分決まっていた、ここで彼等のうちどちらかが引合が個性把握テストでなにをしたのかを理解していればこれから起こる悲劇は回避出来たのかもしれない。

「いいなあヒーロー役。俺もやりたかった」

「：さつき物騒な事を言ってなかったか？」

「ヴィラン役だから仕方なくロールプレイしてただけ。俺だってヒーローしたかった」

「ハハハハ！確かにヴィランは嫌だよな。だけど今回はお前らみたいだからお互い頑張ろうな！」

そう言いながら残念そうにする引合を見て砂藤は笑う。奇抜な教室での登場シーン、峰田との熱いおっぱい談義に個性把握テストでの活躍、そして今の姿。その全てを観察して砂藤は引合を面白い人間だと結論をつけた。そしてそれは口田も同じだったらしく、生来怖がりの彼も引合の人柄に触れて安心したのか朗らかに笑っていた。凡そ、これから戦う者達が見せる表情ではない。

故にだろう。これから起こりうる事を回避出来なかったのは。

「良し！それじゃあ宜しくな砂藤！」

そう言い引合は指貫きグローブを脱ぎ握手を求める。顔は先ほどと変わらない朗らかな笑顔だ。

「おう！宜しくな引合！」

そして砂藤も同じく素手には素手で握手に応じる。そのまま引合は口田にも握手を求め、口田も笑顔でそれに応じた。

「んじゃ先に行つて準備してきます！」

行くぞ尾白少年！」

「それじゃあ二人ともよろしく…後、色々ごめん」

笑顔で走り去る引合とボソリと謝罪しながら立ち去る尾白。その二人を見て砂藤&口田、哀れな生け贄達は自分達も頑張らないといけないと息巻き二人に続くようにその場を後にした。

「ナイス青春！君達も相手に敬意を持って挑むんだぞ！例え相手がヴィラン役であろうが相手は大切なクラスメイトだということを胸に刻むんだ！」

「はい！」

オールマイトの言葉に殆どの生徒が大きく返事を返す。だが、返事を返さなかった者達がいた。

「…あの引合があんな青春青春するかあ？絶対になんかある。オイラの勘がそう言っている」

「峰田君！引合君は二人に敬意を持って接していた！先生もその心を大切にしろと仰ったばかりではないか！」

引合と知り合つて僅か1日だが彼の本質を一人を除き理解していた男。峰田実はそういぶかしみ、飯田がそんな峰田を注意していた。

峰田だけならば考えすぎで流されていただろう。だが、もう一人無言で考えていた者がいた。

「どうした轟！うんこか！」

「いや…石のやつがあんな事をするとは思えねえ。絶対になにかある」

デリカシー皆無な夜嵐の言葉に冷静に返事を返した轟焦凍、通称

シヨート。その人である。

「…轟さんは引合さんと同じ学校でしたっけ？なにか知っているのですか？」

同じ中学出身故に自分達よりも引合石という人間がどんな人物なのか知っているのだろうと判断した八百万は何気なく轟へと問いかける。その問いに返事を返すのが難しいのか何度もうなりながら轟は返事を返した。

「…俺と石の友達に大和って奴がいる。そいつは『煽れる時には煽つとけ』という家訓の持ち主で良く石を弄って倍返しにされてた」

「それは…なんというか」

突然の新キヤラ大和の家訓に返事の返しようもない八百万は困惑した顔をする。だが、それに気付いていない轟は言葉を続ける。

「…そして石の奴は持論を持ってる」

「…持論？『女の子に酷い事は出来ない』みたいな感じの事を仰っていましたね」

「いや、それは石曰く『聖書に書かれている言葉だから持論ではない』らしい。なんの聖書に書かれているか不明だが、まあそういうことなんでしょう」

「…宗教は多種多様化していますから彼の信仰する宗教が何か分かりませんがそういう事なんでしょうね」

「…石の持論に話を戻すぞ」

気付けばクラスメイトの殆どが彼等の話に耳を傾けていた。轟焦凍と八百万。二人とも推薦入試を潜り抜けたエリートの中のエリート。当然そんな彼等が話す事を気にならない訳がない。

「一回だけ石が持論を語った時があった…それは」

「…もうすぐ戦闘訓練開始だな。口田、個性で辺りの鳥に引合達が何処にいるのか教えてもらってくれ」

砂藤のそんな言葉に口田は自らの個性を使って鳥に呼び掛ける。

口田甲司、彼の個性は『生き物ボイス』生き物に呼び掛ける事の出来る力を持っているのだ。

「場所さえ分かれば俺の個性でぶっ飛ばして終わりだ！」

そう息巻く砂藤力道。彼の個性は『シュガードープ』、糖分10gにつきパワー5倍という増強系の個性を持っている。

『それじゃあ両者準備は良いかい?』

オールマイトの声が戦闘エリアに響き渡る。これから試合が始まる、緊張した顔をした二人は身体を強ばらせる。初めての対人戦闘だ、仕方のない事だろう。

『戦闘訓練!開始ッ!』

その言葉と共にビルへと駆け出そうとした二人。だが二人は走る事が出来なかった

「——ビルに引っ張られる!」

「ど、どうしよう砂藤くん!」

彼等の身体、正確には手がビルへと引き摺られるように引っ張られていくのだ。

駆け出そうとしていた故に体勢を崩した彼等はその謎の力に逆らう事は出来ない。

「ウワアアアアアアッ!」

「ハーツハツハツハツ!引っ掛かったな馬鹿めえ!『戦う前に勝つ!』これが俺の持論よ!」

入ったビルの中で引合の高笑いが木霊する。

「石の持論は『戦う前に勝つ』:やっぱりこうなったか」
「:...」

轟含むクラスメイト達の目の前にあるモニターに映し出されている光景には砂藤と口田が謎の力によってビルの内部へと引き摺られていく姿と、高笑いしている引合が映し出されていた。

砂藤と口田、彼等は今自分達が何と戦うのかを理解する。これから始まるのは正々堂々とした戦いではない。

「ヴィランならなんでもありだよなあ?!卑怯汚いは敗者の戯言!ボッコボコにしてやるよお!」

彼等は今、相手の胃袋の中に放り込まれたのだ。

戦闘訓練 中

『逃げる逃げる！まあ逃げたところで無駄だがな！必死に頭を捻れ！
逆転の糸口を引っ張ってこい！』

『まあ：そんな方法はないんだけどな！ハーツハツハツハツ！』

「(想像はしていたが：まさかこれほどとは)」

引合が虐殺ショーを初めて早数分。オールマイトは啞然としてモ
ニター越しにその光景を眺めていた。本来この訓練はヴィラン役、
ヒーロー役に分かれた者達がどれだけその役の思考をなりきれるか、
そしてどのように相手を追い詰めるかにある。今回は初日の第1回、
故にヴィラン役とヒーロー役がぶつかり合い、そこから何かを感じ取
る。ただ、それだけで良いと思っていた。

『逆転のヒントだ！俺の個性は引き寄せと引き離しをする事が出来る
！今お前達を追い掛けている針はそれの応用だ！』

『いつ触られ、何処を狙っているのか！それを理解しない限りこの状
況は回避出来ない！』

『まあ：分かっても俺には勝てないけどな！』

「(圧倒的な中、相手が諦めないように情報を与える：快樂的な犯罪を
犯すヴィランにありがちな行動。己の圧倒的な個性への絶大なる過
信と慢心)」

「(引合少年が演じているのは強個性を持って暴れている『大人こども
型』ヴィランか：)」

引合が演じているヴィランをそう判断し成績をつけていく。どん
なに厳しい目で見ても彼におかしい点は見当たらない。はつきり言
おう、オールマイトの目から見て彼はヴィラン役として完璧だった。
というかどうか見てもヴィランそのものだった。

「なあ：引合の奴、なんて言ってるんだ？」

「つーかアイツ強くな？どうやって勝つんだよ」

「：俺の個性は強化型だからどうしても懐に入らなきゃならない。引
合の個性が分からない限り不用意には近付けないのがキツいな」

「引合君の個性はなんなんだろう。個性把握テストの時には地面に触

れた瞬間大ジャンプをしたりボールを吹き飛ばしたりしていた。そして今回の戦闘訓練では砂藤君と口田君をビルの中に謎の力で引張り、更に今二人は引合君から逃げ続けている。二対一で攻めるならチャンスは今しかない。つまり二人は今、引合君から攻撃を受けているんだ！」ブツブツ

少年少女達は引合石という少年がなにを言い、そして自分ならば彼をどうやって攻略するのかを考え始めている。これは嬉しい誤算だ。自分ならどうやって戦うか、どんな手を取るのか。これこそオールマイトが生徒達にして欲しかった事、故に悩む。彼等に音声という更なる情報を与えてやるべきかを。

「(本来ならば…音声を聞くのは教師だけなのだが。この試合は皆の成長の糧になる。聞かせるべきか…それとも)」

『これを見ているその君達！俺がこれからどんな手を取るのかを想像するんだな！次俺が対戦相手になったその時、対策を何も考えてなかったらボッコボコになるだけだぞ！』

悩んでいたオールマイトの耳に引合の音が響く。そうだ、何を迷う必要がある。聞かせてやるべきだ。引合少年が完璧にヴィラン役に徹しているのだ、『ヴィラン』とは何なのか。

その恐ろしさを

その陰湿さを

その悪辣さを

現場を覗いて、画面越しに教えられるのはきつと今しかない。彼ならばこちらが求めるヴィラン役として十分に動いてくれる筈だ。

「皆…これからこの音声を流す！今戦っている彼等が何を話し、何をしているのか。それを学び次の試合に活かして欲しい！」

「はい！」

生徒達の声を聞き、オールマイトは皆に音声が聞こえるように調整する。

「(頼むぞ引合少年。ヴィランとは何なのか、皆にそれを十分に見せてやってくれ)」

オールマイトの心の声に答えるように引合の音が聞こえ始める。

そしてそれを聞いていた者達はヴィランの悪辣さ、非道さ、陰湿さを
知る事になる。

「——テステス、こちらスーパーイケメン天才怪人。対象A Bを分断
する事に成功。後は計画通りに」

『——こちら尻尾怪人。了解：一つ聞くがこの名前いるか？』
「いる」

『…了解。また連絡する』

通信機を使い引合は尾白と連絡を行う。先ほどまで彼の目の前を
砂藤と口田が逃げ回っており、左右の曲がり角で二手に分かれて逃走
を行った。つまり引合は彼等を逃してしまったのだ。だが引合は全
く慌てる気配なく悠然と歩く、彼が狙うのは左右で分かれた中で右に
逃げた口田。

「惜しかったなあ…あそこで針を食らう覚悟で攻められたら俺も焦っ
たんだが…逃げるだけではなあ…」

「さーて…口田少年は何処に逃げたかな？」

そう言いながら引合は右手のグローブから細い一本の糸を射出す
る。糸は右側の曲がり角の先へと進んでいく。

「何処に逃げようとも俺に素肌を触れられた時点で無駄無駄無駄。グ
ローブとかなら脱げばなんとかなったが、素肌はどうしようもない」
「俺と握手した時点で負けてたんだよ！ハーツハーツハーツ！『戦う
前に勝つ』良い言葉だ！」

糸を追いながら引合は悠然と歩く。糸は着々と目的の存在の下へ
と近付いていき

「見つけたあ…こちらスーパーイケメン怪人。目標Bを発見、捕獲に
移る」

『…こちら尻尾怪人。了解、現在目標Aを発見、様子を窺う。核に近付
き次第奇襲を掛ける』

「了解、目標Bを捕獲次第そちらの戦闘に参加する。もうすぐ詰みだ」
尾白と連絡を取った後、引合は目の前で針から逃げ惑う口田に狙い
を定めた。

「——あの時の握手か!？」

「やっぱりオイラが思った通りじゃねえか！引合の奴、訓練が始まる前から仕掛けてやがった！」

「んなのアリかよ！ズツケエ！」

『戦う前に勝つ』確かにその通りですわね…」

モニタールームに衝撃が走る。引合石は戦闘訓練が始まる前に行った握手、あの時点で勝負はついていないと発言した。

「引合少年！ヴィランとしては間違っていないが戦闘訓練前に攻撃を仕掛けるのは流石にどうかと思うぞ」

ドン引きするオールマイトを他所に会話は進んでいく。勿論引合の事についてだ。

「引合が握手の時点で終わらせたと言ってたがアイツの個性は一体何なんだ？」

「握手の時点で終わっていた…つまり接触する事に発動する個性。ビルの中に二人が連れ込まれたのは握手したから…そして今、二人は引合君が射出した針に追われている。引合君の個性は一体なんだ？」
ツブツ

気になるのは当然謎に包まれた引合の個性。そしてそれを一から十まで全て知る者がここにいる。引合と同じ学校出身であり、いつも共に過ごしていた轟焦凍だ。

「…石の個性が知りてえのか？」

「教えて！」

「おっ…おっ」

クラスメイトの声に驚きながらも轟は話し始める。引合の個性、引合自身が絶大なる自信と信頼を寄せるその能力を。

「石の個性は…簡単に言うなら引力と斥力を操る力だ」

「引力と斥力？つまりは引き寄せたり引き離したり出来るの？」

「石が言うには『俺はこの世の全ての物体を＋か－に分ける事が出来る。＋とは引き寄せられ＋同士―同士は引き離される』…らしい」
「つまり…触ったらそこで勝ち確定かよ！ズツケエ！チートじゃねえか！触れられたら近付く事も出来ねえ！どうしようもねえ！」

赤髪の少年がそう声をあげる。触れば引き寄せる事も引き離す事

も自由自在、彼等が持ちうる個性でも、ここまで強力な個性を持つて
いる者は少ない。

「切島少年！『ズルい』『チート』で終わらせてしまえばそこで終わり
だ！大切なのはその『チート』で『ズルい』個性をどう攻略するかだ
！」

オールマイトの鋭い指摘が赤髪の少年、切島鋭児郎に飛ぶ。ヒー
ローになるのなら『ズルい』『チート』で終わらせてはならない。
ヒーローならば圧倒的な存在に立ち向かわなくてはならない。故に
考える、どうすればその存在に勝てるのかを常に模索しなければなら
ないのだ。

「——それに引合少年の個性を打ち破る方法を理解している者もいる
みたいだぞ」

周囲をグルリと見渡したオールマイトがそのような事を言い出す。
あの圧倒的な個性を打ち破る方法、それは一体なんなのか

「…ウーンツ！誰か分かる人!？」

シユボツと音を鳴らしながらオールマイトが腕をあげる。生徒達
に拳手を求めるも誰も手をあげない。静まり返った空間の中、苛立ち
を隠さず爆豪が声をあげた。

「——チツ。考えれば馬鹿でも分かるだろうが」

「はい！爆豪少年！」

「…俺が引き寄せられてんならその対極となる部分をぶっ壊せば良
い。後、体験して分かった事だがアイツの引き寄せる力は強弱が効
く。そこを突けば一瞬だけ力から逃れられる。その一瞬を使えば問
題ねえ」

そう、引合の個性の対処方法は案外あるのだ。

引き寄せられるなら引き寄せている部分を破壊してしまえば良い。
着ている服が引き寄せられていたら脱げば良い。

もしも引き寄せられている途中だとしても、それに負けない力で逆
方向を向けば良い。

単純だがそれが対処方法として一番正しい。

「後、あの糞端役野郎…完全にナメプしてやがる」

「引合がナメプしてるようには見えねえけど…むしろ遠慮なく暴れてるだろアレ」

一通りの説明を終えた爆豪は苛立ちを隠さずモニターを睨み付ける。その先にいるのは不敵に笑う引合石。

「アイツが本気を出せばアイツらはビルの中にすら入る事が出来ねえ。辺り一帯をアイツらと同じにしちまえば反発で吹き飛び、それで終わる。完全に舐めてやがる」

爆豪の言葉を理解した者の中には顔を青ざめさせる者もいた。引合は戦闘訓練前に触る事に成功している、ならば十でも一でも良い。相手と同じ方を設定しておけば彼等はビルの中に近づく事すら出来ないのだ。

「確かに爆豪少年の言うとおりだ。ならば何故、引合少年は彼等をビルの中に入れたのか。次はそれを考えてみよう！」

そう言いながらオールマイトはモニターを見る。モニターの先には針から逃げ回る口田とそんな彼を捕獲せんと動く引合が映し出されている。

『逃げる逃げる…お前は知らないだろうがその先は行き止まり、そして今回お前が立ち向かわなくてはならないのは針だけじゃない。このスーパーイケメン天才怪人もいる！』

『お前は既にチェックメイトに嵌まつてるんだよおおおっ！』

しかしこの引合ノリノリである。

戦闘訓練 下1/2

「やべえぞ口田……このままじゃあ引合にやられちゃう！」

「気付け口田！お前の後ろだ後ろ！そんな事してる場合じゃねえ！」

「ああ天井に！完全に狙いを定めやがった！」

騒然とするモニタールーム、彼等は今ある一人の存在に夢中になっている。その存在の名前は口田甲司。個性『生き物ボイス』を持つ気弱だが心優しい少年だ。そんな少年が何故注目を浴びているのか、それは一人の存在が彼を捕獲せんと息巻いているのが原因である。

『――糸良し。針の残弾数良し。口田少年には気付かれてない……こちらスーパードライケメン天才怪人、これより対象Bの捕獲に掛かる』

『こちら尻尾怪人。対象Aは個性により拳圧で針を粉碎した後、対象Bに連絡を取ろうとする行動が何度か見られた。緊急事態だ、これより奇襲を掛ける』

『マジか。つまり砂藤は増強系かな？了解、こちらも即座に捕獲する<捕獲証明のロープ>に気を付けろ』

武器の状態確認と仲間と連絡を行った引合が口田の後方より近づいていく。音をたてず素早くひっそりと。その姿は正しく忍者、皆が寝静まった夜。人知れず人を殺す暗殺者そのものだ。

『…天井伝いに動くのって中々バレないな。こりや便利だ』

『うわっ…なにあれ。ゴキブリみたい』

動き方が天井を這いずり回るゴキブリを彷彿とさせる事以外は素晴らしい技術だと皆にそう思わせた。

「キメエ」

「爆豪君！学友をキモいとか言っては駄目だぞ！確かに彼の動きはゴキブリを彷彿とさせるがそれはそれだ！真に見るべきはその隠密性！物音一つたてず近付くあの技量は称賛に値するものだ！」

「キメエ」

飯田にすらゴキブリのようだと言われている我らが引合はそんな事全く気にせず進み続ける。

口田確保まで残り数十秒。

「凄いな引合は！まるであの黒くてカッコいい虫みたいな動きをしてるな！」

ゴキブリの如く天井を這いずる引合を見た夜嵐がそんな事を言い始め、周りにいる者がその言葉にギョツとする。熱い引合へのゴキブリコール。もしも本人がこれを知ったならば、何とも言えない顔で苦笑いするだろう。

『元来人間にはある感情が備わっている。それは危険信号を感じる為の重要不可欠なものだ…だが、この場においてそれはむしろ足枷となる』

「引合の奴、カサカサしながら何か言い始めたぞ」

『口田…分からないだろう。怖いだろう、麻酔薬がたつぷりと染み込んだ針に追われるのは。どれだけ逃げても追いかけてくるソレはお前の頭の中の殆どを占めているだろう…』

『何故この針は自分を追い続けるのだろうか。どうしよう…何とかしなきゃ』フッフッフ。お前のその背中から心の声が聞こえてくるぞ』

『恐怖して逃げ回っているお前の心は既に一杯一杯。ならば後少し驚かすだけで良い。ただそれだけで事足りる』

その言葉を最後に無言となった引合は走る口田の頭上に位置を取る。これから引合が何をするのか、それを感じ取ったオールマイトは如何ともしがたい顔をする

「(もしかして引合少年…ヴィラン役、結構楽しんでる?)」

オールマイトの心の中の疑念は果たして正解か否か、それは置いておこう。そんな中、引合は口田にチェックメイトを掛けんと動いていた。

「口田くううううん！ああそびいまあしよよう！」

「——ッ!?!」

口田が走る眼前に、奇声を発しながら天井より引合が現れたのだ。突然の事に混乱が頂点に達した口田は身体を硬直させてしまう。そしてその隙を逃す引合ではない。

「隙あり！死ねえい！」

その言葉と共に、引合は口田の身体を拘束する。口田の身体の動きを封じた引合は優しく怖がらせないように言葉が続けていく。

「安心しろ。一瞬チクツとするだけだ」

その言葉と同時に口田の手に針が刺さる。刺された痛みで目を大きくした口田だったが、抵抗する間もなく意識を闇へと落とす。

「よし：人質確保。テステスこちらスーパーイケメン天才怪人、対象Bの捕獲に成功、プランBに取り掛かる」

『了解、現在対象Aと交戦中。対象Aが何かを接種した瞬間、パワーが桁違いに上昇した』

「了解。無理はするなよ」

尾白と連絡を取り終えた引合は、即座に口田の通信機とヒーロー役だけに渡される捕獲証明のロープを奪う。

「これで王手」

そう言いながら口田の通信機を動かす引合。その通信機の繋がっている先は当然砂藤力道である。引合は繋がった瞬間、捲し立てるように言葉を発する。

「砂藤くん！三階中央！」

「信じて！」

最後の言葉を強く強調した引合は即座に連絡を切り、捕獲した口田を抱え走り出す。

『こちら尻尾怪人。対象Aの移動を確認、やったな』

「こちらスーパーイケメン天才怪人。当たり前だろ、俺を誰だと思っ
ていやがる。今日の俺は無敵だ」

ヴィランは何故ヴィランなのか。それは簡単、ヒーローでは行えない所業を平然と行う事が出来るからヴィランなのだ。

がんじがらめのルールに締め付けられたヒーローと、何一つ制約のないヴィラン。有利なのは常にヴィラン。

「えええええええ!?!」

「んなのありかよ！人質取って相手を騙すとか最悪じゃねえか！」

「ヒーローの所業に非ず：ツ！」

モニタールームで沸き起こる絶叫。皆が口々に言うのは引合石の

先程の行動についてだ。口田を捕獲し彼の持つ通信機を使い砂藤に連絡をする。これをヒーローがやったら非難まったなしだ。だが、引合はそれを平然と行う。それは何故か？

「(そうだ！引合少年はヒーローなんかじゃない！今の彼はヴィラン。こんなのヴィランなら当たり前にやってくる！引合少年が本物のヴィランだったなら口田少年は殺されているだろう！)」

「(それをやって欲しかった…ッ！それを皆に見せて欲しかった！ありがとう引合少年！)」

「…確かに石はヒーロー役じゃねえな」

「ええ。引合さんはヴィラン役です。オールマイト先生も戦闘訓練を始める前にヒーロー役もヴィラン役もお互いに成りきれと仰られていました」

「——ヴィランなら何でもありって事か。おもしろえ」

オールマイトが伝えたかった事を理解した者達が口々にそう言い始める。一人オールマイトの伝えたかった事を曲解して受け取っていそうな者もいるがそれは敢えてスルーしておこう。

「さあ！この戦いも大詰めに入った所で先程の質問をもう一回しよう！」

『何故引合少年はビルの中に彼等を入れたのか！』ウーツン…分かる人!？」

「…戦闘訓練だから？」

誰ともなくそんな声があがる。だがそれは望む回答ではない、故にオールマイトは否と答える。

「ウーツン！確かにそれもある！だ、け、ど！引合少年が今、ヴィラン役だという事を良く考えて欲しい！」

「引合少年はどんなヴィランを演じている？それを考えるんだ！」

『どんなヴィランを演じているか』その言葉に彼等はあれやこれやと話始める。

「引合の奴、イケメンだの天才とか言ってたな。『自分に自信』があるんじゃないの？」

「核に触らせたくないならかつちゃんの言った通りビルに入らせな

かつたら良いだけの話だ：二対一の中であの態度。つまり『絶対に勝てる』って自信があったんだ」

『チェックメイト』だの『王手』だのまるでボード『ゲーム』みたいな事を言ってたな」

「というか引合の個性なら二人とも一瞬で捕らえられるよな。なんで針を出して追い回すとかいう事をしたんだ？ 『意味ないだろ』」

「なんつーか：今思えば、猫が鼠を追い回すような：簡単に言うて『遊んでる』みたいだったよな」

皆が引合が演じているヴィラン像が何なのか、それを考えていると一人の少女が手をあげた

「引合ちゃんが『ヒーロー』との戦いが遊びにしか思えないくらい自信がある』ヴィラン役を演じていたからかしら？」

「だから引合ちゃんは遊ぶような戦い方をしていた。自分に絶対の自信があるヴィランならビルの中にヒーローが入ってきてても痛くも痒くもないと思う筈」

「むしろ『暇潰しにヒーローで遊ぼう』と考えていても可笑しくはないわ」

「だからヒーロー役の二人をビルの中に招き入れ、追い回すように戦っていた：違うかしら？」

少女の回答を聞いたオールマイトは大きく両手を広げ高らかに宣言をする。

「そう！引合少年は今、『自分の個性に絶大な自信と信頼を寄せる快樂的な犯罪を犯すヴィラン！』つまりこれをヒーロー基礎学にあるヴィランの犯人像に当て嵌めると」

「大人だが子供のようない行動をとる『大人こども型』ヴィランだ！自分の欲求に抑えきれずこのような行動を取るヴィランは多い！」

「だが、引合少年の場合。そこに人質を取り罍を張るといふ行動を行っている。快樂的な犯罪を行う『大人こども型』ヴィランにはあまり見られない行動とも言える」

「これは何故か？分かる人!？」

「はい。オールマイト先生、それは引合さんが今演じている『大人こど

も型』ヴィラン役である前に引合石という人間だからではないので
しょうか？」

「正解だ！この戦い方は引合少年が持つ本質が大きく出ている。何で
もありのヴィラン役となり本来ならばヒーローとして行えないよう
な行動を取ることが出来る今、ぶっちゃけノリノリで演じているんだ
ろね！」

「自分を天才イケメンと言い。遊んでいるように見えて、ちゃんと勝
ち筋を残す戦い方。彼は本来とても思慮深い人間なのだろうと思う
よ」

「個性上。常に思考を止める事なく、相手を自分の有利な戦い方に文
字通り引っ張らなくてはならない引合少年らしいと言えらしいね」
その言葉に誰かがボソリと呟く。

「…つまりヴィラン役を演じる演じない関係なく、この戦い方を普通
に思い付いていたって事じゃね？」

「そう言えば…石は良く大和に向かって『俺はお前が嫌がる事をする
のが好きだ』って言ったな」

「ヒーロー志望とは思えない思考回路だな。爆豪とどっこいどっこい
なんじゃねえの？」

「——つぎけんな！俺とあの糞端役野郎を比べんじゃねえ！」

騒がしくなるモニタールーム。オールマイトは周りを見渡すと手
を叩き注目を集める。

「静かに！もうすぐこの戦闘訓練に決着がつく。ヒーローチームと
ヴィランチーム、彼等が何を話し、どんな行動をとるのか。それを見
聞きして自分の時にどうするのか、それを考えて欲しい！」

「はいー！」

戦闘訓練 下2/2

固唾を飲んでモニターに映し出されている映像を見守る少年少女とオールマイト。そこに映し出されているのは砂藤力道が全力で走る姿

『今行くぞ口田——ッ!』

彼の頭に残っているのは先程、通信機から聞こえてきた「信じて」の言葉のみ。戦況は劣勢。そんな中、まるで逆転の糸口があると言わんばかりに自信に満ちた声。これを信じずとして誰がヒーローか

仲間を信じ、共に戦ってこそヒーロー。

故に砂藤はヴィランの悪辣な罠に掛かってしまった。砂藤は気付かない、あの声が口田の声とは似ていなかった事に。戦闘していた尾白が逃げる砂藤を追いかけてこなかった事に。

何故、口田と連絡が取れないのか。彼を信じてしまっているから疑うことすらしない。

目前に勝利という名の人参をぶら下げられた馬の如く駆け抜けるしかないのだ。

『やはり俺は天才! ハーツハツハツハツハツ! ハーツハツハツハツハツ!』

ヴィランの高笑いが三階中央に鳴り響く。そんな彼の近くには守り抜かなくてはならない核と、意識を失った口田甲司。

戦闘訓練、決着の時は近い。

「——ここに核があつたのか! 周りに誰もいない! 今がチャンスだ!」

口田の言う通り三階中央に辿り着いた砂藤の目に飛び込んできたのは中央に設置されている核、そして周りには誰もいない。迂闊、だが今はそれに感謝するしかない。

「おめでどう砂藤少年! どうやらここまで辿り着けたようだな!」

「——ッ!?!」

核へと向かおうとした瞬間、聞こえてきたのは引合の声。一体何処から聞こえてきたのか、思わず動きを止め回りを見渡す。

「上を見る」

その言葉に砂藤は上を向く。そこには悠然と天井を歩き回る引合の姿があった。そして引合の手元には

「口田!？」

「騙して悪いが仕事なんぞでな。ここで終わりだ」

その瞬間砂藤は己の失態を悟る。あの時の通信機からの連絡は引合からのものだったのだと。だが、目の前には核がある。核に触りさえすれば勝ちも確定、ならばやる事は一つだ。

砂藤は腰に入れておいた袋の中から、白い粉末が入った袋を取り出す。そしてその粉末を一気に飲み干した。

シュガードープ、それが砂藤力道の個性。砂糖10gに付き5倍のパワーを得る増強系の個性だ。先程の白い粉末は彼のエネルギーとなる砂糖。

デメリットとして制限時間である三分を超えたら脳の思考能力が低下するが、短期決戦ならば問題ない。

「…白い粉末。砂糖を接種する事で力を増幅させる個性」

「尻尾怪人と戦ってた筈なのに自傷していた様子はない。現時点では自傷してしまう緑谷の上位互換か」

「だが。無意味だ」

引合がパチンツと指を鳴らす。その瞬間、核を除いた部屋にあった物が砂藤へと襲い掛かったのだ。

「——オオオオオッ!」

常人が食らえばタダでは済まない一撃。緑谷程のパワーとは言わないが、それでも人間が振るうとは思えない程の一撃が連続で放たれる。拳圧だけで突風が唸り、その圧倒的パワーから放たれる拳は全てを粉碎する。

その力を持つて砂藤は前へ前へと進んで行く。目指すは核、他の物に目もくれずその圧倒的パワーを持つて進み続ける。その姿は圧倒的巨体で突き進む重機関車を彷彿とさせ、その姿を見る者に希望を与えた。これならば勝てる、引合に勝つ事が出来ると。

「行けえ!砂藤!そのまま突き進め!核に触るんだあ!」

砂藤の姿を見てモニタールームは大いに盛り上がる。ここに来ての文字通りの大逆転、圧倒的な力を見せつける砂藤を応援する者達。「なら…これも壊す事が出来るか?」

「——ッ!口田!」

重機関車の如く突き刺す砂藤に放たれたのは意識を失った口田。眼前に現れた口田を攻撃する事は出来ない、ぶつかればダメージが入るのは自明の理、故に砂藤は口田を庇わなくてはならない。ヒーローが目の前の仲間を見捨てる事は出来ない。故に砂藤が行った行動は当然

「そうだ!お前は口田を庇うしかないよなあ!足を止めてでも抱き抱えるしかないよなあ!」

「引合は啜う。心底愉快そうに、この光景がまるで予想通りだと言わんばかりに。」

「さて問題だ。ヒーロー砂藤は意識を失った仲間を庇いながら俺相手にどこまで戦えるでしょうか!」

その言葉と共に飛来する物体が砂藤:正確には彼が庇う口田へと襲い掛かる。仲間を庇わなくてはならない砂藤は防戦一方で動く事が出来ない。

「そして…更なるゲストを紹介しよう!このスーパー天才イケメン怪人が誇る最強の部下を!」

「——シャアア!」

防戦一方の砂藤へと更なる敵が襲い掛かる。それは先程まで砂藤が戦っていた存在、尾白猿夫。その人であった。

「行け!尻尾怪人!狙いはそこでスヤスヤ眠っている口田少年だ!」

「ごめん…ほんとごめん」

引合の言葉で謝りながら口田へと襲い掛かる尾白。更なる敵の乱入に戦況はヴィランが有利な状況へと傾いてしまった。先程までの砂藤が作り出していた戦況は引合のたった一つの手で崩壊し、最早砂藤は口田を庇うことしか出来なくなった。

尾白の個性である大きな尻尾を含めて放たれる連撃は確実に砂藤の肉体にダメージを与え、尾白を振り払うように腕を降ればその隙を

逃さないと言わんばかりに引合から部屋にある物体が口田へと放たれる。

これを見ていた者達は思う。なんだこれは、一体なんなのだ。これがヴィランの戦い方、正しく鬼畜外道。これが人間のやる事なのかと。

「先生！もう試合終了だ！もう見てらんねえよ！砂藤はもう動けない！」

「…」

「先生！」

もう試合終了、これ以上は無意味だという声がモニタールームに響き渡る。だがオールマイトは何も言わない、ただモニターを眺めているだけだ。

「（いや：砂藤少年の目は諦めていない。彼は今耐えているのだ。連撃が乱れる、その瞬間を）」

オールマイトが思う通り、砂藤の目は何一つ諦めていない。逆転の手があると言うならば止める理由はない。

「（見せてみる砂藤少年：plus Ultra！逆境でこそヒーローは輝くツ！）」

先へ、さらに向こうへ。砂藤力道はその目に闘志を輝かせる。ヴィランは何でもありの鬼畜外道、そしてヒーローは様々な制約に縛られた存在。

だが、最後に勝つのはヴィランではない。どんな苦境であろうともヒーローは最後に勝つ。

『——ツアアアアツ！』

轟音と共にビルが揺れる。砂藤が床を粉碎する勢いで踏み込み、核に向かって突撃を仕掛けたのだ。連撃を仕掛けている尾白を跳ね除け高速で突き進む。だが、これで口田を庇う事は出来ない。しかし、このままではじり貧になるのは目に見えている。だからこそ突撃、こうなれば尾白は口田に攻撃を仕掛ける事が出来なくなる。

『——引合イイ！』

『——つれで終わりだアアアツ！』

尾白が引合に向かつて叫ぶ。だが、既に砂藤はその爆発的な踏み込みから生み出された力のままに核に向かつて飛び掛かる。

「行け！砂藤！そのまま行けえええッ！」

誰が叫んだかは分からない。だが……この場にいる殆どが同じ事を思っていた。これを止める事は出来ない、砂藤達はあの引合に勝つたのだ。鬼畜外道な行為を平然と行うヴィランにヒーローが勝つたのだと。

『――届けエエエッ！』

「……ナメプ野郎が」

砂藤の絶叫を聞きながら爆豪が心底不快そうに呟く。それと同時に砂藤の手が核にドンドンと近付き

『――あ？』

核に触れる、その寸前で砂藤の動きが突然止まった。呆然としている砂藤は動く事が出来ない、何故自分の身体は核の目の前で止まったのか。一体何故、それだけで思考が埋まり他の事を考える事が出来ない。

『大切な核を放置する訳ないだろ、当然保険は掛けてある。だからあれだけ好き放題出来たんだ』

静まりかえった中、引合の声だけが大きく響く。そして片手を砂藤に向ける。

『おやすみ』

針が射出される。針は正確に砂藤の手に突き刺さり意識を刈り取る。

『……完全つしよーっり！ハーツハツハツハツハツ！ハーツハツハツハツハツ！』

『ごめん……ほんつとにごめん。後でちゃんと謝るから』

高笑いする引合と対照に意識のない二人に謝る尾白。モニタールームに響き渡る声が最後に戦闘訓練は終了した。

ヴィランチーム。勝利

講評会 引合くん知り合いに会う

「さあ！第一回戦が終わったけど。皆、見た感想は!？」

戦闘訓練が終わり、講評会が始まる。オールマイトが戦闘訓練を見た感想を聞くと皆が思い思いに話始める。

「引合の奴がヴィランだった。というかヒーローよりヴィランの方が似合いそう」

「人を人と思わない悪辣な手法。まさしく鬼畜外道と言わざるを得ない」

「どうみてもヴィランだったな！」

「ナメプ野郎死ね」

「予想外の冷たい言葉に死にそう」

「なら死ね」

クラスメイト達の心ない言葉は引合の心を深く抉る。彼からすれば先生が言った通りにヴィラン役をしただけ。むしろ大活躍したのだから褒め称えられても良い筈。と心の底で思い、天を仰ぎながら白目を剥いていた。

「ま、それはともかく！確かに引合少年の戦い方は皆の想像を凌駕するものだっただろう！相手を騙す。人質を取る。弱った者に攻撃を仕掛ける。皆も引合少年がヴィランにしか見えなかったと思う。ぶつちやけ私もそう思った！」

「だが、ヴィランとはそういうものだ！狡猾で残忍。人を人と思わぬ外道！君達が将来戦わなければならない存在とは引合少年が演じた以上に悪質で外道な存在だ！」

「引合より悪質で外道とか怖すぎるだろ」

一人が呟いた言葉にクラスメイト達が同意する。訓練中の引合はまさしく鬼畜外道、それ以上と言われたら本物のヴィランとは一体どれほどの事を行ってくるのかと。

「ヴィランは姑息で悪辣な行為を平然と行ってくる！様々な制約に囚われているヒーローと違って彼等には守るべきルールは存在して

いない！ 故に彼等は何でもしてくる！」

「この戦闘訓練は、ヴィラン側とヒーロー側が二手に分かれて戦うだけではない！ ヴィラン役はヴィランの思考をトレースし、どんな悪辣な手を使ってでも目的を果たし。ヒーロー役はヒーロー故に存在する様々な制約に囚われながらも。ヴィランの悪辣な手を予測し、それを乗り越え勝利する！」

「砂藤少年の最後の突撃は正にそれだった！あの時の君は正しくヒーローそのものだったぞ！」

最後の攻防。そこで見せた砂藤の一撃を褒め称え、オールマイトは言葉を続けていく。

「圧倒的にヒーロー側が不利なルールだが、それを乗り越えてこそヒーローってものさ！」

とオールマイトは締めくくり、さっきまで白目を剥いていた引合をクラスメイト達の目の前、つまりは自分の隣に立たせる。

「今回のMVPは引合少年だ！ 初回でありながらもヴィランの思考をトレースし、試合の流れを完全に支配していた！ 戦闘訓練が始まる前に攻撃を仕掛けたのはアレだったが、ヴィランとして考えるならば正しい行動だ！ 今回は初回なので見逃すが、次やったら注意するのでそのつもりで頼むぞ！」

「はい！」

生徒達の返事を聞き、オールマイトは先程のヴィラン役とヒーロー役の2チームを前に呼び出す。

「さて、試合では敵だったが。本来は大切なクラスメイト。お互いの功績を称え合い握手でこの試合を締めよう！」

「四人とも！ 素晴らしい試合だったぞ！」

ヒーロー側とヴィラン側が握手を交わす。これにて講評会は終了し、次の試合へと移る。

「それじゃあ次は緑谷少年&麗日少女がヒーローチームで爆豪少年と飯田少年がヴィランチームだ！ 先程の試合を見て学んだ事をしっかりと活かして戦ってくれ！」

最高の初戦だったとオールマイトは感じた。あの試合から学べた

事は多い筈。先程はヴィランがヒーローを圧倒したが、次からは今回の試合を見た生徒達が互いに切磋琢磨し、素晴らしい試合を見せてくれると。

だが、現実はそう上手くはいかず

「——ストップだ爆豪少年！殺す気か!？」

『当たらなきゃ死なねえよ!』

第2試合では私情を抑えきれず仲間を無視し独断行動を行いヒーロー側に戦闘を仕掛けた爆豪がビルの一部を崩壊させ、その後の戦闘で緑谷が大怪我を負う等というアクシデントが起こったり。

『相手は籠城戦をしているつもりだろうが、俺には関係ない』

『よろしくおねがいしまあつす!』

轟や夜嵐等の他の生徒と比べて卓越した力を持つ生徒による完全なるワンサイドゲーム。正確には瞬殺が発生し、他の生徒の成績をつける事すら出来なかったりとオールマイトが想定していたような流れにはならず。

教師って……難しいッ!

初めて教鞭を振るうオールマイトにとって、教育の難しさを骨身に味わう1日となった。

今日の授業を終えた俺は、知り合いに会う為に集合場所であるカフェへと向かっている。久しぶりにその知り合いに会うという事もあり、俺のテンションは上がっていた。

「こつちだよ。こつち」

「はやいっすね『せんせー』」

目的のカフェに付くと既に到着していたのか、テラス席から俺を呼ぶ声が聞こえてくる。どうやら先にお茶を飲みながら待っていたようで机の上に紅茶の入ったティーカップが置かれている。流石『せんせー』その長い黒髪と笑顔とおっぱいが素敵です。やはり女性は素晴らしい、この世の宝だ。

「雄英高校に合格したんだね。おめでとう」

「そりゃ余裕の合格ですよ!」

「それはそうだろうとも、君の才能は他の存在の追隨を許さないものだ。他でもないこの僕が認める。当然首席だろうね？」

「いやーそれが……ちよつと筆記で点数落としてしまいました」

苦笑いしながら言い訳をする俺。流石に筆記が壊滅的で雄英に受かるかどうかすらギリギリだったとか、口が裂けても言えないのでそこから辺は濁すしかない。

「全く…模試でA判定を取ったとあれほど自慢していた癖に。本番で失敗したら何の意味もないだろう」

「うつつ。すみません」

返す言葉もないとは正にこの事だろう。こればかりは『せんせー』のお小言を素直に受け入れるしかない。

「そう言えば雄英にはあのオールマイトがいるらしいね。顔は見たかい?」

「見たどころかオールマイトから授業を受けましたよ! 雄英ではオールマイトがヒーロー基礎学を担当しているみたいで今日オールマイトから授業を受けてサインも貰ったんですよ! サイン見ます!?!」

「いや、それは別に良い。それでなんだが……オールマイトから何か話をして貰ったかい?」

「話? 別にないっすけど」

いきなりの『せんせー』の言葉に困惑する。一体オールマイトから何を話して貰うというのだ。

「そうか、それならどうでも良い。話は変わるが個性の練習はちゃんとしているな?」

「そりゃ発現してから毎日バリバリやってますよ。かれこれ十何年間皆勤ですよ皆勤」

「それは上々。個性は使うことにより磨かれる。君が使えば使うほど個性は強くなり君の力となってくれる筈だ」

これは『せんせー』に会うと必ず言われる事だ。個性は筋肉と同じで、使えば使うほど磨き抜かれ強くなる。確か、限界突破だったか? 「そうだ、僕達の持つこの個性に限界はない。使えば使うほど強くな

る。だが、強くなるという事は、逆に使わなければ弱くもなるという事だ」

「そう言い、先生は机に置いてあったティーカップを宙に浮かべる。バードマンに良く怒られる俺の言えた義理じゃないけど個性の無断使用は駄目らしいですよ。」

「紅茶は好きかい？」

「そう言っただけ俺の手元にティーカップを近づけてくる。すまん『せんせー』俺は麦茶派だ。俺の中に眠る日本人の血が砂糖が入ったお茶を受け付けていないんだ。」

「という訳で反発を使い『せんせー』の手元にティーカップを寄せる。すると『せんせー』は嬉しそうに笑い語りだす。」

「うん。言葉に偽りなし、繊細な出力の調整も出来ている。ちゃんと個性を使っているようだね」

「失礼な。そんな事で嘘はつきませんよ」

「僕達の個性は出力の調整を間違えると大変な事になるからね。君がサボっていたとしたらカップの中の紅茶は飛び散り、僕達に降りかかっていただろう」

「そう『せんせー』は俺と同じ個性の持ち主なのだ。自分と同じ個性を持つ人と出会うなんて珍しい事もあるものだ。」

「体育祭は僕が直々に見に行つてあげるから頑張るんだよ。まあ、君なら一位になって当然だけど」

「まあ俺は天才でイケメンですから余裕つすね！」

「どうやら体育祭は『せんせー』が見に来るようだ。女性に無様は見せられない、絶対に優勝せねば。」

「……そろそろ時間だ。次は体育祭で会おう」

「後、分かっていると思うが」

「『せんせー』と会っている事は秘密ですよね？」

「そうだ。それじゃあまた会おう」

HR 学級委員長 上

「昨日の戦闘訓練おつかれ。Vと成績は見せて貰った。爆豪、お前も子どもみたいな事をするなよ」

「……分かつてる」

朝のHRは相澤先生のお小言から始まった。最初に注意したのは緑谷に喧嘩売ってなんか落ち込んでた爆豪。コイツの性格からして『うるせえ！ 分かつてんだよ殺すぞ！』くらい言いそうだが、何やら返事は神妙な声色だった。腹でも痛いのかコイツ？

「緑谷、お前はまた腕をぶっ壊して解決か。いつまでも個性の制御『出来ない』じゃ通さねえぞ」

「うっ……」

「俺は同じ事を言うのが嫌いだ。それさえクリア出来ればやれることは多い。焦れよ緑谷」

「はいー」

昨日の戦闘訓練でビルと腕をぶっ壊した緑谷が注意を受ける。昨日、生身で食らったらミンチより酷くなりそうな一撃を放った緑谷は、腕をへし折り無事保健室に運ばれていた。昔から個性を使い続けていたら今は使いこなせているだろうに、勿体無い。

「ついでに引合」

「……はい？」

何故か俺まで呼ばれる。何かやらかした覚えはないが一体何を言われるのだろうか？

「相手を煽りすぎだ。やるなどは言わん。だが、そこそこにしろ。ヒーロー志望じゃなくてヴィラン志望にでも変更するつもりか？」

「後。お前の持論的には正しいんだろうが、戦闘が始まる前に攻撃を仕掛けるのはやめろ」

……色々言いたい事はあるが恐らく無駄だと思われるので一言だけ言いたい事を言う。

「言葉攻めで相手を顔真つ赤にさせるのはセーフですか？」

「セーフだ。相手の思考を乱すのに言葉攻めほど合理的なものはない」

い」

それさえセーフなら問題ない。これもアウトだったら無言クール系に路線変更する所だった。

「さてHRの本題だが……急で悪いが君達にはやって貰いたい事がある」

その言葉にクラス中に緊張が走る。相澤先生はいきなり入学式参加させず個性把握テストとか始めた前科がある。正直『えー。これから君達には殺し合いをしてもらいます』とか言い始めても何一つ違和感がない。

とりあえず……前にいる峰田を盾にするか。

「……後ろから悪寒がするんだけど気のせいだよな？」

勘の良い奴め。と心の中で舌打ちしていると相澤先生が言葉を続けた。

「学級委員長を決めて貰う」

「くつつそ学校っぽいキターツ！」

『学級委員長を決めて貰う』という言葉に歓声が響き渡り、クラスメイ卜達が口々に立候補し始める。

「委員長！俺それやりたいです！」

「ウチもやりたいっス」

「リーダー！やるやる！」

学級委員長という事は先生から渡される雑務の全てをやらなければならぬという事。つまりは雑用係と同義であり、中学校の頃。抑えられないテンションのままに委員長になった俺は、その後委員長の面倒くささに後悔した事がある。委員長は遠慮したい。俺的には自分でやりはじめた事なら出来るが、他人に押し付けられた事はやりたくはないのだ。

「僕の為にあるようなもの☆」

「俺にやらせろ！」

「学級委員長！皆のリーダーって事だな！俺も立候補するぞ！」

次々にあがる立候補に驚きながら辺りを見渡す。凡そ学級委員長

に向いていないと思われる奴らも元気良く手をあげており、流石は上昇志向の高いヒーロー科だと感心する。

「僕も…」

「私も立候補致しますわ」

「私もやりたいーい！」

「オイラのマニフェストは女子全員膝上30cm！」

手があがるだけで何一つ進まない現状。

後、峰田は後で泣いたり笑ったり出来なくする。そんな中、相澤先生の顔を見ると『何でも良いからさっさと決めろ』と言わんばかりの表情をしていた。

つまり……ここは俺の出演。

「先生！俺が司会進行をしても良いですか!? とうかします！」

「……何でも良いからさっさと決めてくれ」

先生のお墨付きを貰い、意気揚々と教壇に立つ。俺が前に立つても元気に手をあげるクラスメイトを一瞥し、教壇に拳を振り下ろす。ダアン！ と大きな音を響かせ、その音で騒いでいたクラスメイト達は沈黙する。

突然の俺の行動に驚いて動かなくなった奴らを見渡し、声高らかに宣言する。

「お前らア！学級委員長になりたいかアア!?学級委員長になってこのクラスを支配したいかア!」

突然の事についてこれなくなるクラスメイト達。当然だ、いきなり教壇をぶつ叩いてこんな事言われたらドン引きするだろう。というか俺ならする。

だが、ドン引きしているという事は俺の声が届いているという事。こちらら中学校時代に一つの団体を率いた男。この程度の視線、集められない道理はない。

「だったら馬鹿みたいに手をあげるだけじゃ誰もついてこねえ！ 本当にやりたいなら俺達に自分の思いをぶつけてみせろお！」

「脅迫！ 恫喝！ 賄賂！ 何でもありだ！ 司会進行である俺が許

す！ 学級委員長という栄光の為に己の全てを使い、掴め！」

「いや……それは許すなよ」

先生の言葉は華麗にスルーし言葉を続けていく。ここから良い所なんだから全部終わってからにしてください。

「学級委員長はこのクラスを率いる者！ つまりはこのクラスの頂点！ どいつもこいつも簡単に手をあげやがって！ その覚悟がお前らにあるのか！」

「いや……覚悟とかは」

「シヤアラップ！ 覚悟がないなら黙って手を降ろせ！ この場では俺がルールだ！ 王である学級委員長は、皆を引っ張っていく責任がある！ 王になる気概がない奴は引っ込んでな！ ウジ虫野郎が！」

基本、ヒーロー科に入ってくる奴は上昇志向が高い奴しかいない。そんな奴らにこうやって焚き付けてやれば

「んだと！ 誰がウジ虫野郎だ！ あるに決まってるだろうが！ お前ら全員導き殺したるわ！」

「オイラこそ学級委員長として皆を導ける存在だ！」

「常に下学上達！ 当然その覚悟はあるに決まっています！」

「お前ら三人だけかあ!? 他の奴らはただやりたかったから、手をあげただけか!?!」

こうやって三人が俺の声に反論し宣言する。ぶっちゃけ一人でも釣れたら御の字だったが、三人も釣れた。ここからは簡単だ。

「ノブレスオブリージュ☆覚悟なら当然あるよ☆」

誰かが釣れたら他の奴らも釣れていく。大声を張り上げ、雰囲気的に盛り上がないと空気が読めていないみたいな空間を作ればあらゆる思議。

「お前らア！ 学級委員長がやりたいかあああッ!?!」

「おおおおおおおッ！」

「もつと腹から声出せえ！ 他の奴らを蹴落としてでもやりたいかあああッ!?!」

「おおおおおおおッ!!」

「だつたら争え！ 皆の共感を得る事でも恐怖で支配するでも何でも

良い！これから始まるステージで勝ち残った奴が頂点だ！」

そう言いながら黒板に殴り書きをしていく、空気には鮮度がある。開幕の宣言さえしてしまえばこっちのもの。後は流れだ。

『第1回！ 学級委員長争奪！ 選挙大会』かいつまくだあああッ
！」

「うおおおおおおおっ！」

教室が皆の声でビリビリ震えるのを感じながら大仰に頷く。こうも簡単に扇動出来る自分の才能が恐ろしい。やはり俺は天才だ。

「……ここまで出来るならお前が学級委員長したほうが合理的だろ」
嫌ですよめんどくさい。

HR 学級委員長 中

「——故に俺は学級委員長として皆を先導していきたいです！」

「はい！ 委員長みたいな見た目もさながら、内容も糞真面目で大変結構！ 飯田天哉君のスピーチでした！」

第1回学級委員長争奪選挙大会の一番手は飯田だった。飯田はその性格に相応しいスピーチを行い、引合はそれに対して感想を語る。

「次は全身ピンクで超キュート！性格は正に天真爛漫！このクラスは君のような存在を待っていた！芦戸三奈の発表だ！」

「はーいー！」

引合の声に従い、芦戸三奈が教壇へと足を進めた。意気揚々と返事を返し自信満々に教壇に向かう姿には、彼女の明るい人間性を感じられるだろう。そんな中、1—A担任、相澤消太は現状を眺め一人思考に耽る。そんな彼の頭の中に存在しているのは、この学級委員長を決めるにあたり即座に司会進行の名乗りをあげた少年。引合石だ。

（中学校の方からプロフィールは送られていたが……ここまですな）

1—Aの担任である彼は、当然自分が持つクラスの生徒達のプロフィールの全てを確認している。中学校での生活態度、成績、身体能力、成績。生徒達のプロフィールを確認する際、何人か突出した生徒は存在していたが。一人、別の意味で突出している者がいた。

三年にあがるまで成績は平凡以下だった筈が、ある時期を切欠に高得点を常に叩き出し。生活態度は下の下、彼が三年の時に担当した教師は

『非常に私の強い生徒であり、その私の強さからついていく存在多数。男子生徒のほぼ全てを纏め上げ一つの団体を作り上げたカリスマ性は筆舌に尽くしがたい』

『彼が一年生の時に作り上げた団体は三年間崩壊する事なく運営された事から考えるに人を纏めあげるだけではなく、管理運営能力にも秀でていると思われる』

『だが、基本的に他者では思いもつかない行動を取るのだからそこには注意が必要である』

と、引合石の事を評価している。初めてこれを見た相澤は、多少誇張が混じっているとしてみても人を纏めるのが得意な生徒なのだろうと結論をつけていた。

しかし蓋を開けばどうだ？

個性把握テストでは推薦組や主席の爆豪に負けず劣らずの好成績を叩き出し、ボール投げの一件がなければトップの成績に違いなかった。

そしてこの学級委員長を決めるにあたってのオリエンテーション。『第一回！ 学級委員長争奪！ 選挙大会』である。

挙手だけで全く進んでいなかった現状を確認し即座に司会進行を申し出て。やり方はどうであれ、即座に全員を纏め上げた。ヒーロー科に入る生徒とは人を集め、纏め上げる事を得意とする生徒が多い。そんな存在が集まると、当然自分こそが学級委員長になると考え、己の意見を皆に押し付けようとするのが普通だ。

だが。引合はその上昇志向の高さを逆手に取り皆をまとめ、オリエンテーションには必要不可欠なルールを即座に作り上げた。

あまりに人をまとめあげるのが慣れすぎている。相澤の中でのプロフィールに書かれてあった事が最早誇張ではなくなっていた。

「――です！」

「はい！ 取り敢えず可愛い！ それしかありません！ 以上芦戸三奈のスピーチでした！」

「次はクールビューティー！ クラス一イカしてるパンク少女！ 耳郎響香だ！」

「……恥ずかしいから。それ、やめてくんない？」

呼ばれ方に不満があつたのか、嫌そうに言いながら耳郎は周りに見えないように引合に小さな紙を見せる。それを見た引合は嬉しそうに頷き発表を促した。

（……次の発表者の時間を削って自分の発表時間を増やして欲しいか、対価は今度ジュースでも奢る……引合の奴はそれを認めたか）

そしてその紙の内容を相澤は確認していた。内容は簡単に言えば賄賂そのもの。本来相澤はこれを咎める必要があるが、このオリエンテーションにおいてそれを咎める事はしない。

規則その1

司会進行に呼ばれた者は教壇に立ち、司会進行が終了の合図を行うまでスピーチを行う。内容は全て自由。教壇から出ずクラスメイトに危害を加えなければ何をしても良い。

※相澤先生がやりすぎと判断した場合は上に書いていた通りにはならない。やり過ぎに注意すべし

教壇に入った時点でやり過ぎなければ何をしても問題はないところに明記しているのだ。

(司会進行に賄賂を送っても自由。賄賂など何も行わず飯田のように自分の意見を誠実に伝えるでも良い)

始まる前に『どんな手を使っても良い!』と引合は語った。故に、これは引合にとって予想範囲内なのだろう。

(耳朗はそれを選んだか……まあ誠実だけでは限界が来る事もある。賢いといえば賢い手だ)

学級委員長をN.O. 1ヒーローに例えるならば、発表者はどのよう
にN.O. 1ヒーローになるのか。多少汚い手を使ってでもなるのか、
それとも汚い手を使わずになるのか、それを見る事が出来る。

飯田は全てに気付きながらも敢えて己の意見を皆に伝えるだけ
だった。

芦戸はルールの意味に気付かずただ発表をしただけだった。

耳郎は理解し、自分が勝つ為に次の発表者。つまりは他者を蹴落と
した。

(……即席にしては面白いルールを考えやがる)

ただ投票するならばここまで違いが出なかつただろう。皆が自分
に投票するのが目に見えている。だが、このルールならばそんな事が
出来ない。

規則その2

全員のスピーチを聞いた後、白紙に自分の名前、学級委員長に推薦

したい者の名前を書いて提出する。

※同じ紙に同じ名前を二つ書いていた場合、その紙は無効となる
(抜け道はあるにはあるが……このルールならば自分を投票する事は出来ない。故にコイツらは皆に自分をアピールするしかない、その為にどうするか。見物だな)

どいつもこいつも自分が学級委員長に相応しいと考えてる奴ばかりだ。そんな奴らに自分を認めさせるのはスピーチの場しかない。

「――以上っス」

「うーん！ 非常に素晴らしいスピーチありがとう！ さて次は……上鳴電気でいっつか。どうぞ」

「おうっ……って何か適当だな!？」

「おっ口答えしたな？ はい制限時間半分」

「ウエツ?! 冗談だよな?」

「俺がルールだ。黙って従え」

「ウエイ……」

上鳴は半分の時間の中で発表し、スゴスゴと席へと戻っていく。規則その1に『司会進行が終了の合図を行うまで』と明記しているのだ。故に文句を言おうが『俺がルールだ』の一言で玉砕される。

(……このルールに気付かない奴は少し頭が弱いな)

と。ルールに気付いていないであろう芦戸と上鳴の評価をつけ、相澤は思考を続ける。

(雄英は自由な校風が売りだが……ここまで自由にやる生徒は初めてだな)

ただの遊びにしかないルールならば強制終了するつもりだったが、ここまで考えられたルールならば止める必要がない。

(雄英はどのような場所であれ君達に試練を与える。例えそれがこんな事でもな)

例えば始まりが引合の戯れであろうとも、使えるのならば最大限使う。実に合理的だ。

(plus Ultra 学級委員長になりたいならこの試練を乗り越えろ)

HR 学級委員長 下

「——だから私は学級委員長になりたいです！」

「ブラボオオ！ その透明な身体の奥底の心にはそれだけ隠しきれない熱い思いが隠されていたのか葉隠透！ 次は……峰田実。5秒で終わらせろよ」

空中に浮かぶ学生服。個性『透明』を持つ少女。葉隠透のスピーチが終わり引合はやる気のなさそうに峰田の名前を呼ぶ。いきなり発表時間を5秒にされた峰田は愕然とした表情をして叫ぶ。何故自分だけこんな目にあうのかと

「なんでオイラだけ5秒なんだよ！ 5秒とか『一票お願いします』だけで終わるだろ!？」

「0秒が良かったか？」

「チクシヨオオオ！ この暴君！ ヘタレ！ ムツツリスケベ！」

実は他の者達の時間延長の要求により峰田に全ての皺寄せが寄っているという事実があるのだが、それを知っているのは時間延長を要求した者達と司会進行の引合と相澤だけである。

「オイラはスカートの丈を膝上30cmにする！」

半分ヤケクソになりながら発言した峰田のスピーチに教室に衝撃が走る。5秒という少ない時間で言い切ったのは見事のだが問題なのはその内容。

「えっ……お前、女装癖あんの？」

「——お、ま、え、が時間を5秒に設定したからこうなったんだろおおおッ!？」

恐らく『オイラが学級委員長になったら女子のスカートの丈を膝上30cmする』と言いたかったのだろうが如何せんそれを言い切るのに時間がなかった。故に言いたかった事を何とか言おうとしたのだろう。その結果、この惨劇を産み出した。

「えー……性癖は人それぞれです。大切なのは、その性癖で女性を泣かせない事。女装は皆が見えない所でやりましょう」

「オイラは……オイラは……」

引合がお前の女装を見たら女は泣くと遠回しに感想を述べた後、全身真っ白になりながら峰田が席へと戻る。そして、クラスメイト達の哀れむ視線を一身に受けながら峰田は考えるのを止めた。

第1回学級委員長争奪選挙大会、後半戦に突入。

「それじゃあ次は……爆豪勝己」

「俺の名前を呼ぶんじゃねえよこの糞ナメプ野郎！」

俺が爆豪の名前を呼ぶと理不尽にキレられた。なんだコイツ俺がルールという事を分かってないのか？ん？

「かつちゃん……引合君にそんな事言ったら峰田君と上鳴君の二の舞に」

「うるっせえよクソナード！ どうせアイツらは他の奴らの踏み台にでもなったんだろうが！ 俺を踏み台にするってやつがいるなら俺がソイツを踏み台にして踏み殺したるわ！」

……驚いた。この馬鹿、このオリエンテーションのルールを理解している。しかし、こちらもHRが終わるまでにこれを終わらせないといけない。故にさっさとしてもらおうぞ。

「嫌ならスピーチしなくても良いぞ」

「しないわけないだろうが！ 演説し殺したるわ！」

そう言つてやると心底不快そうにズカズカと音をたてながら爆豪は教壇へと向かう。分かってるならさっさとやれよ。

「あー……モブ共。俺に投票しないと殺す！」

両手を爆発させながら脅迫紛いのスピーチをする爆豪。その姿に呆れるクラスメイト達。ため息を吐く相澤先生と俺。そう言われて誰が投票したくなると思うのか、やっぱりコイツ馬鹿だわ。

「はい。0票確定ありがとうございますございました。次は麗日お茶子さん、張り切つてどうぞー！」

「はっはいー！」

「んだと！お前ら全員俺に投票しろやー！」

感想を言い教壇から押し出すと、不機嫌を隠さず爆豪が吠える。だからそんな性格の奴に誰が一票入れるんだよ。いねえよそんな奴、産

まれ直して出直して来い。

爆豪が不機嫌になりながらも席に座る姿を確認した俺は、麗日に何時でも初めても良いと合図を促す。

「あの……引合君。一つええかな?」

「はい?何か分からない事でも?」

俺の説明で至らなかつた点があつたとは不覚。女子には優しく、男には厳しくが俺のモットー。何でも答えましょう。

「うん。これってスピーチの内容は何でもええんよね?」

「勿論! 峰田みたいに性癖を暴露したり爆豪みたいにチンピラよろしく脅迫したりと何でもありです! スピーチ内容は自由! さあ張り切つて行こう!」

「オイラは女装する変態じゃねええッ!」

「誰がチンピラだ!ぶつ殺すぞ!」

俺の声に馬鹿が二人釣れたが無視する。そして麗日は俺の回答で納得したのか何度も頷き、緊張を解す為に両手で頬を叩く。なんだこの子可愛すぎ天使か?

「えー。私、麗日お茶子は緑谷出久君を学級委員長に推薦します!」

麗日のその言葉に時が止まつた。いや、正確には教室の時が止まつたと言うべきか。驚愕するクラスメイト達、目を見開く相澤先生。動きが止まる俺。

「えええええッ!?!」

教室に絶叫が響き渡る。確かに叫びたい理由は分かる。非常に分かるがぶつちやけ時間がない、黙れ馬鹿共。

「ハアッ!?! なんでクソデクを推薦しやがるんだ!?! おいこらどーいう事だデクウ!」

「うわあああつ! ごめんかつちやん僕にも何がなんやら」

ブチ切れた爆豪が緑谷の胸ぐらを掴み威圧する。だから時間ないつつってんだろシバくぞ爆豪。

「おーい爆豪」

爆豪の元に近付き、机を触り額を叩く。すると爆豪が緑谷の胸ぐらから手を離しこちらに身体を向けた。

「んだよ糞ナメプ野郎！ 引っ込んでろ！」

「スピーチ中だ。静かにしろ」

その言葉と同時に爆豪の額が机に引き合わされガツンと心地良い音を響かせる。

「……よし。鎮圧完了」

「……殺す。テメエだけは絶対に殺す」

「分かった分かった。良い子だから後にしろ」

机に突っ伏し、目だけで俺を睨む爆豪を放置する。どうやら周りのクラスメイトも爆豪の暴れっぷりを見て静かになったようだ。感心感心、まだ騒いでいたら女子は違うが男子は爆豪と同じ末路を辿っていたからな。本当に良かった。

「えーと……大丈夫？」

「大丈夫！ さあ張り切って行こう！」

緊張したように続きを話し始めた麗日の言葉に耳を傾ける。どうやら麗日は受験や戦闘訓練で頑張っていた緑谷の姿を見て、きつと緑谷なら学級委員長として頑張ってくれると考え推薦したらしい。

……良い子や。どいつもこいつも自分が学級委員長になる為になんな手を使ってる中で純粋に他者を推薦する心。これはもう勝てる気がしない。

「えー……グスツ。どいつもこいつも自分の事しか考えてない中とても素晴らしいスピーチをありがとうございます。相澤先生も何かありませんか？」

「正直……このクラスで他の奴を推薦する奴が出るとは思わなかった。良かったぞ麗日」

このスピーチには俺と相澤先生も絶賛。誉められて予想外だったのか嬉しそうにする麗日。こんな子に推薦されるとか羨ましいぞ緑谷死ね。

「それでは次。緑谷羨ましい死ね……じゃなかった。取り敢えず壁の染みになるまで……でもない。緑谷出久、どうぞ」

「引合の奴。緑谷に対して殺意が滲み出てやがる……ッ！」

俺を見ながら顔を真っ青にさせ緑谷が教壇に立つ。失礼な奴め、俺

がお前に何かをする訳がないだろ。全てはHRが終わってからだ。

「みつ……緑谷いじゆくです！」

噛んだのを自覚した瞬間、顔を真っ赤にする緑谷。それを見て、何とも言えない表情を取るクラスメイト達と同じような顔をしつつ緑谷のスピーチの終わりを待った。

「——以上です！」

「はいお疲れ様でした。次は緊張で噛まないように頑張りましょう……残りはショートだけか」

今まで我関せずと思考を他所へと飛ばしていたであろうショートを教壇に呼び出す。取り敢えず何でも良いから言ってくれ。

「……俺は石を推薦する。得意だろ？ こんなん」

「俺は司会進行だからなした。別の奴か自分にしろ」

「……特にねえ」

ショートのその言葉でスピーチタイムは終了した。次は皆様お待ちかね

「はい。お疲れ様でしたー！ これから白紙を配りまーす！ そこに自分の名前と推薦したい人の名前を書いてくださーい！」

投票の時間だ。

「……投票の結果ですが。悲しい事が判明しました」

投票用紙を集め確認した俺と相澤先生はある事に気付いた。

「何故か自分の名前の所に俺の名前が書かれてあったのが二枚もありました」

司会進行である俺は投票用紙を配ったが記入はしていない。これはつまりそういう事だ。

「誰とは言いませんが俺は峰田と上鳴に対して投票してました」

「思いつきし言っただけじゃん」

「後、いくら見直しても名前を書く欄にクラス全員分の名前がありません。というか半分くらいしかありません。喧嘩売ってますか？ 買うぞっ！」

「まあ全部許すけど」

「よつつしやああああッ!!」

俺の許可に教室が沸き立つ。

ぶっちゃけこれを想定して作られたルールだ。自分の名前が使えないなら他人の名前を使えば良い。これに気付かなかったのか芦戸が悔しそうな顔をしていた。

もしかして考えるのが苦手なのか？

「時間がないので結果だけ。緑谷2票八百万2票。他は省略」

「以上の結果になりました。同票2名という訳で残りは俺と相澤先生の票で決まります」

トップの同票が2名という珍しい状況になり、俺と相澤先生の票が運命を決めるという状態になった。

「俺は良い。引合、お前が決める」

「うっす」

相澤先生が辞退した為、俺の票だけになった。これは責任重大である。まあ入れるのは誰か決めているんだが。

「どうせ八百万だろ？」

分かりきつてると言わんばかりの態度を取る峰田の意見を聞き流す。本来ならばそうするつもりだったが、今回は少し違う。

「えー……緑谷。お前の投票用紙なんだが、なんで俺に一票入れているんだ？司会進行の俺に入れても無駄って言ったよな？」

そう緑谷が俺に一票入れていたのだ。入れても無駄だと説明したのに何故入れたのか。これを確認しなければならぬ。

「……引合君はこうやって皆をまとめあげたから一番学級委員長に相応しいんじゃないかなって」

「まあ俺の名前を書いた時点でこの票は無効なんだけどな」

「うっ……」

俯く緑谷に言葉を続けていく。

「……まあ。こうやって俺を評価したのは素晴らしい、俺は誉められるのが大好きな人間だからこんなサービスもする」

そうやって俺は緑谷に投票用紙を渡す。そこに書かれてあるのは

名前 引合 石

推薦者 緑谷出久

「こっ……これって……」

「緑谷3票！ 因みにコイツはお前らみたいな狡い事をせず純粹に他人から3票もぎ取った！ 真の王者に卑怯な真似など必要ない！」

「1—A学級委員長は緑谷出久！ 副委員長は八百万百で決定！ 以上！ 終了！」

有無を言わず終了の宣言をする。クラスメイト達も緑谷ならと考え認めたようだ。これが爆豪なら非難が出るに決まっている。やはり人徳というものは大切だ。

どれだけ卑怯な手を使おうが勝てない時は勝てない。良い教訓になったという事で一つ。

食堂 上

食堂、雄英高校の全ての生徒が一同に集まるこの場所は常に喧騒に包まれている。そんな何処を見ても騒がしい中、周りの声に負けないほど盛り上がっている者達があった。

「オールマイトの一番かっこよかったシーンといえばあの大災害だろ！ 単独で千人を救う偉業！」

「分かるよ！ 僕あの映像をもう一万回は見てるからオールマイトの台詞全部言える！」

「おっ？ 言ったな緑谷？ じゃあいつせいで行くぞ？」

「もう大丈夫だ皆！ 私が来た！」

オタク全開の話題で盛り上がり、聞いている者達をドン引きさせている存在がいた。引合石と緑谷出久である。彼等は、周りの存在など知ったことではないと言わんばかりに盛り上がり、彼等の近くにいる者達の殆どが口元をひきつらせドン引きしている。そんな中、彼等にドン引きしない者といえは

「引合君とデクくん…って。オタクなの？」

そう言いながら頭を捻る少女、麗日お茶子と。

「使えば絶大な力を発揮する緑谷君の個性はオールマイトと似た物を感じる。故に彼がオールマイトに憧れるのも必然なのだろうな」

何か言えば一人で勝手に納得する分かり手の中の分かり手、簡単に言えばカモ。引合に『コイツいつか詐欺に引つ掛かりそうだ』と思わせた男、飯田天哉に。

「…：すげえな緑谷。石についていけるのか」

心底驚いたと言わんばかりに呟く轟焦凍、通称ショートの三人だけだ。

彼等は只今昼食中である。

「いやあー！ 久しぶりに語った！ まっさか緑谷もオールマイトのファンだったとはなあ！」

「僕もびびくりしたよ！ まさか引合君がオールマイトのファンだったなんて！ 銀時代のオールマイトでここまで語り合えたなんて生

まれて初めてだ！」

ひとしきり語り合ったオタク共は楽しそうに笑い合う。引合は満足そうに、緑谷は目を輝かせもつと語り合いたいと言わんばかりに。

「二人共！ オールマイイトにスッゴい詳しいけどオタクなの？」

「親がオールマイイトフアんだから自然となった。そこんじよそこらの奴より詳しい自信があるぞ」

「ううう麗日さん!？」

そんな二人に話し掛ける麗日。その返答に引合は何ら恥ずかしがる事なく、緑谷は顔を真っ赤にして返答する。

「緑谷君！ 趣味とは人それぞれだ！ 君がオタクであったとしてもなんら恥ずかしがる必要はないぞ！ むしろその知識量を誇るべきだ！」

「そつ……そう？ こんな気持ち悪くないかな？」

飯田の言葉に緑谷が恥ずかしい半分落ち込み半分で語る。恐らく、緑谷自身がオタクで気持ち悪がられた事があったのだろう。そんな緑谷に轟と飯田がそんな事はないと語る。

「オールマイイトの事をそんなに知っててすげえじゃねえか。こういうのを『好きこそ物の上手なれ』って言うんだろ？」

「それだ轟君！ 他者を超越した知識量。それはいつの時代でも力になる！ No.1ヒーローの姿をよく見てきたという事は、その背中を見続けてきたという証明！ プロヒーローを目指す者にとって、それは大きな力になる！」

轟と飯田の言葉に緑谷は俯き、感極まったように涙を流し始める。当然周りにいた者はその姿に驚き慌てふためく。

「うっ……うう……」

「どうしたのデクくん!？」

「大丈夫か緑谷君!？」

「わりい……俺。なんか嫌な事を言っちゃったか？」

「違うんだ……嬉しくて。こんな事初めて言われたんだ」

緑谷の脳裏に浮かび上がるのは自分の趣味を馬鹿にされ続けてきた過去の記憶。

気持ち悪い

クソナード

馬鹿にされ続けた彼にとって、皆に掛けられた言葉は正に青天の霹靂。同世代の者から初めて認められたという事実が彼の涙腺を刺激する。

「誉められて嬉しかったんだろ？ 気持ちは分かる」

その言葉と共に引合は緑谷の頭をグワシと乱暴に撫で回す。乱暴だが優しさを感じるその掌は、自分を労っているというのを感じさせ更に緑谷の涙腺を刺激した。

人が溢れる食堂の中で。

「見世物じゃねーよ。見てた奴一秒五百円払え」

突然泣き始めた緑谷を遠巻きに見ていた者達が、引合の言葉で顔をさつと横に向ける。

（理不尽だしくつつそ高え!?）

遠巻きに見ている者達の心境が見事に一致した瞬間であった。

「——落ち着いた？」

「ありがとう麗日さん。もう大丈夫」

「良かった！ だったらはやくご飯食べよ！ カツ丼、冷えたら美味しくなくなるよ？」

「……ッ！」

「どうしたの。ブサイクだよ?」

「いや……麗らか過ぎて」

緑谷と麗日が漫才みたいな事をしている中、他の三人はその様子を見守りながら食事を取る。

「緑谷君がいきなり涙を流した時は驚いたが……そうか。彼には理解者がいなかったのか」

「理解者は見つけるものじゃなくて基本作るもの。ソースは俺」
「……そういうや中学校の頃はオールナイトファンが多かったな」

沈痛な面持ちで納得する飯田、ドヤ顔の引合、特に理由はないが中学時代を振り返る轟。三者三様な反応を取っていると麗日が空気を交える為に話題を出す。

「まだ言ってなかつけど……デクくん！学級委員長当選おめでとう！私、デクくんに投票したんだ！」

「そうだった。緑谷君、学級委員長就任おめでとう！君ならばきっと素晴らしい学級委員長になれる筈だ！」

「因みにショートを除いて推薦したのはここにいる俺達三名です。頑張れ雑用係」

「引合君！学級委員長は雑用係ではない！クラスメイトの信用を一身に受けて初めて務める事が出来る聖職！けっして雑用等という言葉では片付けてはならない係だ！」

「頑張れよ。緑谷」

学級委員長就任に対しての応援が緑谷に掛けられる。しかしそれに対する緑谷の反応は四人の予想とは相反するものだった。

「ありがとう。けど……僕に学級委員長が務まるのか不安だよ」

「ツトマル」

「大丈夫さ」

「務まるから大丈夫。絶対に大丈夫。なんならショート of 髪の毛全部賭けても良い」

不安そうに話す緑谷に様々な声が掛けられる。引合が轟の頭髪を賭けるといふ言葉に、緑谷が面白そうに笑うのを見て轟は頷き返事をした。

「分かった」

「分かっちゃ駄目だよ!?!」

「引合君！未成年の賭博行為は法律で禁止され……ッ!?!」

飯田が立ち上がり引合を注意しようとした瞬間、食堂にけたたましいサイレンの音が鳴り響いた。

食堂 中

食堂に鳴り響く警報。耳をつんざくような音を立てるそれは非日常の訪れを聞く者達に伝えていく。騒然とする食堂の中。警報と共に響き渡る人間的ではない、機械的なアナウンスが人々の恐怖を増長させた。

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください。繰り返します……』

「セキュリティ3!? こんな事初めてだ！」

「ヤバイって! さっさと逃げるぞ！」

我先へと食堂から逃げ出す者達の中。困惑した様子で辺りを見渡す者達は、逃げ出す者達の中に紛れ込み我先と食堂から逃げ出そうとする人の波の中へと入っていく。

「セキュリティ3って何ですか!？」

「校舎内に誰かが侵入してきたって事だよ! こんな事初めてだ! 君達も早く!」

近くにいた者に飯田が現状の確認を取り、飯田達も人の波の中へと入って行こうとする。その瞬間。

「シヨート」

「分かった」

引合が轟に声を掛ける。その声に轟は頷きながら己の個性を発動させ、地面を凍らせ、逃げ出そうとした飯田達の動きを止めた。突然動きを止められ困惑する飯田達。そんな彼等の顔を見て引合は、先程と何一つ変わらない笑顔を飯田達に向ける。

「取り敢えず座つとけ。飯も食べ終わってないだろ？」

鳴り響く警報。機械的なアナウンス。それらが非日常を伝える中、引合石は何一つ焦る様子はなく、先程と変わらぬ様子で飯田達に話し掛けた。

食堂は人々の恐怖に包まれている。

「引合君! さっきのアナウンスを聞いただろ!? ここは危険だ! はやく指示に従い屋外に出なければ!」

「そうだよ!? はやくしないと」

飯田と緑谷が引合に詰め寄る。皆が食堂の出入口へと逃げ出しているのに何故動きを止めるのかと。彼等が止まっている間にも出入口には人がドンドンと集まっていく。このままでは自分達は取り残されてしまう。彼等の心に焦燥感が募り始める。

「なあに焦ったら負けだ。ここはゆっくり待つのが正解。焦ってあの波に突撃したらただの馬鹿だ」

「そんな事を言っている場合では……ッ！」

飯田の焦燥感に駆られた顔を真つ正面から見て引合は安心しろと言いながら笑う。安心出来る理由は何処にもない、こんな所にいる暇があるならいち早く避難しなければならぬ。そう引合に伝えると、もう一度『大丈夫だ』と言い張り昼食を取り始める。

「……なにか理由があるんだな？」

「あるからこうしてるんだろうが。説明して欲しいんだろ？」

「当然だ。下らない事なら俺は君を軽蔑する」

その言葉に引合は笑い『簡単な事だ』と前置きした後、説明を始める。

「先ず一つ。ここにいたら人の波に吞まれず、それにより発生する危険から逃れられる事が出来る」

そう言いながら引合が指差す先にはここから逃げる為に出入口へ集まる人達の波。彼等を除いて食堂にいた者達全てが出入口に殺到しているのだ。それにより起こる結果など火を見るより明らかであり。

「——皆、混乱してちゃんと進めていないのか!？」

「正解。あそこにいる奴等の殆どが冷静さを失っている。密集した中では何が起きるか分からない。こんな時は別の場所から逃げるか、冷静に待つがセオリーだ」

そう結論をつけた後、引合は言葉を続ける。

「二つ目。ぶっちゃけあそこ以外の脱出経路がある」

「ええええええっ!？」

そう言い切った引合の言葉に飯田達は驚愕する。轟も飯田達まで

とは言わないが、両目を大きく開き、驚きを隠さずにいた。

「冷静に考えてあそこ以外にも出入口はあるだろう？」

「どこにあるん？」

麗日の言葉に、引合はその脱出経路があるであろう場所を指差した。その場所は生徒の誰もが知っていて、引合以外、誰もが思い付かなかった場所。

「調理室。あそこで働く調理員さんや作業員が緊急時に避難する際に生徒と同じ場所から避難する訳がない。彼等専用の出入口から逃げてる。間違いない」

そう言い切り、引合は緑谷を見る。その目はオールマイトの事を楽しく話していた時の目ではない。その目は相手の心の奥底を覗き見しているような、目の前の存在に嘘をついたところで無意味だと感じさせる目だった。

その目の前に緑谷の心は震える。彼の幼馴染であるかつちゃんのような相手を威圧する目ではない。もつと違う別の何か。体験した事のない感覚に苛まれたのだ。

「さて、緑谷。いや学級委員長。ここにいる五人はA組。この非常時にお前はどうか動く？」

「どう動く……って？」

「俺達だけでこの場から脱出するのか。目の前で混乱している奴等を俺達で何とかするかだ」

一つはこの場からの逃走、これは簡単。五人で混乱しているこの場所から去るだけだ。難しい事は何一つない。だが、もう一つの選択肢は難しいで済む話ではない。

「ぶっちゃけた話、恐怖と混乱で冷静さを失った奴等の正気を取り戻すのは簡単な話じゃない。混乱を極めた人間の扱いを間違えたら大惨事になることは必至。何か一つでも間違えればあの場所は怪我人で溢れかえる事になる」

「俺としてはこの場から逃げる事を奨めておく。さあ、どうする学級委員長。お前はこの場所でどう行動したい？」

引合の声が緑谷の全身に響き渡る。つまり引合は学級委員長であ

る緑谷に、これからの五人の行動をどうするべきかの選択肢を与え、決定権を押し付けたのだ。

「俺達はお前の決定に従う。なあ飯田？」

「そうだな……緑谷君。君のここぞという時の胆力や判断力は『多』を牽引するに値する。俺もその判断に従おう」

「私もデクくんの判断に任せるよ！ どうする!？」

「石が任せるって言うなら俺も文句はねえ。好きにしろ」

学級委員長になった事を喜んでいたものの不安がっていた緑谷に突然押し付けられた責任と2つの選択肢。それは重圧となり緑谷の精神に重くのし掛かる。

「やあ……どうする？」

恐らく、これが緑谷出久が引合石という存在から押し付けられた最初の苦難。余談だが、この事件を振り返って引合はこう語っている。『コイツはやれば出来る子だと思つて発破を掛けすぎた。だが、反省もしていないし後悔もしていない』
と。

食堂 下

(どうするどうするどうする!! こんな時、どうすれば良い!? 引合君が言った通り逃げた方が良いのか!? でもそんな事したらあそこにいる人達が。でも、もしも対処を間違えたら……)

緑谷出久は考える。己が取るべき最善の手、自分達はこれからどうするべきなのかを己の思考の全てを使い模索していく。

『ワンフオーオール』で大きな音を立ててこつちに視線を集める……駄目だ。そんな事したらパニックになってる人達が暴走するかもしれない。こんな事を考えてる時間にもあの人混みの中で怪我をしている人がいるかもしれない)

(必要なのは皆を刺激しないで視線を集める事。そんな方法がどこにある……考えろ。絶対に方法はある筈だ)

彼の思考の中から既に逃げるという選択肢は消え失せどうやって皆の視線を集めるのか。ただ、それだけに思考を張り巡らせていく。

緑谷出久は考える

目の前に現状を解決する為に。

(やだ……この子だったらブツブツ言い始めた。もしかしたらアカンかもしれない)

緑谷がブツブツ言ってるのを見て。俺は一抹の不安を感じていた。俺の想像ならば既に『皆を助けよう!』となっている筈なのだが、現実はその簡単にはいかないらしい。緑谷が学級委員長になるのを不安がっていたからこれを解決させて自信でもつけさせようと考えたんだが、いきなりこれは無理があったか?

「引合君って教室で皆をまとめてたよね!?アレはどうやったの?」

「あれは……簡単に言うなら全員の視線を集めて煽って盛り上げただけだからなあ……この状況じゃあの方法は役にたたんで」

「そっか……良い案だと思っただけだ」

名案と言わんばかりに聞いてくる麗日にアレは役に立たないと伝えると残念そうな顔をして諦める。

「……石なら何とか出来るだろ?」

「ショート。お前は俺を何でも出来るドラえもんとでも思っていないか？」

「……出来ないのか？」

不思議そうにこちらを見るショート。この馬鹿、本当にどうしてやるのか。

まあ……ぶっちゃけ何とか出来る。だが俺がこの状況を解決したとして、待ち受けているのは緑谷が自分が学級委員長に相応しくないと考え、他の誰かに学級委員長を譲りたいと考える事だ。

そして、緑谷は誰に学級委員長を推薦するのか？そんな事、あの時の投票で分かりきっている。緑谷は間違いなく俺に学級委員長をやらそうと考える。それは不味い、非常によろしくない。

『僕はやっぱり引合君が学級委員長をやった方が良いと思うんだ』

『確かに引合はHRでも皆をまとめてたし食堂でも活躍したしな！

俺はそれでも良いと思うぜ！』

『引合、もうメンドクサイからお前がやれ。それが一番合理的だ』

最悪の事態を想像し、思わず血の気が引くのを感じる。これで先生から『爆豪を何とかしろ』とか『峰田を何とかしろ』とか『取り敢えずこれ放課後までに頼むぞ』とか無茶振りされたらこれから待っているであろう俺の輝かしい学生生活が水泡へと消え去る。

(……最悪だ。間違いなく俺が学級委員長をやらなければならない事態になる。学級委員長になるとクラスメイトをまとめ、先生の雑用を聞かなければならない)

学級委員長とは雑用係だ。先生に放課後まで完全に支配される奴隷職。だれが好き好んであんな事をするというのか。なんとしても回避してやる。俺は天才でイケメンな引合石。この程度の危機、余裕で乗り越えて見せる。

「おい。緑谷」

「……駄目だ、これじゃ皆がパニックになる。他の方法を考えないと。時間はない、他に何が出来る？ 『ワンフォーオール』を使えばパニックになる。かといってそれ以外で皆の視線を集める方法が僕には……」

「……駄目だコイツ。完全に自分の世界に入つてやがる」

取り敢えずヒントを与えてやろうと思ひ、話し掛けるも。緑谷は自分の世界に入つており俺の声を全く認識していなかった。というか『ワンフオーオール』ってカッコいい名前の個性だな。俺なんて『磁力』だぞ『磁力』別に磁力操っている訳でもないのにこんな名前だからな。

「フンッ！」

「アベツ!？」

取り敢えず自分の世界に入つていた緑谷の頭を殴り現実に引き戻す。頭を抑えながら此方を見る緑谷に語り掛ける。

「ひ……引合君?」

「イケメン天才な引合君が特別にヒントをやろう。お前、自分だけの力で何とかしようとしただろ?」

「学級委員長はクラスメイトに命令出来る立場だ。お前の周りには四人も命令出来る駒がある。それを加えて考えろ」

「引合君! 学級委員長とは皆の信頼を一身に受けて初めて務める事が出来る聖職! クラスメイトを駒として考えるなんて事は」

糞真面目な飯田の言葉を受け流しながら緑谷を見る。昼食中の話でコイツがオールマイトを特別視しているのは理解している。正直俺も同じ気持ちだからその気持ちは理解出来る。多分だがそのせいで『オールマイトならばどうする』って前提が存在しているのだろう。

高過ぎる目標に己が付いていけない。恐らくだが、緑谷は今まで人前で何かをする人間じゃなかったのだろう。そんな人間にこんな事をやらせたらパニックになるのは自明の理。正直やり過ぎたかも知れん。

「困ったら人を頼れ。少なくともここにはお前に手を貸す存在がいるぞ」

「そうだよ! 私に出来る事なら何でも言つて!」

「……君に任せると言つたのだ。緑谷君、君の判断に僕は従おう」

俺の言葉に麗日と飯田が追従する。ここまで来たら後は流れだ。どんなに空気の読めない奴でもここまでお膳立てされたらやるしか

ないと腹をくくる筈。もしもここまでやって緑谷が悩むなら俺の負け。ここで動き出すなら俺の勝ち。

「……皆。力を貸して欲しい！」

緑谷の決意の宿った瞳を見た瞬間、俺は自分の勝利を確信した。

この後の事は語るまでもないだろう。だが、強いて語るとしたら。

「引合君！君の個性で僕をあそこまで飛ばして！」

「りょーかい。上手くやれよ」

緑谷を引合が出入口の上に向かって反発させ、緑谷が混乱の中にある出入口の上を飛翔する。顔面をぶつけながらも出入口の上に辿りつき、緑谷は大声をあげ皆の視線を集めた。

「だ……大丈夫です！ 皆さん！ 落ち着いてください！ 落ち着いてください！ 大丈夫です！」

皆が集まる出入口。そこに突然現れた緑谷の大声、その存在に密集していた者達は顔を上に向け足を止め。その瞬間、飯田と麗日が声をあげた。

「皆さん！ 落ち着いて下さい！ パニックにならず冷静に列を作り、安全に校外へと脱出しましょう！」

「怪我をしている人がいたらその人を先に出してあげてくださいー！」

その声に呼応するように密集している人達の中からも声があがる。

「皆！ アイツらの言ってる通りだ！ 安全にここから出よう！」

「ここに踏まれて怪我をしている人がいる！ 先に通してやってくれ！」

一度冷静になった者達は、自分達がやるべき事を理解すればそれに従い行動し始める。それからは皆が迅速に行動し食堂から皆が脱出する事に成功した。

「やったねデクくん！」

「流石だ緑谷君！ 君のお陰で皆が冷静に脱出する事が出来た！」

「そっ……そんな、皆がいたから成功したんだ。僕だけの力じゃどうしようも」

麗日と飯田からの称賛を受け緑谷は慌てたように否定する。その

言葉に待ったを掛けるように、引合は緑谷の言葉を否定する。全てはお前がやったのだと。

「それは違う。緑谷、これはお前が考えお前が成し遂げた事だ。謙遜は良い事だが、やり過ぎると嫌味だぞ？」

「お前の行動で皆が冷静になり、そのお陰で全員が冷静に脱出する事が出来た」

「お前はあそこにいる皆を『助けた』んだ。『ヒーローみたいで』かっこよかったぞ」

引合の言葉を聞き緑谷は涙を流す。

「う……うん！」

「次は俺達がここから出る番だ。行くぞ学級委員長」

怒涛の昼休みは終わった。その後の授業はHR。朝。学級委員長と副学級委員長を決め、次は他の生徒の役職を決める時間だ。

「どうした引合。なんでバリカンなんて持ってんだ？」

「……もしかしたら断髪式が始まるかもしれないからな」

「？」

「ひ、引合君！ 峰田君！ ししし、静かにして下さい！」

八百万に作って貰ったバリカンを持ち峰田と話をする引合。二人がそんな話をしていると緊張でガチガチになりながらも壇上に立つ緑谷から注意を受ける。

「大丈夫かみどりやー？」

「緊張でガチガチじゃねーか」

「ダッセーんだよクソナード」

「皆さん静かにして下さい……ほら委員長。話を進めて」

緑谷を揶揄する者達を八百万が注意し緑谷に話を促す。その声に頷き、緑谷は話を続けた。

「でっでは他の委員決めを執り行って参ります！」

「……けど、その前にいいですか!？」

「僕は……今まで学級委員長をした事ありません。人の前に立つ事が始めてで、正直緊張しています」

「で……ですが、そんな僕でも精一杯頑張っていますので皆さんよろ

しくお願いしまひゅ！」

最後の一言で噛んだ緑谷は顔を真っ赤にしてそのまま沈黙する。生暖かい視線が緑谷に集まる中、引合は拍手と共に大きな声をあげた。

「ブラボオオオ緑谷！ 頑張れ学級委員長！ よっ！ 未来のプロヒーロー！」

「頑張ってねデクくん！」

「学級委員長として分からない事があるなら何でも言ってくれ！ 俺が力になろう！」

引合の声に続き麗日、飯田の声があがり、クラス中から緑谷に対する応援の声が沸き上がる。

「食堂であんな活躍をしたんだ！ 緑谷なら出来るって！」

「頑張れよ非常口緑谷！」

「みーどりやっ！ みーどりやっ！ みーどりやっ！」

「皆……ありがとう！」

沸き起こる緑谷コール。それを聞き緑谷は涙を流す。彼の人生の中で、恐らく初めて受ける歓声を浴び、この瞬間、学級委員長として頑張る事を固く決意した。

「……ケッ！」

その様子を不快そうに眺め爆豪は悪態をつく。その視線の先にいるのは学級委員長である緑谷出久。

そして。

「……」

無言で寝袋の中に入り、相澤消太は一人の生徒を眺めていた。それは学級委員長である緑谷出久ではなく。

「みーどりやっ！ みーどりやっ！ みーどりやっ！ みーどりやっ！」

笑顔で緑谷コールをする引合石。相澤の鋭い瞳が、その姿をクラスが落ち着くまで眺め続けていた。

動乱 USJ編 チキチキ地獄絵図とキチガイ引合
仕立てゝ魔王様を添えてゝ

バス 上

「今日のヒーロー基礎学だが……俺とオールマイト、そしてもう一人の三人体制で行う事になった」

（なった…？ 特例なのかな？）

PMO:50

午後の授業はヒーロー基礎学。担任である相澤消太がやる気のないさそうな声色で生徒に語り掛ける。その言葉に緑谷は心の中だけで首を傾げ、そんな中。彼の隣に座っているしろうゆ顔の少年、瀬呂範太が手をあげ疑問を相澤へと問い掛けた。

「ハイ！ なにするんですかー？」

「災害訓練なんでもござれ『人命救助訓練』だ」

相澤が『rescue』と書かれたカードを生徒達に見せ付けると、生徒達は思い思いに話始める。

「おいおい。つまり俺の独壇場って事では？」

「人命救助!? ヒーローにおいて一番大切な事っすね！ 燃えてきたあぁッ！」

「……燃えたら救助出来ないだろ」

ドヤ顔で話し出す引合、1人盛り上がる夜嵐、燃えるという意味を勘違いして突っ込みをいれる轟。

「レスキュー……今回も大変そうだな」

「ねー！」

「バカかおめーこれこそヒーローの本分だぜ!? 鳴るぜ！ 腕が！」

「水難なら私の独壇場。ケロケロ」

そんな三人以外にもレスキューに忌避感を感じる者や夜嵐のように盛り上がる者、引合のように救助に自信がある者。様々な思いが教室を駆け巡り。

「おい、まだ途中」

相澤の睨みで静まり返る。その様子は

まさに蛇に睨まれた蛙といったところだろうか。

「今回コスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を制限するコスチュームもあるだろうからな」

「訓練所は少し離れた場所にあるからバスに乗っていく。以上、準備開始」

ピツという電子音が鳴ると同時に壁から生徒達のコスチュームが入った箱が現れ、生徒達はその箱を持ち更衣室へと移動した。

今日のヒーロー基礎学は救助訓練だ。

「おっ！ 俺以外の体操服ボーイ発見！」

「俺以外って……そう言えば引合君のコスチュームって指ぬきグローブだけだった？」

更衣室。体操服に着替えた緑谷に引合が近寄っていく。指ぬきグローブ以外のコスチュームを用意しておらず必然的に体操服を着る事になる引合は、自分以外がコスチュームではなく他の誰かが体操服を着ているのを見て、仲間意識を感じ話し掛けた。

「おっ？ 俺のこのスーパ指ぬきグローブのスペック知りたい？」

「えっ！ 教えてくれるの!?!」

引合のそんな言葉に緑谷は目を輝かす。元々重度のヒーローオタクである緑谷にとって他人の個性やコスチューム云々を知る事はとても楽しい事。そんな緑谷の態度を見た引合は機嫌良さそうに話し始める。

「良かろう！ 先ずは俺の手袋だが……出せる物がなんやかんや結構ある！」

「二つは針！ 即効性の麻酔薬が染み込んだ針がこの手の甲の出っ張りにいっぱい入ってる！」

「当然針は俺が触っているから自由自在に操れる！ 戦闘訓練で見せたアレだな」

トントンと自分の手の甲の出っ張りを叩く引合の言葉を聞き、緑谷

は己の世界に入りブツブツと呟き始める。

「そうか……!? 引合君の個性は簡単に言おうと触れた物を対象にして引力と斥力を操る力! 針の動きは引合君の自由自在! 単純だけど被害を出さずに敵を無力化させるのには凄く最適なコスチュームだ!」

「だろ? 俺凄いだろ?」

緑谷の言葉に満足したように笑顔で話す引合に、緑谷は満面の笑みを浮かべ返事を返す。

「うん! 凄いや引合君!」

「ぐはあ!」

「たっ……倒れたあああっ!?」

緑谷が誉めの言葉を放った瞬間、引合は変な声をあげながら地面に突っ伏す。

突然の事態に困惑する緑谷を尻目に引合は立ち上がり緑谷に話し掛ける。

「……ワンモアプリーズ」

「えっ……『たっ……倒れたあああっ!?』」

「ノー! その一つ前!」

緑谷の言葉に不満があったのか引合はどの言葉を言って欲しかったのかを要求する。

「えーと……確か『うん! 凄いや引合君!』だっけ?」

「それだあああ!」

ハイテンションで緑谷を指差し、引合は言葉を続ける。

「俺は褒められるのが大好きだ! という訳で緑谷! 君にはこれをプレゼント!」

「えっ?」

困惑する緑谷にマス目が沢山ある紙が渡される。そしてそのマス目の一番最初に『引合』の二文字が書かれた判子が押されており、例えるならばラジオ体操で判子を押しってもらう紙に酷似していた。

「これは『引合スタンプ帳!』俺が素晴らしいと感じた事をした人にプレゼントする紙だ!」

「マス目に判子が全部溜まると景品が手には入るぞ！　頑張つて君も景品ゲットだ！」

「あつ……ありがとう？」

（夏休みのラジオ体操で見たことある紙だこれー!?）

困惑する緑谷を尻目に、引合はバスが到着している場所へと移動する。貰った謎の紙を捨てるに捨てれず困惑する緑谷に、後ろから声が掛かる。

「……お前も貰ったのか」

「あつ……轟君。これどうすれば」

轟の声に緑谷は振り返る。いきなり渡された謎の紙、善意で渡された物を捨てるのは忍びない。ならば誰かに譲ろう、そう考え轟に話し掛けると。

「……負けねえからな」

そう言いながら、轟は緑谷にあるものを見せ付ける。轟が見せ付けているものは、緑谷の持っているのと同じ『引合スタンプ帳』強いて違う部分をあげるとするならば、轟の紙には全体の半分まで判子が押されている事だろうか。

（轟君……集めているんだ）

クラスメイトの意外な一面を知った緑谷は渡された紙をロッカーの中に片付けバスが到着している場所へと足を進めた。

「——で、オールナイトがそこで言ったんだよ『辛いときこそ笑え』つてな！」

「やっぱオールナイトは凄いな！　俺もあんなカッコいいヒーローになりたい！」

「分かってるな夜嵐！」

バスの中で二人の男が意気投合する。1人は引合石、もう1人は夜嵐イナサ。彼等は話をし始めると直ぐに意気投合し、自分の好きなヒーローの話題で盛り上がり始めた。語り合うヒーローの話題は勿論No.1ヒーローオールナイト。どんな人でも盛り上がる事が出来る鉄板ネタ、そんなネタを彼等が使えばどうなるのかは火を見るよりも明らかであり。

「……俺を挟んでベラベラ話してんじやねーよ！ 殺すぞモブ共！」

その結果、彼等の真ん中にいる爆豪が怒りのままに吠えたてた。何故爆豪が彼等の真ん中にいるのか、簡単に説明すると引合が相手の意見を無視して、無理矢理隣に座らせただけだ。そしてその爆豪の隣に夜嵐が座り、彼等は無意識的に爆豪の逃げ道を防いだ。

「どうした爆豪！ うんこか!？」

「違うぞ夜嵐。爆豪は俺達の会話に混ざりたくて仕方ないんだ」

「なるほど！」

見当違いの意見に爆豪の苛立ちが頂点に近付く。嫌いな奴の隣に無理矢理座らされた挙げ句、自分を間にして会話された爆豪の気分は不機嫌絶好調だった。

「微塵も混ざりたくねーわ！ 死ねカス！」

「ハブったりしてごめんな！ 爆豪も混ざっていいぞ！」

「聞けやカス共！」

両手を爆発させながら爆豪は凄むが、引合と夜嵐にそれが通用する事はなく。

「それじゃあ爆豪の好きなヒーローは誰だ!？」

「いねーわ死ね！」

「えっ……オールマイト好きじゃないとか。お前ヴィランなの?」

信じられないと言った様子で呟く引合の姿を見て、爆豪は自分の決してはならない部分が簡単に切れたのを感じた。

「……誰がヴィランだ。ぶっ殺すぞナメプ野郎！」

その容貌たるや。まさに怒髪、天を突く。夜嵐と引合に良いように扱われた爆豪は阿修羅すら凌駕する顔へと変化していた。この顔を見た赤子はひきつけを起こし、犬は震えあがり服従を誓うだろう。そんな顔を見た引合は。

「その顔。どうみてもヴィランだろ」

遠慮なく爆豪を煽り倒した。

「……死ねえッ！」

爆音と共に引合の顔面に小さな爆破が放たれる。が、引合には当た

らない。

「フハハハハ！ 止まって見えるぞ！」

「避けんな死ね！」

（かっちゃんやんが弄り倒されてる……流石雄英高校！ 信じられない

光景だ！）

バスは走り続ける、彼等に乗せて。

バス 下

人には他人には話せない事、つまり秘密を持つ者がいる。そんな者達は腹に何かを抱え、必ず訪れるであろう未来。つまりはその秘密が他者に露呈する事実に怯えなければならぬ。

「私、思った事は何でも言っちゃおうの緑谷ちゃん」

「あー！ ハイ！ 蛙吹さん！」

「梅雨ちゃんと呼んで」

蛙吹梅雨と名乗った少女は未だ揺れるバスの中、隣に座っている緑谷に話し掛ける。これから始まるのはクラスメイト同士の何気ない会話なのだが、状況を知っている者や話し掛けられた緑谷には何気ない会話にはならない。何故なら

「貴方の個性『オールマイイト』に似てる」

(!?)

緑谷出久の秘密、それは希望の象徴『オールマイイト』の個性『ワンフォーオール』を受け継ぐ者なのだから。

「そそそそ！ そうかな!? いやでも僕はそのえー」

蛙吹の言葉にしどろもどろになる緑谷、どうやら彼は隠し事をするのが苦手らしい。秘密を抱える者として致命的な欠陥である。

バスは目的地へと走り続ける。

「待てよ梅雨ちゃん。オールマイイトは怪我しねえぞ、似て非なるアレだぜ」

しどろもどろに返事をする緑谷の言葉を赤毛の少年、切島鋭児郎の言葉が遮る。緑谷にとって切島は救世主そのもの、心の中で緑谷は切島へ感謝の念を捧げた。

「しかし増強型のシンプルな個性はいいな！ 派手で出来る事が多い！」

「俺の『硬化』は対人じゃ強えけど如何せん地味なんだよなあー」

そう言いながら硬化した腕を掲げる。

切島鋭児郎、個性『硬化』全身をバキバキに固める事が出来る。因みに硬化には制限時間があるからそこには注意が必要だ！

「ぼくは凄くカッコいいと思うよ！ プロでも十分通用する個性だよ！」
「プロなー！ しかしやっぱヒーローは人気商売みてえなところあるぜ！」

緑谷と切島の個性の話題がバス内に伝播し、皆が思い思いに個性を話題に話始める。

「僕の『ネビルレーザー』は派手さも強さもプロ並☆」

そう語る金髪の少年の名は青山優雅、個性『ネビルレーザー』を持つ。あらゆる物を貫く強力なレーザーをお臍から放つ事が出来るぞ！ だが、そんな強力な個性故にデメリットもある。

「でも、お腹壊しちゃうのはヨクナイね！」

1秒以上レーザーを照射すると反動でお腹を壊してしまうのだ！
かつこわるい！

「それが……なにか☆」

「オイラの個性は戦闘で役に立たないからなあ……」

そう自嘲する峰田実。彼の個性は『もぎもぎ』頭の丸い球をもぎ取る事が出来る。球は自分には引っ付かないが他の者にはチョーひつつく！ 快便だと1日中引っ付く。地味に強い個性だ！

後、もぎすぎたら頭から血が出るらしい。もぎすぎには注意が必要だ！

「そんな事言ったら俺の個性だって戦闘向きじゃねーよ」

そんな峰田を慰めるように話すのはしょうゆ顔の少年、瀬呂範太。個性は『テープ』両肘がテープロールのように発達しておりそこからゼロハンテープのような物を射出出来る！ テープの使い方は巻き取って移動に使うも切り離してトラップに使うも自由自在だ！ しかもノーモーションでテープを射出出来るらしい！ 地味だがぶっちゃけスゲー万能！

「二人とも涙拭けよ」

そんな二人を慰めるのは引合石。彼の個性は皆ご存知『磁力』地味だがチョーがつくほどの万能！ 触れた物の引力と斥力を操る個性はマジにつえー！

「そう言えば引合君と私の個性って似てるよね！ 引合君も限界超えると駄目なん？」

目を輝かせて引合に話し掛けるのは麗日お茶子。個性『無重力』五指で触れた物の重力を消し去るやべー個性だ！

因みに消し去る重量には限界があるらしいぞ！ 限界超えたらリバースするらしい！ ぜんっぜん麗かじゃねー！

後、自分を浮かせても吐くぞー！ ゲロる美少女だ！

「昔はキヤパ超えたら貧血でぶっ倒れてたけど、今は限界突破し過ぎて貧血になる事がなくなったなあ……」

「……限界突破ってなんなん？」

「知らないのか？ 限界突破とは……」

個性を話題に盛り上がる生徒達。そんな中、切島が話題を変えるかのように声をあげた。

「派手で強いつて言ったらやっぱ轟と爆豪と夜嵐だな！」

その言葉で皆の視線が三人に集まる。轟は我関せずと目的地まで睡眠を取り、爆豪と夜嵐は。

「なあ爆豪！ お前の好きなヒーローって結局誰なんだ!？」

「……頼むから死ね。死んでくれ」

「えっ……嫌だ！」

「……なら黙れ」

「分かった！ うるさかったか!？ ごめんな！」

「……おう」

(かつちゃんぐったりしてるー!?)

引合と夜嵐の間にいた爆豪は心身共に疲れた様子を見せ、その光景は緑谷に驚愕を与えた。

「……夜嵐ちゃん。凄いわね」

「マジにピユアだな夜嵐。いかに爆豪が糞を下水で煮込んだ性格でもあの二人の間は耐えられなかったみてーだな」

上鳴の言葉を聞いた爆豪はピクリと眉を動かし底冷えするような声で威圧する。

「……テメエ後で殺す」

「今のおめーに凄まれても全く怖くねーわ」

「全くだ。これだから最近の若者は」

上鳴の言葉に追従する引合の言葉を聞き爆豪は再び噴火する。だが引合はそれを見て顔色一つ変えず

「テメエはさつきから俺に喧嘩売ってんのか上等だこの糞ナメプ野郎！ 倍で買い殺したるわ！」

（復活はや！）

「……あまり強い言葉を使うなよ。弱く見えるぞ」

喧嘩を売った。

「死ねえッ！」

「ワンパターン野郎め！ 貴様の攻撃など当たる訳がなからう！」

爆豪を煽り倒して笑顔の引合。そんな絶好調な彼に相澤は警告する。

「……そろそろいい加減にしないと除籍にするぞ。分かったか引合」

「なんで俺だけ!？」

「……お前が諸悪の根源だろうが」

「うつす、すいませんでした。黙ります」

この後。引合は借りてきた猫のように大人しくなり、バスに平和が訪れたのは語るまでもないだろう。

ウソの災害や事故ルーム 1

USJ、それは大人と子どもの夢を叶える楽園の地。ハリウッドの超大作映画をモチーフとした大興奮のライドや人気キャラクターのショーのが楽しめるアミューズメントパークだ。

「すっげー！ USJかよ！」

赤髪の少年、切島鋭児郎が興奮を抑えきれずに叫ぶ。彼等の目の前には崩壊したビル群、遠く広がる水域、土砂崩れに巻き込まれた家屋。その他、ドーム状になった場所が幾つかあり、その光景を例えるならば災害の見本市。

ありとあらゆる災害を再現したこの場所は、何も知らない者が見ればテーマパークと思わせる程の壮大さがあり。切島の言葉はここにいる者達の総意を代弁していた。

「これが倍率300倍、雄英高校の資金力……ッ！ 俺の家が何十件入るんだ!？」

そう絶句するように呟くのは、皆様お馴染み引合石。彼が目前の光景を見て思った感想は皆とは少し違ったらしく、広大な敷地と自分の家を比べ、雄英の資金力に驚愕していた。

「ウチなんて何百件入るか分からんで!？」

そんな引合の呟きに麗日お茶子の同意が入る。興奮と驚きの入り交じった声色で語られるそれには説得力が大いに感じられ、自分の方が多く入ると宣言していた。つまりは貧乏自慢である、奴隷の鎖自慢と殆ど変わらない。ある意味聞いている者に切なさを感じられる言葉であった。

「……言うほど大きいでしょうか？」

そんな二人の声に八百万百の独白が掻き消される。もしもこの声が彼等に聞こえていたとしたら、彼女は世間知らずのお金持ちのお嬢様として認知されていただろう。

「水難事故や土砂災害、 火事……e t cと。ありとあらゆる事故や災害を想定し僕が作った演習場です」

機械音に似た声が響き渡る。彼等が声の主を見れば、そこには宇宙

服に似たコスチュームを身に纏い、表情の見えない存在がそこにいた。

「スペースヒーロー13号！ 災害救助で目覚ましい活躍をしている紳士的なヒーローだ！」

「わー！ 私好きなの13号！」

重度のヒーローオタクである緑谷出久が即座に目の前の存在が何者なのか把握し、13号のファンである麗日が喜びの声をあげた。

「どのような災害現場でも対応出来る……その名も」

「U ウソの

S 災害や

J 事故ルーム！」

(USJだった!!)

USJ。それは夢を叶える楽園の地、だがこの雄英においてUSJとは、災害救助を学ぶ為の施設の名前を指していた。

1-A USJに到着する。

突然だが、引合石はお小言が嫌いだ。正確には大人に説教や正論を言われる事が嫌いなお子様なのだが、圧倒的自分主義な彼がそれを認める事は性格を矯正しない限り未来永劫あり得ないだろう。

「超人社会では個性の使用を資格制にして一見成り立っているように見えます。しかし一歩間違えれば用意に人を殺せ……」

(ながい……)

彼は長い話が嫌いだ。正確には淡々と、眠気を誘う話し方が嫌いだ。中学時代、問題児として教師に認識されていた彼はその辺の問題児が可愛く見えるレベルで問題児だった。

(……つまり周囲の安全に気を付けて個性を使いましょうって事だろ。周囲を気にせず使う馬鹿なんていないし……)

そんな事を思う引合の脳裏に複数の馬鹿が思い浮かぶ。このクラスにおいて馬鹿みたいな個性の使い方をしている存在が複数いる。1人は、自分と同じオールマイトオタクであり個性を使えば骨が折れる男。緑谷出久だ。

(あつ……緑谷がいたわ。アイツ個性使ったら骨折れるし、馬鹿みた

いな出力しか出せないみたいだからアイツは気を付ける必要があるか)

そしてもう一人は先日 of 戦闘訓練でビルを壊した男、爆豪勝己。不機嫌そうに先生の説明を聞く彼を確認した引合は、心の中で溜息を吐く。

(ああ……爆豪もキレたら何するか分からないか。だとしたらこの長ったらしいだけの説明にも意味が出来るか)

だとしても自分には無関係、そう引合は結論つける。普通ならばプロヒーローの有り難い言葉なのだが、分かりきってる事を言うなどという幼稚じみた思考回路を持っている彼からすればただ長いだけのお小言。

「相澤先生の体力テストで自身の秘めてる可能性を知り、オールマイトの対人訓練でそれを人に向ける危うさを体験したと思います」

(あつ女神可愛い。信仰しよ)

故に彼が先生の話を半分聞き流し八百万の方をチラ見するのは仕方ない事なのだろう。

……仕方ないのか？

「……引合、ちゃんと聞け」

「うっす！ 勿論13号先生の話を一言一句逃さず聞いております！」

「……言ってみろ」

「『相澤先生の体力テストで自身の秘めてる可能性を知り……』」

「……聞いてるなら良い」

彼は無駄に器用である。どんな事でもこなそうと思えばこなす事が出来る。故に彼は教師から問題児として要注意扱いされていたのだ。故に話を聞き流しながらも内容を理解するという理解不能な行為が出来るのは当然の事であり、その事を付き合ひの短い相澤が理解出来ないのも当然の事だ。

(女神のおっぱい触りたい……でも手を出したら女神が悲しむ。女の子にエッチな事をして泣かせたら母ちゃんに関節バキバキに折り殺される。詰んでる)

(……何故でしょう。少し悪寒を感じますわ)

相澤消太は知る事となる。引合石の特異性、その問題児っぷりを。凝山中学の教師から『えっ……轟君は理解出来ませんが引合君が合格ツ!? 本当に良いんですか!? あっ……いえいえ別にあの子に問題がある訳じゃないですよ!? むしろ色々と優秀ですし……勉強だつてちゃんと取り組めば良い成績を出しました』と、しどろもどろに教師に言わしめたその意味を。

そして……その機会は直ぐに訪れる。

「……ご清聴ありがとうございます」

「ブラボオオッ! おおおッ! ブラアアアボオオオオッ!」

13号が話し終え、真面目の申し子飯田天哉が溢れんばかりの感嘆の声をあげ拍手を打ち鳴らす。生徒達が拍手を打ち鳴らす中、相澤はこれから行う授業の流れを考えつつ大広間へと視界を移す。

するとUSJの中央、大広間で黒い靄が姿を現した。プロヒーローとしての経験が即座に相澤の脳内を駆け巡る。あれは侵入者、ヴィランであると。

「総員一固まりになって動くな!」

相澤の怒号とも呼べる声に皆が驚いたように反応する。そんな中、引合は鋭い声で八百万へと話し掛けた

「八百万。急いでフラッシュバン出してくれ!」

「えっ……ええ! 分かりましたわ!」

引合の言葉に反射的に反応した八百万がフラッシュバンを創造し引合へと渡す。

「しかし……これを一体……」

「先手必勝! 『対策せずに正面きつて来る奴が馬鹿なんだよ』シューッ!」

「引合さんっ!?!」

八百万の言葉を受け流しながら引合は相澤が見ていた方向へと身体を向けフラッシュバンを個性を使い、黒い靄に向かって反射させた。

「チッ! 全員、目と耳を塞げ!」

突然の引合の奇行に相澤は舌打ちを隠さず全員に指示を促す。混乱しながらも即座に相澤の指示に従う生徒達。

「どこだよ……オールマイト……ってなんだこれ……ッ！」

黒い靄から百鬼夜行を彷彿とさせるヴィランの軍勢が現れる。その中で中心にいた男の足元にフラッシュバンが着弾する。

その瞬間、目が焼きつかんばかりの閃光と世界を揺らす爆音が大広間を包み込む。

「グアアアアアッ！」

突然の極光と爆音にヴィランは悲鳴をあげる。特に自分の真下に着弾した男は音と光に堪えられず意識を失う。

音と光が収まり、目を開いた彼等の目に映ったのは目を押さえながらのたうち回る哀れな者達の姿。

「先手必勝、戦う前に勝つ。この手に限る」

呆然と目の前の惨状を眺める生徒達の中、引合は計算通りだと言わんばかりに何度も頷き、八百万へ更なる兵器を要求した。

「さーって八百万。止めの睡眠ガスを一つ」

「渡しませんからね!？」

「えっ……何で？」

色々と言いたい事はあった。

即座に反応したのは上等だが、何故周りを気にせずあんな行動を取ったとか。

理解したのなら現状を周りに伝えようとは思わなかったのかとか。

自分が投げた物が何なのか理解しているのなら周りにそれを伝えるべきだとか。

「引合……」つだけいいか？」

「なんです？ 即座に敵を無力化したこのイケメン天才引合石君にお褒めの言葉でも？」

どうだ。自分はやってやったぞと言わんばかりの引合の顔を見て、相澤は自分の中で切れては駄目な部分がプツリと切れるのを感じた。

なんだこの問題児は……

「上手くいって良かったが……やるならやるとちゃんとええ！」

「フッフ。まあ、とうぜ……あついったア!？」

眼前の問題児の頭を全力で殴り、相澤は皆に指示を出す。

「13号!殿は俺に任せて、お前は学校へと連絡を取りつつ生徒を避難させろ! お前らは13号の指示に従いここから離れるんだ!」

突然の事に理解出来ず混乱する生徒達だが、相澤の鶴の一声でハツとして指示に従い動き出す。そんな中、頭を殴られ悶絶していた引合が待ったを掛けた。

「いっつう……いや、ここはショートの個性でアイツらの足を奪う事の方が……」

「尾白! この馬鹿を引き摺ってでも連れていけ!」
「分かりました!」

太い尻尾で引合を拘束し、尾白が13号の後を追う。混乱する現場。相澤はゴーグルを装着し、臨戦態勢を取る。

「……やはりこうなったか。流星は僕の教えを受けた子、死柄木弔では彼を相手するのは分不相応だったという事か」

黒い霧の中から女が姿を現す。整った顔に黒い長髪。ふと、相澤は目の前の存在に既視感を感じるが、気のせいだと結論を出す。

死柄木弔と呼んだ男を黒い霧の中へと放り投げた女は、辺りを見渡し溜息をついた。

「折角……オールマイトに逢いに来たというのに、本人がいなくては話にならないじゃないか。黒霧、取り敢えず子ども達を散り散りにしろ」

「分かりました……それで、彼はどうなされるつもりで?」

女に黒霧と呼ばれた黒い霧は、丁寧な口調で返事を返す。

「あの子は特別だ。時間稼ぎにしかならんだろうが、脳無を三体配置させた場所に放り込んでおけ」

不穏な会話を続ける二人の言葉を聞き、相澤は昨日のマスコミの一件はコイツらが絡んでいと察した。故に、目の前の存在を逃がす事は出来ないかと腹を括る。

「僕は……目の前の雑魚を念入りに捻り潰す」

底冷えするような女の目が相澤を射抜く。歴戦のプロヒーローで

ある相澤ですら思わず後ろへと下がってしまう程の眼光、これと似た目を見た事がある。あの既視感は気のせいではない。

この瞬間、その考えは確信に変わった。

緊張感が両者の間を支配する。1秒が永遠に感じられる中、黒霧と呼ばれた黒い靄を纏ったヴィランが空高く飛翔し、13号達が向かった出入口へと動き出す。

それが二人の開幕の合図となった。

ウソの災害や事故ルーム 2

荒い呼吸。身体が思考についていけず嫌な汗が背中を伝い、疲労と焦燥感が全身を包み込んでいく。

「イレイザーヘッド。相澤消太、個性『抹消』。見た者の個性を一時的に使用不能とする。制限時間は己の瞳が閉じるまで」

背後からの奇襲を感じ、己の武器である特殊合金を編み込んだマフラーを気配が感じた場所へと放つ。しかし手応えはない、その事実が彼の焦りを増長させた。

「実に強い『個性』だ。だが……対処方法はある」

女の声が大広間に響き渡る、視界の隅に入れば個性の発動を止める事が出来る、その筈なのだ。

「その方法は簡単、視界に入らなければ良い。それだけの話だ」
(化け物が……ッ！)

実現不可能な事を平然と宣い実行する実力。相澤消太は本能で自分と相対する女の実力差を感じ取り、心の中で呻き声をあげた。

「オールマイトが雄英の切り札だとしたら、君は鬼札。ジョーカーと呼べる存在だ」

「……そりゃ嬉しい評価だ。オールマイトさん程とは言わんが俺も自分の実力には自信があるからな」

その鬼札を掌で翻弄するお前は一体なんなのだと思ひ、相澤は皮肉めいた笑みを浮かべながら返事を返す。

「鍛え抜かれた実力を活かすきれない戦場で一人戦わねばならない。正面きつての大立ち回りなんて君の専門外だろう？」

確かに大立ち回りは彼の本領を活かせる場所ではない、彼が最も得意とするのは奇襲からの一撃必殺。現状の大立ち回りなんて彼が最も苦手する行為だ。

「しかも実力差が天と地も離れている。なんという不運だろうか、もしもこの場にオールマイトがいたとしたら、君は自分の本懐である奇襲が充分に発揮出来るというのに、彼はこの場にいない」

その言葉と同時に背中、後頭部、腰、手、足の全てが触られた感触

を感じる。気配が微塵も感じられなかった。笑う事も出来ない、自分は勝負の土俵にすら立つ事すら出来なかったのだ。

「だからこうなる」

その瞬間、相澤の身体は地面に引き寄せられる。視界が回り真上を見上げる形になる。身体を動かさない、正確には動かさずとしてもそれ以上の力で地面に引っ張られているのが正しい表現なのだろうか。

「何故……お前が……この『個性』を……」

相澤はこの個性がなんなのかを知っている。自分が知りうる限り、この個性を持っている者は自分の生徒とその両親だけであり、その両親は『個性』を失っている筈。

彼は彼等から『個性』を奪った存在を知っている。

それは最悪にして災厄のヴィラン。個性が人類に発現した黎明期より存在する闇の王。全てのヴィランを統べる怪物。呼び方は様々あるが、人は畏れを持ってその存在をこう呼んだ。

「……彼等の『個性』を君は知っているのか。成程、彼等の薫陶を受けた者がいるとは知っていたが……まさか君とは」

「オールフォーワン……ッ！ 何故お前が……死んだ筈ではッ!?」

魔王 オールフォーワンと。

「……死の淵より蘇ったのさ。再び魔王として帰り咲く為にね」

（馬鹿な馬鹿な馬鹿な！ 何故こいつがここにいる!? 目的はオールマイトか？ まさかコイツの目的はオールマイトを殺す事か!? 違う！ コイツの実力があればこんな小細工なんて必要ない。散歩をするように雄英に挑みに来れば良い！ それだけで事たりる！）

相澤の脳裏で様々な憶測が飛び交う。一体何故この様な行為を？ 目的はオールマイト？ それとも雄英の崩壊？ オールマイトを殺害する事によってヒーロー社会を崩壊させようとしている？ 考えども考えども思考がまとまらない。

「落ち着くと良い。君が考えた理由でこの場にいる訳ではない」

（思考を読まれた……ッ!? まさか思考を読む『個性』を持っているのか!?）

「いや……これは技術だ。発汗、眼の動き、顔色。それらを見て導き出したに過ぎない……が、どうやら正解のようだね」

この程度の見戯。個性を使うまでもないと言わんばかりにオールフォーワンは思考を読み、言葉を続けた。

「僕がこの場所に来た理由は簡単だよ。あの子がここから離れたからだ」

「……あの子？ 一体誰の事を言っている」

相澤の疑問に答えずオールフォーワンは独白を続ける。誰に語り掛けるのでもなく、ただ独り言を呟くように。

「雄英体育祭まで会うつもりはなかったんだ。今回の一件は死柄木弔が自らの意思を持ってオールマイトを殺すと宣言し、自分から計画を立てたから見守っていただけに過ぎない」

「もしも計画が失敗すれば牢屋まで彼を迎えに行くつもりだった。どうせあの子には劣る。失敗は目に見えていた。だから……失敗をバネに憎悪を蓄え、更なる成長の糧にして欲しい。そう『僕』達は結論を付けた」

「まさか……糧にする間もなく瞬殺されるとは思わなかったけどね。人生は長い、こんな経験は初めてだ」

静かな大広間にオールフォーワンの笑い声が木霊する。澆刺とした女性の笑い声だが、今となれば吐き気を催す邪悪の下卑た声に感じる。

「あの子……とは誰だ？」

「君に教える意味が感じられない」

「答えろッ！」

相澤の怒号を無視してオールフォーワンは話を続ける。誰かと話している訳でもなく。ただ、独り言のように。

「あの子と今、会うのは好ましくないんだ。まだ時期じゃない、僕が正体を現すのはもう少し先」

「だからこそ……相澤消太。君が全員を避難させてくれたお陰で僕がこの場に現れる事が出来た」

「君のお陰であの子に試練を与える事が出来る。君には礼を言わなく

てはならない」

「ありがとう。君は僕のヒーローだ」

姿が見えなくても分かる。この存在は今、愉悦で歪んだ笑みで自分に礼を言っている。そして、自分が最善と思った行動のせいで目の前の魔王が現れたのだと。

だが、このお陰で理解した。

あの子とはつまり

「I—Aの生徒の誰かか……ッ！」

「さて……お話は終了だ」

オールフォードはそう告げると相澤の視界が黒に染まる、何か布状のものを顔に被せられた。そう理解すると同時にオールフォード以外の声が大広間に響き渡る。

「申し訳ございません！ 彼を所定の位置に転送するのは成功したのですが……一人、生徒をここから逃がしてしまいました！」

その声は先程の黒い靄を纏ったヴィラン。オールフォードから黒霧と呼ばれていた者だった。恐怖で声を震わす黒霧に、オールフォードは優しい声色で語り掛ける。

「構わないさ。その子がオールマイトを連れて来てくれる、このペー
ジを読んでみると良い」

「はっ……はあ……『オールマイト、僅か1時間で三件の事件を解決』
ですか」

「オールマイトがいない理由、理解出来たかい？」

「……活動限界、ですか？」

「そうだ。彼は『僕』と戦ってからかなり消耗したみたいだね。まさか
授業に参加出来ない程とは」

「だが……これで準備は整った。オールマイトは助けを呼ぶ声から逃
れる事は出来ない。絶対にこの場に駆け付けてくる、その行いが自分
の生命を削る事になると理解しててもね」

確信に満ちた声色だった、オールマイトがこの場所に来る。それは、太陽が昇った後には月が登るのと同じくらい当たり前だ、と言わんばかりに。

「あの子はオールマイルトを神聖視している部分が見られる。『オールマイルトこそ最も強く、最も偉大である』と勘違いしているあの子に現実を見せ付けてやるのさ」

「自分は三体の脳無を倒したのに、たった一体の脳無に苦戦するオールマイルトを見てあの子はきつとこう思うだろう『なんだ、オールマイルトって実は大した事ないんだな』と」

その言葉と同時に顔面に掛けられた布が外される。その瞬間、相澤は己の個性を発動しこの状況を打破しようとした。

「君にも紹介しておくよ。これが『対・平和の象徴』改人脳無。これからオールマイルトを苦しめる存在だ」

視界に映ったのは、黒鉄を彷彿とさせる黒く盛り上がった肉体を持ち、脳を露出したおぞましい怪物。脳無と呼ばれた怪物が相澤の腕を持ち上げ、まるで玩具を壊すかのように捻り潰す。

「——ッ!! ガアッ!」

「さて、その目も邪魔だな……閉じて貰おう」

そう言い、オールフォォーワンは相澤の両目の上瞼と下瞼を触る。その瞬間、上下から圧力がかかったように瞼が開かなくなる。

何も見えない暗闇の中。再び自分が地面に引つ張られる感覚に感じながら、相澤は思考の渦の中へと身を委ねた。

(逃げろ13号……1人でも多く生徒達を連れてこの場から逃げろんだ。勝ち目なんてない、敵はあのオールフォォーワン。教師が束になったところで勝てる敵ではない)

「——来い、オールマイルト。僕はここにいるぞ」

魔王、顕現す。

ウソの災害や事故ルーム 3

「さて、オールマイトを待つのは良いんだが……少し手持ち無沙汰。暇だな」

大広間で魔王は何気なく眩き、美しい黒い長髪を靡かせ周りを見渡す。近くには、魔王を守る従者の如く何も言わず佇む脳無と黒霧が控え、その足元には先程蹂躪したプロヒーロー イレイザーヘッドがボロ雑巾のように放置されている。

「必要がない……が。まあ余興程度にはなるだろう」

「……どうなさいましたか？」

「いや……時間潰しに。少しプロヒーローの意地がどれ程なものか試して見ようと思って」

そう言い残し、魔王はある場所へと足を進める。その先は水難ゾーンと呼ばれる湖に難破船が放置されている場所、そう記憶していた黒霧は魔王へと疑問を投げかけた。

「既に彼等が子ども達を殺してるでしょう。水難ゾーンには水の中で実力を出せる者達を配置しております。恐らく……貴方のご要望に答えられないと思いますが……」

「何を言ってるんだい？ ちゃんというじゃないか」

「は……？」

魔王は、その言葉と同時にある場所を指さす。その場所には水難ゾーンを生還し、水辺からコチラの様子を伺う子ども達が3人程存在しており、黒霧は子ども達の気配に気づかなかった己を恥じながら直ぐに個性を使えるように準備をする。

「ああ、大丈夫だよ黒霧。必要ない」

カツン。カツン。カツン。

軽い足音を響かせ、魔王は子ども達の元へと足を進める。魔王が近付く度に3人の内、一番背丈が小さな少年が身体を震わせ声を荒らげる。

「やべーって！ おい緑谷！ はやく逃げようぜ！ なあおい！」

「それは駄目だ……ここで背中を見せたら間違いなく奴らの思う壺。ここはもう立ち向かうしか……」

「戦うとか冗談だろ!? 相澤先生を見ろよ! 先生が勝てなかったのにあんなのに勝てる訳ねえ!」

緑谷と呼ばれた少年は拳を握り締め魔王を睨み付ける。その姿を見た魔王は嬉しそうに顔を歪ませ、3人へと語り掛けた。

「別に逃げるなら止める気はなかったんだけど……そっか……そっか」

この瞬間、緑谷は自分の選択が誤りだった事に気付く、だがもう遅い。覆水盆に返らずという諺があるように、一度行つた事はやり直しが出来ない。つまり、もう取り返しが付かないのだ。

「君達も僕に立ち向かってくれるんだね」

その瞬間、背中越しに魔王を見ていた黒霧ですら震え上がる程の悍ましい気配がこの場を支配する。何故、自分は生きているのか、嗚呼。こんな事になるならいつ舌を噛みきつて死んでしまった方がマシだ。味方である黒霧ですらそう思わせる圧倒的な存在感。

「ひっ……ひい……」

小柄な少年がいる場所が黄色く染まる。魔王の存在感に耐えられず、身体を震わせ尿を漏らしたのだ。だが、他の2人にそれを指摘する程の胆力は存在しておらず。

「君もかい?」

「ケ……ケロオ……」

魔王がそう問い掛ければ。残った一人の少女は、まるで蛇に睨まれた蛙に身体を動かす事が出来なくなる。その様子を見た魔王は、緑谷を除く二人の子どもの顔面へと手を伸ばす。

「……出来ないなら消えて貰おう」

その手が二人の顔面へと少し、少しと近づいて行く。手が顔面へと触れる。その直前、緑谷は魔王の眼前へと飛び込み、拳を振るわんと声を張り上げた。

「あああああああ!」

悲鳴にも似たその声は、自分の中に恐怖を掻き消すのが目的だったのだろう。恐怖を掻き消し、緑谷は魔王へと拳を放つ。

「SMAAAAAAAAASH！」

しかし……その拳は魔王へと届かない。魔王を庇うように脳無が前に現れ、緑谷の一撃から魔王を庇ったのだ。

「は？」

静まり返った大広間に魔王の声が響き渡る。その言葉に籠っていた感情は憤怒と疑問。一体何故、理解が出来ない。そんな感情が入り交じった声が響いた瞬間。緑谷の髪を乱暴な手付きで持ち上げ、魔王は問い掛ける。

「……何故お前が『ワンフォーオール』を持っている？」

「——ッ!?!」

底冷えする魔王の眼光が緑谷を射抜く。『ワンフォーオール』これは緑谷の大切な秘密であり、他の誰にも知られてはならない言葉。視線を狼狽えさせる緑谷を見て、魔王は整った顔を憤怒に歪ませた。

「巫山戯るな……巫山戯るなよオールマイト、こんな餓鬼に渡して何になる。力だけではなく人を見る目も耄碌したか？ 何故あの子を選ばなかった……僕の育てたあの子がこんな餓鬼に劣るとも言いたいのか！」

そう吐き捨て魔王は緑谷を放り投げる。投げ捨てられた緑谷は、宙を舞いイレイザーヘッドが倒れている隣へと落下する。

「他の追隨を許さぬカリスマに人心掌握！そして……オールマイト。貴様を遥か凌駕する圧倒的な潜在能力！」

「その全てが貴様の力を受け継ぐに相応しい存在だ！ 僕が彼を導き！ あの子はそれに答えた！」

「最高の『器』だ！ 下らぬ感情をかなぐり捨ててでもあの子に力を渡す筈！ なのに！ 何故!?!」

絶叫が大広間に響き渡る。一通り叫び終えた後、魔王は幽鬼の如く緑谷の元へと歩み寄り始める。魔王から発せられていた存在感がさらに強くなり、その場にいた者達全員が、魔王を中心に世界が歪んでいるような錯覚に陥る。世界すら歪ませる圧倒的な存在感を放ち魔

王は問い掛ける。

「……少年。君の名を覚えてくれないか？」

「ひっ……みっ……みっ……」

名前を名乗ろうとしても声が震え言葉にならない、そんな緑谷の姿を見て魔王は声を荒らげさせた。

「答えろ！」

「ひあ……あっ……あっ……」

呼吸すら満足に出来ない緑谷から視線を外し魔王は指を鳴らす、その瞬間。緑谷とイレイザーヘッドの身体が宙へと浮かび、両手を広げ、十字架に縛り上げられたかのような姿となる。

「……ここで君達を殺すのは簡単だ。だが、それは少しつまらない」

一つ、ゲームをしよう。イレイザーヘッド、君の教師としての意地を見せて貰おう。

そして……ワンフォーオールの後継者。君は力を受け継ぐに相応しくない存在だと、その心に刻み付けてやる。

ウソの災害や事故ルーム 4

悲鳴が鼓膜を震わせる。

眼前に広がる凄惨な光景、日常を侵食する圧倒的な悪意の前に少年はただ、震える事しか出来なかった。

「——君のせいだ。君が自分の身を犠牲にしなかったから彼は死ぬんだ」

絶望が視界に飛び込む、一体何処で間違えたのだろうか。あの時、逃げる選択肢を取らなかったから？それとも、今日学校を休まずにU SJに来てしまったから？それとも無個性の自分が『ワンフォーオール』を継承してしまった事？

「——だずげでえ……だずげでえくれえ……死にたくねえ……死にたくねえ」

助けを求める目をしていて。逃れられない死の恐怖から救いを求める目をしていて。ヒーローならば助けなければならない。ヒーローならば。

「彼を助きたいならこう言えば良い『彼の代わりに僕を殺せ』と、その言葉に僕は従おう」

魔王の嘲るような声が少年の耳を穿つ。魔王は全て理解している、少年が分不相応な力を得たただの非力な子どもだという事実、この場で声を出せない現実を。

『『オールマイト』ならばこの程度の危機、笑って打破出来ただろう』魔王は嗤う、震える事しか出来ず、目の前で助けを乞う存在に救いの手を差し伸べられない非力で凡百、小さな少年を。

「ヒーローとは助けを求める声に答えるのが仕事ではなかったのかな？ どうするヒーロー？ 君は彼を助けないのか？」

「お前達お得意の『自己犠牲』出来るものならやってみるよ」

その言葉を聞いても少年が口を開く事はない。ただ震え、地獄のような時間が過ぎ去るを待つ事しか出来ないのだ。

「既に四肢を砕いてある。この哀れなヴィランはこれから始まるゲー

ムの説明の為に死ぬ」

死ぬ、その言葉に少年の胸が締め付けられる。自分が声に出さないから目の前の男は死ぬ。怖くて立ち向かえない自分のせいで誰かが死んでしまう。

「……聞くな、緑谷。お前のせいじゃない。全ては目の前の奴が……」
そんな声を掻き消すように魔王は笑う。聞いた者全てに不快感を感じさせるような下卑た声を大広間に響き渡らせる。

「ハハッ……ハーハッハッハッ！ これはお笑いだ！ 僕のせい？
僕はちゃんとチャンスを与えているだろう？ それを無為にしてるのは彼自身だ！」

震える少年の目を覗き込み魔王は話を続ける。

「自分の命と相手の命を天秤に載せ、自分の命を選ぶ卑怯者。分不相応な力を手に入れて自分が特別だとしても錯覚したか？」

「手に入れた力が特別でも、お前は特別でもなんでもない。何処にもいる、ヒーローにすらなれない凡百の存在だよ」

その証拠に、お前は目の前の命すら救えない。そう言わんばかりに少年の眼前で一人の男の命が奪われようとしていた。

「——ッ！ 見るな！ 緑谷！」

横から聞こえる声に従おうとするも瞼を閉じる事も首を動かす事も出来ない。そんな少年の姿を見て、魔王は楽しげに笑った。

「四肢と胴体を反発させれば身体は千切れる。馬鹿でも分かる、当然の道理だ」

鮮血が舞う。力を失った肉の塊が地面へと転がり、断片から血液を流す。苦悶の表情のまま絶命した男の目が少年を射抜く。

「——ッ！」

恐怖が少年の身体を支配する。死体は何も語らないと宣う者がいるが、少年はそれが真実ではないと身を持って理解した。

その目が語ってたのだ

何故、助けてくれなかったのかと。

何故、見捨てたのかと。

俺を助けなかったお前なんて死んでしまえば良いと。

「さて、ゲームを始めようか」

魔王の試練が始まる。

「ルールは簡単。君達が死ぬか、それよりも先にオールマイトが駆け付けてくれるかだ」

魔王は二人に語る。

「僕が10数える、それまでに君達のどちらかが声をあげろ。分かっているとと思うがあげなければ両方とも殺す」

「声をあげた者は自分の四肢の好きな場所を選べ、その場所を僕が押し折る。ああ……同じ場所を二回選んでも良いよ。その代わり、その部分を引きちぎるけど」

「待て」

楽しそうに語る魔王にイレイザーヘッドは待ったをかける。その声に答えるように無言になり、言葉を促した。

「参加者は俺だけにしろ」

その言葉を聞き、魔王はイレイザーヘッドの目の前に立ち、歪んだ笑みのまま吐き捨てた。

「駄目だ」

「チツ！」

瞼を開く事が出来ないイレイザーヘッドですら、魔王の表情が理解出来たのか吐き捨てるように舌打ちをする。その様子が楽しいと言わんばかりに魔王は言葉を続けた。

「これは君の矜持と後継者の心を押し折る為のゲームなんだ。それなのに後継者が参加しないだなんて話にならないだろう？」

「後継者。先程、君のせいで人が死んだが……また君は見捨てるつもりかい？」

眼前の死体の眼が睨みつける、人が死んだ。他の誰でもない自分のせいで。

「——ヴェ」

喉の奥からこみ上げる嫌悪感に耐え切れず少年は嘔吐する。吐瀉

物が服を汚し、その苦い味が口の中を支配した。

「黙れオールフォーワン！ 貴様が殺したんだろうが！ 緑谷。こんな奴の声に耳を傾けるな。お前は何か一つ悪くない！」

「彼は助けを求めていた！ 後継者が身代わりになれば彼の命は助かっていた！ ならば彼を殺したのは誰だ!?!」

「貴様だろうがッ！ 貴様の戯れに付き合わされて死んだんだ！」

「薄汚い人殺しが！ オールマイトさんが来た時が貴様の本当の最後だ！」

イレイザーヘッドの言葉を聞いた魔王は笑う。心底愉快げに、無知を笑う愚者のように。

「……何が可笑しい」

「忘れたのかイレイザーヘッド？ 君の師匠達とオールマイトは確かに僕を打ち倒した、魔王として認めざるをえない。彼等は勇者だ」

「だが……勇者達は力を失った。君の師匠達は僕に力を奪われ、オールマイトは生涯残る大きな傷を負った」

故に、断言しよう。今の僕なら彼等を赤子の手を捻るように殺す事が出来る。

この場に他の者がいたとしたら妄言だと鼻で笑っただろう。平和の象徴、オールマイトを殺せる訳がないと。だが、この場において魔王の言葉を妄言と笑う者はいない。

「イレイザーヘッド、君は彼等の個性の恐ろしさを理解している筈だ。二人で一つ、相反する個性を持った者達、その個性を奪った僕の恐ろしさを理解していないとは言わせない」

「もう一度言おう、君達はオールマイトが来るまでの暇潰し。そして……話は終わりだ」

その言葉を最後に魔王は数を数え始める。数が0に近づく事に少年の身体は震えを増していく。そんな少年にイレイザーヘッドは語り掛けた。

「——緑谷、これから何があっても絶対に声をあげるな」

「持っていてくれオールフォーワン！ 俺の腕を！」

その瞬間、イレイザーヘッドの残った片腕があらぬ方向へと曲がっ

た。
悪夢は終わらない。

ウソの災害や事故ルーム 5

生徒を守る、それが教師としての使命

市民を守る、それがプロヒーローとしての使命。

故に、相澤消太は己を死地へと追い込む。全ては子供達を守る為に、自分がここで死のうが彼に一片の後悔はない、それがヒーローと呼ばれる者としての使命なのだから。

『消太ア！ どんな時でも笑えつてんだろうが！ なに……？ 辛い？ しんどい？ なら倍の苦しみを味わせてやるよオラア！』

『ヒーローが笑わずに市民が笑える訳ねえだろうが！ 大切なのは逆境でこそ笑う事！ どんな戦い方でも良い、絶対に勝て！ 卑怯上等！ 俺がいるから皆が笑える！ そんなヒーローが1番強いって事を忘れんなよ！』

(……生徒を安心させなければならぬ。怯える子ども達の心に安心を与えなければならぬ)

「ハッ。この程度で俺の矜持を押し折れるとでも思ったのか？ 魔王と恐れられた奴にしては随分やる事が小さいな」

虚勢を張る、痛みなど知った事ではない。奴はオールマイトが来るまでの暇つぶしだと言った。生徒を一人逃がしたと、黒霧と呼ばれるヴィランは言っていた。つまりこれは我慢比べ。授業をするより、ヴィランを捕まえるよりも簡単な仕事だ。

「吠えたなイレイザーヘッド。後、足の二本しかない事を理解している筈だ」

「さて、カウントダウンといこう」

数字が0へと近付く中、隣にいる緑谷へと語り掛ける。オールマイトの後継者、新たな平和の象徴。そんな少年は今、恐怖と絶望の真只中にいる。

「大丈夫だ緑谷。先生を信じなさい」

『絶望の中でこそ、光り輝くものがある。オールマイトの奴が良く言ってる言葉だ。お前も、何時か絶望に陥る事があるかもしれない。そんな時こそ』

(Plus Ultra それを乗り越えてこそヒーローは光り輝く)

「持っていけオールフォーワン！俺の足を！」

激痛と共に足の骨が折れるのを感じる。残り一本、正確には5回、まだいける。まだ笑っていられる。

「……まだ笑うか。イレイザーヘッド」

「当然。逆境で笑うのもヒーローの仕事だ」

何時も通りの笑みを浮かべる、どんな状況でもヒーローは笑わなければならぬ。

「——せんせえ……」

「大丈夫だ緑谷。静かにしている。次、声をあげたら除籍だ」

『プロヒーローにとって一番大切な事？ そうね……あの人も同じ事を言うと思うけど』

(『決意』を抱き続けるツ！この先、どんな状況になっても生徒達を守り抜く覚悟を！)

カウントが0へと近づく。残ったのは片足のみ、これを使うと次に待ち受けているのは四肢との永遠の別れ。本来ならば緑谷に頼み、この場を凌ぐのが合理的な考えなのだろう。

そんな合理的、クソ喰らえだ。

「残り一本……持っていけッ！」

四肢は砕け、次は別れの時間。

「……後継者。何故声をあげない？ 君は震えるだけなのか？ その力を持ち、君は動く事すら出来ないのか？」

「ひっ……ぼっ……ぼくは……」

「黙れオールフォーワン。俺の矜持を押し折るんじゃないのか？」

「折れるものなら折ってみろ。俺の矜持を」

「命と矜持、どちらを取るかと思えば……君は矜持を選ぶか。不合理だ。理解が出来ない、ワンフォーオールの継承者達に彼等、そして君。」

君達は自己犠牲を自らに強いる異常者なのか？」

理解に苦しむと吐き捨てられた言葉を聞き、イレイザーヘッドは笑う。その声を聞き、魔王から発せられる威圧感は一層強くなる。

「——何が可笑しい？」

「生憎、その不合理を貫き通す事で俺達ヒーローは毎日の飯を食べるからな。これを貫き通せない奴はヒーローを辞めるべきだと俺は思っているよ」

「……その不合理を貫くせいで君はここで死ぬ。それでも矜持を貫くのか？」

相澤消太は笑う、全ては生徒の心と身体を守る為に。

「そうだ。俺はプロヒーローであり教師でもある」

「生徒を守るのは教師である俺の仕事だ」

決して矜持を曲げるつもりはない。と、不退転の意思を魔王へと見せ付け。抹消ヒーローイレイザーヘッド 相澤消太は笑った。

「10」

その瞬間、カウントが再開される。数字が0へと近づいていく中、相澤消太は緑谷に語り掛ける。

「……良いか緑谷。決して声を出すな」

「こんなザマになってはいるが……俺はヒーローでありお前らの担任だ」

「お前の命は俺が守る。だからもう少しだけ我慢するんだ」

「1」

カウントが遂に1を告げた。

「何処でも好きな所を持っていけ！ オールフォーワン！」

最後のカウントを掻き消すように、緑谷の悲鳴が相澤の耳に響き渡る。訪れるであろう想像を絶する苦痛を覚悟した瞬間。

全てを掻き消す爆音と共に、USJが揺れた。

「……ゲーム終了、か。やるじゃないかイレイザーヘッド。矜持と後継者の命、両方とも守れたぞ」

USJに声が響き渡る。瞼が開かず姿が見えないが、声だけで分かる。その存在を、声だけでこの人になら全てを任せられると思わせる

安心感を。

「私 が き た ! ! 」

(遅すぎるんですよ……オールマイトさん)

平和の象徴。降臨す

ウソの災害や事故ルーム 6

『人を助けるって……つまり、その人は怖い思いをしたって事だ。命だけではなく、心を助けてこそ真のヒーローだと私は思う』

師の言葉が脳裏に響き渡る。理解していた筈だ、全てを守る平和の象徴となると覚悟したあの日から。この『力』を引き継いだあの時から。

眼前に映るのは、宙に磔にされ四肢を有らぬ方向へと曲げた後輩と、恐怖に支配された自分の弟子の姿。余程恐ろしい目にあつたのだろう、正気とは言えぬその姿を見て、怒りが身体の奥底から湧き上がる。

「嫌な予感がしてね……校長の話振り切つて来たよ」

「どうやら……正しかったみたいだ」

この怒りの対象はヴィラン達か？ 確かにヴィランに対する怒りもあるだろう。だが、それ以上に腹立たしい存在がいる。

「来る途中……飯田少年から事のあらましは聞いてきた」

身を焦がす怒り、その対象は。

「もう大丈夫！ 私が出来た！」

皆の心と身体を守れなかつた愚かな自分自身だ。

『どれだけ怖くても「自分は大丈夫だ」って笑うんだ。世の中、笑つてる奴が一番、強いからな』

今、師の言葉を守れている気がしない。

「来たか……オールマイトツ！ やれ！ 脳無！」

その瞬間、大地が悲鳴をあげる。凄まじい踏み込みと共にオールマイトと脳無の拳が交錯したのだ。ぶつかり合う拳圧だけで突風が幾度となく吹き荒れる。

「オオオオオオオッ！」

脳無の咆哮が木霊する。全ては命令された通り眼前の存在を討ち果たす事、

それ以外の行動など脳無に必要はない。

「……私と同等のパワーを持つてみたいだが、それだけで私を倒せると思ったら大間違いだ！」

拳を放つ脳無の腕を持ち、オールマイトは回転を始める。その回転により発生する現象は正しく台風そのもの。自然災害を人間の純粋な筋力だけで起こす神の御業。

「Delaware……hurricane……ッ！」

「SMASH！」

掛け声と共に人知を超越した筋力で放り投げられ、脳無は宙を舞う。視覚不可能な速度で投げ飛ばされ、そのまま水難ゾーンに存在する巨岩を粉砕した。崩壊する巨岩に目もくれず、オールマイトは大広間へと向かう。踏み込みだけで地面が悲鳴をあげた。弾丸を彷彿とさせる、常人では目視すら不可能な速度で大広間へと辿り着いたオールマイトは、主犯と思われるヴィランに向かって拳を構える。

「Detroit……」

(コチラに背中を向けるとは……その慢心、後悔すると良いッ！) 拳がヴィランへと放たれる。その瞬間、オールマイトは見てしまった。

振り返り、微笑みを見せてくるヴィランの顔を。

「久しぶりだね。オールマイト」

「……ッ!? あっ……貴女は!?!」

驚愕と共にオールマイトの拳が止まる。そして、その隙を逃す者はいない。

「……それが君の弱点だ」

瞬間、ヴィランがオールマイトの体に触れる。それだけでオールマイトは地に伏せる事となった。突然感じた圧力にオールマイトは対処出来ず動けなくなる。

「黒霧」

「はい」

黒霧と呼ばれたヴィランから放たれる黒い靄がオールマイトの全身を包み込む。

「1回戦は君の勝ちだ。だが……脳無は特別頑丈でね、まだまだ戦える」

黒い霞に視界が包まれる中、オールマイトの脳は驚愕に支配されていた。一体何故、それだけが彼の思考を支配し、現状把握を拒む。

（何故なのでしょう……何故、貴女が……生きていますか!?）

「第二回戦だ。無様を晒せ、オールマイト」

（お師匠様！）

黒い霞が霧散していく。大広間に現れた筈のオールマイトは、黒い靄によって姿を消した。

「そっ……そんな……オールマイトが……」

「クソッ！」

絶望に打ちひしがれる緑谷の声と激情を抑えきれない相澤の声を聞き、魔王は堪えきれない愉悦を顔に浮かべ嗤う。

「ハハッ……残念だったね。折角オールマイトが来たのに……彼は何一つ出来ずに消えたよ！」

「次は誰が僕の敵になってくれるのかな？ 後継者、君か？ それともイレイザーヘッド？ そこで震えている子ども達？」

緑谷、相澤、蛙吹、峰田を順に見渡し魔王は笑う。彼女は魔王、魔王は勇者と対峙してこそ意味がある。

「それとも……先程の状況を全く知らない別の子ども達かな？」

魔王が何気なく呟くと同時に、四人の勇者達が姿を現す。

「動くんじゃないやねえ霧野郎！ テメエが動いたと俺が判断した瞬間、俺がお前を即、爆破する！」

黒霧の背後から襲い掛かり。そのまま組み伏せ、手から己の個性である『爆破』を使い脅迫する少年、爆豪勝己。

「なっ……ッ!? いつの間にッ！」

そして……そんな姿にドン引きする少年、切島鋭児郎。

「ヤベーよ爆豪。言ってる事とやってる事がモロにヴィランだよ」

「黙ってるクソ髪イ！」

吠えたてる爆豪の声に呼応するかの如く、氷結の壁が魔王と緑谷達を分断する。

「遅くなっちまったみてえだな」

辺り一面に冷気を巻き散らかしながら呟く少年、轟焦凍。

「大丈夫ですか先生……って！ 不味いぞ轟！ 先生と緑谷。全然動かん！」

暴風を纏いながら宙で磔になっている2人を助けようと奮闘する少年、夜嵐イナサ。

「任せた」

「存外適当だな！ だが、任せられた！」

味方である黒霧を抑えられ、子ども達に包囲されても尚、魔王に焦りなぞ存在しない。

「ハハッ……これはやられたよ、黒霧。君が子どもに遅れを取るとはね」

「申し訳ありませんッ！ お手を煩わす事になってしまい！」

「良いんだよ。別に……むしろ感謝しているんだ」

震える黒霧に、魔王は優しい声色で返事をかえず。

「この子ども達を殺しておけば……オールマイトの矜持とイレイザーヘッドの矜持。そして後継者の心を叩き潰せるからね」

その言葉を聞き、相澤と緑谷は声を張り上げる。逃げろ、勝ち目がないと。

「駄目だ……駄目だかつちゃん！ お願い逃げて！」

「黙ってる糞ナード！ 役立たずは黙って死ね！」

緑谷の悲鳴にも似た懇願は本人よって切り伏せられる。

「お前ら！ 速く逃げろ！ ソイツはお前らでは足元にすら……いや、足の爪にも及ばない存在だ！ 分かつたらさっさと！」

「無理です先生、もう狙われています。それに傷付いた味方を置いて逃げるなんて男じゃねえ！」

相澤の言葉に不退転の意思を持って宣言する切島。そんな彼等の声を聞き、魔王は声高らかに笑う。

「……そうかそうか、立ち向かってくれるのか。魔王であるこの僕に」

「君達も僕の敵になっ てくれるんだね？」

魔王から放たれる空間すら歪める威圧感を感じながら、恐怖を押し隠すように轟焦凍は声を張り上げた。

「来るぞッ！」

魔王と力なき勇者達、ここに相対す。

ウソの災害や事故ルーム 7

「まあ……この程度か」

地面に倒れ伏す勇者達を眺め、何気なく魔王は呟く。実力差が天地ほど離れているのだから当然の結果だと結論をつけ、偶然見つけた面白い存在に思考へと移した。

「抑えられない自尊心。己が最強であるという慢心、自負。ふむ……肥大し歪んだ自尊心に実力が追い付いていない半端者と言ったところか」

足元に倒れている少年の頭を踏み付け、魔王は言い切る。魔王が見つけた面白い存在の名は爆豪勝己、緑谷出久と同じ中学校出身であり、雄英高校ヒーロー科を首席で合格した才能に溢れたヒーローの卵の一人。

「てっ……テメエ……フザけるな……」

横目で睨みつける姿を見て魔王は嗤う。滑稽だ、こんな事があるのかと心底愉快そうに。

「目が語ってるぞ『何故俺が負ける？ 巫山戯るな、俺以外は全員端役。お前は俺の華々しい将来への踏み台になるべき存在。だからさっさと俺に殺されやがれ』と、な」

「残念ながら君は特別な存在ではないし運命に定められた勇者でもない。少し凡庸から外れた程度の、何処にでもいる唯の少年だ」

魔王の言葉の一つ一つが爆豪勝己の心の底にある何かを崩していく。それは彼にとって最も大切なナニカ、彼の膨大な自尊心が隠している弱くて脆い部分。

「老婆心みたいなものだが。恐らく……僕が言わなければ誰も君に言わない、だから最後に教えてあげるよ」

やめろ、それに触れるな。

「常に頂点でいたいんだろう？ 自分より強い存在が心底不愉快なのだろう？ 自分だけが特別じゃないと気が済まないのだろうか？」

止めろ、俺の記憶に触れるな。

「その自尊心の『原点』に存在するのは誰だ？ 初めて君を讃えた存在

「は誰だ？」

「止めてくれ。これ以上、俺に触れないでくれ。」

「君は誰に初めて『特別』だと言われた？」

「爆豪勝己は思い出してしまふ。誰もが己を褒め称える前、初めて自分を認め、褒め讃えた存在を。」

『凄いやかつちゃん！　かつちゃんて何でも出来るんだね！』

「——ッ！　やめろっ！　モブが俺の心を乱すんじゃねえ！」

「耐えきれずに喚き散らす。だが、魔王から放たれる言葉は消える事はない。むしろ爆豪の荒れた様子を見て、嬉々として語り出す。」

「幼い頃から聞かされ続けた賛辞は気持ち良かっただろう？　端役から褒め称えられて、罵倒で返事を返しても讃えられるのは快感だったかい？」

「だが……自尊心だけならそうはならない。そこまで歪んでしまったのは理由がある。恐らく……その自尊心を歪めた張本人は、君にとって最も特別な存在だ」

『大丈夫？　頭打っちゃったら大変だよ？』

「脳裏に浮かぶのは幼い頃の記憶。丸太の橋から落ちた自分に駆け寄る小さな頃の緑谷出久の姿。」

「——違うッ！　アレは何処にでもいる道端の石ころだ！　特別なんかじゃねえ！」

「そうだ、デクは昔から誰よりも劣っていた。だから俺はモブの中でもアイツを覚えているんだ。」

「何故、僕の言葉でその石ころが思い浮かんだ？　何処にでもいるなら忘れているだろう？」

「それはデクが無個性で何も出来ない奴だからだ！」

「必死に否定する爆豪の姿を見て魔王は嗤い、一言一言、その全てを否定する。」

「そんな存在……自尊心の塊である君が覚えている訳がないだろう？　直ぐにでも記憶から消えている筈だ」

「デクと俺は幼馴染だ！だから覚えてる！　そうに違いない！」

「幼馴染関係なく、本当に端役だと思ってるなら直ぐにでも視界から

外れるさ。人間は興味の無い事を全く覚え無いからね」

「デクの癖に調子に乗るから不快なんだよ！ あんな糞モブが調子に乗って」

「取るに足らない端役なら、何をしても気にはならないと思うけどね」
何も言えなくなつた。反論は全て否定され、自覚せざるを得ない。
爆豪勝己にとつての緑谷出久という存在を。

「原点はその『道端の石つころ』君の歪んだ自尊心は、全てそこから始まつた」

「理解すると良い」井の中の蛙。大海を知らず『君は特別な存在ではなく、何処にでもいる唯のちっぽけな少年だということ』

そう言い残し魔王は爆豪勝己から視線を外す。全身の力が抜け、呆然と胡乱な視線を宙へと向ける存在に対して興味を持つ事が出来なかつたのだ。

「……そろそろ殺すか」

魔王の魔の手が勇者達へと襲い掛かるその瞬間、USJのゲートが開く。

「飯田天哉！ ただ今戻りました！」

声高らかに宣言する少年の後ろに存在するのは雄英高校が誇るプロヒーロー達。

「……どう致しますか？」

「ヴィラン連合の恐怖を叩き込む事に成功したからもう用はないんだけど……オールマイトの矜持はへし折ってッ!?」

黒霧の言葉に返事を返す魔王の顔が驚愕に染まる。想像外の出来事が発生した、そう言わんばかりの顔をする魔王の顔を見て黒霧は不安そうに言葉を重ねるが、魔王は直ぐ笑い出す。

「ハハッ……ハハッハッハッ！ やはり君は天才だ！ 僕が見込むだけはある！ 君は何時も僕の想像を超えていく！」

「黒霧！ 揺れが始まつた瞬間、直ぐにこの場を後にする！」
「……一体何が始まるので？」

不安そうに尋ねる黒霧に魔王は今まで一番楽しそうな笑顔で返事を返す。

「あの子が全力を出すのさ」

その瞬間、USJにいる者達は立つことすら不可能な揺れと爆音を感じた。まるで極地的な大地震がこの場で発生したような感覚に陥る。

地震が収まると同時に、この場にいる全ての者達は、信じられない光景を見た。

——それは塊だった、余りにも巨大な球体。人が小さな点にしか見えない程巨大な灰色の球体が大暴風ゾーンのドームの天井をぶち破り天へと姿を現したのだ。

「は？」

誰が言ったのか分からない。だが、皆の心はこの一言に集約していた。

いや…なにあれ、と。

「ハーハッハッハッ！ もーしらん！ 被害とかもうそんなの知らんわバーカー！」

球体の頂点から高笑い響き渡る。もうどうにでもなれと言わんばかりの感情の籠った半ばヤケクソ気味の高笑い。雄英にいる者達はこの声の主を知っている。

「腕がちぎれようが四肢をもごうが即回復！ 超パワーで粉碎！ 玉砕！ 大喝采！ マトモに戦ってられるかバーカー！ 死ね！ 死なないだろうけど死ね！」

「オラオラオラ！ 何処にいる！ どうせ他にもいるんだろ分かってんだよこちとらよオ！」

その名は引合石、凝山中学が誇る問題児。

そして現在、雄英高校が誇る問題児となった少年だ。

「来いやヴィラン共オ！ まとめてぶっ飛ばしたるわオラアアツ！」

引合石。彼は今、ブチ切れていた。

ウソの災害や事故ルーム 8

「どいつもこいつも！ コイツら人間じゃねえ！ いや人間だとしても俺はコイツらを人間とは認めん！ コイツらからは知性を微塵たりとも感じん！」

少年は激怒した。逃れられない現実、四肢をもごうが即回復し、拳圧だけで色々と破壊する怪物達の暴虐無人の暴れ様に腹を据えかねたのだ。少年が被害を抑えながら戦えども、怪物共に知性はなく。力の限り暴れる木偶の坊共、どれだけ神経を使つて戦おうが怪物達は全てを台無しにする。もう少年の心は限界だった。

「もう……良いよな。俺もうゴールしても良いよな？」

ヒーローにはヴィランの生命を奪わず捕まえ、安全を確保する義務がある。それはヒーローの卵である彼にもそれが含まれる。だが……圧倒的な力を持つて暴れる怪物達を捕まえるのは少年の実力を以てしても危険な行為であり、無駄に近付けば、間違いなく超パワーから放たれる一撃でミンチより酷い事になるのは馬鹿でも分かる。

故に、彼……引合石は自重を捨てた。

「初めてですよ……俺をここまでコケにした馬鹿共は」

その言葉と共に、ドーム内に存在する全ての建物が揺れ始める。凄まじい地鳴り、地面の悲鳴がドーム外まで轟く。超極地的大地震がドーム内で発生しているかのような爆音、思考能力を持たぬ怪物達ですら本能で危険を感じたのか辺りを見渡す。罅割れていく地面、浮かび上がる建物群、天変地異を彷彿とさせるその光景は正しく世界の終焉そのもの。建物が重力に逆らい空へと飛び立ち、大地はその蛮行に悲鳴をあげた。

「ハ、ハハ。ハハハハ……ハハハッハッハッ！ ハハハッハッハッ！」

笑う。嗤う。晒う。他者がその顔を見れば吐き気を催す様な悪人が見せる笑みを見せ引合は笑う、出力を間違えれば辺り一帯を破壊する己の個性。周りを気にせず使うと決めた瞬間に、怪物達の万に一つの勝ち目は無くなったのだ。建物群に引かれるように空へと

怪物達の身体が浮かび上がる。

「……お前らの身体能力は恐ろしい。拳圧だけで窓ガラスを割りワンパンで建物を粉砕するし家だってワンパンで粉砕だ。それで四肢をもいでも生えてくる回復力。化け物だろマジで」

だが、と付け加え引合は話を続ける。

「どれだけ力があるうとも……それを上回る圧倒的な質量の前には無力！ 相手が悪かったな！ 俺に勝てる奴は殆どいない！」

パチン、指を鳴らす。それを合図として空へと浮かび上がった建物達が黒い怪物達を中心にして一つの球体へと姿を変えた。

「……取り敢えずお前らのお仲間全員これにぶち込んでやるから覚悟しとけよ」

そう纏めあげ、引合は作り上げた巨大な球体を宙へと浮かばせる。地上から反発するように飛び立った球体は大雨暴風スペースの天井を簡単に破り、USJへとその威容を現した。引合も地上から飛び上がり球体の上へと着地する。

——その後の事は語るまでもないだろう。馬鹿はブチ切れながら登場をかました、それだけの話だ。

「何処だ黒い怪物オー！ どうせまだどこかにいるんだろお!？」

馬鹿は吼える。自分が作り出した球体の頂上からUSJに己の声を響かせんと声高らかに叫び、聞く者達をドン引せた『黒い怪物』と呼ぶ存在に馬鹿がどれだけ苦戦したのか分からないが、その存在に対して怒りを蓄えているのは声を聞くだけで理解出来る。

「ヴィランに告げるウ！ お前ら社会の最底辺のカス共に人権はない！ 速やかに投降しろ！ しなければ命の保証はナアイ！」

……ついでにヒーローの卵としてあるまじき発言をポンポンと吐き出す。これで良いのか未来のプロヒーロー、これで良いのか英雄高校ヒーロー科。因みに基本的人権はヴィランにも適応されている。故に馬鹿の発言は間違いなのだが、彼は現在ブチ切れているので気付いていない。そしてこの馬鹿を止めれる者もこの場に存在していない。

「……って、んん!? 女神がピンチじゃん！ 助けないと！」

ある光景が馬鹿の目に止まる。山岳スペースと呼ばれる場所に彼女が女神と崇め奉る存在、八百万百がヴィランと対峙していたのだ。しかもヴィランの方が有利に見える、それを見た瞬間。引合は山岳スペースの方角へと飛び立つ。弾丸よろしく一直線で目的地まで突き進み、ヴィランの眼前に着地すると、チンピラよろしく詰め寄り始めた。

「おうおうおう！ お前ヴィランの癖に誰と戦ってんのか分かってんのか!? ここにおられるお方はなあ！」

「巨乳！」

「美人！」

「賢い！」

「優しい！」

「恐らく金持ち！」

「後……俺より個性が凄い！ の6拍子揃ったそれはそれは凄いお方だぞオラア！ 分かったらさっさと降伏せんかワレコラボケカスウ！」

巻舌で捲し立てる引合の姿を見てヴィランは呆れ果てたような声色で八百万へと話し掛ける。

「……おい。コイツはお前らの知り合いか？」

「……はい。残念ながら」

（コイツ……ウチの存在には気付いてない。どうでも良いけどなんか腹立つな）

沈痛な面持ちで返事を返す八百万。そして存在を認識されていない耳郎は心の中で腹を立てる。

「……その娘の事は心底どうでも良いが、コチラには人質がいる。それはどうするつもりだ？」

「ウエツ……ウエエ」

人質として捕らえた上鳴に電気の流れる指を向けながらそう告げる。が、その様子を見ても引合は不思議そうに首を傾げ言葉を続けた。

「そんな事は知らん。なんで俺が男を助けにやならんのか」

「!?」

その言葉に、この場にいる者達全員が驚愕し上鳴は悲鳴をあげた。

「ウエツ！ ウエエエエエ！」

「あんた！ 本気でいつてんのそれ!？」

「引合さん！ いくら冗談でも言つて良い事と悪い事が有ります！」

「お前……流石にそれはヒーローとしてどうかと思うぞ……」

ヴィラン含めた全員からの非難を浴びながら、引合はヴィランの方へと歩み寄る。

「人質は殺しちゃ意味無いから殺せないよなあ？ それにお前の個性は見る限り電気系統らしいし、個性が分かれば対処方法は幾らでもある。ぶつちやけるとお前みたいな雑魚は何時でもぶつ飛ばせるんだ」

「……それ以上近付くなら、折る」

上鳴の首へと手を添え警告するヴィランに引合は嘲笑うような顔で吐き捨てる。

「折れるもんなら折ってみろ。首の骨折った瞬間にお前の全身を引きちぎつてやる」

睨み合うヴィランと引合。一色触発、その光景に八百万と耳郎が息を呑む。その瞬間

「かかっ たな あほが！」

「何を……ガツ!？」

拳大の瓦礫がガツンと良い音をあげヴィランの後頭部に直撃し、意識を刈り取る。倒れる瞬間にヴィランの魔の手から解放された上鳴は八百万達の元へと転がり込む。

「ヴィランに人権はナイイ！ 降伏しろつてわざわざ言つてやったのに無視するお前が全部悪い！」

「フハハハハ！ バーカー！バーカー！ ヴィランなんてただのカスなんだよカス！」

意識の失ったヴィランに罵倒をかます引合。女神の安全も守り、ついでに上鳴も助けヴィランをノックアウトし、気分は絶好調。そんな引合の背中に魔の手が近寄り始める。

「いい加減に……しろッ！」

その瞬間、引合の背中から全身に爆音が響き渡る。

「ウゲアアアアアアアッ!?」

耳郎響香 個性『イヤホンジャック』

耳たぶが長いコード状になっている。左右それぞれ6mまで伸ばすことができるぞ！最大の直径は12m！コードの先端にはプラグが備わっており、プラグを挿した対象に自身の心音を爆音の衝撃波として放つことができる！

「例え嘘でもそんな事言うのはどうかと思うよホントにびっくりしたんだから！」

「耳郎さん……聞こえてません。白目剥いてます」

「えっ！ 嘘!？」

「ウエエ……」

余談ではあるが、八百万が声をかけながら肩を揺さぶると即復活したらしい

ウソの災害や事故ルーム9

「……何なんだこれは。一体何なのだこれは!？」

現場は一言で現すならば阿鼻叫喚の地獄絵図、雄英高校のジョーカーである相澤消太は既に死体とほぼ変わらぬ状況、地面に伏す生徒と恐怖で震え上がる生徒達。

プロヒーローである彼等がこの光景を見て感じたのは己に対する憤怒である。

何故、もっと早く駆けつけてやれなかったのか。もっと早く駆けつけていれば、このような事態を防げたかも知れないのにと。

「……あれが首領のようだな」

義憤に駆られるプロヒーローの中でただ一人、即座に行動を移した者がいた。彼はスナイプ。テングロンハットを被り、両手に銃を持つプロヒーローは未だ君臨する魔王へと向け発砲した。

彼の個性は『ホーミング』遠距離にいる相手の位置が一瞬で理解出来どんな場所からでも急所を撃ち抜ける個性だ。

打ち出された弾丸は魔王の肩を貫かんと宙を穿ちながら突き進んで行く。だが、それが魔王を貫く事はなかった。

「黒霧。銃弾程度、気にする事はなかったんだよ？　僕があの程度でどうにかなるとでも思っていたのかい？」

「怪我をしないのが一番です」

魔王の眼前に立ち塞がった黒い霧が銃弾をブラックホールの如く吸い込む。銃弾は何処へ向かったのか、それをスナイプが考える前に彼の脇腹を鋭い痛みが走った。

その瞬間に理解した。この痛みの原因は己の銃弾であると魔王を貫く筈の一撃はあの黒き霧によって己を貫く槍へと変化したのだと。

「……空間移動の個性、どうやら敵は中々に強力のようだね。先行してた筈のオールマイトがこの状況を鎮圧出来てないとなると彼等の實力はオールマイトに匹敵、いやそれ以上となるのかもしれない」

一匹の鼠が冷静に状況を確認する。その鼠はこの世界で唯一無二、その強力な個性によって人間以上の知恵を持つことが出来た動物。

個性『ハイスペック』人間を遥かに凌駕するIQを誇る英雄高校校長である根津校長は怒りを抑え現状を分析した。

分析結果は一瞬で出た。

自分達では勝ち目がない。幸運の女神が自分達に微笑み、彼等がこの場を去ってくれる事だけがこの場における最善であると。

「……昔、羽無太郎にひまわりの種を送り付けた報いが来たのかな？」

「思わず現実逃避をしたくなる。周りの教師達も敵の実力を感じ取ったのか、臨戦態勢のまま動けなくなってしまった。プロヒーロースナイプの絶技とも言える銃撃が意図も容易く、赤子の手を捻るが如く返されてしまったのだ。そうなるのも無理もない。

「……どう致しますか？」

「ヴィラン連合の恐怖を叩き込む事に成功したからもう用はないのだけれど……オールマイトの矜持はへし折って……ッ!？」

眼前の敵の笑みが崩れ驚愕がその顔を支配した。その瞬間、USJが揺れる。それはプロヒーローの彼等ですら立っている事すらやとの大地震、局地的大地震がこの場で発生したのだ。

その瞬間、眼前のヴィラン達は黒き霧に包まれその姿を消す。

根津が望んだ奇跡は起こったのだ。それも意図も容易く、即座に。この大地震が奇跡の元なのだとしたら一体何が原因で起こったのか、それを理解する為に震源地である暴風災害ゾーンへと目を向ける。

そこには筆舌に尽くし難い光景が広がっていた。思わず根津が唸ってしまうほどの現実、近くにいたセメントス先生も思わずフラリと倒れそうになるような意味不明な現状が彼等の眼前に現れたのだ

「え……いや、何これ?」

扇情的なコスチュームを身に纏うプロヒーローミッドナイトの絞り出すような言葉に根津を肩に載せたプロヒーローヴラドキングは現実から目を背け呟いた。

「見たら……分かるだろう?つまり……そういう事だ」

「いや……こんなの分からないわよ! バツカじゃないの!?! なんてこうなってるのよ!?!」

最早キャラ崩壊したミッドナイトの絶叫がUSJに響き渡る。だが、それを止める者は誰もいない。誰もそれを諫める余裕がないのだ。因みに1番余裕がないのは根津である。彼は今現実から目を背けチューチューと唸っている。その姿は正しくげっ歯類の鼠そのものだ。普段の知的溢れた姿は消え去り最早野生そのものである。

「なんで暴風大雨ゾーンの天井がぶっ壊れてあんなデカブツが宙に浮いてんのよ!? 何がどうなればこうなるよ!?!」

宙に浮かぶ巨大な灰色の球体の上で高笑いをしてる馬鹿の声を聴きながら根津は乾いた笑みを浮かべる。因みにセメントスも浮かべていた。

「というか教員全員笑うしかなかった。」

ヒーローはいついかなる時も笑顔でいなければならないとはオールマイトの言だが、これを見て笑顔になれと言われても困る。

大半の生徒達は恐怖を忘れ呆然と球体を見つめ、殆ど死体の相澤も痛みを忘れ、苦笑いをしている。

「……あの人達の子供なのだからいつかはやらかすと思っただが……もうやらかしたか。引合、お前は馬鹿だよ。本当に」

嗚呼……本当に馬鹿だと相澤は呟いた。身体の拘束は既に解け、現実に戻り救出の為に動き出した教員の1人が此方に近付くのを感じ、涙目で縋り付く緑谷に微笑みかけ、馬鹿の姿をその目に焼き付ける。

「来いやヴィラン共オ! まとめてぶっ飛ばしたるわオラアアツ!」

馬鹿の怒声が響き渡る。相当腹に据えかねた事が起こっていたらしいと相澤がぼんやりと考えていると己の親友が目の前まで近付いてきた。

「Hey。イレイザー、男前が上がったようで何よりだぜ」

「遅いぞマイク。俺はいいからあの馬鹿と生徒達を頼む」

首元にスピーカーを取り付けた金髪頭のプロヒーロー、プレゼントマイクの言葉を切り捨てる。だが、そんな相澤の言葉をマイクを肩を

竦めて返事を返した。

「手足折れてて血塗れの死体の癖に何言ってるんだよ。生徒達には他の奴らが既に向かった。俺はお前ら担当だ。後、オールナイトが見当たらないんだが何処にいるんだ？ 校長が野生に帰るくらい混乱してたからさっさと解決してもらわないと校長先生はそのまま野生に帰るかもしれない」

ついでにセメントスの奴も過労死するかもしれないなど笑いながらマイクは相澤を担ぎ上げようとする。だが、その行動に相澤は待ったを掛けた。

「俺は後で良い。だから生徒を頼む」

「だからそんな事を言ってる状況じゃ……」

「マイク」

そう一言だけ言うと相澤は緑谷並びに生徒達を睥睨する。魔王という恐怖から開放された彼等は皆マトモとは言える状況ではなかった。

「ひっ…ひっ…ひいいッ！」

震えあがり全身を震わせ頭を抱える峰田実。

「……もう大丈夫よ峰田ちゃん。奴らはもう消えたわ……もう消えたのよ」

気丈に振る舞いながら峰田に優しく語りかける蛙吹梅雨。彼女の身体は小刻みに震えており、それが温度差から起こるものではなく恐怖からだと言うのは自明の理であろう。あのような惨劇があったのだ、当然の結果だ。

「先生え……ゴメンなさい。僕のせいで、僕のせいで」

「違う。緑谷、お前のせいじゃない。これは悪い夢だったんだ。落ち着きなさい」

相澤に縋り付くように啜り泣く緑谷出久。彼等の身体には何一つ傷はない。だが、心に大きな傷を負ったのは確かだ。

「糞ッ！ 糞ッ！ 糞ッ！ 糞がアアアッ！」

人一倍のタフネスで意識を取り戻した爆豪勝己。彼は怒りのままに吠え立てた、あの現場を知らぬ者に彼が何に怒ってるのかは分から

ない。彼の心は魔王によつて切開され傷口に塩を叩き込まれたのだ。魔王によつてズタズタに刻まれたプライド。涙が頬を伝つてゐる事を忘れ、ただ爆豪はただ獣の様に吠えた。

「……大丈夫か？切島、夜嵐」

爆豪の咆哮で目を覚ました轟は近くで倒れていた切島と夜嵐を何度も揺さぶる。彼の行動で目を覚ました2人は口々に礼を言いながら現状を理解する為に辺りを見渡した。

「……なんとか、な。サンキューな轟」

「……手も足も出なかった。が、次は必ず勝つぞ！」

夜嵐の宣言が響き渡り。その言葉に切島は笑つた。彼等は魔王によつて赤子の如く捻られ倒された、だが夜嵐はそれでも諦めずに次なる邂逅での勝利を決意していたのだ。

「……強えな。夜嵐は」

思わずそう呟いた轟の言葉を聞き、夜嵐は心底不思議そうに首を傾げた。

「負けっぱなしは嫌じゃないのか？俺は嫌だぞ」

「……そりやそうだな！次はもつともつと強くなつた俺達であの女に一泡吹かしてやろうぜ！」

3人は笑う、次の邂逅では絶対に勝つと。その時がくるか分からないがこの時、彼等の心が一つになったのは確かだ。

「勿論。爆豪、お前も一緒だからな！仲間外れにはしないで！」

夜嵐は爆豪にそう告げる。その言葉を聞き、爆豪は咆哮を辞め涙を拭きながら吠え立てた。

「……まだ言つてんのか糞暴風野郎！ぶつ殺すぞ！」

「おお！調子が戻つたな！その調子だ！」

「馬鹿言つてんじゃねえぞ！あれは俺の獲物だ！テメエら脇役は霧野郎でもボコつていやがれ！」

そう吐き捨てる爆豪にそりやないぜと切島は笑い轟は我関せずとある方法へと目を向けていた。そんな轟の視線に釣られるように三人が向けた視線の先には馬鹿が造り上げた物体Xが宙を浮いていた。大雨暴風ゾーンの屋根は吹き飛び、雨風が天井から吹き荒れてい

る。ついでにその上には謎の物体Xである。意味不明状況だ。

「おい、その糞紅白。何見てんだ……は？」

「どうしたんだよ二人ともって……は？」

「うおっ！ 滅茶苦茶デカイなあれ！ 誰が作ったんだあんなの！？」

意味不明な状況を呆然と眺めていると状況がさらに変化する。

空中を脳無と呼ばれた怪物とオールマイトが拳圧で空を舞いながら空中戦をしていたのだ。既に謎の物体Xでお腹はいっぱいなのに更に加えられた状況に追い付けずリリースする4人。空中にて行われる乱打の勝負。勝利したオールマイトが謎の物体Xに脳無を叩きつけ、その一撃が謎の物体Xを崩壊させ、タダでさえ壊れていた大雨暴風ゾーンをただの瓦礫の山へと変化させた。

「……俺。雄英高校を舐めてたかもしれねえ」

「これが雄英高校か！ 凄いな！」

「……多分違うと思うがな」

鼠とある教師の悲鳴がUSJに木霊する。だが、それに答える者はいない。

何はともあれ事件は解決したのだから

「フハハハハ！ ウルトラスーパーイケメン世界代表の俺とナンバーワンヒーローオールマイトを敵に回すとは馬鹿な奴らめ！ 知能がないからそうなるんだよバカが！」

「待って引合少年！ 今確実に個性解除したよね!? 完全に大雨暴風ゾーンが壊れたよ!？」

「オールマイトの一撃があまりにも強すぎて強制的に解除されたんです……流石オールマイト！」

「流石にこれを弁償するのはおじさん辛いかなって……聞いているかい？」

「そう言えばオールマイトって空中戦で色々ぶっ壊してましたね。でもオールマイトの財力ならこの程度余裕ですよ。まさか自分が原因なのに俺に半分払わせるとか暴挙に出ませんよね！ よね！」

「oh. shit! ほんと彼らそつくりだよ君は！」

余談だが完全に崩壊した大雨暴風ゾーンの目の前でそんな会話が
あつたとかかなかつたとか

ウソの災害や事故ルーム10

「いやあ……ヴィランは強敵でしたね」

今世紀最高峰の知能を持ち、今世紀最高峰のイケメンである完璧超人、引合石。つまりは俺の事だが、女神を助けた後の俺は他にあの無知暴虐の黒き怪物の残党を探す為に動こうとした。

「いや、アンタはもう動くなって。マジで何するかわかんないから動くな」

「待て！そこのパンク美少女耳郎響香ちゃん！俺のこの濁りなき眼を良く見てくれ！決して悪い事はしないから！」

動こうとすると何故かいつの間にか現れた俺のクラスメイトであるパンク美少女耳郎響香が耳のイヤホンジャックを俺に押し付けながら動きを封じようとしてくる。

「どうせ悪い事しかしない(悪いとは思ってない)でしょうが……取り敢えずアンタをここで解放したらマジにとんでもない事が起きそうだからここで大人しくしてな」

そう睨みつけるように言い捨てる耳郎は女神にロープを要求した。間違いなく俺を縛る為のロープである。俺が一体何をしようのだろうか。

「ヤオモモ ロープ出してすっごい頑丈で切れないやつ」

「分かりましたわー！」

言うが早いか女神は個性を使いロープを作り出した。黒く、鉄を彷彿とさせるそれはロープというよりもワイヤーと言うべき代物だった。

「特殊合金のワイヤーですわ！これならどんな力持ちでもこれを千切るのは至難の業です！さあどうぞ耳郎さん！」

簡単に特殊合金のワイヤーを創造する女神の個性の強力さに心の中で震え上がる俺、それが当然のように受け取る耳郎。どうやら女神の個性の恐ろしさが耳郎には理解出来ないようだ。やっぱり俺よりも強いわその個性。というかガチれば殆どのプロヒーローを封殺出来そう。

「ん。ありがとう」

その姿に少し物申したくなるがグツと堪えそのワイヤーを俺に使わせないように言葉を発する。

「俺よりも先にノ�されてるヴィランを拘束したほうが……」

「既に実行済みですわ！」

プリプリと身体から何かを放出しながら俺にそう言い切る女神が大変美しいのは置いておいて、俺は言葉を紡いだ。

俺の奥義その一『なんかそれっぽい事を言っつてこの場は煙に巻くの術』の使い所だ。

「しっかし八百万の個性は本当に凄いな。そんな個性だったら向かう所敵無しだろ」

「いえ……私の個性なんて轟さんや夜嵐さん、爆豪さん、そして引合さんと比べたら普通だと思えますけれど」

それに、私が本当に強かったのならばあのようにヴィランに上鳴さんを人質に取られることはありませんでした。と自嘲するように笑みを浮かべる女神。その表情から察するに本気でそう思っているらしく、それを察した俺は否定するように言葉を続けた。

「いやいやいや。その個性を使いこなす八百万には俺達が束になっても敵わない可能性があるよ。というか俺は勝てる気がしない」

「そうでしょうか……？」

勝てない戦はしない主義なのでそのような状況になる事はまずないであろうが、そんな状況になった場合の事を少しイメージしてみる。

「……骨の一つ残らず消滅させられそうだな。本気になった八百万にどうやって勝てるのかさっぱり思い付かん」

「引合さんの中の私のイメージはどうなっつていらっしやるのですか!？」

「……」
H A H A H A、そんなチートオブチート個性を持つてて何を仰るのやら。と笑っていると話に入っつてこなかった耳郎が不満そうに口を尖らせた。

「アンタ。ヤオモモを凄い評価してるけど私から見ればアンタのほう

がチート臭い個性持つてて滅茶苦茶強いと思うんだけど？」

あんな意味不明な物体作り出しておいて弱いとか冗談じゃない。と、俺の造り出した球体を指差して言い切る耳郎。

「八百万がガチったら俺なんて秒殺だぞ？」

というか女神は轟も夜嵐も爆豪も何奴も此奴も即殺出来るポテンシャルを持つてる。俺？勿論瞬殺だよ。個性使われなくとも瞬殺される自信しかない。

「……私にそんな力があるのでしょいか？」

「……そこまで言うなら試しに掌からなんでも良いから武器を出してくれないか？ 拳銃とかでも良いぞ……銃弾はペイント弾でも良いからさ」

「……そんなので宜しいのでしたら」

そう言うのと即座に拳銃を造り出し、女神はそれを俺に手渡してくる。ここまで出来て何故自分が強くないと思えるのだろうか？

「ほら、この時点で俺に勝ち目は無い。靴舐めて命乞いするくらいしかマジで手がない」

「……意味不明なだけど？」

俺の言葉に呆れた顔をする耳郎に更に分かりやすく説明を繰り出す。これで分からないなら俺はもう知らん。この場から逃げる。

「これでも分からないとか本気か？ ならこう言おうか」

核爆弾でも毒ガスでも作ろうと思えば何でも作れるんだろう？ 理解していれば何でも創り出せる。金でも銀でもニトロでもこの世に存在しない鉱物ですら化学式があれば創造可能。生物以外ならなんでもだったか？

俺の言葉に女神の動きが止まった。耳郎も俺が言いたい事が理解出来たのか信じられないような顔をして女神を見る。その気持ちは非常に良く分かる。俺も初めて聞いた時は『なんでこの全世界の宝は外に出てるんだ？ 美しくてしかも強いとか世界が保護しなきゃダメだろ』と思ったからな。

「やろうと思えば地球だって滅ぼせる。人類が生み出した兵器の設計図を理解していたらそれだけで人間武器庫だ。コストとして脂肪を

使うらしいがリスクとコストが割に合っていない」

「俺達が個性を使つて実現する事を八百万は人間の知恵を使つて幾らでも実現可能なんだ。正直八百万と会うまで絶対に敵わない個性なんて俺にはないと思つてたからな」

因みに何処その元担任は例外である。停止とかチートだろチート。絶対に何処のav作品のキャラだよあの教師は。

「力と金。この2つを無限に生み出せる八百万の個性はこの現代社会において神に等しい個性なんだよ。靴舐めるのでマジで許して下さい何でもしますから」

「いえ……舐めなくて結構ですわ」

女神の少しアレな顔を見て実は少し舐めたい気持ちがあつたのは生涯隠す事を決意する。というか女神の靴舐めるとかご褒美でしかない。跪いて靴を舐めたい

「深く考えなかつたけど……そう考えるとヤオモモの個性は本当に凄い。確かにウチじゃ勝ち目すら想像がつかない」

「……私にそんな力が？」

「ガチで八百万にどう勝てと……まあ八百万の話はこれくらいにしておこう。そろそろウエイウエイ言ってる上鳴も元に戻りそうだし」

HHHHHと笑いながら話を纏める。俺を縛る事すら忘れた二人は俺から視線を外し上鳴の方へと視線を向ける。

今だ！

「それじゃあサラバー！」

決め台詞を残し、俺は作り出した球体に引き寄せられるように宙を舞った。地上から2人の声が聞こえたが聞こえなかつた事にしてこの場を後にする。

この後、引合は空中で無知暴虐の怪物と殴り合いをしているオールマイトと顔を合わせたりしたのだが、そこはまた後日語る事としてしよう。

それよりも今語るべき存在がいる。

「私にそのような力が……？」

八百万百は考える。引合が語つた事を今まで想像した事すらな

かったのだ。

力ある者にはそれ相応の責任が求められる。ノブレス・オブリージュを第一として育てられたとある資産家のご令嬢である彼女は所謂箱入り中の箱入り娘。花よ蝶よと育てられた彼女にあのようなアイデアを与える存在は許されなかった。

だが、先程の場においてはキチガイ、畜生、蛮族。の三拍子揃ったヒーローの卵失格の糞野郎、引合石がそこにいた。まさかヒーローを志す雄英生の中にあのような畜生がいるとは彼女の御両親も思わなかったであろう。悲しいことだが彼女の御両親にはこれから数段階無視してワープ進化する彼女の成長を是非暖かい目で見守って欲しいものである。

馬鹿にとつては当然の思考回路なのだが彼女にとつては初めての体験。馬鹿の言葉を咀嚼し理解した彼女は徐ろに指を前へと向け個性を発動した。

「理解していれば何でも創り出せる……ならばこのような物も」

指先から生み出されたのは1つの弾丸。だが、弾丸を打ち出すには尻にある雷管を打ち付けなければならない。銃と弾丸、これは本来2つで1つの筈なのだ。

だが、八百万の指から生み出された弾丸は宙を裂き壁へと突き刺さる。

「えっ……ヤオモモ？」

その光景に困惑する耳郎響香に対して八百万百は震える声で返事を返す。

「……銃弾を撃つ為には雷管を叩かなくてはなりません。それは耳郎さんもご存知ですよね？」

「うん……だけどあの弾はあれだけで……」

「……雷管の直ぐ後ろにちよつとした衝撃を出す量の火薬を取り付けて作り出しただけですわ……ですがこれ程とは。いえ、もしかすると」

八百万が徐ろに手を振りあげる。その瞬間先程の弾丸が空中に大量に生み出されマシンガンの如く壁に穴を開けていく。

「……理解しました。確かに引合さんの言う通りですわ」

「ヤオモモ……？」

人が変わったようにブツブツと呟きながら八百万は様々な物を生み出していく。そんな八百万に耳郎が心配したように声を掛けると八百万は困ったような笑みを浮かべる。

「……過ぎた力は身を滅ぼすとお父様やお母様から口酸っぱく言われ育てられました。引合さんの言う通りです、私の個性は」

人間には過ぎた力かもしれません。

出会いが変われば人も変わる。ならばこそ違う成長もある。このUSJでの一件は八百万百が大きな運命の波に飲まれる物語の序章である。

閉話 魔王

「目が覚めたかい？死柄木弔。酷い顔だ、顔を洗つてくると良い」
とある雑踏渦巻く繁華街のとある路地。腐乱した生ゴミとそれを貪り食うネズミが闊歩する裏路地にある小さな雑居ビルの三階。隠れ家的なバーを彷彿とさせる内装の部屋に彼等はいた。

「女ア……なんで邪魔しやがった」

黒い霧から現れた女性が死柄木と呼ぶ少年を優しく起こす。それはまるで幼子を起こすように丁寧なものだったが、彼女がとても乱雑に死柄木を放り投げたのは彼女の後ろに控えていた黒霧が良く知っている事だ。

「開幕早々でガチガチにメタられて行動不能にされた者の言葉ではないね。まさかオールナイトに会う前にゲームオーバーにされるとは、これもまた経験さ」

「死ね」

己の感情のままに吐き捨て、その両腕を女性に向かって突き付ける。その行動を制止しようとした黒霧を女性は笑みを浮かべながら止め、パチンと指を鳴らす

少年の両腕が彼女の顔に触れると思われたその瞬間、彼の動きが止まった。

「短気は損気だよ、死柄木弔。『僕』の教育方針が甘過ぎるせいなのは理解出来るがそれにしても君はもう少し自制心を覚えるべきだ」

「怒りをただ闇雲に吐き出すだけでなく。蓄え、ここぞというところで全て出す。そうする事で本来以上の力は出せると言うものだ」

女性は優しく微笑みながら少年の頭を撫でる。その行動で戦意を削がれたのか、少年は腕をダラリと降ろし黒霧へと言葉を掛ける。

「疲れたし今日は寝る。『先生』が呼んだら起こしてくれ」

「畏まりました死柄木弔。良い夢を」

フラフラとこの場を後にする少年の後ろ姿を見送り女性はカウンター端に置いてあるテレビモニターの電源を付けた。

「やあ『僕』。君の教育方針に色々と言いたい事があるが……今日の僕は非常に機嫌が良い。だから本題から話そうじゃないか」

sound Onlyと表示されたモニターから1人の男の声が響く。

『この歳になって自分に説教されるのは中々感慨深いから何時でも歓迎するのだけど。それで……あの子はどうかだった?』

「最悪だよ。僕の『あの子』に開幕早々メタられてゲームオーバーさ。あのまま放置してたら黒霧以外全員刑務所送りさ」

いや。案外勘の良いあのヒーロー様ならあの子の事を察知して保護するかもしれないねと笑いながら結論を付ける女性の声を聞きモニター越しの男も薄く笑った。

「後1年……間違いないくそれまでに『あの子』は覚醒する」

『へえ……』

空気が変わった、女性の近くでコップを磨く黒霧はそう感じた。いや女性だけではない、画面越しにいるさる御方も心底愉快そうに同じように顔を歪めている筈だ。と感じ取る。

『個性終末論』世界は何れ1人の人間が持つ個性に飲み込まれ滅びる。というところある学者が残した理論だ。彼は酷く聡明で賢かった。彼が何れ来る人類の滅びに警鐘を出す為に学会で出した理論は封殺され、彼は悲しみと絶望の中で生命を落とした」

『誰もが御伽噺だと思った。個性とは人智を超越する力そのものだが、既に個性が生活の一部となっていた大衆共に彼の警鐘が届く事はなかった』

『この世界を滅ぼす個性等幾らでも存在しうるのにね』

例えば……あの突然変異で産まれたヤクザと彼の支配下にある少女の個性や八百万家に代々引き継がれる個性がその1つだね。と女性には笑い言葉を紡ぐ。

『だが……それらは真に彼が残した『個性終末論』に相応しい個性とは言えない』

「そうさ。確かに彼等の個性ならば世界にすら喧嘩を売って勝利する事が出来るだろう。だけどそれだけ、彼等は人類に対して勝利するの

が関の山。『個性終末論』には程遠い」

『だが。あの家が持つ……『引合』の持つ個性は彼等のような生易しいものじゃない。アレの個性の本質はもつと根源的な物だ』

モニター越しの男が昂揚したのか声に力が入り始める。その声を聞き女性は酷く邪悪な笑みを浮かべた。

「何故、人類に個性が発現したのか。『僕達』新人類は世界によって産み出されたのか。その答えは全て『引合』の持つ個性が証明している」

『あの個性の本質を知る者は僕達しかいない。オールマイトと共にこの僕に立ち塞がった彼等ですら自分の持つ力の本質に気付かず上辺だけを使っていたからね』

いや……もしかしたら理解したからこそ敢えて上辺だけを使っていたのかもしれない。と女性は笑う。モニター越しの男の声も心底愉快げに『確かに。ほんの一片でも良心があるならこの個性が持つ真の力を奮う事はないだろうからね』と笑った。

「そして……その切符を持っているのは、僕と」

『この僕と』

『あの怪物』だ」

女性は嗤う。酷く愉快げに、その美貌を悪に歪ませ、全ての悪逆を尽くして尚至れぬ悪の頂点、魔王の如く心底邪悪な笑みを浮かべ

「僕達の中で一番近いのはあの子だ。今日、あの子は知った筈だ。自分の持つ個性、そして理想とするオールマイトの弱さを」

あの子こそ僕の後継者に相応しい存在だ

——通信が切れる。どうやら『あれ』が勝手に落としたのだろう。まだ話したい事はあったのだが、許そう。なんせ今日は良い事があった。とても良い事だ

「どうした先生。やけにご機嫌じゃないか」

「ああドクター。僕の人形がちゃんと仕事を果たしていたのが嬉しくてね。それだと思うよ」

表に出したつもりは一切無かったのだが。それも仕方ない、許して

くれ。

「ああ……あの劣化コピーか。先生があんな役に立たん塵芥を創り出して喜んでた時は遂に気でも狂ったと思ったが……遂に役に立ったのか」

「嗚呼……僕のちよつとしたおままごとで無聊を慰めるのももうすぐ終わりだ」

「そうか……全てが終わったら約束は果たしてもらおうぞワシはアレが手に入ればそれで良い」

約束は守るさドクター。あの力さえ手に入れば他の全ては塵芥に等しい。あげるよ、あんなゴミ。

「全ては僕が真なる魔王へと至る為に」

楽しみにしているよ……本当にね

閉話 プロヒーロー

USJ襲撃から数時間が経ち。1ーAの生徒達は皆自宅に帰り、他の生徒達も安全を期す為強制下校となった。生徒達がだれもいない雄英高校、本来生徒達の喧騒で賑わう学園内は静寂に包まれていた。

「……本当に良いんだね？」

「早くして下さいリカバリーガール。この問答に合理性を感じない。俺は皆に伝えなければならぬ事、そして……やらなければならぬ事があるんです」

保健室、そこに2人の教師がいた。1人はこの保健室の主で治癒の個性を持つプロヒーローリカバリーガール。そしてもう1人は全身を包帯で包まれ身動き1つすら取れない男、1ーA担任プロヒーローレイザーヘッド。またの名を相澤消太。

「……もう一度だけ言うておくよ。私の個性は治癒の促進、細胞の活性化を行う事により高速回復を可能とするんだ。アンタの身体は殆ど死体と同然四肢は砕けついでに体の内側も外側もボロボロ。アンタが今意識を保っているのが奇跡のレベルさね」

心底呆れ果てたように頭を振り振りながらもリカバリーガールは言葉を続ける。

「そんな状況で治癒をやってみな。壊れた器では治癒に耐えきれなくて破裂する可能性だってある」

「死すら生易しい苦痛に耐えて寿命を削る事になるよ」

それは脅しであった。だが、リカバリーガールは理解していた。眼前の男がこんな脅しで止まるような男ではないと。

「くどいですリカバリーガール。はやく」

やはり無意味だったとリカバリーガールは溜息をついた。相澤の目は既に決意している。この目を止められようか、いや止められない。本来ならば何を言われようが止めなければならぬ筈なのにリカバリーガールはこの目には勝てない。

『すまん婆さん。こんなナリだがさっさと治してくれ。親友と愛する人が戦ってるんだ。俺だけこんな場所でノウノウとベットで寝てられない』

『ここで寿命削って今すぐアイツらの元に行けるなら幾らでも削ってやる。だから頼む』

思い出すのはイレイザーヘッドの師の姿。その目とイレイザーヘッドの目、決意に溢れたこの目にはどうしても勝てない、故にリカバリーガールは折れた。

「……『ダブルス』の悪いところばかり受け継いで。合理的もやりすぎちゃあ世話ないよ」

「……ヒーローとして。一教師として。この選択が一番合理的なだけです」

あくまでこれが最善だと言い張る愚か者に彼の師の姿を掛け合わせてしまい思わず悪態をつく。

「……恨むよ『ダブルス』」

静寂に包まれた雄英高校に苦痛を伴った叫び声が響いた。

私が初めてお師匠に夢を語った時、何かに驚いたように大きく目を開き、そしてその言葉を咀嚼するように何度か頷き、そして笑った。

『お前、イカれてるよ』

『だけど……そんなお前ならきつとなれるよ』

私がお師匠の力を引き継ぎ。ヒーローとして名を決めたあの時も、あの人は嬉しそうに笑っていた。

『オールマイト。全ての希望を背負う者、うん。良い名前じゃないか、似合ってるよ。俊典』

いつも笑っている人だった。笑顔こそが人々を救うと言わんばかりに笑みを絶やさずにいる美しい人だった。お師匠は私が理想とするヒーローだった。

『それが君の弱点だ』

『第2ラウンドだ。無様を晒せ、オールマイト』

だからこそ信じられない、あんな姿を。罪なき子供達を蹂躪し嗤

う。まるであの男、オールフォーワンのような悪意に塗れたあの笑みを。

「……オールマイト！ 聞いているのですか！」

「あっ……ああ！ すまない！ 少しぼんやりしていた！」

隣から聞こえる声で現実に戻る。どうやら自分は物思いに拭き取っていたようだ。あのような事件があった後だと言うにまだ私は引き摺っているようだ。

「大丈夫ですか？ やはりあの怪物との戦いのダメージが残っているのでは……？」

「だいじょーぶ！ 少し物思いに拭き取ってただけだ！ 安心して欲しい！」

USJでの一件が解決し、駆けつけた警察によって捜査が開始された。捕縛されたヴィランの数は70を超えており、その中には以前にも個性犯罪を行ったものがいたとの報告がされた。

しかしその件はあまり問題ではない。本当に問題なのは取り逃した彼女達だ。

「それなら良いんだけどね……しかし困った事になった。オールマイト、その話は本当なのかい？」

「ええ……あの姿は間違いなく私の師匠。志村菜奈の姿でした」

根津校長に聞かれ再度肯定する。あの時いた女性は間違いなくお師匠だ。だが、解せない。何故あの人があそこにいるのか、そして……何故。

「……お師匠は死んだ筈なのです、それは間違いない。なのに何故」「アンビリーバボーな事もあるもんだな。USJに攻めてきた敵のボスがオールマイトの師匠でしかも既に亡くなっているとはなあ……」

逆立てた金髪と個性的なサングラスが特徴的なプロヒーロー、プレゼントマイクが驚いたように言葉を吐く。それを聞き他の教師、プロヒーローが口を開いた。

「しかし……幾らオールマイトのお師匠だとしてもあの相澤消太をあそこまで一方的に勝てる者がいるのか？」

「スナイプ……いたからこうなったんでしょ。あんたが1番身に染み

て分かつてる筈よ」

テンガロンハットを被ったプロヒーロー、スナイプに扇情的な衣装を身に纏ったプロヒーローミッドナイトは呆れたように頭を振る。

相澤消太、彼はこの雄英高校で頂点の実力を持つプロヒーロー。抹消という個性を無効化する強力な個性から放たれる奇襲はあらゆるヴィランを確実に捕縛していた。

そんな彼の實力は彼等が良く知っている。並のヴィランごときでは手も足も出ない存在、それが彼の筈なのだ。

「……オールマイトの師匠と同じ姿をしていた者と黒霧と呼ばれていたヴィラン。彼等を捕り逃してしまったのは不味かったかもしれない」

血の如く紅い衣装を身に纏うプロヒーローヴラドキングがそう言葉漏らす。様々な言葉が飛び交う中、根津は言葉を発した。

「……あの脳が露出した怪物。脳無と呼ばれていたらしいね。あれが現場から合計4体発見されたらしいけど、オールマイト。君が4体も倒したのかい？」

「4体……あれが4体だど!？」

根津の言葉にオールマイトは立ち上がる。信じられない言葉を聞いたと言わんばかりの態度に他のヒーロー達は眉を細めた。彼らのプロヒーローとしての直感で嫌な予感を感じ取ったのだ。

「私は一体しか無力化していない！あれは私の100%のパワーと対峙し、恐ろしい回復力と凄まじいタフネスを持っていた！あんなのが他に三体も存在していたとしたら……」

そう言い、オールマイトは言葉の先の未来を想像し顔を顰めた。生徒達ではまだ相手にすらならない存在。あの子達の前にアレが対峙すれば間違いなく殺されていただろう。

「オイオイ……つまりなにか？その脳無って奴を倒した奴がいるってのか？それも生徒の中に？」

「……イレイザーヘッドが倒したのかもしれない」

マイクの困惑した声にプロヒーローセメントスが1番ありうる自体を提示した。

「まあ……その辺りは回復した消太に聞けば分かるでしょ。それよりもあの謎の物体の話しをしましょう」

同意するミッドナイトに他の教師達も納得したように頷き彼女の言葉の続きを待つ。その中でオールマイトだけはピクリと身体を動かし汗を流す。

「大雨暴風ゾーンから現れた謎の巨大な球体。あんな出力を持った個性を持つヴィランがいたとしたら私では太刀打ち出来ないわ」

「アノヨウナ状況ラウミダセル個性ハ『サイコキネシス』カ『念動』クライナモノダロウ」

「もしかすると他の勢力のヴィランの仕業なのでは？ その存在が彼等の邪魔をする為に行動を移したとか」

不味い、オールマイトは内心冷汗をかく。このままではあの球体を作り出した存在が誰かの話になってしまう。オールマイトにとってあの球体を作り出した存在、つまりは引合石なのだが。オールマイトは彼に対して非常に罪悪感とか後悔を感じている。

「(不味い……ヘタすれば引合少年に疑いが掛かってしまうかもしれない。あの子に危険な目に合わせてしかもヴィランかもしれない疑いを掛けてしまったら私は彼等に見せる顔がマジでなくなる！)」

何とかしなければ。と頭を捻る脳筋No.1ヒーローの背中越しにドアが開く音が聞こえた。

「まあ……あれを作ったのは引合石で、あの脳無を無力化したのは引合石なんですけどね……自分で言ってるんだがあの馬鹿ロクな事しないな」

そこにいたのはイレイザーヘッドだった。身体中に包帯を巻き、フラフラと歩く姿はゾンビを彷彿とさせるものだったが爛々と輝く目が彼が死人ではないと唯一証明していた。何時もような死んだ目でない彼の姿に他の教師達は言葉を失う

「先輩！ 傷はもう平気なのですか!？」

「13号か、婆さんの治癒受けたから問題ない。そんな事より話さなきゃいけない事が山ほどあります」

13号に一言だけ返すと相澤消太は言葉を続ける。

「で。オールマイト先生はすっかり話をしましたか？」

「ん!? なんの話かい!？」

「そりゃ貴方とオールフォーワンとの確執。『ダブルス』の持つ個性、そしてあの謎の女……いえオールフォーワンと呼称すべきですね。奴が何故この場に現れたのか……それは自分が知ってるんでこれから話します」

色々と話してはならない事をぶちまけた。これには根津とオールマイトは絶句である。

「相澤くうん!? H A H A H A! イキなり何を言い出すかと思えば H A H A H A!」

「チュー……チュー! チュー!」

呂律が崩壊するオールマイトと思わず野生に帰ってしまった根津校長。そんな2人を無視して相澤は話を続ける。

「あー……すいませんがこれから話す事は国家機密並の最重要機密だから。覚悟して聞いてください。マイク、ラジオでボロでしたら物理的に首が飛ぶと思え」

「What!?! 消太いきなりどうした!?! そんな事をお前が知ってる事は驚きだがそんな事をいきなりペラペラ言い出すとかお前らしくねえぞ?！」

困惑するプレゼントマイクの言葉に頭を振り相澤は話を続ける。

「……俺らしくない事をせざる得ない状況になったんだ」

溜息を吐き放った言葉はこの場にいる全ての者達の意識を何処かへ吹き飛ばした。

「引合石がヴィランに狙われている。ついでに狙っている奴はオールマイトの因縁の存在で最強のヴィラン、オールフォーワン。個性を奪う力を持つ最強の怪物です」

「どうやらオールフォーワンは引合石の両親である元プロヒーロー『ダブルス』の個性を奪っているらしく、彼等の個性は引合石の個性を片方ずつ持っていました」

「引合要。個性『引力』」

「引合紬。個性『斥力』」

「そしてオールフォーワンは引合石を育て上げオールマイトが持つ個性『ワンフォー』相澤くん！ ちよーつと待って欲しい！マジで全部言っちゃうつもり!?』というか引合少年がオールフォーワンに育て上げられたってどういう事!?』……だって貴方に任せるとずっと言わなそうですし、オールフォーワンが言ったんですよ『引合石はワンフォーオールを引き継ぐに最高の器だ僕がそう育て彼はそれに答えた』ってね」

慌てて言葉を遮るオールマイトをサラリと受け流し相澤は言いたいことを全部言いきった。

ワンフォーオール、オールフォーワン、引合石。言葉の真意を知らぬ者達はその意味を測りかねているが知っている者は顔を真っ青にしている。ぶつちやけオールマイトである。因みに根津校長は野生に完全に帰ってしまいチューチューと鳴きながら部屋の中を走り回っている。

「a a a h……つまり良く分からねえけど引合リスナーがやべえ状況にいるって事だな？」

「そうだ……って事でオールマイト。頼みがあります」

「……これ以上なにか？」

これ以上何を言われるのか困惑するオールマイトに相澤は言い放つ。その言葉を聞きオールマイトは完全に現実から逃避した。

「貴方の持っていた力の結晶。ワンフォーオールを俺に下さい」

「……は？」

閉話 相澤消太とオールマイト

「は……？」

いきなりの事に理解が出来ず困惑するオールマイトの姿を見て肩を竦める。目に固い決意を浮かべ、不退転の意志を持ち、相澤は言葉を続けた。

「ああ。オールマイトさんの後継者は既に存在している事もワンフォーオールも継承済みだって事も全て理解してます。そうですね……言い方を変えましょう」

「緑谷出久が持つ個性を俺が引き継いでも良いですか？」

「今度こそ完璧にオールマイトの時が止まった。」

「これから起こりうるであろう戦い……その責はただの一生徒である緑谷出久には辛い事となるでしょう。敵はダブルスとオールマイトが死力を尽くし、己の殆どを捧げて尚足りなかった怪物。そんな奴との戦いでワンフォーオールを持つ者を導入しない等、愚の骨頂」

そんな戦いに緑谷出久を参加させる訳にはいかないでしょう。と相澤は言葉を纏めた。オールマイトとて仇敵であるオールフォーワンが生きていたのだとしたら自分が戦う覚悟はある。だが、それと己の後継者に関しては話は別だ。

「しかし……私は彼の在り方だからこそワンフォーオールを引き継ぐに相応しい存在だと思ひ、力を託したのだ。そうおいそれと言葉を曲げる訳には。オールフォーワンが生きていたのなら……次こそ私が完璧に奴を……」

拳を握り締め、そう言い切ろうとするオールマイトの言葉を途中で遮り相澤は言葉を発する。オールマイトの言葉に心底呆れたような声色で。

「貴方の意志を継ぐ者……そんなのは全てが終わった後で出来るでしょう。合理的じゃない、合理的に考えるならばワンフォーオールはプロヒーローに譲渡すべきです」

「暗に緑谷出久からワンフォーオールを取り上げろと言う相澤の言

葉にオールマイトは眉根を細める。己が選んだ後継者が力不足だと
言われたのだ。そう感じるの間違いではない、本来ならば彼の後継
者の話なのだから彼が決めるべき。だが……状況があまりにも悪
かった。

宿敵、オールフォーワン。オールマイトとダブルスが命を懸けて倒
した筈の怪物が、ダブルスの個性を手に入れ復活し。ダブルスの息子
である引合石がオールフォーワンの毒牙に掛かっている可能性があ
るのだ。ダブルスを師として仰いでいた相澤消太にとって看過でき
ない状況だ。故に、どんな手を使ってもオールフォーワンを打ち滅
ぼさなければならぬ。だが、その為の力であるワンフォーオールは
ただの子ども、緑谷出久に託されていた。彼からすれば非合理を通り
過ぎて最早理解不能な状況だ。力なき勇者が成長し魔王を打ち倒す
英雄譚ですらここまで酷いスタートはないだろう。

オールフォーワンを倒す為にはワンフォーオールの絶対的な力が
必要不可欠。しかしその力を使いこなす者は弱体化しオールフォー
ワンはかつて立ち塞がった者達の力を手に入れ強化されている。

頼みの後継者は未だ個性を使いこなせぬ所か魔王に心を切り刻ま
れた。このままでは勝てない、相澤はそう確信していた。

「ワンフォーオールを即座に使いこなす器と己の鍛え上げた個性。
トップヒーローならば皆、誰もが持っている筈。貴方のようにとは言
いませんがヒーローならば誰もが自己犠牲の覚悟を決めています。
ベストジーニスト、特に彼はあなたのように人々の支柱となるべく
日々ヒーロー活動を行っています。俺が駄目なら彼でも良いでしょ
う」

「プロヒーローが駄目ならばトップヒーローよりは実戦経験の少な
きに少々頼りなさはありますが雄英BIG3の1人である通形ミリオ、
彼でも良いでしょう。彼ならばワンフォーオールを即座に使いこな
し、必ずやオールフォーワンを倒すと誓ってくれる筈です」

「どちらも貴方が選んだ後継者よりはマシだと言わんばかりに言い
切る相澤の首元を掴み上げオールマイトは睨みつける。

「ちよつ……ちよつとオールマイト!?!」

「へいへいへい！ 落ち着けてオールマイルト！ 消太！ お前も言い過ぎだ！」

その姿を見てミッドナイトとプレゼントマイクは慌てて止めに入るが2人に止まる気配はない。互いが互いに己の意見を曲げず睨み合っていた。

「彼が私を選んだ後継者だ……ッ！ いくら君でもそれ以上の暴言は……ッ！」

「殴りますか！ なら遠慮なく殴ってください！ それで緑谷出久を貴方の後継者から解放するならば俺は幾らでも殴られますよ！」

「ゆつくりと後継者を育てる時間は今はない！ さらに緑谷出久は今日の一件で心に深い傷を負った！ これ以上ただの子どもに貴方の重荷を背負わせるつもりですか！」

相澤消太の脳裏に震えながらしがみついてくる緑谷出久の姿を浮かび上がる。目の前のヴィランの死、そしてその死を無理矢理押し付けられたただの少年は、ただ震えていた。

あの子にオールマイルト（全ての希望を背負う者）の後継者を引き継がすのは余りにも酷がすぎる。

「……オールフォーワンは私がこの命を持つてして私が倒してみせる！ そして緑谷少年を私の後継者として育て上げてみせる！」

頑として意見を変えないオールマイルト。宿敵、オールフォーワンは自分が倒してみせると言い切り相澤はそれを否定する。

「今の貴方では出来ない！ 現実を見て下さいオールマイルトさん！

後継者を考え直してください！ 今は巨悪と戦う力が必要不可欠なんです！」

「人々には主柱が必要だ！ 緑谷少年はきつとその柱になれる！ だから私はワンフォーオールを彼に渡した！」

「ならば貴方の意志を継ぐプロヒーローに渡すのが最も合理的でしょうが！ もしも貴方という柱が消えて後継者が育つてなかったらどうするつもりですか！」

「私は死なない！」

意見を頑なに変えないオールマイルトに相澤は業を煮やし、言ってし

まった。

「人は死にます！ それはオールマイトさん。貴方だって変わりありません！」

「貴方のお師匠だってそうだったでしょう!？」

その言葉を相澤が放った瞬間、彼は宙を舞った。頬に伝わる鋭い痛みを感じ取り、自分の背中に衝撃が伝わるのを感じながら壁へと衝突した。

「消太!? テメエ何やってんだオールマイト！ 消太はまだ怪我人だろうが！」

親友が宙を舞い壁へと激突する姿を見てプレゼントマイクは怒りのままにオールマイトを弾劾するがオールマイトにその言葉は届かない。ただ相澤を見据え己の主張を言い張るだけだ。

「私は死なない……ッ！ 必ずやオールフオーワンを打ち倒し緑谷少年を私の後継者として育て上げてみせる！」

「……貴方が何を言おうとも俺が緑谷出久から個性を受け取るつもりです。本当ならば貴方に納得してもらいたかったが……こうなれば話は別だ」

ユラリ、幽鬼の如く立ち上がり相澤は言い放つ。話はどこまで行っても平行線、ならばこれ以上の問答は無用と言わんばかりに相澤は部屋を後にしようとする。

「ちよつと！ 何処に行くつもりよレイザーヘッド！」

慌てて止めに入るミッドナイトの言葉を相澤は背中越しに言葉を返した。

「……職員室です。やらなきゃならない仕事は山のようにありますので」

失礼します、とその言葉を最後に相澤は部屋を後にする。誰もが言葉を失い、ただ無言でオールマイトを見詰める。彼等の先にいるオールマイトはただ相澤が出ていった扉の先を見詰めボソリと呟く。

「私は負けん……相澤くん。私は絶対に奴に勝ち、緑谷少年を育て上げてみせる」

「全ての決着は私が必ず付ける……ッ！ 次代に私達の負の遺産は決し

「て残さない！」

「……勝つのは私だ」

最後の独白は部屋の静寂に飲み込まれるように消えていく。この日の会議はこれで終わった。相澤消太とオールマイト、彼等に溝を作りながら。

ワンフオーオールを継ぐ者&地獄の体育祭 グラントリノ

『——私の力、ワンフオーオールを預けたいと思える奴を見つけた』
嘗て平和の為に戦う女がいた、その女は何時も笑みを絶やさず人々の為にあらんと悪と戦い続けていた、力になりたいと思った。正義という言葉はアイツの為にあるとも思えた。

『この世界には主柱となる存在が必要です。そんな存在に私はなりません』

そんな女の元に一人の餓鬼が転がり込んだ。今どき珍しい『個性』を持たない餓鬼だったが、ガッツと根性だけは人一倍ある餓鬼だった。女に頼まれ俺は餓鬼を毎日血反吐が出るまで扱きに扱いた。何処かで泣き言でもぬかすかと思えば餓鬼は文句の一つも言わずに己を鍛え抜いた。

餓鬼はメキメキと力を付け、色んな奴らの目に止まった。餓鬼の力を羨望し追い続ける者、餓鬼の人間性に惹かれた者。そんな奴らの中でアイツらは少し変だった。

『——俊典ってさ。限界なんか知らんって感じで走り続けてるから俺達が知らない場所で倒れて死んでそうなイメージしかないんだよな』
『心配になっちゃうよね。まあ、こんな事を本人に伝えたって笑いながら問題ないって言うだけだろうけど』

アイツらは餓鬼を支えてやりたいと言っていた。自分達に名声は要らない。ただ餓鬼の負担の少しでも背負ってやりたいってな。餓鬼はただ願いを叶える為に走り続け、アイツらはその背中を押し続けていた。

あの餓鬼に、ヒーローなる以外の才能以外全てを母親の腹の中に忘れた奴にあんな出来た友人達が出来るなんて奇跡だと思った。実際奇跡だったらしく、餓鬼の負担を背負うとする奴はアイツらを含めて片手の指で数えるくらいしか出てこなかった。

餓鬼は自分の夢を叶えた。NO.1ヒーロー、平和の象徴と呼ばれ

る存在となり誰もがアイツの存在に安心と信頼を覚えるようになった。

そんな中で悲劇は起きた。黎明期から存在するヴィラン、ワンフォーオールの継承者達が立ち向かうべき存在が餓鬼の前に立ち塞がった。

女は既に死に、女の残した言葉だけが俺の原動力となっていた俺と平和の象徴となった餓鬼、そしてアイツらでその存在と戦った。三日三晩の激戦の末、アイツらは勝利した。

だが……代償は大き過ぎた。

餓鬼は力の大半を失い、アイツらは力の全てを失った。

『……グラントリノ。もしも私に何かがあった時、俊典の事を頼んでも良いか?』

女の言葉には何をいきなりと困惑した。死を覚悟し決意に溢れた顔、俺は圧倒され半ば条件反射で約束した。

時は流れ、アイツらの言葉は女と似ていた。

『頼むー。頭なら幾らでも下げるし靴なら幾らでも舐める！ だから……どうか俊典の奴をお願いします！』

何故と聞いた。力が無くなるうともお前らと餓鬼の関係は変わらない筈だ。だからこそお前らはそのままが良い、お前らがいるだけであの餓鬼の戦う力になる筈だと。そんな言葉にアイツらは泣きそうな顔になりながら頭を振り言葉を続けた。

『……私達ではもう駄目なんです、あれから俊典に連絡が取れなくなっていました』

その時、初めてアイツらの泣きそうな顔を見た。悔しさと怒りが混じり、どうしようにもどうにも出来ないと言わんばかりのあの顔を。

『私をもっと強ければ全て守れた筈なのに……って。俊典はそう思っているんだと思います。俊典は責任感が強いから私達の事まで背負ってしまっただけです……もう対等ではいられない。私達が背負いたくとも背負えなくなりました』

何を馬鹿な事とは言えなかった、俺もあの時から餓鬼からの連絡がサッパリと途絶えてしまっている。

『お願いします！　どうか私達の代わりに俊典を！　アイツを助けてやってください！　貴方にしか頼めないんです！　グラントリノ！』

分かった、俊典の事は俺に任せろ。

思わず口から出た言葉に俺は笑ってしまいそうになった、状況こそ違えど俺はまた背負ってしまった。女の意志、そしてコイツらの願いを。

……俺だけは最後まで背負い切らなければならない、託された物は決して軽くはない。

「――雄英高校にヴィラン乱入か……俊典の奴め。弛んどるぞ」

朝のテレビはヴィラン連合とやらがUSJに侵入したという内容ばかりだ。幸い死傷者は出なかったようだが精神的にダメージを負った者も少なからず存在するようだ。

「……雄英。確かアイツらの餓鬼が居るはずだな」

確か……前に来た手紙にそんな事が書いてあった筈だ。

「――約束しちまったしなあ……行くしかないよなあ」

俺の背中には女の意味とアイツらの願いがある。そろそろ俊典の奴にも後継者の1人や2人は見つかっただろう。ヒーロー以外の才能全てを親の腹に忘れた男に後継者を育て上げられるとは到底思えん。馬鹿みたいに自分の経験を語って困惑される姿が目に見える。

「行くか……雄英」

教員免許はまだあった筈、助けになってやる時が来た。電話を掛ける、勿論電話先はあの馬鹿だ。

「もしもし！　俊典か！　俺もそつちで教師やるから手回し頼むぞ！」

久しぶりに俺の言葉を聞き、困惑する馬鹿を無視して電話を切る。馬鹿から着信が山ほど来るが全部無視して電話線を引っっこ抜く。こうすりやアイツも腹を括るだろ。ついでに根津の奴に話を通す筈、これで問題ない。

「確か……石だったか？　アイツらの餓鬼だ。どんな奴かは大体想像がつく、まあ会ってみてのお楽しみだな」

手紙では教育をちよつと失敗したと書いていたが、恐らく誤差の範疇だろう。オールマイトの後継者と一緒に扱いてやらんこともない。「待っているよ俊典」

敵にはめっぽう強いくせに身内には意気地無しで臆病なお前も有精卵共と一緒に叩き直してやる。

臨時休校 相澤消太と引合石の憂鬱

朝の陽の光が窓を染め上げ、すっかり街に染まった鳥達が朝を知らせるように一日の労働を始める。時計を見れば短針が9を指しており、これがゲームや漫画の中であれば「やつべ！ 遅刻遅刻！」と主人公がバタバタと動いている事だろう。

「……なんだ9時か……まだ寝れるな」

部屋の主は眠たそうに眼を擦り、また眠りにつこうとする。そして飛び起きるように立ち上がり悲鳴にも似た絶叫を上げた。

「あーっ！ やべえガチ遅刻じゃねえか！ やべえやべえやべえ！

」

その瞬間クローゼットがひとりでに動き出し、中から制服が部屋の主の元へと飛び込んでいく。下着だけで眠っていたのかそのまま飛び込んできた制服を着てひとりでに開く扉から下にいるであろう母親の元へと駆け出していく。

クローゼットがひとりでに開いたり制服が飛んだり扉が触つてないのを開いたりとまるでポルターガイストを彷彿とさせる現象だが、これは全て彼の個性が為せる技、所謂才能の無駄遣いそのものでもある。

「母ちゃん！ ごめん今朝飯いらさないから！」

「引合、制服を着て何処に行くつもりなんだ？」

「そりや学校に決まつ……ん？」

居間にいるであろう母親にそう言いながら靴を履き。個性で玄関を開き大空へと飛翔しようとした瞬間、個性が使えなくなった事実が気が付いた。

そして気付く、自分に声を掛けたのは母親でも父親でもない。だが、自分はこの声の主を知っている。

「……なんで相澤先生が家にいるんですかねえ？」

「……事件の後の家庭訪問みたいなものだ」

包帯まみれの、古代エジプトの墓にありそうな姿となっていた先生を見て成程、と納得した瞬間。居間の方から母親の声が響く。

「石一ツ！ あんた今日学校休みでしょうが！ それに先生もさつきこられたんだしさつきとこつちに來なさい！」

「キメるわよー！」

「すぐ行きます！」

キメるといふ死の宣告に慌てて居間へと駆け出していく。慌てていた引合は自分と同じように自分の担任が慌てて居間へと向かった事実気付いていなかった。

今日は臨時休校だ。

「消太も大変なのねえ……そんなミイラマンになって。困った事に手をつ突っ込んでしまったら直ぐに誰かに相談しなさいね？ 聞くだけなら今の私でも出来るから」

「あつ。コーヒーで良いかしら？」

「いえ……大丈夫です」

包帯越しからでも分かる。苦虫を100匹同時に噛んだような悲痛に満ちた表情で背中越しに話し掛ける母さんの言葉に返事をする相澤先生という珍しいものを俺は見た。

「マジで何しに來たんすか先生」

「……先日の事件の件だ。お前が大暴れしたUSJの一件だよ」

何故か小声で話し合う俺達。背中越しに聞こえてくるコーヒーメーカーの音と母さんの楽しそうな声に嫌な予感を感じつつ、俺は菓子置きにおいてあったサルミアツキを舐める。

「はー……なるほど、つまり俺は無実ですね。あつ、先生もいます？」

俺がサルミアツキを差し出すと先生は一言札を言いながら口に含む。

「先生も好きなんすねサルミアツキ。これが好きなのって家くらいだと思つてましたよ」

「……慣れてしまったら癖になったと言うべきか、まあ好きになったな」

舐めれば目も覚めるし、合理的だと言う相澤先生。日本に片手で数えるくらいしかないであろうサルミアツキ好きがまさか自分の担

任だとは思わなかった。

「前にシヨート……轟にサルミアッキをあげたら半泣きで俺を睨んできた事があるんですよ。それっきり他人にはあげなくなっただけですけど、先生はイける口なんすね」

因みに大和にくれてやったらアイツは次の日に激辛カレーを俺にプレゼンしてきた、マジで悪気はなかったんだ。許して欲しい。

「……即刻そのテロ行為をやめろ。慣れてない奴にこれは劇薬だ」
「美味しいんすけどねえ」

ポリポリとサルミアッキを噛みながら次のを食べ始める。何故か諦めたような顔で此方を見る先生に首を傾げ、俺は話を続けた。

「んで……家庭訪問なんですけど、俺ほど真面目で成績優秀でイケメン天才な奴もいないんですもう帰って貰っても良いんですよ？ 次があるんじゃないんですか？」

「安心しろ。時間ならたっぷりあるから話ならゆっくり出来るぞ」

うわーい引合くんすっごい嬉しいなー

そうだろう？ 存分に話してやるからな

と、キヤツキヤツウフフフ。真顔で和気藹々な俺達の元に母ちゃんがコーヒを持って此方に来る。空気が張り詰めるのが分かる、何故か先生も緊張していた。

なんか分からんが流石母ちゃんだ。

「……それで家庭訪問だったかしら？ 先生はうちの子をどう思っていますか？」

直球ドストレートな言葉に先生が震え上がる。何故震えるのかさっぱり分からない『ぶつちやけオタクの息子さん問題児ですよH A H A H A！』と言ってしまえば死ぬのは俺だけなのに、そんな事を考えていると徐に母ちゃんに抱き寄せられる。突然の抱擁に混乱していると母ちゃんは言葉を続けた。

「……正直に言うとかと色々と教育を間違えた感はありません、けれどこの子の根っこの部分は昔から何一つ変わってません。これだけは私達の生命を賭けられます」

「えっ……？ いきなり何言ってるの？」

突然父ちゃんと母ちゃんの生命を賭けられた俺は困惑するしか出来ず、しかも親から教育間違えたと言われ少々落ち込む。

「聞きなさい……石。貴方は人を殺す事をどう思いますか？」

「……？ そりゃ犯罪だと思っけど」

人を殺したら犯罪者。馬鹿でもわかる事だと思っけど。

「……言い方を変えます。貴方は人を殺しますか？」

「母ちゃんと父ちゃんが殺されたら地の果てまで追い掛けて犯人は絶対に殺すけど……他の事で殺そうとは思わない」

いきなり何を言わせているのか。現状がさっぱり理解出来ず、俺は思うがままに言葉を発する。その度に先生が凄い顔をしているが、俺は先生の目の前で母ちゃんにハグされているのだ。正直いっばいっばい。

「……なんで私達を殺されたら相手を殺すの？」

「……家族だから？」

家族は絆であり宝。だから守りたいと思っし、それを傷付けられて我慢出来るとは俺は到底思えない。怒りで我を忘れる自信がある。

「……なら大丈夫ね！ 私達すっごい強いから！ 石が100人いてもまだ勝てるわ！」

「うん。知ってる」

そりゃ、俺をしばきあげれる父ちゃんと母ちゃんが俺より弱い訳が無い。というかなんか変な技術を持つてる父ちゃんと母ちゃんが負ける姿が想像出来ない。

「……細さんは変わりませんね。甘くて、残酷です」

そう言いながら寂しそうに笑っ先生。そんな先生を見て母ちゃんは笑いながら言葉を続ける。

「例え、何かを失っても私は私のまま。貴方にも教えたでしょ？」

「根っこさえ変わらなきや生き方は変わっても生き様は変わらない」
……っって覚えてるじゃない」

パチクリと目を広げ驚く母ちゃんと笑っ先生を見て疑問点が生まれる。

この2人……やけに仲が良くないか？

その時、俺の脳内で電流が走る！

生徒の親と教師のイケナイ恋！ 禁断の恋に走る2人！ それを知り激怒する夫！ 怒りのままに教師の前で嫁を~~××~~
「……石がなんか顔真っ青にして震えてるんだけど。何を考えているのかしら？」

「彼の考えている事は予想出来ないの……なんとも」

駄目だ……家庭崩壊の危機がまさかこんな所で来るなんて。どうすれば良い、どうやって先生を埋めれば……

「……裏山？ ドラム缶？」

「やだ……この子ったら何処に死体処理するか考えてる。何をどうすればそうなるのかしら」

俺が死体処理方法を考えていると頭部に鈍い痛みが走り、現実へと意識が浮上する。

「——ッ！ 何すんだよ母ちゃん！」

「馬鹿みたいに変な事を考えないの。どうせ禁断の恋とか考えてたんでしょ？ a vの見すぎよ、というかアンタの性癖じゃないでしょ？
あれ？ アンタの性癖は『幼馴染とイチヤイチャ』とかそんな感じでしょ？」

「色々言いたい事はある。なんで俺の脳内を読めたのかとか、なんで俺の性癖を知っているのかとか。しかも知っていたとして何故先生の目の前で言うのかとか。」

自分の顔が熱くなるのが分かる、いつそ殺してくれ。

「安心しなさい。消太はアンタのおしめも変えた事があるんだから、
兎更性癖の1つや2つ知った所で気にしないわよ」

「あ……紬さん。その程度にしてやって貰わないと引合の奴が限界なんです……」

突然の教えられる事実に俺の脳が追い付けずショート寸前になる。
相澤先生が俺の性癖を知って、先生は俺のおしめを変えた事があつて……つまり。

「つまり……先生は俺の兄さんって事なのか？」

「……落ち着け、血は繋がってないし俺に親はちゃんという。俺の親はお前の親じゃない」

俺にそう言いながらコーヒーを飲む先生、心なしか手が震えているのは気の所為ではないのだろう。

「あら？ 私達は貴方の事を息子同然の存在だと思ってるわよ？」
あつコーヒー吹いた。

臨時休校 終

引合石は激怒した。己の性癖を教師へと晒し、しかもある意味知りたくなかった事実を邪智暴虐の化身。つまり己の母親から教えられた彼は家を飛び出した。

某アニメのワンシーンにある『もう良い！私ア○ドル辞める！』と言わんばかりに家を飛び出し駆け出していく彼の背中を見た者は、いつもより彼の背中が小さく感じるだろう。彼の背中に掛けられる「今日は焼肉だからはやく帰ってきなさいよ！」という声を無視して引合は街へと走り出した。

街を駆ける彼に対して彼を知る者達はまーたなんかやつてるよと言わんばかりの視線を向けるが今日の引合にそれを構う余裕は一切ない、ぶっちゃけ今日はもういっぱいいいっぱいなのだ。

「うっうー……知らないもん。相澤先生が俺のおしめ変えてたとか……俺の性癖が親にバラされたとか……教育間違えたとか……知らないもん」

街を駆け抜け、とある海岸に辿り着いた引合は砂浜での字を描きながらぼんやりと海を眺めていた。朝焼けに照らされた海と、蒼く広がる大空を眺め、彼はまた泣いた。

引合石、彼は今完全にキヤラ崩壊していた。

「グレてやる……ッ！ 母ちゃんの言うこと無視してやる！ 買い食いして帰ってやる！ 晩御飯残してやる！」

そんな小さな叛逆を胸に秘め、彼は砂浜に寝転がり空を見上げる。蒼く広がる大空が彼の眼前に拡がり、そんな光景を彼は何も考えずにただぼんやりと眺める。どれだけ時間そうやってしていたのか分からないが、彼はハッと気付く

「待てよ……今、制服じゃね？」

バツと立ち上がり服装を見れば砂まみれの制服が視界に移る、散々にも程がある。母親に性癖をばらされたり知りたくなかった事を教えられたり制服は砂まみれになる、彼の中でいいようなない怒りがフ

ツツツと湧き出てくる。

誰でもいいから八つ当たりしたい、ボッコボコにしたい。その思いが溢れ出し彼は砂浜を後にする。

「……そうだ。ヴィランを殴ろう」

京都に行くような感覚でヴィランを殴ろうと決意する。そんな暴力の化身に支配された引合を止める者は誰もいなかった。

街にはコンビニよりもヒーロー事務所がある。ヒーロー社会となった現代社会では日夜現れるヴィランと対峙する為にヒーロー事務所が街にこれでもかと言わんばかりに配置されており、日夜現れる莫大な量のヴィランとそれに対峙するヒーロー、犬も歩けばヴィランに当たる。そんな世界に変わっていた。

今日も何処でヴィランが暴れている。

銀行内から異形の姿をしたヴィランが外へと走り出す。それを止めようとヒーロー達が獅子奮迅の活躍をするも、異形故の圧倒的な力で全てを吹き飛ばし街を駆けていく。ヒーローの一人が増援を呼ぶ為に無線に連絡を入れようとする。その瞬間、ヴィランが地面に叩きつけられ動かなくなる。

一体何事かと思ひ。ヴィランを地面に叩きつけられた存在を探し、ヒーローは言葉を失った。

「母ちゃんのばーかっつっ！ ばーかっつっ！」

砂まみれの少年がヴィランを足蹴にした後、泣きながらこの場を凄まじい速度で後にして行くのだ。ドップラー効果よろしく母親への罵倒を残しながら。

突然の出来事に対処出来ず、気を失い地面に倒れ伏すヴィラン。困惑するヒーロー。そしてそれを見守っていた住人は困ったように頭を振った。

「まーた引合がヴィランぶっ飛ばしてるぞ」

「また引合か。今度は何があったんだ？」

またアイツか、と。言いながら現場を後にする者達やその姿から何があったのかを考察する者達。

「制服砂塗れだったなアイツ。何やってたんだ？」

「海岸で女にプロポーズしてけんもほろろに振られたんじやね？」

「それだ」

と、色々な疑惑が浮上している中、ヒーローは突然訪れたアウエー感を全身に浴びながらヴィランを拘束した。

そんな事件の1連を撮影していたテレビ局はこの事件は使えないと判断し、そつと録画を中止した。

右を行けばヴィランがいて左を行けばヴィランがいる。今日も街はヴィランフィーバーな1日だったのだが、ヒーロー達は己の仕事を果たせずにいた。

1人の少年が突然現れヴィランを無力化しながら、涙を流しながら消え去るといふ意味不明な事態が街で多発したのだ。

泣きながらヴィランを足蹴にして母親への罵倒を放ちながらその場所から消え去っていく。この少年を捕まえて厳重注意を行うべきなのだろうが、ヒーロー達は少年を捕まえれずにいた。彼の移動速度が常軌を逸していたのだ、彼から目を離れた瞬間に姿を消しヴィランを無力化する。ヒーロー達が彼を止める為に呼び掛けるも彼には届いていないのか、彼はただ涙を流しながらヴィランを無力化していた。

そしてそれを見る街の者達は『またやってるよ』くらいにしか感じておらず。それどころか、その少年に手を振る者すら出る始末。

困惑するヒーロー達。一部のヒーロー達の中には『アレが落ち着いたら保護しに行けば良い』と言って放置する者達もいた。ヒーローとしてその言動は如何な者かと憤慨するヒーローもいたが、その発言をする者達全員が皆して遠い目をしていたのを見て誰もが口を閉じた。

そして……時間は昼を過ぎ夕暮れへと姿を変えていく。海は夕暮れ色に染まり、大空と海。その両方が少し寂しい夕暮れ色に変化している海岸で、少年はコンビニで買ったおにぎりをほうばりながらため息をついた。

「帰りたくねえ……帰りたくねえ……」

ブツブツと家出している子どものような事を言う少年の肩に手が

添えられる。その手の主を少年は見て、またため息を吐いた。

「うつわ……バードマンじゃん」

「……誰にだつて家に帰りたくない日はある。今日はウチの事務所に泊まるか？」

「……泊まる」

コクリと頷き、少年はバードマンと呼ぶプロヒーローの背中について歩き出す。

互いに何も話さずに歩いていく中、バードマンは少年を励まそうと話しかける。

「まあ……人生、何があるか分からない。何があつたのか知らんが気にするなよ」

「分かつてるけど……落ち込む」

そう言つてまた無言になる少年の姿を見てバードマンは内心慌てふためいた。理不尽が人の姿を持つて生まれた問題児が元気を失つていたので。彼はこうなつていた原因をある人から伝えられて知つていたのでが、それを言えば彼がまた落ち込むと知つていた為。敢えて言わないようにしていた。

何度か話していく内に、何とか元気づけようとしたバードマンはついに口を滑らす。

「まあ……性癖は人それぞれだからな！俺も好きだから安心しろ！」

しまったと思ひなんか誤魔化そうとするも時既に遅し、少年の顔が裏切られたと言わんばかりに絶望に染まり夜の街を駆け出した。

「……もう誰も信じられないっ！」

「カムバアアアック！ 引合待て！ 少しでも良いから待つてっ！ お前逃がしたら俺が紬さんに怒られるから！ お願い待つてリリース！」

夕暮れに染まつた街の中を少年とプロヒーローが駆け抜けていく。そんな彼等の姿を呆れたように見下ろしていた1人のプロヒーローがいた事をここに記しておこう。

何はともあれ引合石の臨時休校は終わった。色々と彼にとって

散々な日なのだったが、その経験が彼を強くしていくのだろう。多分、恐らく、きっと。

「先輩……なにやってるんですか」

呆れ果てたような声が夜の街の中に消え去った。

桃園の誓い（桃園ではない）

臨時休校が終わった次の日。結局昨日はバードマンに捕まり嚴重注意を受けた俺は学校に行くとなんな奴が俺をジロジロと見ていた。残念ながら俺は見世物じゃないのでその視線をフル無視して教室へと向かう。

「おっす引合！ 皆から噂されてたけどどうしたんだ!？」

「グッモーニン切島ア！ その話はやめろオ！ 俺が修羅になっても良いのかア!？」

教室に入るとド直球で切島が昨日の事を聞いてきた、どうやら昨日の一件を切島は知らないらしい。正直街中走り回ってたから知らない奴なんていない者だと思ってた。

「聞いたぜ引合！ お前街中走り回ってヴィランぶっ飛ばしてんだろ!？ 追いかけて来るヒーローガン無視してとかヤバすぎんだろ！ 個性の不正使用からの傷害とかもろにヴィランじゃねーか!？」

「いや……マジでやばいだろお前。大丈夫なのか?」

ヤベエヤベエと語呂が死んでいる上鳴と此方を心配する瀬呂。正直もろやってる事がヴィランだったので俺も何も言えない。しかもあの時の俺は怒りで我を忘れていた、正直何も言えない。

「あの姿……正しく鬼神そのものだった」

「まあ……なんかあったんだろ。クツキー食うか? 落ち着くぞ」

ウンウンと鳥頭を向けながらそんな事を抜かす常闇と取り敢えず焼酎の感覚でクツキーを渡してくる砂藤。取り敢えず砂藤に礼を言っただけ俺は言葉を続けた。

「……昨日ちよつと色々あつてな」

「いやいやいや。色々あったからって街中のヴィランぶっ飛ばすとか何がどうなつたらそうなるんだよ!？」

母親に性癖を担任にバラされたりその担任におしめ変えられた事がある事を教えられたりしたらこうなつたとは死んでも言えず、俺は乾いた笑みを以て返事を返した。

「……察しろ?」

「出来るかッ！」

クラスの大半が俺に説明を要求するが俺は死んでも説明をするつもりはない。　　とうかしたら俺の心が死ぬ。

クラス中を見渡して昨日の事を知りたがっているのを確認する、男子は今いる奴全員と女子が。

「一体引合さんの身に何があったのでしょうか……？」

「……多分心底どうでも良い事じゃない？」

俺の身を案じてくれている女神と俺を呆れ果てた顔で見る耳郎の姿。　　後はチラチラ此方を見る麗日と半分軽蔑した目で此方を見る蛙吹。

「ねー！　教えてよ！　何があったの!？」

「……例え女子でも俺はこの事を墓の底まで持っていくッ！　誰にも話さん！」

「えー！　ケチー！」

口を尖らせながら俺に説明を要求してくる芦戸と葉隠。　今いる面子では大体こんな感じだった。

「爆豪は性格がクソ煮込みの糞野郎で何時ヴィランになるか分からねえけど引合は既に実行済みとかウチのクラスヤバすぎんだろ。　ヒーローを指すのに論外が2人もいるぜ2人も」

もう知らん、言うなら言え。　とさえ俺は席にどっかりと座り込み窓をぼんやりと眺める。　空は雲一つない快晴で八つ当たりしたくなるくらい良い天気だった。

そんな事をしてしているとまたクラスメイトが登校してくる、ズカズカと此方に近付いてくる足音を聞いた時点で見なくても誰か察してしまふ。

「おう飯田か、どうしたそんな不機嫌な顔して。　なんか嫌な事でもあったのか？」

そう聞くと飯田は如何ともし難い顔をして返事を返した。

「いや……何も無い」

そのまま自分の席へと向かう飯田を目で追った後、俺はぼんやりと窓から景色を眺める。　遠くから女子の姦しい声が此方に届き、さらに

遠くから男子ともの絶叫が響き渡った。嫌な予感しかしない、というかこんな状況を作れる存在は俺の知る限り1人しかない。

「……なーんか廊下側が騒がしくねえか？」

「ちよつと俺見てくるわ」

瀬呂の言葉に上鳴が返事を返しながら廊下側を見渡し絶叫にも近い悲鳴をあげた。

「あんじゃこりゃあああッ!？」

上鳴の絶叫に、なんだなんだと男子が廊下を見て同じように悲鳴をあげる。まあアレを初めて見たのなら仕方ない、凝山では良くあつた事だ。

「……女子は八百万にガスマスク作って貰った方が良いぞ。」

「……アンタマジで何知ってんの？」

俺の善意からの忠告に知っている事を吐けと言わんばかりに睨み付ける耳郎に、笑いながら席を立ち廊下側へと向かう。

「親友が俺を煽りに来た」

「ハア？」

取り敢えず女神に女子の人数分のガスマスクを作ってもらうように頼み俺は石化している男子を押しつけて廊下へと出る。

「よお引合！ 童貞でブサイクの癖に昨日はやらかしたみてえだな！
ウケる！」

大名行列も顔真つ青のレベルで女子を引き連れ、その先頭で俺を見ながら笑う男。信条大和がそこにはいた。

「もうその規模の女を侍らしたか。ほんつと手が早いなお前」

「まあな！ いやあ雄英は最高だ！ 女のレベルが高くて気分が良い！」

清々しい程の屑つぶりを見せつけている大和、そしてそんな姿を見ても引きもしない女子。顔を惚けさせ大和を見る姿は凝山で良く見た姿だ。

「おい引合！ なんだよコイツ！ なんでこんなにモテモテなんだよ!?! 現実的に有り得ねえだろ！」

「諦めろ上鳴。これが真のモテ男の恐ろしさだ」

歯ぎしりをギリギリと鳴らしながら大和を睨み付ける上鳴にそう言う。上鳴は涙を流しながら教室へと戻っていく、強く生きろよ。

残ったA組連中の視線を受け俺は大和を説明した。

「これは俺とシヨートと同じ学校の出身の天下一のモテ男だ。個性は『フェロモン』』生物学的にメスと分類される者全てに対して魅力的な体臭を出す変態だ」

その個性を聞いて絶句する奴らを見無視して大和は俺を煽る。

「なんだ？ 嫉妬か？ うん？」

「片っ端からメスの動物集めてお前に向かって放つぞ」

「すまん。調子に乗った」

俺の言葉を聞いて即座に謝る大和。そうなるなら煽らなきゃ良いんだが

「煽れるうちに煽つとけが家の家訓でな！」

「だから捨てろって言ってるんだろ？ その糞の役にも立たん家訓」

大和の取り巻きの女子が俺を睨み付けるが俺はその視線を全部無視して言葉が続ける。

「……マジで俺を煽りに来ただけか？」

「いや？ 心操がお前の噂を聞いて心配してたから安心させるついでにお前を煽りにきた」

そう言いながら大和が手を招くと居心地が心底悪そうな顔で心操が出て来た。

「顔が死にかけてて、俺が心配してしまうんだが？」

そう言うと大和は笑いながら心操の背中をバンバンと叩きながら言葉が続けた。

「すまんすまん！ 童貞にはちよつと辛い環境だったな！」

色んな意味で死にかけの顔で心操が俺に話掛けて来る。

「なあ……コイツって何時もこんな感じなのか？」

「諦めろ、ソイツは常時そんな感じだ。大和が傍にいる時点で花の高校生活はないと思え」

「いや……それは良いんだけど。アンタ、ほんと凄いな」

ある意味尊敬するよ、と。俺に言い心操はまた女子の群れの中へと

消えて行く。そこ辛いだろうに良く戻ろうと思うな、と感心しながら俺は大和の顔面にアイアンクローを掛けた。

「あだだだだ！俺の天下無双のイケメンフェイスが!？」

「大和くん!？」

悲鳴をあげる女子を無視して、俺は大和を女子の群れへと放り投げた。溢れんばかりに殺意の籠った視線を無視して俺は大和へと語り掛ける。

「邪魔になってるから巢に帰れ巢に」

「いつつー……お前みたいな不細工になつたらどうするつもりだ!？」

「知らん。その顔がグチャグチャになった方が幸せになれる奴は多いと思うぞ」

その会話を最後に大和は女子を引き連れて普通科の方へと消えていく。

女子が消えて俺も教室へと戻ろうとしたが、その腕を誰かに掴まれる。

「なあアンタ！アイツなんとかしろよ！」

その声の方向を向けば、さきほど女子がいた場所に男子共が集まっていた。正直むさくるしいのではやく帰って欲しい。

「アイツが入学早々女を侍らせたせいでアイツに女が集中して俺達の方に誰も来ないんだよ！アンタはアレと同じ学校出身なんだろ！」

アイツをなんとかする方法知ってる!？ なんとかしろよ！」

その言葉を皮切り男子共の嘆願が廊下中に響き渡る。昨日の一件で正直疲れていた俺は心のままに叫んだ。

「んなもん俺も知りたいわボケ！俺だってアイツを何とか出来るならとうに何とかしとるわ！」

「はあ!？ なら俺達はどうすりや良いんだよ！このままじゃアイツのせいで俺達の学生生活台無しなんだよ！」

そうだそうだと声を貼りあげる男子共。教室から感じるソイツら何とかしろという視線。その瞬間、俺の中の何かが弾けた。

眼前の男子の顔面にアイアンクローを掛ける。突然の凶行に困惑

する男子共に対して俺は声を張り上げた。

「グチャグチャグチャグチャと……つまりお前らは自分じや大和から女を寝取れねえから俺に助けを求めてんだろうが！ とんだヘタレペニス野郎共だな！ お前らのそのちんこは飾りかア!? ああん!」

突然の暴言に困惑する男子共に俺は言葉を続ける。

「アイツは中学時代でもあんな感じだった！ だがな！ うちの中学ではアイツ1人だけがモテてたわけじゃねえぞ！ それが何故か分かるか!?!」

「んなもん知るかよ！ ソイツはなんでモテてたんだよ!?!」

男子共の中から声が上がる。俺はその声にあらん限りの声で返事を返した。

「ソイツの魅力が大和よりもあつたからだ！ 確かにアイツの個性は女を寄せ付けるがアイツ以上の魅力があるなら問題ないんだよ！

大和は糞以下の人間性だが自分の女だけは死ぬ程大切にしやがる！ お前にその度胸と甲斐性はあるのか!? ねえだろ!」

俺の雰囲気を押されていく男子共を見て俺はさらに言葉を続けていく。

「良いか！ アイツは確かに強大だ！ だが絶対に勝てない敵ではない！ 己を磨き、誰もが羨む人間になった時、お前らはアイツに勝つ事が出来る!」

「お前達に彼女が出来る可能性はあるんだ!」

男子共は俺の言葉を聞いていた。俺の経験が籠った言葉がアイツらに届いたんだ。やはり実体験のない言葉に力はない、経験してこそ言葉には力がある。

「俺だつてお前らみたいに苦しんださ！ 3年間ずつとな！ 分かるか！ 3年間だぞ！ 己を磨き、なお届かない星へと手を届かせる為に!」

そう……あの時の俺では届かなかった。

「お前らはそうやって文句をたれるだけなのか!? 見果てぬ彼方にあ
る星は確かに遠い……だが、それを掴んでこそ！ 星を掴んでこそ己

の宿願が果たせると思わねえのか?!」

この瞬間、男子共の咆哮が廊下に響き渡る。俺だって星を掴みたい。と、誰もが思い、叫ぶ。俺はその咆哮に負けじと声を張り上げた。

「お前らアアアツ！ モテたいかアアアツ！」

「オオオオオオオオツ！」

「俺だってモテたい！ お前らにその為に……星を掴む為に己を磨き抜く覚悟はあるかアアアツ！」

「オオオオオオオオオオツ！」

その咆哮でビリビリとガラスが揺れる。その咆哮に悲しみの色はない、既に皆の目には決意が宿り、声には強い意志が宿っていた。

「……お前らの意思は良く分かった！ お前ら全員俺に付いてこい！俺と共に見果てぬ星を掴みに行こう！」

あの時の俺は少々疲れていたのかもしれない。じゃないと中学自体と同じ誤ちを繰り返す訳が無い。

「ここに桃園の誓いを……我ら異なる時、場所に産まれど！ 共に見果てぬ星へと足掻き続け！ 研鑽を続ける事を誓う！」

「共に往こう……我が同胞達よ！」

腕を張り上げ雄叫びをあげる自分と男子共。何故俺はまた同じ事を繰り返してしまったのか、何度考えても分からない。だが、やってしまった事は仕方ない。

「星を掴め！ さあ行くんだ！ 敵は強大だが倒せぬ訳ではない！」

その言葉を残し俺は教室へと戻る。テンションが上がり切った男子共はそのまま自分達の教室へと戻って行った。彼等は示された道突き進むのだろう、頑張つて欲しい。

教室の中ではあのテンションに当てられたのか一部の男子が燃え上がっていたり、女子が変な物を見る目で此方を見ていた。

「いや……アンタほんとになんなの？」

「今をときめくイケメン天才の引合石君だが？ サインいる？」

俺の存在自体を問う耳郎にノートを破りサインを描いて渡す。渡されたサインをマジマジと見詰め耳郎はボソリと呟いた

「……いらないんだけど」

そんな事をしてしていると、校内放送が流れ始め俺はその放送に耳を傾ける。

『えー……1—A 引合石君。至急職員室まで来て欲しいのさ』

「……今度は何やったの？」

突然呼ばれた俺の名前、正直嫌な予感しかしない。そんな俺に耳郎は呆れた顔で話掛けて来た。

「……正直。前科が有りすぎてどれがどれやらさっぱり」

そう言つて肩を竦めながら席を立つ。ここまでやってまだHRの時間にすらなっていない事実若干震えながら俺は職員室へと足を進めた。

危機 退学 回避方法

人間。予想外の出来事に出くわすと思考が止まると言うが、そんな自体に出くわす人はそういないと思う。当然だ、そんな事態がそうポンポンと起こられたら此方の身が持たない。

「——って訳なんだけども……聞いてるかい？」

「ああ……まあ……多分」

眼前の下畜生齧歯類の言葉がその事態であり、俺は既にいっぱいいっぱいになっている。昨日今日とで神は一体俺に何を求めているのだろうか？ 無駄に試練を与えないで欲しい、人間には限界があるのだから。

歯切れの悪い俺の言葉を聞き畜生以下の糞齧歯類はその言葉を紡いだ。

「つまり……下手したら君は退学になる可能性があるのさ！」

快活な声色でそんな事を抜かすこの齧歯類にマジでマタタビぶっかけてやつても許されると思うのは俺だけだろうか？

引合石、入学早々退学の危機へと陥る。

「……で、何でそんな事態になったんですつけ？ すいませんがもう一度ご説明頂けませんか腐れ齧歯類？」

「本音が漏れてるよ」

おっと、腐れ齧歯類と言えども仮にもこの学園の校長をやってる溝鼠だ。ちゃんと、丁寧に接しないとな。

「すいません溝鼠様。つい本音が」

「うーん……隠す気ないね！」

まあ良いさ。と言いながら紅茶を飲む齧歯類、偉そうに紅茶を飲みながら齧歯類は先程までの話を再度説明し直した。

「簡潔に纏めると君、この短期間で問題起こしすぎ」

「どこが!？」俺は清く正しい模範的生徒の鏡ですよ!？ 溝産まれだから目が腐ってるんじゃないんですか!？」

謂れのない風評被害に俺は反論する。俺ほど真面目でこの学園の為に尽力する男いない筈だ、全く失礼極まりない。この齧歯類には何

が見えているのだろうか。

「うん。今もバッチリ問題行動を起こしてるかな！」

「どうやら校長の目は冗談抜きで腐っていたようだ、話にならない。」

「USJの一件、そして昨日の一件、ついでに朝の馬鹿騒ぎ。うちの学園でもこの短時間でここまでやらかした生徒は過去1人として存在しないよ?。」

「つまり……この学園に俺の伝説が刻まれた……と?。」

「その通りだけど決して褒められるような行為ではないのさ! むしろ逆効果だからこうなってるって思ってた欲しいのさ!。」

「どうやら俺はこの学園に伝説を刻めたい。建てた偉業が過去誰も達成していないというのは大変素晴らしいものだ。その代わりに退学の危機に陥るのは何一つ宜しくないが。」

「USJで君が崩壊させたあのゾーン……損害費はこのくらいさ!。」

「そう言いながら紙を渡してくる。それに俺は目を通し目玉が飛び出るような数字に絶句した。」

「よん……よん……四十八億ウ!? あんな場所にそんな価値があんのかよ!? 無駄遣いが過ぎるだろ英雄! バカなのか!? いや馬鹿にも程があるだろ!。」

「仮にも国立の癖になんでそんな無駄遣い出来る金があるのかと小一時間問い詰めたくなったが、そんな俺の言葉に被せるように齧歯類は言葉を続けた。」

「因みに施工費をセメントス先生とローダーアーム先生に頼んで割り引いてるから本来はその2倍も3倍もするのさ!。」

「はあ!。」

「因みにオールマイト先生が壊した被害額を含めるとその10倍くらいになるのさ! 正直やってられなくて泣きそうなのさ!。」

「俺の悲鳴を遮るように齧歯類は更に追撃を掛けてくる。あれは緊急事態だったのでセーフ。正当防衛、故に俺は悪くない。だから俺はびた一文も払う気はない。」

「というか額だけでいうなら弱小国の国家予算分くらいの被害額だ。」

な。と思わず現実逃避しそうになった俺に齧歯類は逃がしはせんと
言わんばかりに言葉を続けていく。

「まあ金銭の要求をするつもりはもうとうないのさ。君のような才能
に溢れ過ぎててどうにかなってそうな子どもに押し付けるほど雄英
は愚かじやないしね」

それよりも問題は昨日の件だよ昨日の件。 と言い齧歯類は腕を組
み、某秘密結社のボスのような格好で言葉を続けた。

「昨日の一件は幾ら雄英でも誤魔化しが効かない一件なのさ。ヒー
ロー達全員を尻目にヴィランを無力化、しかもヒーローに追い付かれ
ずに一日中ずつとそれを繰り返す、プロヒーローの面目丸潰れって事
なのさ。幸いバードマンが君を保護して嚴重注意したって事で事件
は終わったけども……プロヒーローからすれば自分の面目丸潰れに
された挙句、それがただの子どもとなればどうなるかは火を見るより
明らかなのさ……って聞いてるかい？」

「アツハイ聞いてます」

正直意識が飛びそうな程ペラペラ話されて若干焦ったが大体の事
は分かった。つまり……

「俺という素晴らしい才能の持ち主に街中のヒーローが嫉妬している
と」

「……超がつくほどポジティブに捉えたらそうなるかもね」

ため息を吐きながら齧歯類は話を続けていく。これで2つ目、3つ
目は朝の一件らしいが一体なんの問題があったのだろうか？ とい
うか知られるのが速くないか？

「先程の一件、素晴らしいお手並みだったのさ。生徒達の心身に取り
入り、彼等の望む言葉を吐き出しながら士気を高め、自分が輪の中心
となるやり口。君ならどんな場所であって馴染めるだろう、例えるな
ら……そう」

ヒーロー達の集まりに狡賢く卑劣なヴィランが入り込むようにね。

本題はこれからだと言わんばかりに齧歯類は声色を変え話し始め
る。そんな事言われても正直俺は何がなんやらさっぱり分からん
で取り敢えず称賛として受け取っておく。

「はあ……そりやどうも……？」

「いやいや。そう謙遜する事はないのさ！ 他者を誘導する人心掌握の術、きつと素晴らしい師匠から教えられたのじゃないかな？ そう……それこそ犯罪者の頂点に立つ者から……とか？」

「何言ってるんだこの齧齒類」

意味不明な言葉に困惑してつい本音が出てしまう。マジで何が言いたいのかさっぱりわからない、もっと要点を纏めて話して欲しい。これだから獣は駄目なんだ、知能が足りん。

「……まあ、そう言われるのは分かってたさ。という訳で引合君には少し話して貰いたい人がいるのさ！」

そう齧齒類が言うのと新しい人がこの場に現れる。どんな人かと言えば美人で俺よりも歳上、顔もお綺麗でおっぱいの大きさも中々グツド。正直好みだ。

「初めまして。私は塚内真、君の事は根津校長先生から聞いているわ。とっても元気な生徒さんだっけね」

そう言いながら握手を求められたので俺は笑顔でそれに答える。美人のお願いは9割答えるべき、それが俺の生き様だ。

「いやあ……それほどでもありますよ」

そう言って握手を終わらそうとすると塚内さんが俺の手を離す事はなくそのまま話を続けていく…… what？

「私は人心掌握に術について研究しているの。貴方は人を纏めるのがお上手だと先程聞いたから少し話を聞きたいなと思って……駄目かしら？」

「そうですか……それくらいなら別に話しますよ？」

「良かった！ それじゃあ……」

そんなこんなで塚内さんは俺がどうやって皆を纏めていたのか、そのコツはどうかと聞いてきたので一応俺の中で確立しているやり方を説明した。ぶっちゃけやってる事は扇動家なのだが結果的に纏めあげているのでよしとして欲しい。

「……その歳で良くそこまで理論を確立したわね。それは独自で磨いたの？ それとも誰かから教わって？」

「……いえ、殆ど独学ですね。俺の周りの奴らは何奴も此奴も濃い奴ばっかだったので……ソイツらを纏めあげなきや話にならなかつたと言うべきか……ああ……でも最初の頃は教わってましたね」

懐かしい……最初の頃は『せんせー』から他人と仲良くなれる方法として色んな事を教えられたものだ。今覚えば帝王学みたいな事を言っていた記憶がある。

「それは……どんな事？」

「まあ……これくらいなら言っても良いか。ただ単純に友達を作る方法ですよ。個性が発現した俺は人と違う物を見つけていたらしく、誰とも理解し合えなかつたんです。そんな時に教えて貰ったんです」

良くある個性の弊害ですよ、と笑いながら言葉を纏める。俺の場合人は人とは違う世界を見ている、ただそれだけだ。

「そう……良い人に出会えたのね」

「まあ……俺と同じ世界が見える人でしたからねえ。逢えただけでも奇跡ですよ」

俺の言葉を聞き塚内さんはでも……と言いながら言葉を続けた。

「君のような技術を持った人がヴィランになれば恐ろしい事になるわ。即座に人を纏めあげ犯行に移す。そして自分だけは逃げ延びまたそれを繰り返す。その技術は悪用したら大変な事になる。それは分かってる？」

「そんなテロリストみたいな事しませんよ。そんな事したら俺本当にヴィランになるじゃないですか」

そんな事したらオールマイトに捕まって即人生終了である。恐ろしい、そんな事考えたくもない。

「貴方ってヴィランじゃないの？」

冗談交じりに笑い掛けてくる塚内さんに俺も笑いながら返事を返した。

「失礼な、誓ってヴィランじゃないですよ。このイケメン天才な引合石くんがヴィランなんて馬鹿な存在になる訳がない。合法的にヴィランをぶっ飛ばせるヒーローが一番ですよ」

俺の言葉に塚内さんは苦笑しながらちよつとした毒を放つ。

「なら……昨日の事は反省しないとね？」

ぐうの音も出ない正論に言葉を失つてると、塚内さんは俺の手を離して齧歯類と話し始める。

「良い子ですね。性格がちよつとアレですけど、きっと性根の優しい子だと思いますよ？」

性格がアレだと言われて内心落ち込む、マジで俺の教育は失敗していたらしい。こんなイケメン天才な完璧超人でも少し駄目な部分があるほうがギャップ萌えを狙える分マシと結論をつける。

「そつか……なら此方も覚悟を決めないといけないね」

「まっつて齧歯類。なんの話？」

「齧歯類じゃなくてちゃんと校長先生と呼んで欲しいのさ！」

人を退学処分にしようとしている齧歯類なぞ齧歯類で十分だ。溝鼠と呼ばないだけ感謝して欲しい。

「それで退学になる可能性になるって言ったね？ それじゃあそれを回避する方法の話をしようか？」

「なんなりと仰て下さい我らが雄英高校の誇りである根津校長先生様。何なりと従いましょう」

前言撤回、素晴らしい根津校長に対して溝鼠だのと抜かす患者は俺が泣いたり笑ったり出来なくする。こんな素晴らしい校長先生にそのような愚行を行う患者は俺が許さん。

「……手のひら返しが速いね？」

「いえ。なんの事かさっぱり分かりませんが、そんな事よりもその方法とやらを無知で愚蒙な私めに是非ともお教え下さい。あつ靴舐めましょうか？」

「……血って遺伝するものなんだね」

靴は舐めなくても良いと言い根津校長先生閣下は話し始める、そのお言葉を一言一句聞き逃さないように俺は耳を傾けた。

「もう直ぐ開催する雄英高校体育祭！ そこで君は世間に自分という存在をこれというくらい主張して欲しいのさ！」

閣下……お言葉ですが言われなくともやるつもりです。

特別講師 空彦

偉大なる根津校長先生閣下からのお話が終わり、開放された俺は1—Aへと足を進めていた。偉大なる閣下は俺の愚行をお許しになるらしく、その代償として俺に雄英体育祭で大活躍しろと仰られた。

偉大なる根津校長先生は良く分かっていらっしやる、当然俺は体育祭で無様を見せられないので大歓迎の代償だ。

「体育祭は観客と生徒と先生に目にも見せてやるぜえ……」

と、1人テンションを上げているとA組とB組の生徒達で言い争いをしていた。なんだなんだとその場を見学しに近づいて行く。

「ハハハハ！ USJでは大変なご活躍をしていたみたいだねえA組イ！ だけど 体育祭ではそうはいかないよ！ 体育祭は僕達B組が全力を以てA組を潰させて貰うからねえ！」

フルスロットルで他人を見下しているなんかめっちゃくちや面白そうな奴がB組にいた。正直見た瞬間に気に入ったレベルだ。コイツは面白い、そう確信した俺は息を潜め、その言い争いを見学する。

「アア！ 黙れ糞モブ！ 黙って失せ死ね！」

その言葉を聞き、中指を突き立て威圧する馬鹿。あの面白い奴の対戦相手はどうやら爆豪らしい、これはどうなるのか見物だ。

「……アレアレアレエエツ!? そういう君はヘドロ事件の被害者じゃないかあ!?! 先日のUSJでの一件と良い……君ってヴィランを集める体質なんじゃないかなあ!?! ああああ恐ろしい！ 君のせいで僕達B組も被害を被ったらやってられないよ！ いやあほんと怖い怖い！」

「テメエ……今なんつった？」

やばいあのB組の奴くっそ面白い、あの向こう見ずの煽り方。まるで何処ぞのモテ男を見ているようだ、そしてその煽りに完全に乗せられる馬鹿豪。この程度の煽りも耐えられないとか生きていけないぞ？

「もう1回言つて欲しいのかい!?! さっきの事すら忘れるとかとんだ鶏頭だね！ その髪型は鶏のモノマネかい!?! もう一度言つてあげ

るよ！ 君みたいなヴィランを集める奴のせいで僕達まで被害を食らってしまったら堪らないって言ったのさ！」

そう言い切り相手を見下すように笑うキレキレの煽り、なんて完璧な人材なんだ。A組に足りないのは彼だ、このキレキレ感是非常に好ましい。

「殺す……ッ！ ぶっ殺す……ッ！」

両手を爆発させながら阿修羅の形相で近づいて行く爆豪。手を出そうとした時点でお前の負けだ、そしてそんな爆豪を止めようと必死に切島が動きを抑える。だが、爆豪の力の方が上らしくドンドンと面白い奴へと近づいて行く。

「やめろって爆豪！ ああもうお前らも手伝え！」

切島の言葉でA組の男子達が爆豪を止めに入る。そんな姿を見て面白い奴は見下すように笑った。

「アハハハハ！ A組の彼は自制心が全くないみたいだね！ 我慢出来ずにすぐ切れる子どもじゃないか！」

「お前ももうやめろって物間！ マジでアイツの顔やべーじゃん！ そろそろ殺されそうだぞ！」

面白い彼の名前は物間というらしい、覚えておこう。そんな物間君はクラスメイト達に揺さぶられながら教室へと引きづられていくがそれを気に介さず笑い続けた。

「アハハハハハハハ！ こんなのが相手だなんて僕達の勝ちは確定だね！ 自制心のない子どもだなんて手のひらで簡単に踊らせるじゃないか！」

アハハハハ、アハハハハ。と笑い声を廊下へ残し物間はBの教室へと叩き込まれた。あんな面白い奴がいるなんて俺もBに行きたかったと少し感じつつ、A組の教室へと近づいて行く。

「殺す……ッ！ 殺す……ッ！ 消し飛ばしてぶっ殺す……ッ！」

「ああもう落ち着けて爆豪！ 誰かコイツを何とかしてくれーっ！」

爆豪の足を抑えながら悲鳴にも似た絶叫をあげる上鳴の声を聞き、爆豪を止める為に近づいて行く。

「おい爆豪、言い争い完敗じゃねえか。少しは落ち着け馬鹿」

「アアン!?ぶっ殺すぞテメエ！」

俺の言葉に超反応で此方を見向き睨み付けてくる爆豪。そんな爆豪のデコを叩き地面と引き合わせる。すると心地よい音を鳴らし爆豪が地面に額を付けた。

「……テメエ、マジで殺す。アイツの前にお前を殺す。絶対殺す殺す殺す殺す」

「ボキャブラリー貧弱かお前」

そう言い残し男子連中に散るように手を振る。すると何とも言えない顔で全員が爆豪から離れていった。

「石……大丈夫か？」

「どうしたショート。俺は今、絶対調だぞ？」

心配するように此方を見てくるショートにそう伝えながら俺は席へとつく。アイツは少々心配性だから昨日の俺の奇行を知って心配になったんだろう。安心して欲しい、多分もうない。

偉大なる校長閣下から慈悲を頂き、さっきの面白い奴を見つけた俺は機嫌が絶対調に良い、そんな俺を見て女神が声を掛けてくる。

「……先程の職員室に呼ばれてましたけど、随分機嫌が良くなってますね？」

「ああ……そりやさつきから良い事が連続で起きたから。嫌でも機嫌が良くなるって事だよ」

頭の上にはてなマークを出しながら『そうなんですか……?』と納得しようとする女神の愛らしさに感謝しつつ、俺はHRの鐘が鳴り、朝の挨拶を元気良く行った。

「えー……今日は緑谷と峰田が休みだ。ついでにオールマイルト先生は急用で今日は来られない為、今日のヒーロー基礎学は特別講師に来て頂く事になった。ヒーロー歴何十年の大ベテランだ。お前ら、くれぐれも無礼のないようにな」

オールマイルト休みとかヒーロー基礎学の楽しみ全部なくなったんだが？

ヒーロー基礎学。本来はオールマイイトが担当している筈なのだが、何故か今日は休みらしく特別講師が来るとの事となる。皆が更衣室で着替え、体育館へと向かう。

「特別講師って誰だろうねー！」

「プロヒーロー歴何十年の大ベテランなんだろう!? すっげえ人だと思っうぜ！」

芦戸と切島のそんな会話を皮切りにA組の生徒達は思い思いに未だ姿見ぬ特別講師がどのような人なのかを話し合う。

「こう……筋骨隆々って感じなんじゃね! プロヒーローにも滅茶苦茶強い爺さんのヒーローいたじゃん! 確か……ヨロイムシャとかいう爺さん！」

「いや……案外ヒョロヒョロかもしれないねえぞ？」

「いやー! 絶対ムキムキだね！」

まだ見ぬ特別講師は筋骨隆々だと言い張る上鳴とその逆ではないかと言う瀬呂。そして

「女性かもしれないよー! ミステリアスな美魔女みたいな人もーッ！」

「僕みたいに英国紳士のように紳士的でキラめいてる人かもね☆」

「何十年もプロヒーローをやってるなんて何て凄い人なんだ! うおおおっ! 燃えてきたあつ！」

敢えて女性の可能性を出す葉隠に英国紳士のような人かもしれないと言う青山、そして取り敢えずテンションが上がる夜嵐。様々な憶測が飛び交いながらも彼等は体育祭へと辿り着いた。

「はい、じゃあヒーロー基礎学始めるぞ。取り敢えず今日の特別講師の方に挨拶をして頂くから」

授業が始まり相澤がそう言うも、その特別講師の姿は一向に見えず生徒達はやんやんやと話し始める。

「もしかして葉隠みたいな姿が見えないヒーロー!？」

「もしかしたら『アン○マン』みたいに小さくなれるヒーローかもしれないねえ！」

未だ姿を見せぬヒーロー。興奮が止まらない生徒達、そんな中で数

人がこの場でない何処かへと視線を向けていた。

「……チツ」

ある方向を見ながら不機嫌そうに鼻を鳴らす爆豪。

「……もしかしてアレか？」

爆豪と同じ方角を見据えてそう洩らす轟。

「うわっ！ 凄いやいな！ 俺よりもずつと速いぞ！」

目を輝かせ、感嘆の意を唱える夜嵐。そんな3人の声を聞き生徒達はその方向へと顔を向けた。体育館γ、障害物が広がるステージを閃光の如く駆け、四次元の立体機動で空を舞い、今にも此方に迫り着く人影がそこにあつたのだ。

閃光の如く宙を駆け、相澤の隣に着地する。その存在に生徒達の目は釘付けになる。自分達の予想とどうだったのか、それを確認した瞬間、生徒達の目が驚愕一色に包まれた。

「うーん……お前らの教育指針を読んで試してみたが……これなら実践訓練したほうが速くないか？」

「……グラントリノ、今回は貴方のやりたいようにやって下さい。どうせオールマイト先生も大体そんな感じでやってますんで」

「しかしなあ……」

そのプロヒーローは相澤の腰の高さ程度しか身長がなかった。皺まみれの顔を不服そうに歪ませるその姿を見て誰かが呟いた。

「えっ……ガチのおじいちゃんじゃん」

言外にこんな爺さんで大丈夫なのかと言わんばかりの言葉を上鳴が呟いた瞬間、グラントリノと呼ばれた老人の姿が消える。

そして上鳴の身体が宙を舞い地面へと叩きつけられる。

「上鳴イ!？」

切島の悲鳴が響き渡る。そんな声に追従するように相澤はやる気のなさそうで言葉を発した。

「お前ら……その方に存分に揉んでもらえ。その方はオールマイトさんを育て上げた傑物にして、俺の知る限り最強格のプロヒーローの1人だ」

「最強格たあ言ってくれるじゃねえかイレイザーヘッドよ。お前の師

匠の方が俺よりもよっぽど強かったぜ」

「……ダブルスが自分達よりも貴方の方が強いと仰ってたんですよ。グラントリノ」

「アイツらは自己評価が案外低いからなあ」

飄々と相澤の隣で笑う老人。先程上鳴を攻撃していた筈なのに、気付かぬ間にそこにいたのだ、生半可の速度ではない。生徒達の中に緊張が走る。

「取り敢えず……吐くまで実戦経験あるのみよオ！ 耐えて見せろよ有精卵共！」

グラントリノ、古き時代からのプロヒーローが有精卵共である生徒達を見て獲物を見る獅子の如く笑った。

個性 『ハイスペック』

「すまないね……ダブルス」

雄英高校校長であり、個性『ハイスペック』を持つ鼠は溢れんばかりの罪悪感を溜息と共に吐き出した。先程の一件は言わば確認、もしも引合石がヴィランなのであればこの場で確実に仕留める、その覚悟と意思が彼にはあった。

だが、現実には彼はヴィランではなかった。ヴィランの王、オールフォーワンによって育て上げられた存在がまだヴィランではない。その事実根津は感謝し、彼を己の計画の為の生贄にする決意を決めた。

「オールフォーワンの復活が確定した以上……今までのようにはいられない。取れる手は取るべきだ」

そう言うとき徐にチェス盤を出し駒を並べていく。黒の駒はキングただ一つ、そして白の駒は王以外全て並べる。

「……このキングをどう攻略すれば良い？ もし攻略したとして……オールマイトが死んだとしたら僕達はこの平和をどう維持する？」
「新たな象徴になりうる存在が皆には必要だ。誰もが『彼ならば』と思え、ヴィランからすれば理解不能の理不尽の体現者」

「オールマイトは後継者を選び、相澤先生は己がなると覚悟を決めている。だが……僕は違う。平和の象徴……あらゆる全ての者達に安心感を与えられる存在は彼だと思う」

根津の脳内に昨日の一件が思い出される、1人の少年は朝から夜までひたすらにヴィランを無力化し続けた。本来ならば個性の無断使用と傷害でヴィランと判断するべきなのだろう。だが、根津にはそう思えなかった。

「1人で街全てのヴィランを駆逐する……その姿に人々は日常と変わらぬ安心感を覚えている。オールマイト……まるで君じゃないか」

引合石。彼を平和の象徴に成りうる存在、実力はUSJの一件で申し分ない事は確定している。そして昨日の1件でオールマイトのよ

うに1人で全てを解決出来る事も判明した。個性の無断使用？ 傷害？ そんな事を言っている場合では無い、そんな圧倒的な実力を持つ存在がヴィランではない。その事実には我々は感謝すべきなのだ。

「間違いない、体育祭で彼は世間に自分という存在を見せ付けるだろう。圧倒的な力を以てその存在を社会に示す。そしてその場ではどんな力を振るおうとも民衆にはエンターテインメント程度にしか思われない」

「そんな場所で彼が全てを歯牙にかけず頂点に立つ。人々は彼の事を未来有望な素晴らしい人材だと思ふ筈だ」

「マスコミに金を掴ませ、次代の平和の象徴を担う存在は彼だと言わんばかりに放送を流してもらおう。そして彼は今までと変わらずに問題を……常人では有り得ぬ偉業を成し遂げる筈だ。そしてその実績が……彼がヒーローとなったその瞬間に偉大なる功績の一部となる。例え現時点では犯罪者の行為に等しくとも、そこに民衆の好印象が合わされば……『学生時代から己を顧みず人々を守り、導いていた存在』になれるのさ」

こんな事がバレたら相澤先生とオールマイトに詰め寄られるだろう、と。根津は笑った。だが、それを気にする事はない。

根津に物理的な力は一切ない。オールマイトのような環境を変える神の如き一撃は放てないし、イレイザーヘッドのように影から隠れ一撃必殺を放つ事も出来ない。

だが根津には権力がある。金がある。そして様々なジャンルの方々とのコネクションがある。それは社会において何よりも強い。そして彼は人よりも優れた知能を持っている。そんな彼からすれば偏向報道だろうがなんだろうがお茶の子さいさいであり、彼の一声で社会の流れを変化させる事は可能なのだ。

「ワンフォーオールの後継者は緑谷出久君でも相澤先生でもどっちでも良いのさ。彼にその力は必要ない、それはUSJで良く分かったからね」

「たった40億程度で彼の将来が買えるなら安すぎる買い物なのさ。その点に関してはヴィランに感謝しないとイケないね」

冷めた紅茶を飲み干し根津は笑う。人類を超越した頭脳を持つ鼠は人類社会を己の手のひらで回す、全ては今の世界を維持する為に、全ては世界の平和の為に。

「オールマイト……君の覚悟は彼に引き継がせる。だから安心して君はオールフオーワンと決着をつけたら良い、勝つても負けても彼がいる。彼ならば平和の象徴に成りうる存在だ」

「すまないね……オールマイト。本来は君の味方をしたかったんだけど……状況が状況なのさ」

オールマイトへの謝罪を吐き出し、根津はある人へ連絡をし始める。天下の雄英高校校長として彼が持つコネクションは無尽蔵と言つて過言ではない。これから忙しくなる、そう笑いながら根津は己の計画を進めていくのだった。

——そして、そんな事になってると露も知らない我らが引合石の現在の状況というと。

「やるじゃねえか小僧！ それだけ動けりや上等よ！」

「そりゃ……どうもっ！」

体育館γで眼前のグラントリノと共に四次元的立体機動で動作をしながら戦闘を行っていた。互いに一撃を加える瞬間にその場から離脱、そして隙を狙い攻撃の繰り返し、それを何度も行っている。グラントリノが生徒達へと攻撃を仕掛けた瞬間、それを察知して逃れた存在は複数いたが殆どはその場で無力化され腹を抑え蹲っている、簡単に言えば腹キツクされ悶絶しているのだ。

「——テメエら……俺を無視してんじゃねえッ！」

そんな2人の元に爆破を繰り返し空中機動を繰り返しながら近付いてくる存在がいる。爆豪勝己、彼もグラントリノの一撃から逃れた1人。本能ともいえる野性的な直感持つ彼はグラントリノの攻撃を察知し、逃れたのだ。因みに夜嵐と轟は超スピードからの腹キツクを受けている、現状動ける生徒は彼等の2人だけだろう。

「爆発小僧か！ まだやる気か！」

そして、そんな爆豪を見てグラントリノは空中で何度も軌道を変え爆豪へと近づいて行く。変則的な軌道から放たれる一撃は爆豪の

背中に直撃し、爆豪は地面へと叩きつけられた。

「……タフだな爆豪。これで何回目だ？」

引合が感嘆したように呟く。爆豪は先程から何度もグラントリノに叩き落とされ、その度に立ち上がって攻撃を仕掛けているのだ。修羅の如く目を爛々とギラつかせ倒れても倒れても立ち上がる。その姿は正しく戦いを求める戦闘狂そのもの。

「……まだまだッ！ 俺は弱くねえ！ こんな所で！ こんな奴らに負けてる場合じゃねえ！」

そしてまた空中へと舞い上がり、今度は引合に攻撃を仕掛けると近づいて行く。

「うわっあぶなっ！」

放たれる一撃はそんな声と共に避けられ背中を叩かれたかと思うと、また地面へと引き戻されていく。ゆつくりと地面へと引き合わされていく感覚を感じながら爆豪はあらん限りの声で叫んだ。

「まだだ！ 絶対にお前らをぶっ飛ばす！ じゃねえとあの糞女に俺は勝てねえ！ だからテメエらは俺にぶっ飛ばされる！」

「良く分からんが爆豪が青春してる事は分かった」

爆豪の絶叫にそう反応した引合は再びグラントリノと正面から対峙し、また立体機動からの攻撃を繰り返す。グラントリノが引合の死角に入り、蹴りを入れようとすると、引合が示し合わせたように裏拳を放つ。両者がその一撃を避け、また距離を取る。

「……やるじゃねえか、最近の餓鬼は末恐ろしいな。坊主、名前は？」

「今をときめくイケメン天才の引合石です。あっサインいる？」

何時もの様に巫山戯た名乗りをかます引合の言葉を聞きグラントリノは納得したように頷いた。

「……血か。将来が末恐ろしいな」

そしてグラントリノは手を上げ引合へと近づいて行く。

「どうやらお前とやっても千日手になりそうだ。お前に教える事は何もねえ、好きにやれ」

「やだ……もしかして免許皆伝？」

そんな引合の戯言を無視してグラントリノは爆豪へと近づいて行く。地面に引き合わされて尚、未だに目を爛々と輝かせ睨み付けてくる爆豪の姿を見てグラントリノは笑った。

「爆発小僧……放課後、この場所に来い」

ただ一言。そう爆豪に言い残しグラントリノは自分が腹キツクした生徒達の元へと飛び去っていく。そこに残ったのは、驚いた顔でグラントリノが飛び立つ姿を見る爆豪と

「取り敢えず……俺達も戻るか」

グラントリノの飛び去った姿を見送る引合だけだった。その後のヒーロー基礎学はグラントリノの指導の下、生徒達が入り組んだ工場跡地で目的地に如何に素早く辿り着くかが行われ、最初の腹キツクを除けばマトモな授業が行われた。

そして……時間は流れ帰りのHRの時間となる。担任である相澤が近い内に行われる雄英体育祭について話を行い、生徒達がそれを聞き様々な話を話すが爆豪の耳には届いていなかった。

「引合さん！ 今日とは是非私と戦闘訓練を行いませんか!? 前に教えられた事の続きを聞きたいのです！」

「……何か言ったっけ俺？」

本来なら聞くだけで虫酸の走る声だが、それすらも爆豪の耳には届いていない。ただ目を爛々と輝かせ、放課後を今か今かと待っているのだ。

「んじゃ……体育祭までに全員死ぬ気で頑張れよ」

相澤のやる気のない激励と共にHRが終わる、その瞬間に爆豪はカバンを持ち教室を後にする。あらゆる全てを無視して彼は目的地へと足を進めた。

「来たか。爆発小僧」

「テメエが呼んだんだろうが」

体育館γで既に待っていたグラントリノの言葉を聞き爆豪は修羅の様な形相で笑った。

緑谷出久の恐怖 理解不能な引合石

海岸公園。波の音だけが響き、人の声がしない夕方の海辺に1人の少年がいた。緑色の髪を潮風で揺らし体育座りでただ海を見詰めている姿は、青少年の青春の1ページを彷彿とさせるだろう。実際、彼が背負っている問題は青春の1ページ云々の話ではないのだが。

「どうすれば良いんだろう……？」

少年は目尻に涙を溜めながら己の現状をただ嘆く。昨日の昼頃、臨時休校で家にいた少年の元に担任の教師が来た。

USJでの一件、そこで命を掛けて助けてくれた恩師が自分を心配して来てくれたのだと母に説明され喜んだ少年だが、その恩師から放たれた言葉は少年を根底を揺さぶった。

『緑谷、お前はヒーローを目指さない方が良い』

なんの冗談かと思った。しかし担任の目は何一つ笑っておらず、包帯の奥で決意に満ち溢れたその目を見て少年は怯んだ。

『USJでの一件……お前の持つ個性はお前を苛烈な運命に導いているのは間違いない。今回が俺がいたから良かったが、もしかするとお前一人でいる時に奴は現れるかもしれない』

奴、その言葉を聞いて思い出すのは1人の女性の姿。見目麗しい人だったが、その中身は邪悪を煮詰めた鬼畜外道、少年の目の前で人を殺し、更に教師をいたぶり続けた姿は今も脳裏に刻まれている。

思い出すだけで震えるあの姿を思い出す少年の姿を見て、担任は溜息を吐きながら言葉を続けた。

『……オールマイトさんはお前を選んだ、ワンフォーオールの後継者は本来はオールマイトさん自身が選ぶべきだ。何一つ間違えちゃいない。だが、そんな事を言う状況じゃなくなったんだ』

ワンフォーオール。その言葉が担任の口から放たれ、緑谷は目を丸くする。何故、それを貴方が知っているのかと困惑していると担任は肩を竦めながら話を続けた。

『ああ……俺はちよつとした伝手でオールマイトさんの事は全部知ら

されてるんだ。だからその点については安心しろ、だからワンフオールが他者へと継承出来る個性って事も理解している』

まあ……そんな事は今はどうでも良いな。と担任は再び言葉を続ける。

『……再びあの巨悪がお前の目の前に立ち塞がった時、すまないが……その時お前があの巨悪に立ち向かえるとは俺には思えない……ワンフオールをお前が持ち続ける限り、あの巨悪がお前の前に現れるのは火を見るよりも明らかだ』

だから……その『個性』を捨ててくれ。と、担任は少年へと言い切る。そして、今日だけじゃ結論はつけられないだろう。暫くしたらまた聞く、その時に良い言葉を聞かせて欲しい。と言い残し担任は少年の家から去った。

その1日。担任から言われた言葉が悶々と頭の中で駆け巡り、少年はただ嗚咽を漏らした。憧れのヒーローから頂いた力、君はヒーローになれると言われ、辿り着いた雄英高校。これから僕のヒーローの道が始まった、そう思った矢先にこれである。憧れの人から頂いた力、それを持つているとあの巨悪が自分の前に現れる。その事実少年はただ震えるしかなかった。

次の日、少年は学校を休んだ。学校に行ったら担任に会ってしまった。それが今の少年には恐ろしくて、足が学校に向かうのを拒否したのだ。

母親に体調が悪いと嘘をつき少年はベットの途中で震えていた。己の中にある個性。憧れの人から授かったそれを手放したくないという思いと、あの巨悪に立ち向かう事への恐怖。それが頭の中でグルグルと駆け巡っていたのだ。

そんな少年の元へとまた客人が訪れる。それは彼の憧れの人にて師匠、No.1ヒーローオールマイト。その人であった。

己の師匠が心配して自分に逢いに来てくれた。その事実少年は涙を流し、己の中にある不安の全てを曝け出した。きつとオールマイトなら何とかしてくれる、そう思ってた。

『そうか……緑谷少年。だけど大丈夫だ！ あの巨悪……オール

フォーワンは私が必ず倒す！ だから安心するんだ！』

何時ものようにそう笑うオールマイト。本来ならばそれで少年は安心してこの話は終わるのだ。だが、今回は状況が違う。

思い出されるのはオールマイトがあ的女性と対峙した瞬間。

『それが君の弱点だ』

『第2ラウンドだ。無様を晒せオールマイト』

その言葉と共に、オールマイトはあの存在に軽くあしらわれていた。急に動きを止め、そこを突かれて彼は別の場所へと飛ばされてしまったのだ。その姿を眼前で見ていた少年は、それ故に……その言葉に安心感を覚えられなかった。

『だいじょーぶっ！ 私がいる！ 緑谷少年！君が心配する事はなにもない！』

笑顔でそう言い切るオールマイトの言葉に安心感を覚えきれずに、オールマイトは少年の元から去り、他に休んでいた生徒の元へと向かった。

『その個性をもっている限り……お前はあの巨悪と立ち向かう事となる』

担任の言葉は師匠の言葉を聞いて尚消え去ることは無く、肥大化して少年の心に重くのしかかった。

『だいじょーぶっ！ 私がいる！ 緑谷少年！ 君が心配する事はなにもない！』

本当ならば安心感を覚える言葉の筈なのに。安心出来ない、この力を持つていたら自分はあの巨悪と戦わなくてはならないのか、それを考えるだけで少年の身体は恐怖で震えた。

身体をふらつかせながらベッドの中に潜り込む、眠ってしまえば現実から逃れられる。そう思い目を閉じるも、脳内では先程の事が駆け巡り眠る事すら出来ない。ただベッドの中で震えていると時間は経ち、夕方になった。

夕暮れに包まれた街を窓から眺め少年は気分を変える為に家を出る。家に籠っているからこんな暗い気持ちになるのだと結論を付けて宛もなく街へと足を進めた。何気なく少年は足を進め、とある場所

へと辿り着く。そこは彼と師匠の思い出が詰まった場所、海岸公園。少年は砂場で座り込むと、そのまま俯いて涙を流す。

思い出の場所に辿り着いたのは、限界に近い自分の心が求めている場所だったのだろう。此処には師匠との思い出が詰まっている、だからこそ少年はここに來たのだ。

だが、ここには彼の師匠は來ていない。場所を変えても襲ってくる恐怖に身を震わせ少年は涙を流す。誰でも良いから自分を救って欲しい、そんな事を思いながら嗚咽を漏らした。

「どうすれば良いんだろう……?」

いつそ担任の言う通りに力を捨ててしまえば良いのか? あの恐ろしい存在と立ち向かうくらいならいつそ……と、そんな思いが彼の中で産まれたその瞬間、彼が眺めていた海から何かが現れた。

「さーっむ! やっぱ夜の素潜りは辛いわ! 獲物も大して取れなかったし! やってらん……ん?」

それは海パン一丁でシュノーケルを被り魚の刺さった銚を携えている自分と同じくらい年齢であろう存在。

「どうか少年はその存在を知っていた。」

「引合……くん?」

「……こんな夜中に何やってんだお前? とういか緑谷、お前今日休んでたよな? もう大丈夫なのか?」

凡そ、その姿のお前にだけは言われたくはない言葉を言い放つ引合の姿に驚いた少年、緑谷出久は困惑しながらも大丈夫だと頷く。

夜の海パン男、引合の手元にある銚先に突き刺さっている魚がピチピチと足搔くように蠢く。

彼の感じていた恐怖心とかそんな感じの何かが、意味不明な展開で吹き飛ばされた気がした。

馬鹿とマリモと魚と爆発小僧

夜の海岸公園、潮風が吹き抜ける砂浜に2人の少年がいた。1人は何処からか持ってきた薪を使い自分が召し捕った魚を頂かんとし、もう1人はその奇行に対して困惑し、声を発した。

「……ここで火を使うのは駄目なんじゃないかなあ？」

少年の奇行を止めんとし、声を発した者の名は緑谷出久。先程まで色々と内心いっぱいいっぱいだった筈だが、連続で行われる奇行の数々に先程まで感じてた恐怖心が吹き飛ばされたのだ。

「知らん。この程度ならバレても『知らなかったんですごめんなさい』で多分何とかなる」

そして、そんな緑谷の言葉を顧みず火を付け魚を焼き始めた者の名前は引合石。最近様々な大人達によって未来を歪められそうな少年筆頭候補である彼は、そんな事を露知らず今日も己のやりたいがままに行動していた。

傷害、個性の無断使用、ヒーローへの虚偽を含めた救援要請、行ってきた罪状はある意味数しれず。コイツ普通のヴィランよりヴィランしてるぜと言わんばかりのヤベー奴は今日も今日とて罪を犯していた。

※因みにこの海岸公園での漁猟行為は禁止されており、ついではいえば銚を使った漁猟行為は県自体で禁止されている。

「……ええ」

チンピラDQNを超越した何か（犯罪者）の奇行を目の前で見ながら緑谷はそれを止める事が出来ず、ただ眺めている事しか出来なかった。

現状、夜の海岸公園に未成年の少年が二人きりである。

パチ、パチ。と火の粉が、まるで躍るかのように闇の中を跳ぶ。薪の中心に刺された魚が炎で照らされ、彼の最後の姿を闇の中へと映し出す。そんな状況の中、緑谷と引合は薪を眺めるように座り込んでいた。

「今日さあ……特別講師のヒーローが来てたんだわ。その特別講師が

くつそ年寄りで大丈夫かコイツと思つてたらくつそ強いので内心ビビったわ。爆豪の奴は何度もぶっ飛ばされてたし気を抜いたら俺ですらボコられるレベルだった」

他愛のない話。それは緑谷を現実から引き離すのもってこいな話題であり、その会話の中で出てきた特別講師という存在に緑谷は気を惹かれた。

「……なんていうヒーローなの？」

お年寄りのプロヒーロー。一体誰なんだろう、もしかしてトッププロヒーローの1人であるヨロイムシヤかもしれないと思ひ聞くも引合はその言葉に肩を竦め

「忘れた。興味ないから相澤先生の説明もぶっちやけ聞いてない」

この返しであった。この返しには純朴で優しい緑谷も内心ドン引き

「ええ……」

としか言えなかった。徐々に焼かれていく魚の目も、呆れてものと言えないと言わんばかりに引合の顔を見ていた。

まあ……魚の場合は死んでいる為、ただ白目を向いているだけなのだが。

「もうすぐ雄英体育祭らしくてな。八百万と……ついでに青山と麗日で戦闘訓練をしたんだが……俺は眠れる獅子を2人も呼び起こしたのかもしれない。特に八百万が下手をすれば俺ですら手に負えんレベルになってしまった」

後、青山が糞を漏らしたがまあ……どうでも良いかという言葉に緑谷は自分が学校を休んだ日になんかとんでもない事態が連続して起きている事実にも可笑しくなり笑ってしまう。

「麗日がああ……俺と個性が似ているから戦闘方法を教えたなら恐ろしい速度で吸収して自分流にしてたり……ゲロを吐かない練習として色々やらしたけど……まあ、ひどい事になったな」

「一体麗日さんの身に何があつたんだ……ッ!？」

麗日の安否を想像し、戦慄を隠し切れない緑谷の言葉を無視して引合は言葉を続ける。

「後……八百万がサポート科に用事が出来たらしくてな、着いて行ったら素晴らしいオツパイを持った色んな意味でヤバい美少女がいて、八百万とツイツが何故か意気投合したりでもうどうしようもなくなくなったりとか……ほんとなんであんな事になったんだろうか……」

遠い目で空を見上げる引合の言葉は重く、その目は自分の犯した罪に耐えられない罪人の如く酷く歪んでいた。

「後……青山は糞しかしてなかったな。アイツには悪い事をした」

「3人の身に一体何が……ッ!？」

特に青山君に何があつたんだ!？」

結論だけ聞いているのにこの濃密さ、一体戦闘訓練中に何があつたんだと戦慄を隠し切れない緑谷を見て、引合は乾いた笑みで笑った。その笑みを見て緑谷はそれ以上の追求を止めた。

「それで……どうして緑谷は今日休んだんだ？ 疲れで熱でも引かなかったのか？」

話を変わるがと念頭を起し引合は話題を緑谷が休んだ理由へと変えた。引合からすれば何気ない、ちよつとした疑問から出た言葉なのだろうが、緑谷にとって今自分の話題は地雷原そのものであり、先程まで弾んでいた声色が冷え切るように下がり、目尻には涙が溜まり始めた。

その姿を一部始終見ていた引合は混乱する。自分が何か言ってしまったのか、慌てふためき、焼き加減が良い感じになってきた魚を緑谷へと差し出した。

「んっ!? いやなん……あ……ん……焼き加減も良いし魚食うか？ 美味いぞ？」

「……大丈夫」

何が大丈夫なんだよと内心苦言を呈しながら引合は魚を再び火の中へと突っ込む。火炎地獄から抜け出した魚は再び元の地獄へと叩き落とされた。

地獄に叩き落とされた魚を見ながら緑谷はポツリポツリも話し始める。

「……もしも引合君が自分がヒーローになれば恐ろしいヴィランと戦

われないといけなくて……戦わないなら自分の個性を捨てなきゃいけないってなつたらどうする？」

「……お前はいきなり何を言っているんだ」

緑谷の吐き出すような言葉に困惑しながらも引合は言葉を返す。その途中で本音が出てしまうのは彼の愛嬌だろう。

「……まあ、そうだな。捨てるって意味が個性を使えなくなるって意味なら俺が個性を捨てる事は絶対じゃないな」

確信を持って言い切る姿に緑谷は疑問を呈す。本当に捨てないのかと、

「……恐ろしいヴィランと戦うことになっても？」

その言葉を聞いた引合は言ってる言葉の意味が分からないと言わんばかりに首を傾げ返事を返す。

「……それがヒーローの仕事だろ？ 何言ってるんだお前。頭壊れたか？ まあ……俺は勝てない戦は絶対にしないから負けたくないしな！」

そう言うと、火炎地獄の中にいる魚を救い出し、そのままかぶりつく。腹を食い破られた魚はもうこのまま身を食い尽くされるしかないのだろう。

そんな引合の言葉に、緑谷は何を言っているんだと言わんばかりに手を強く握りしめた。あの邪悪を煮詰めたような存在と対峙してないからそんな事が言えるのだ、と口に出したくなるが、それを抑えた。それを言ってしまうえば本当に自分が憧れたヒーローになれなくなる。そんな気がしたのだ。

「それに……ん？ 今日人は人が多いな？」

言葉が続けようとした引合は急にとある方向を見る。その方向を釣られるように緑谷も視線を向けると、そこには自分が良く知っている存在がそこにいた。

その存在は海に向かって駆け出し両腕から爆破を繰り返しながら海上を凄まじい速度で移動し、砂浜へと戻る。そしてまた海上を凄まじい速度で移動し、また砂浜へと戻るを繰り返し始めたのだ。

その存在はただ前を向いていた。諦めや恐怖など何処にもない、凄まじいタフネスを持っている筈なのにどれだけの負荷を掛ければそ

うなるのかも想像つかないが、肩で息を吐きながら、また海上を凄まじい速度で移動した。

「……なんだ爆豪か。おーい！ ばくごーう！ こつち！こつち！カムヒヤ！ カム！ 来い雑魚！」

爆豪勝己、それが彼の名前。引合の叫び声が届いたのか爆豪は爆破を繰り返しながら残り火となった光源目掛けて突撃を仕掛けてくる。爆豪と顔を合わせたくなかった緑谷は隠れてその場を後にしようとするも、引合が緑谷の首元に腕を掛けて動きを止める。

「まあまあ。こんな時にクラスメイトが3人も集まるとかある意味奇跡だからまだ帰るなって」

身を全て食い尽くされた魚は爆豪の爆破が産み出す爆風で宙を舞う。哀れにも顔だけは食い残され、無情な現実から逃避するように白目を空へと向けて爆発四散した。

「黙ってる糞ナメプ野郎！ ぶっ殺すぞ！」

「まあまあ……訓練中にすまんかったが珍しい事もあるもんだし、お前も座れって」

そう笑いかけながら残り火となった薪の近くに座るように言う引合の言葉を聞き爆豪はいつもの如くブチ切れる。

「ああ！ 何が珍し……デク」

が、そこにいた存在に爆豪は啞然となる。顔を真っ青にして此方を見る存在がそこにいたのだ。

「……ちつ。ちようど良い、テメエらには言いたい事があつたんだ」

そう吐き捨てるとズカズカと歩き薪の近くへと座り込む。そして未だに顔を真っ青にして座らない緑谷を見て吠えたてた。

「はやくしろや！ 座らせ殺すぞ！」

そんな光景を見て、座らせ殺すってなんだよと内心笑いながら引合は未だに顔を青くして震える緑谷を無理矢理座らせた。

魚の代わりに常時爆発小僧が加わり、夜はまだ更けていく。

爆豪勝己 RESTART

俺は凄かった、人よりも才能があつたし『個性』もプロヒーローに向いている派手で強力な個性だった。常に誰かから褒められて、賞賛された。だから俺は雄英に入り、産まれて初めて心の底から見上げるという行為を行った。今までならば俺が1番凄い、それで終わっていたのだが此処には本能で分かつてしまふ程、俺よりも強い奴が蠢いていた。

ナメプ野郎の金魚の糞みてえな紅白野郎にうるせえ暴風野郎、そしてナメプ野郎……ポニーテールは個性が強いだけ、だが……あの3人は俺よりも確実に強い。

特にナメプ野郎、コイツは俺でも理解不能な領域にいた。初めの戦闘訓練、そこで見せた『強個性』を持つ者としての圧倒的な戦い方。それは良い、だが、問題は次。USJでのあの1件だ。

USJ内に浮かび上がった巨大な球体。人間が塵程度の大きさにしか見えないコンクリートの塊、あんなのを作り上げる個性とは一体何なんだ？ なまじ俺は頭も良いし耳も良い、だからこそあれを作り上げた存在が誰か理解してしまった。

ナメプ野郎、アイツの全力に俺の全力は歯牙にすら届かない、腹立たしいが糞女の言う通りだった。

『理解すると良い』井の中の蛙。大海を知らず『君は特別な存在ではなく、何処にでもいる唯のちっぽけな少年だということ』

あんな超常の力を見せ付けられたら嫌でも理解させられる。俺がただの餓鬼で雑魚共相手にイキつてた、唯の雑魚だって事に。絶望よりも先に怒りを感じた……ナメプ野郎ではなく、今まで慢心して鍛えなかった自分自身にだ。俺の隣にデクじゃなくてアイツがいたなら、俺はきつと己を鍛え続けアイツの足元に届く程にはなっていた筈だ。だが、俺の隣にはデクがいた。何も出来ない木偶の坊、個性もなけりや運動も出来ない勉強だけのクソナード。俺はデクを見下して、ただそれだけに満足して己を鍛えなかった。

殺したくなる。過去の俺を、自分こそが最強にオールマイトを超える存在だと思つて疑わなかつた無知な俺を、自分が特別でもないただの餓鬼だと気付かなかつた俺自身を。

近接戦ですら軽くあしらわれた。俺は個性の特性故に、空中戦が苦手ではない。爆破を繰り返せば戦闘機のように縦横無尽に動き回る。だが、アイツの個性は空中戦に向いている訳では無い。なのに負けた、空中戦でも近接戦でも負けた。圧倒的な出力を持った個性でゴリ押される訳ではなく、必要最小限の力で俺は抑え込まれた。

個性で負けているだけじゃない。地力の差すら追い付いていない、怒りでどうにかなりそうだった。俺は今まで何をしていたんだ？俺は一体何様のつもりだった？ プロヒーロー向きの強個性？ 人よりも才能がある？ そんなものコイツの持つ物と比べたら鼻糞以下の物じゃねえか。

圧倒的な力と才、そして隣には俺を凌ぐ個性を持った奴が隣にいる。漫画ならライバル同士でお互いを延々と高め合うんだろうな、胸糞悪い。

才、力、そして隣に居る者。存在そのものが俺の完全上位互換。俺は初めて心の底から人を見上げ、そして心の底から泣いた。

だが……それで結構。俺の完全上位互換、この広い世界だ。いても可笑しくねえ、寧ろ今までいなかつたのが可笑しかつたんだ。俺の完全上位互換が現れた、だからどうした？

それでも俺が俺である事には変わらない。俺はオールマイトを、世界最強の存在を超える男だ。そんな俺が目の前を壁を超えれずに諦めて泣くなんて行為をする訳がない。

壁なら壊す。何でもぶっ壊して進んできた俺がこんな場所で立ち止まる訳がねえ、だから超える。眼前でヘラヘラと笑う理不尽の化身を。

「どうした爆豪。黙り腐つて……うんこか？」

「黙ってるナメプ野郎」

ヘラヘラと笑い下らねえ事をほざくナメプ野郎の言葉を切り捨て、俺はデクを見た。視線を逸らし顔を真っ青にしながら身体を震わ

すコイツが……ムカつくし、ぶつ殺したくなるが、俺の原点だ。

俺を初めて見下ろした存在。しかも俺よりも劣っている癖にだ、俺よりも優れてないコイツが俺を見下ろす。それに恐怖した俺はコイツを拒絶し、そして俺の中の自尊心は歪み始めた。それからの俺は、コイツからの賞賛に苛立ちを感じながらもコイツの羨望を受けないと苛立つようになった。

無個性で運動も出来ない木偶の坊は俺の背中を追い続けた、俺はそれを上から踏み潰し優越感に浸っていた。俺より下の存在を見下す感覚に酔っていたんだ。

過去の俺を爆殺してやりたいレベルで腹が立つが、それは良い。

雄英に入ってからからの木偶の坊は、こんな僅かな期間で俺の背中に追いつく程になっていた。発現して無かった個性が発現して、そこからのクラス委員長、今までのコイツではありえなかった。そしてUSJ、コイツはあの糞女にボコられながらも俺に逃げろと指図してきた。

俺よりも弱い筈なのにまた俺の身を案じやがったのだ、ヘドロ事件の時の様に。もう駄目だ、このままの成長速度ではコイツは俺を超える。そして俺は完全にコイツに見下される。

そう思っていた筈なのだが……

「なんだテメエ……そのザマは」

「ひっ……ごっ……ごめん」

「——なに謝ってんだって言ってんだよクソナード！ テメエクソみてえな顔しやがって！ 昔みてえに逆戻りしてんじやねえよ！ ぶつ殺すぞ！」

今日あったコイツは雄英に入ってから自分の自分を忘れたみてえに震え、呆れるほどの雑魚に逆戻りしちまった。初めてのヒーロー基礎学での戦闘で勝って俺を超えるとほざいた顔は真っ青に染まり、俺の顔を見るだけで震えていた。

思わず顔を見た時は呆けてしまった。どうやら俺の原点は無様にもUSJの一件で堪えてしまったらしい。俺を超える気概も全部アレで消え失せ、ただのクソナードに逆戻りだ。

今までの俺ならば漸く立場を理解したかと嘲るのだろうか、今の俺から見れば腹が立つただけだ。

「俺を超えるんじゃないのかよ……？ 勝って越えたいってほざいてたのは嘘だったのか？ テメエは何処まで行ってもクソナードなんか？」

「だっ……だっ……」

しどろもどろになる木偶の坊の面に限界を感じた俺は胸倉を掴みあげ、感情のままに吠え立てる。

「だっ……だっ……」 テメエが俺の原点ならそれらしく行動しやがれ！ テメエがそのザマだったから俺までクソ雑魚で満足しちまったんだろうが！」

俺の言葉が理解不能だったのか、困惑する木偶の坊の胸倉を離す。テメエがこのナメプ野郎みたいな奴だったら、俺はこんなクソ雑魚じゃなかった。テメエさえ強けりや俺だって慢心しなかったし、糞みたいに雑魚に対してイキリ続けるなんて無様を晒さなかった。

怯えた目で俺を見る木偶の坊の視線が心底わずらしくなり。俺は視線を切り、ナメプ野郎を睨みつける。

ナメプ野郎は相も変わらず笑っているだけだ。

「——おい。ナメプ野郎」

「なんだ爆豪？ えらい殺意マシマシの目で睨みつけてくるが、もしかしてヤル気か？ ん？」

その言葉はまさしく強者故の余裕から出る言葉。自分が目の前の存在よりも圧倒的に上だと理解しているからこそ出る言葉。

「そうだ。俺とこの場で、今すぐ戦え」

ナメプ野郎の目の色が変わる。俺が本気だと、回避は出来ないと理解したのである。

「本気で殺れ。じゃねえとぶっ殺す」

「よからう。手加減してやるから本気で掛かってこい」

はなからお前如きに本気を出すまでもないと言わんばかりの態度に殺意が湧く、だがその通りだ。今の俺じゃコイツに届かねえ。だから……確かめさせもらう。

俺の全力で何処まで届くか、コイツの足元にどれだけ追い付けるか。

夜の海岸公園に2人の少年が対峙する。1人は力を追い求め勝利を追求する求道者、もう1人は理不尽の化身。運命の女神が何方に傾いているかなど火を見るよりも明らかだ。

だが、何をしても越えたい存在が目の前にいるのならば、立ち向かうのが求道者としての性そのものである。

そして……それを見る少年の胸に何が灯るのは、未だ誰にもわからない。

爆豪勝己 START 緑谷出久 omen

夜の海岸公園は静寂に包まれている。波音と潮風が静かに静寂の中に溶け、対面する2人の少年は何一つ語る事なくただ互いを睨み付けていた。

潮風が両者の間を強く吹き抜ける、それを合図に1人は動き出した。両腕から爆破を放ち爆音を上げながら眼前の存在へと特攻を仕掛ける。先手必勝を体現する、その愚直ながらも荒々しい一手は当然の如く躲される。

しかし、躲すのは織り込み済みだったのか、その方向へと向かって方に腕を向けて爆破を放つ。放たれた爆風は浜を挟り小さなクレーターを作り出す。だが、手応えはない。その証拠に別方向から自分を賞賛するような声が響いた。

会心の一撃を避けられたと言わんばかりに舌打ちをかます。だが……：眼前的相手ならばこの程度出来て当然だと言わんばかりに眼光を爛々と光らせ笑う。

「——ちっ。糞が」

「やるじゃん爆豪、下手したら当たってたわ」

海パン一丁だから当たれば火傷決定だなと笑う眼前の少年、引合石を見ながら爆豪勝己は笑う。己が超えるべき壁の高さに喜び爆豪は、両手を暇にしながら引合へと悠然と近づいて行く。

ダラりと両腕を揺らしながら一歩一歩近付いてくる爆豪の姿を見た引合は、同じようにゆっくりと爆豪へと近づいて行く。10メートル、5メートル、3メートルとドンドンと距離を近づけながら互いに笑い合う。

「——ハッ」

爆豪は笑う、その両腕を何度も紅く輝かせ最高の一撃を放つ為に。「待ったなし……：ハンドの二つや二つくれてやる。それに……：こういう展開は俺好みだ」

引合は笑う。両腕を固く握り締め、片手を顔面の前に起く。もう片手の力を抜き何時でも降り抜ける体制を取った。

先に動いたのは引合だった、身体を低くして爆豪の元へと突撃を仕掛ける。爆豪は正面から来る引合の方へと片腕を向け爆破を放つ。爆音と共に放たれる一撃は海を砂浜を、海を穿ち、その一撃の凄まじさを証明した。

だが、爆豪は放った一撃からそのまま身体を反転させ残った片手を眼前へと向けた。その眼前には、引合が既に拳を振り上げる体制にまで整っている。ボクシングでいうアッパーの構え、脳天を揺らす一撃を放たんとしていた。

だが、それに爆豪の片腕は既に個性を放つ事が出来る。自分の一撃と相手のアッパー、どちらが速いかと言われれば間違いなく自分、それを確信し爆豪は爆破を放った。

バチバチと汗腺から溢れ出る二ト口に似た液体が今にも最高の一撃を放たんとした瞬間、引合のアッパーが放たれる。その一撃が顎を狙っていたのなら爆豪の方が早く一撃を放てたのだろう。だが、引合の腕は顎を狙いに行かなかった。

「――腕ッ！」

本能でその一撃を察したがもう遅い、身体は既に個性を放たんとしている。今にも最高の一撃を放たんとしていた片腕に衝撃が走る。下から打ち上げられた片腕は真上と上がり、そこで汗腺から溢れ出した二ト口に似た液体は爆音と共に虚空へと衝撃を放った。

爆豪の身体が止まる。上空へと放った一撃、そのせいで出来てしまった隙、それを逃す引合ではない。

「ダアアツシャアアツ！」

その掛け声と共に、放たれた回し蹴りが爆豪の横腹に衝撃を与え、蹴られたと理解した直後に感じる衝撃、そして激痛、腹の中がかき混ぜられる感覚に陥り嗚咽感が爆豪の脳裏を支配した。

ただの少年ならばここで嘔吐して終わりだっただろう。少なくともこの戦いを呆然と見ている緑谷出久という少年ならばそうなる。だが、爆豪は違った。

本能、野性的とも言える直感がここで蠢いては死ぬと脳内で叫んだのだ。

個性を使いこの場を緊急離脱する、激痛に耐えながら見た爆豪の視界に映ったのは自分がいた場所に振り下ろされる足、つまりは力カト落とし。身体を振り子のように回し放たれた一撃は砂埃を生み出す。当たれば確実に意識はなかった、直感に従った己に安堵し、爆豪は眼前の存在を睨みつけた。

「おいおい。ここは横に飛んで蹴りの1発放つのがお約束だろ？ 個性ばっかでバンバンバンバンデカいのぶちかますのも良いけどやっぱ砂浜で勝負と言えばコレだろコレ」

そう言いながら虚空に演舞を放ち、引合は笑う。引合の個性は『磁力』手で触れた物同士を対象に引き寄せるか引き離すかを選択する事が出来る力、この力故に触れたら一撃で終わる。故に爆豪は触れられないように、爆破による一撃で相手の隙を付き、そこから会心の一撃を見舞い、終わらせる予定だった。

だが、今の引合の手は固く握られている。まるで個性を使うつもりなど毛頭ないと言わんばかりの構えだ。

今までの戦い方では埒があかない。個性を使ってデカイ一撃を放とうが避けられてしまえばどうという事ではない。

ならば此方も同じ手を使えば良い、相手が個性を使わないならば好都合。格闘戦に乗り、そこから確実に当てられる爆破を放ってやれば良い。

汗で肌につく上着を適当に脱ぎ捨てる。これで服のせいで動き辛いなんて事は起きない、正々堂々真正面から殴り会える。

「なあ……ワンハンドシエイクデスマッチって知ってるか？ 俺あれ好きなんだよ。互いに譲れないと分かっているからこそその片腕同士の殴り合い、確実に当たるし当てられる一撃、意地と意地のぶつかり合いつて感じでなんか良いんだよなあ」

「知るか死ぬ」

そう引合の言葉を切り捨てた爆豪だったが、アレなら確実に爆破をぶつけられるなど脳内で考えた自分のみみっちさに少し呆れ眼前の存在へと再び近づき始めた。

「宣言しよう。俺は右ストレートで決める」

「言ってる」

右ストレート。その言葉に爆豪はピクリと反応するが、初手は殴り合えば確実に分かると考え、その言葉を無視した。

互いに距離を詰め、初手をまじ合わせる。自分は先程のお礼を含めて横腹目掛けての回し蹴り。そして引合が放った一撃は

「……テメエ。ホラふかしてんじゃねえぞ」

「良いじゃねえか。対話フェイズだ対話フェイズ」

互いに足を交錯させ睨み合う。初手は回し蹴りの同時打ち、ならば次は？

爆豪はそのまま足を振り上げ脳天へとカカト落としを放つ、そして引合は滑り込むようにカカト落としを避け爆豪の眼前へと近寄った。

第二ラウンドの始まりだ。

——拳をまじ合わせ蹴りを放ち合う。そんな2人の姿を見て緑谷出久はただ混乱しか出来なかった。元来喧嘩等と無縁な人間性であり、純朴で気弱な少年である彼は喧嘩などした事の無い少年だった。何処にでもいる心優しい少年、だからこそ彼には理解が出来ない。

何故、眼前の2人は何の理由もなく喜んで殴り合いをしているのか。が。

「なんでなんだよ……引合君が殴り合う理由なんてないだろ？ かつちやんだってなんでいきなり……？」

理解が出来ない、互いに傷を付けあって喜ぶ2人が。ぎっくりと言えば彼等に殴り合う理由なんて殆どない、ただ爆豪が越えたい壁の高さが知りたくて、引合がそれを引き受けただけ。爆豪だって今じやなくとも体育祭で存分に引合と戦える、それで本来は問題はないのだ。引合だってこれを引き受ける必要は無い。無視して帰れば無駄に傷を作る事はなかった。ならば何故彼等は殴り合ってるのか？

「爆豪オ！ 腰が入ってねえ拳だなあ！ アアン!？」

「だああってる！ 死ねえ！」

互いに拳を交じ合わせる。互いに頬を殴り抜き血を吐き出し、今度は頭突きを互いに放ち合う。

「——ツクウ！ 結構な石頭なことだ！」

「テメエだつて糞石頭じゃねえか死ね！」

また殴り合う、その度に傷を増やしていく。緑谷には彼等が同じ人間には見えなかった。

力だけで言うならば目の前の2人と緑谷を比べたら圧倒的に緑谷の方が強い。ワンフオーオール超パワーをその身に宿す緑谷が本気で殴れば2人を瞬殺する事は可能だ。

だが、今の緑谷には2人と殴り合いをして勝てるイメージが全く湧かない。彼等に拳を当てられるイメージが全く湧かないのだ。

緑谷出久、彼が純朴ではなく。爆豪や引合のような人間性を持っていたならば彼等の行為を理解出来ただろう。そして彼等と殴り合っても勝てるイメージが沸いたのであろう。

その理由を簡単に言うならば彼等の世界に緑谷出久が入れていない、ただそれだけだ。殴り合いに恐怖を抱かず、己の意地を突き通す決意、そして傷を恐れない覚悟。それらが彼等を突き動かしているのだ。

殴り合う事で脳内のアドレナリンが大量放出されているのも殴り合える理由の一つだろう、だが……それよりも意地、決意、覚悟。この3つがあるから彼等は殴り合える。

「——ツハアツ！ 死ねやあ！」

「死ね死ね死ね死ねと……それしか言えんのかこの猿ウ！ オラア！」

互いに一撃を食らわせれば、やり返しと言わんばかりに一撃を食らわせる。

「やめなよ！二人とも！ もう辞めないで怪我が酷くなる！」

我慢が出来ない、緑谷はあらん限りの声で叫んだ。何が悲しくて幼馴染と新しく出来た友達達の殴り合いを見なければならぬのか、しかもなんの理由もない殴り合い、傷が出来るだけではないか。

そんな緑谷の声が届いたのか2人が止まる。声が届いた、そう安心した緑谷に溢れんばかりの殺意が込められた罵声が放たれる。

「だああつてろクソデク！ テメエが俺に指図すんじゃねえ！……今

の俺が何処まで届くのか、その邪魔をするんじゃないやねえ！　ぶつつ殺すぞ！」

「ひっ……」

純然たる怒り、殴り合いを止められた事で爆豪は怒り狂う。その罵声に怯える緑谷を一睨みすると爆豪はまた引合の方を向いた。

「なあ……緑谷。今さあ……すっごい良い所なんだよ。用事なら後にしてくれ」

口元から血を流しながら笑う引合の姿を見て緑谷は思考が止まる。理解が出来ない、何故？

立ち竦す緑谷から視線を切ると引合は笑いながら爆豪へと言葉を向ける。

「気持ちには分かるが言い過ぎだろ。俺達の事を思ってたってくれたんだからな？」

「知るか、今のクソデクのヒーローごっこに付き合う暇はねえんだよ。俺はお前を超えて糞女を超える、そしてオールマイトを超える」

「……良く分からんが俺は踏み台つか？　上等、踏み台のデカさを思い知らせたる」

吐き捨てるように言い捨てた爆豪の言葉が緑谷の脳裏をガツンと殴りつけた。ヒーローごっこ、自分の今までの行いが子ども遊びのように言われたのだ。

ヒーローごっこ。その言葉が緑谷の脳裏をグルグルと駆け巡り、眼前の光景が見えなくなる。自分の行いがごっこ遊びだった？　憧れの存在から指導を受け、ついに雄英高校に入れたのに、それが全てごっこ遊び？

緑谷の目から涙が溢れ出す、己の全てを全否定され悲しくて涙が止まらなくなつたのだ。だが、それを慰める者はいない。

「死ねやあ！」

「……調子こいてんじゃないやねえぞゴラァ！」

彼等は彼等の世界の中に入っている。緑谷が思考の渦に取り込まれている中、ついに決着が着いた。

爆豪の右ストレートが爆豪自身の顎を貫いたのだ。恐らく引合の

個性による一撃、今まで個性を使わないと思っていた爆豪にとっては理解不能の一撃、爆豪は目を見開き引合を睨み付けるとそのまま意識を落とした。

「ちやーんと右ストレートって言ったんだけどなあ……なんだか良く分からんが良し！ 勝ったなガハハ！」

そう笑い倒れた爆豪の隣に座り込んだ引合を見て緑谷は急いで駆け寄っていく。その姿を見て引合は笑いながら手を振る。

「すまん緑谷！ このバカ頼んだ！ 俺はそろそろ帰る！」

その言葉を最後に引合は文字通り飛び去るように宙を舞い闇の中へと消え去る。海パン一丁、しかも片手に銚子を持って闇の中に消える姿は変態のそれであったが緑谷にはそんな事を考える余裕はなかった。

傷まみれで倒れている幼馴染の為に急いで自動販売機から水を買った、幼馴染に元に戻ると凄まじいタフネスで起き上がり口から血を吐く姿がそこにあった。

「——ちっ！ 糞がッ！」

気に食わない。そう言わなければかりに砂浜を殴り付ける幼馴染、その姿をみて恐る恐る緑谷は話し掛けた。

「……かっ……かっちゃん。あの……」

「……クソデク。俺は先に行く、テメエがそこで終わるも終わらないもテメエの勝手だ」

突然の言葉に困惑する緑谷を無視して爆豪は言葉を続ける。

「俺はオールマイトを超える。この思いはずっと変わらねえ」

「……頑張れって感じのデクだったか？ 今のテメエなんぞ唯の木偶の坊だ。昔と変わららず無能で無個性なクソデクだ」

「精々そこで死んどけ」

そう吐き捨て、爆豪は緑谷を無視して上着を取り家路へと足を進める。

1人取り残された緑谷は拳を握り締め涙を流す。幼馴染から言われたヒーローごっこ、担任から言われた言葉、オールマイトの言葉。その全てがグルグルと脳の駆け巡る。

「僕は……僕は……」

——君はヒーローになれる

「僕は……ヒーローになれるんですよね？ オールマイト？」

呟いた疑問は夜風に吹かれて闇夜の中へと消え去った。

——夢を見た、自分の記憶ではない誰かの記憶を。その夢の中で自分は姿がなく、ただ俯瞰的に記憶を眺める傍観者。

「——何故抗うんだ？ 共に往こう、愚かで可愛い弟よ」

荒廃した世界で2人の男が対峙している。溢れんばかりの邪気、そこに存在するだけで世界に悪意をばら撒く存在。そしてその存在と対峙する存在は、弱々しくも眼前の存在を睨み付けるその目は揺るぎなく、命を捨てても戦う覚悟を秘めていた。

「間違っているからだ。許してはいけないからだ」

「——の……」

その言葉が言い終わる前に世界が変わる。荒廃した世界は白く輝く世界へと変化する、そこでは自分の姿がある。白く輝く世界の中心、光が集まる場所に1人の女性が立っていた。

「君が……俊典の次か。アイツが選んだ男にしては少々頼りなさそうだ」

そう朗らかに笑う女性を自分は知っている。USJでウイルスを殺し、担任をいたぶり、クラスメイトを……幼馴染を蹂躪した悪意の権化。だが、自分には眼前の存在がああ悪意の権化と同じ存在とは思えなかった。

朗らかに笑う女性から清く正しい善性の気配を感じ取ったのだ。

この人はあの恐ろしい存在とは違う、そう確信する。

「——しまった、色々と話したいが時間がない。手早く終わらせないと」

そう言いながら近付いてくる女性をただ呆然と見詰めていると、女性には溢れんばかりの笑顔で此方を見詰め返した。

「良いか？ どんなに苦しい事があつたとしても笑え。そして己の胸に問いかけるんだ」

返事を返そうとする緑谷を無視して女性は緑谷の胸に拳をそつと添える。

「――全てはそこが教えてくれる。自分の始まり……原点って奴さ」
頑張れよ……九代目。

その言葉を最後に世界が極光へと包まれる。女性の姿が見えない、聞きたい事すら聞けず意識が現実へと浮上した。

――夢から覚める、朝日が窓から部屋を照らし、小鳥が朝の訪れを知らせた。

「……学校、行かなきゃ」

昨日母親に嘘をついてズル休みしたのだから、今日は行かなくてはならない。そう思い寝巻きから制服へと着替え始める。肌着を脱ぎ

「……あれ？」

自分の胸に色濃く付いた紋様に疑問を抱きながらも、これが悪い物ではないと感じ、気にせず着替えを続行した。

朝は誰にでも訪れる、緑谷出久の一日が始まる。

「テクくん！休んでたけど大丈夫!？」

「うん……大丈夫。ありがとう麗日さん」

心配するように声を掛けてくれた友人に挨拶をしながら緑谷は自分の席に着く。

「……あのような事が起きた後だ、身体が疲れても無理はない。だが！安心してくれ！この飯田天哉、俺が委員長である君のサポートをしよう！」

「するのは副委員長のヤオモモじゃねーの？」

飯田のそんな言葉に上鳴の空気の読めていないツツコミが入る。

その言葉に飯田は盲点だったと言わんばかりに頭を抱えた。

「しまった！副委員長が委員長のサポートをするのが当然！ならば俺より八百万君の方が適任……ならば俺はどうすれば!？」

1人思考の渦に取り込まれる飯田にツツコミを入れながら砂藤力道が大きく叩き、緑谷へと話し掛ける。

「……別にお前もサポートしても良いんじゃないのか？緑谷！何かあったら俺にも役割任せてくれよ！力だけはあるからな！俺は」

ふん！と力瘤を作り自分の筋力をアピールする砂藤の言葉に他のクラスメイト達が合いの手を入れる。

「そうだぜ緑谷！ 困ったら俺達にドンドン頼れよな！」

「俺に出来ることなら……まあ、任せてよ」

「初めての委員長なんだから分からないことばっかりでしょー！
色々教えるよ！ 先ずは服を脱ぎます！」

切島、尾白、葉隠。1人自分以外がやったら即通報の行為を平然と宣ったが、この場にいる皆がクラス委員長初心者である緑谷の力になると皆が肯定した。

「何！クラス委員長は服を脱がなくてはならないのか!？」

そんな和気藹々な空気の中に訳の分からない事を抜かしながら教室へと入ってくる存在がいた。緑谷は彼の事を良く知っている、昨日の一件で正直顔を合わせずらい存在、引合石だ。

「……いや、脱ぐ必要ねーから。お前、男の脱衣シーン見てーのかよ？」

「そりゃ無理だ。見たら身体中から出血して死ぬ！」

そんな引合へと呆れたように言葉を返す瀬呂の言葉を聞き、引合は先程の言葉を凄まじい速度で撤回した。

「じゃあ死ぬね」

さらに会いたくない存在の声が教室に響く。緑谷の幼馴染、爆豪勝己の声だ。その声にピクリと反応した緑谷をジロリと睨み付けた爆豪は不機嫌そうに引合へと話し掛けた。

「おい……今日の放課後、俺とやれや」

闘志を漲らせた目で引合を見ながら宣言する爆豪の言葉を聞いて引合はノータイムで返事を返す。

「めんどい。今日は嫌だ」

「死ぬええ！」

「甘い！ 切島ガードッ！」

拒絶と共に放たれる爆破の一撃。それをクラスメイトである切島鋭児郎を盾にして防ぐ。声をあげる暇もなく爆破を顔で受けた切島はくぐもった声で怒りの絶叫をあげる。

「——ベエ！ 俺じゃなかったら怪我してたぞお前ら！ 聞いてんのか引合！ 爆豪！」

「違うんです先輩！ 悪いのは全部あの爆豪なんです！ 信じてください！ この曇りなき眼を！」

引合の曇りなき眼を見て切島は怒りを放つ。

「おっ……おう。そうなのか……って、先輩でもないし盾にしたお前も普通に悪いわ！」

「うるせえ。邪魔だクソ髪」

不機嫌そうに自分の席へと向かおうとする爆豪を見て切島はさらなる怒りを爆豪へと放つ。

「お前も悪いからな！ むしろお前が9割悪いから！ 聞いてんのか爆豪おいコラ！」

「うるせえ死ね」

「聞けよ問題児共！ 1—A問題児No. 1とNo. 2！」

そう言いながら爆豪の元へと近寄る切島からクソクソと離れた引合は緑谷の元へと近づき、元気よく朝の挨拶を放った。

「グツモーニン緑谷！ 調子良さそうで……良いか分からんが……まあ。うん！」

「引合君！ 君には言いたい事が山のようにあるんだ！ さあこつちに来たまえ！」

「ヒエツ」

眼鏡を光らせ、引合を捕まえた飯田はズルズルと教室の外へと引合を連れ出していく。なすがままに連れて行かれる引合はさながらもうすぐ売られる子牛の姿を彷彿とさせた。

「——クソデク。テメエちったあマシになったかよ」

「かつ……かつちゃん」

爆豪が緑谷へと話し掛ける。昨日の1件がまだ頭の中でぐるぐるを巻いている緑谷はその顔を見ることが出来ずに身体を震わした。

「ちっ……木偶の坊が！ そのまま死ね！」

その姿に苛立ちを隠さず。爆豪はそのまま席へと向かい、そのままドカリと座り込む。

「……大丈夫か緑谷？ おい爆豪！ お前緑谷が何やったって言うんだよ！」

爆豪の背中を追い掛けてた切島が先程の状況を見ていたのか緑谷を労りながら爆豪を非難する。それを聞き、爆豪は何気なく言葉を返した。

「ああ……？ 何も出来てねえから言ってるんだろが。黙ってるクソ髪、出来ねえなら黙って死ね」

「……お前なあ」

呆れたように頭を振ると、緑谷を労るように肩をポンと叩き、切島は自分の席へと戻る。

ワイワイと賑やかな朝の教室、そこに新たな生徒が入ってくる。

「おう峰田！ お前昨日は風邪でも引いてたのか!？」

峰田実。昨日緑谷と同じく学校を休んでいた存在に、上鳴は元氣よく声を上げた。だが、峰田の返事はない。身体を震わす峰田を見てクラスメイト達は困惑したが、突如クワツと目を開き峰田は声高らかに叫んだ。

「……オイラは峰田じゃねえ！ ゴツド峰田だ！」

「どうした峰田！ 風邪で頭がついにイカれたか!？」

「昨日……引合との電話でオイラは悟った。人はどうしようもない恐怖に陥る事がある。その時に、人を助けるのはエロス……つまりエロスこそが全てを救う存在、つまりエロスを追求し、その果てに辿り着いた者こそが神だと」

「つまり……オイラこそ神だ」

その言葉に殆どの者達の心が一つになる。

「(何言ってるんだコイツ?)」

訝しむような顔で見てくるクラスメイトを見て峰田は言葉を続けた。

「お前らはまだこの領域に辿り着いてない、だからオイラの言っている言葉が分からないだろう。だがオイラの言葉を理解する時が何れ来る」

そう言い残し峰田は自分の席に向かう。その途中で緑谷を見て

「良いか緑谷……おっぱいは良いぞ」

と一言だけ残して席へとついた。突然の峰田の変貌に混乱するク

ラス、元凶である引合を探しに教室を出る一部男子。教室の中は最早カオスそのものだった。

そんな混沌に混沌をぶち込んだ鍋の中のような教室に相澤が入ってくる。

「おいお前ら……さつさと席に」

「先生！ 引合のせいで峰田が狂いました！」

「オイラは峰田じゃねえ！ ゴツド峰田だ！」

その一部始終を見て相澤は心底疲れたように溜息を吐く。

「ほっとけ。時間が経てば直る……多分な」

「因みに……峰田は今日一日ゴツド峰田であつた事を此処に記しておこう。」

「緑谷。体育館△に來い」

放課後、相澤消太が緑谷出久へと話し掛ける。一体何の話なのか、それを理解している緑谷は顔を真っ青にしてその言葉に従った。まづ間違いない彼の持つ力、平和の象徴オールマイトから授かった個性『ワンフォーオール』の話だ。

未だに結論が出せずにいる緑谷は、死刑宣告を受けた囚人のように重い足取りで体育館△へと向かう。その中で彼の友人である麗日お茶子、飯田天哉が心配した様子で彼の事を見ていたが、そんな事に気を使う余裕がない彼は幽鬼の如くフラフラと身体を揺らしながら辿り着いた。

体育館△。雄英高校の体育館とは普通校の体育館とは違い、事件や戦闘での様々な場面を想定した造りをしている。ここは岩盤をメイソンのとした構成、家屋や工場地帯の様に細々とした建築物が存在しない。故に、体育館△の中央で立ち、彼を見詰める相澤の存在を遠くから認識する事が出来た。

「……覚悟は決まったか？」

それは今の緑谷にとつては死刑宣告に等しく、これに領けば彼の夢へと道は閉じさる事となる。だが、彼にはもう自分がどうすれば良いのか分からない。無言で頷き指に小さな切り傷を作る。そしてその手を相澤へと向けようとした、その瞬間。

「SMASH！」

彼等の間に、暴風を身に纏い1人の男が姿を現す。男の巨軀が緑谷を相澤から庇うように前に立ち、眼前にいるであろう相澤へと底冷えするように低い声で話し掛けた。

「……これは一体、どういう事かな？」

その底冷えするする声を聞きながらも相澤は何時の様に飄々とした態度で言葉を返す。

「どうもこうもありませんよ、俺は俺が正しいと思っっている事をしてるだけです」

「……私は彼こそが私の後継者に相応しいと思っっている。そう伝えた筈だが？」

最早、脅迫とも呼べる程の圧倒的な威圧感。分かっているのだろう？ならばどうするべきだ？と言わんばかりの言葉に相澤は嘲るように鼻で笑った。

「……聞きましたよ。それじゃあもう一度言いましたよかオールマイトさん？」

オールマイト。そう呼ばれた男の肩がピクリと動く、相澤は鋭い視線でそれを見た後。断じて引かぬ、そう言わんばかりに言葉を返した。

「貴方の戦いに子どもを巻き込むなど言っているんです。緑谷はまだヒーローではない、そして彼を育てる時間はない。何度言えば分かるんですか？」

両者の間の空気が恐ろしい速度で冷え込んでいく、両者何も語る気は既がない。故に、彼等は臨戦体制を取る。緊張が互いを支配する。

両者の譲れない物がぶつかり合う。古代から意地を突き通す為に行う行為、ここまでくれば緑谷も現状を理解する。自分の師と担任が争おうとしていると。

止めなくては。そう思い声を出そうとするも口から声が出ない、パクパクと口が閉口するだけだ、目から涙が溢れ出す。何故自分は泣いているのか、理解が出来ずにいると、背中越しに師匠の声が響く。

「大丈夫だ緑谷少年。私が出来た」

その言葉と同時にオールマイトは相澤へと駆け出していく。大人同士の、意地を突き通す為の戦いが今、始まった。

先手は相澤の捕縛布だった。オールマイトの腕を絡め取るように巻き付けた捕縛布、そして相澤は全身を使いオールマイトを地面に叩き付けんと布を操る。

だが、相澤の力如きでは自然現象に等しい圧倒的なパワーを持ったオールマイトを止められない。逆に布を持ち、布を相澤を宙へと放り投げた。

「Carolina……」

そして宙を舞う相澤の眼前へと飛び立ち、その剛腕を放たんと、振りかぶった。当たれば間違はなく意識を失う事は間違いない、プロヒーローであろうがヴィランであろうが、この状態になれば殆どの存在が諦めて神に祈るか現実から逃避するだろう。

だが……相澤は違う。オールマイトが拳を振りかぶる瞬間、彼は己の個性を発動した『抹消』視界にいる者の個性を一時的に使用不可能にする力。それを発動した。

全てを粉碎する神の拳の力が一時的に失われる。筋骨隆々だったオールマイトの身体が一瞬で萎み、ミイラのような形相へと姿を変えた。そして相澤は捕縛布を放ちオールマイトの身体に巻き付けていく。

このミイラこそが平和の象徴、オールマイトの真実の姿。過去の戦いで先程の形態、所謂マツスルフォームを維持し続ける事が出来なくなったオールマイトが、ワンフォーオールによって姿を変えていた。ならばワンフォーオールを使えなくなってしまうばどうなるのか、答えがこれだ。

巻き付けた捕縛布を自分の手元へと手繰り寄せ鋭い蹴りを放った。オールマイトの腹に鈍痛が行き渡り、その衝撃で血を吐く。そのまま相澤は地面に着地しオールマイトを自分の方へと寄せて鋭いボディーブローを放った。地面をバウンドしていく眼前の存在へと視線を切らず相澤は言葉を発する。

「俺の個性は『抹消』正面から相対するなら基本的に負けません」

自分の個性を説明しながらも。視線は決して外さず、血を吐きながら睨み付けてくるオールマイトを見て相澤は言葉を続けた。

「……舐めて掛かりましたか？ 貴方が本気なら俺は今頃そこら辺で血を吐いて倒れてますよ？」

「……舐めて掛かったつもりは毛頭ないんだけどね……ゴホツゴホツ」

血を吐きながら言葉を発するオールマイト、そしてそれを見て相澤は言葉を返す。

「俺ではあの女……オールフォーワンに手も足も出なかった。貴方が

幾ら倒すと言ってもこの状況ではやはり信じられない……だけど、その力があれば……もしかしたら俺でも勝てるかも……いや俺の個性とその力があれば勝てるかも知れない」

ワンフォーオールは俺が貰い受けます。そして俺がオールフォーワンを倒してみせます。

そして。その言葉はオールマイトだけではなく、その後ろにいる緑谷へと話し掛けているようであり。言外に伝わった言葉の意味に緑谷の心臓は、掴まれたようにドクンと大きく動いた。

「奴との決着は私が付ける！ 君に背負わせるつもりはない！」

相澤の瞼が閉じられる。ドライアイのせいで目が極度に乾燥する相澤にとって個性発動はある種の拷問に等しい、彼の個性は強力だが、1度視線を外すとその効果を発揮する事はなくなる。

マッスルフォームに戻り今度は相澤の視界に入らないように死角へと高速移動したオールマイトは再び拳を放たんとする。

だが、死角に入ったオールマイトに再度捕縛布が放たれる。視界に入っていない状況からの一撃を読んでいたと言わんばかりのそれはオールマイトの身体に巻き付かんと襲い掛かる。

「SHIT！ その嫌らしい戦い方！ほんと師匠達とそっくりだよ！」

『相手の隙の隙を付け』あの人達にそう言われ続けたので」

再度捕縛せんと襲い掛かった捕縛布から逃れんと横へとオールマイトは跳躍する。そして、相澤もその瞬間に身体を一回転させオールマイトを目視した。その瞬間に発動する個性、オールマイトの身が再び萎む。そして相澤はオールマイトの元まで駆け寄り、再びボディブローを放った。とある戦いで内臓に大ダメージを負っているオールマイトにとって内臓への攻撃は余りにも辛い。

蹲り、あらん限りの血を吐きそうになるのを耐えオールマイトは相澤を評価する。

「……本当に嫌らしい戦い方だ。捕縛布で捕まえ、個性を抹消する。捕縛布で逆にその身を吹き飛ばされようとも抹消さえ発動すれば、後は常人を無力化するだけ。ならば死角をせめれば……捕縛布を放ち、

それによって自分に都合の良い状況を作り出す」

「……」対多は面倒臭いので少々苦手ですが、奇襲と正面切つての一對一は俺の本懐です、もう一度言いますよオールマイトさん」

俺を倒したいなら本気で来てください。貴方が来るまではこれでも雄英最強だったんです、筋を通したいなら俺を倒してからにして下さい。

「……本気で強いよ相澤君。いやマジで、なんでトッププロにならないんだい？ 君ならなれるだろう？」

賞賛と疑問の混じったオールマイトの言葉に相澤はいつもの様に呆れたような、疲れたような声色で返事を返した。

「……俺の個性を考えてください、メディアの露出なんて事があれば俺の個性が公に出してしまう。そうなればヴィランが俺の対策をするかもしれないじゃないですか」

全くもって合理的ではない。そう言い張る相澤が再び瞼を閉じる、そしてその瞬間、オールマイトは地面を割る程の踏み込みと共に相澤の元へと近寄った。

「S M A A A A A A S H !」

「バカの一つ覚えですかオールマイトさん！ 砂煙で視界を遮ったとして、俺がそれに大して対応出来ないと思ってるんですか！」

轟音が体育館で包まれる。体育館△が砂埃と共に悲鳴を上げ、凄まじい轟音と共に崩壊を続けていく。環境すら歪める神に等しい一撃、そしてそれを無効化する超常の力。神の拳が岩をも砕き、捕縛布がその両腕に襲い掛かる。

神とは如何なるものか、正しくその剛腕から放たれる一撃はそれを体現していた。オールマイト、平和の象徴、No. 1ヒーロー、と様々な呼び名がある者に宿っていた力『ワンフオーオール』災害現象すらその身一つで起こせる究極の力を放てる個性。

オールマイト、彼をこの場に於いてはこう名乗るのが正しいのかもしれない。

『ワンフオーオールの後継者』

そのワンフオーオールの力を無効化する力、それこそ相澤消太が持つ個性『抹消』この世の殆どの超常の力……個性を消し去る無情の力であり、この個性社会に於いてその力は何よりも強い。

神の一撃すら放てる個性と個性に対して絶対的な力を持つ個性。まるで物語のライバルと主人公が持つ力だ。

まあ……そんな彼等に問題点を上げるとすれば。

まず第一に、ここが体育館△であるという事。ここは生徒達が自分達の成長の為に使う場所であり、決して彼等の殴り合いの為に使うべきではない。

そして第2に、オールマイト。彼は先日のUSJ襲撃の事件の際にUSJの1部分を崩壊させている。本来ならば自分からこのような行いは当然自粛するべきであり、相澤がこの行為をオールマイトに望んだとしても、それを止めるべきなのだ。

そして第三。ここが最重要であり、彼等が決して忘れてはならない

事。彼等が現時点で全くもって出来ていない事だ。

崩壊していく体育館△、そこで呆然と彼等を見詰める少年。緑谷出久、ワンフォーオールを継ぐ者、平和の象徴の後継者、彼の事を置いてけぼりにして勝手に全てを決めようとしている所だ。

オールマイトは自分の後継者を第一に考えているように見えて考えていない。全ては己の意志を曲げない為に意地を通そうとしているだけ。

ならば相澤消太はどうだろうか？ 彼も同じだ。生徒の為、子供を守る為、己がその盾になる。呆れるほどに正義感に溢れる言葉だ。だが、彼の本心はそんなものでは無い。彼もまたオールマイトと同じように己の意志を曲げない為に意地を通そうとしているだけだ。

そこに緑谷の意思はない、緑谷出久の言葉は彼等に届かない所か必要ないのだ。ならばこの体育館△での争いを一言で例えるならば。

どうしようもないほど自分の意思を曲げないが為に周りの環境破壊すら気にせず喧嘩している彼等は。

自然環境すら崩壊させる神の拳と、全ての超常の力を無効化する超常の力、そんな力を奮って喧嘩をする彼等は一体なんなのか。

「すまないが相澤君！ 私は私の意志を通させて貰う！ あの時、彼こそが私の後継者に相応しいと思ったあの時から！ この意志を曲げるつもりはない！」

砂埃が竜巻の様に舞い、神の如きの拳を振るい平和の象徴は猛る。そして、個性を消し去る男はその言葉を聞いて声高らかに吼え立てた。

「此方とてそのつもりです！ 俺は俺の意志を曲げるつもりは一切ない！ 貴方の力は俺が継ぐ！ そしてオールフォーワンは俺が倒します！」

「……正直ウマが合わないとは思ってたけどほんつとに君とは分かり合える気がしないよ！」

「奇遇ですねー俺もそうですよー！」

力を持った唯の糞餓鬼共だ。

「何なんだよ……どういふ事なんだよ。どうしてオールマイトと相

澤先生が戦い始めるんだよ！ 何一つ分からないよ！」

力を持つ他者の言葉を聞かず、強いだけの彼等は己の意地を突き通す為に戦う。張本人たる少年の心はどうすれば良いのか。

ドクン、心臓が鳴り響く。崩れていく体育館△を見詰めている彼の身体に超常の力が行き渡り、限界だと言わんばかりに緑谷出久の身体は飛び出した。

ドクン、心臓が大きく動き出す。血が行き渡った身体は彼の感情に従い動き出す。何故自分に何も説明しないのか、何故、眼前の2人が勝手に納得して勝手に争っているのか、意味が分からない。分かりたくもない。

「……分からない！」

憧れたヒーローと自分を助けてくれたヒーローが何故戦い合わなければならぬのか、それが分からない。

限界だった心が砕けていく音が聞こえた気がした。もう我慢出来ない、耐える事すら出来ない。

「分からないよ！」

三度対峙した両者の間に小さな影が現れる、それに気付いた糞餓鬼共は慌てて戦闘行為を中止し後ろへと飛んだ。そして、彼等がいた場所に神の一撃が振るわれた。

「あああああああああッ！」

絶叫と共に放たれた一撃は地面を砕き今まで一番の爆音を放ち砂煙を巻き上げた。困惑する両者の視線を感じながら張本人は叫んだ。

「説明して下さいよ！ なんで2人が争うんですか！ さっぱり分かりません！ なんでなんですか！」

ボロボロと涙を流しながら絶叫する緑谷を見て相澤は茫然自失といった様子で手を降ろす。既に臨戦態勢など取れていない、違う、違うんだと口から呟くように漏れ出しているがそれは今の緑谷に届いていない。

「何でなんですか！ 相澤先生がこの力を持っていたら危ないって言ったんじゃないですか！ いっぱい考えて考えて！ それでも分からなくて！ 頭がグチャグチャになって！ それでももう手放そうって思っ

たのに！なのになんで先生がオールマイトと戦うんですか!? ワンフォーオールを知ってるって事はオールマイトの味方なんですよね!? なのになんで！」

本心からの絶叫だった。現れた恐怖、そしてそれから自分を守ってくれた存在。その人の言葉なのだからきつと正しい、そう思う自分とオールマイトに託された力を手放したくないと願う自分。その両方が入り交じり、昨日の幼なじみの言葉。

『ヒーローごっこ』

その言葉で更に思考の迷宮へと堕ちて行つた緑谷にとつてこの選択しかなかった。自分が手放せばあの恐怖と相對する事はない、しかし……手放せば自分がやってきた事は、オールマイトと共に過ごした時間は一体何だったのか。考えれば考えるほど迷宮の奥へ奥へと入り込んで抜け出す事が出来ない。限界だった彼にとつてあれしか答えがなかった。

「緑谷……俺は……」

「いつそ事情なんて説明せずにこの力を奪って欲しかった！ 聞きたくなかった！ 知りたくなかった！」

涙を流し、呆然と呟く相澤を睨み付けた後。緑谷はオールマイトを睨み付ける、既に戦闘態勢を解きミイラのような形相へと戻っていたオールマイトへと心の奥底に封じ込めていた思いを放った。

「助けて欲しかった！ 貴方に導いて欲しかった！ だけど貴方はいつもの様に『もう大丈夫！』って！ 全然大丈夫じゃなかったじゃないですか！ 貴方は僕の憧れで……どんなヴィランにも負けない最高の……最高の……」

その言葉を最後に緑谷は泣き崩れた、ただ涙を流し嗚咽を漏らし続ける。その姿に近付きながら言葉を返そうとするオールマイト。

「緑谷少年……私は、君こそが……あの時、どんなヒーローですら前に出られなかったあの時に、一人勇気をもって飛び出せた君だからこそ……私の……」

後一步で緑谷に触れる。その瞬間、その手が払い退けられた。

「お前は本っ当にヒーローしか出来ねえな俊典イ！」

跳ね除けられた手、それを行つた存在を視認しオールマイトはたじろぐ。それは己の師匠グラントリノ、その顔は阿修羅の如く怒り狂っているが自分の師匠を間違える事は無い。

何故ここまで激怒しているのか、修行時代ですから見せた事の無い修羅の形相にオールマイトはたじろいだ。

たじろぐオールマイトから視線を切り、グラントリノは自身の背中にしがみついている存在へと話し掛けた。

「根津よ。そろそろ退いてくれ」

「全く君は……速いけど乗り心地が最悪だね？ 殆どおんぶされてる身でいうのもなんだけどもうちよつと優しくはいけなかったのかな？」

「そりゃあ……お前を背負うなんて一生しねえと思つてたからな」

そう言うと、グラントリノの背中から一匹の鼠が地面に降り立つ。その鼠は緑谷に近寄りながら相澤へと声を掛けた。

「……相澤先生は今日はもう帰つた方が良いね？ 少し頭を冷やした方が良い」

「はい……申し訳ありませんが。後の事は……」

そう言い残し、相澤は緑谷の方を何度か見ると、揺れるように歩きながらこの場を後にした。

そして、グラントリノがオールマイトを引き摺りこの場から後にしていく。その中でオールマイトの足が何度も擦れていくがそれを気にする余裕がないのか、オールマイトも茫然自失といった様子で緑谷を見詰めていた。

そしてこの場に根津と緑谷しかいなくなると、根津は緑谷へと頭を下げた。

「すまない。彼等が君の意志を無視してこのような事を行うなんて……許してくれなんて言えない。だけど……その力を持つのは君だ。その力をどうするのかは君が決めて欲しい……彼等が、仲間同士で争ってしまう程の価値と意義がその力にはあるのさ」

「君の意志を全て僕達、雄英高校は尊重する。君が選んだ道を突き進んで欲しい」

こんな事しか言えない僕を恨んで欲しい。そう言い残しこの場を後にしようとした根津に声が掛けられる。とてもか細い、まるで独り言のように呟かれた言葉を根津の耳は察知し、その言葉に答えた。

「……僕の知るヒーローの言葉を借りるならば『——自分の奥底にある物。そこが知っている、だから私は走り続ける事が出来る』らしいのさ」

オリジン、その答えはきつと君の原点が教えてくれると思う。そう言い残し根津はこの場を後にした。

心臓が鳴り響く、心音と共に夢であった女性の姿が緑谷の視界に浮かび上がる。その女性は困ったように笑いながら緑谷に近付き、徐に抱き締めた。

『大丈夫だ……私達は……いや、この力は君の味方だ。君の思うように行動してくれ、それにこの力は答えてくれる筈だ』

『——思い出すんだ、君のオリジンを』

その言葉と共に緑谷から離れ、最後に言い忘れていた事があった。と笑いながら女性は語る。

『……ヒーローしか出来ないあの馬鹿に言ってやれ『お前の弟子はお前ではない』とな』

「……貴女はなんなんですか？」

夢で見た姿と同じ。この存在は一体何なのか、呆然と呟くように出た疑問は、朗らかな笑みで返された。

『——秘密だ。今知るよりも何れ全てを知る時が来る、ならばその時に知った方がロマンがあつて良いじゃないか』

その言葉を最後に女性が緑谷の視界から消える。その姿を最後まで見続けた緑谷は立ち上がり体育館△を後にした。

「……僕の原点。オリジン」

その足が向かう場所は決まっている。彼が気付いていなくとも本能が察して既にその場所に向かおうとしている。

緑谷出久とオールマイトの思い出が詰まった場所、海岸公園だ。

憧れたのは最高のヒーロー。どんなヴィランにだって背を向ける事なんて決してなく、どんな強敵だってその拳で吹き飛ばすコミックのヒーローが現実に現れたような存在。

海岸公園の道を歩きながら自分の奥底にあるものが溢れ出てくるのを感じた。

オールマイト、最高のヒーローと共にここで己を鍛え上げ雄英高校へと入学する為、ヒーローの第一歩を踏み出す為に日々トレーニングを繰り返した。

『貴方のようなヒーローになりたいんです！恐れ知らずでどんな時でも笑顔で助ける！ 貴方のような最高のヒーローに！』

最高のヒーローになりたい、それだけが僕の原動力だった。何故忘れていたんだろう、心の底から願っていた事だったのに。

潮風が全身を吹き抜ける。その先にある景色、大海が広がる海岸、景観を汚す物が何一つ存在しない砂浜、それを見て涙が溢れ出す。

『これは受け売りだが、最初から運よく授かったものと、認められ譲渡されたものではその本質が違う、肝に銘じておきな。これは君自身が勝ち取った力だ!!』

この力は憧れの人に認められた証。僕の始まり……1度は挫折した夢だったが、今の僕を作る原点はきつとこの海岸公園から始まった。貴方のようなヒーローになりたい、その思いが今の僕を作り出している。

『ヒーローごっこ』かっちゃん……君の言う通りだよ。僕はオールマイトに憧れて、オールマイトのような人間になりたいと思っている」

だが……その何が悪い？僕の願いはただ一つ、貴方のような最高のヒーローになりたい、それだけだ。開き直りと言われても構わない、僕は僕の憧れたヒーローになる。オールマイトの真似だと言われても構わない、それでも僕は彼のようなヒーローになりたい。恐れ知らずで笑って助ける最高のヒーローに。

「……僕はオールマイトのようなヒーローになりたい」

これこそが僕の原点。緑谷出久が最高のヒーロー、オールマイトの様なヒーローになると決めた誓いの日。

一人の少年は本来とは違う道を歩む事となる。悩み苦悩し、己のヒーローとしての道を歩んでいくであろう彼の道はここに閉ざされ、師を模倣するヒーローとしての道を選び歩んでいく事となる。

この道を選んだ少年を嘲笑する者もいるだろう。だが、彼にとっての原点はオールマイトの背中。その背中を追い続けると決めた少年にその嘲笑は決して届かない。

これは緑谷出久が最高のヒーローを目指す物語ではない。これは彼が憧れの存在へと目を焼かれながらも突き進む物語である。これから彼は、愚直にただひとすらに真つ直ぐ師の道を追い続けるのだろう。

その道は、本来彼が通る道とは段違いに厳しい道となるだろう。その道の第一歩となる今日のこの日、今はただ祝福する事としよう。

Plus Ultra! これからの彼の人生に訪れる受難に幸あれ!

「良いかい弔。正義とは一体なんだと思う？」

闇の中で悪意が蠢く。弔、そう呼ばれた少年はため息混じりに返事を返した。

「——アンタが教えたんだろうが。この世にあるのは力、力こそが秩序を産み出し、秩序から正義は産まれる。だから正義とはなんだと言われたら、ただ一つ。力だ」

その言葉に機嫌を良くしたのか悪意は声色を良くして言葉が続けていく。彼等の会話を聞いていた妙齡の女性は、何も言わず彼等の会話を聞くだけだ。

「そうだよ……良く覚えていたね、これこそが原始時代から変わらな
い答えの1つさ『力こそが正義』だからこそ、オールマイトのような
狂人がこの世界にいることが許されるんだ」

オールマイト。その言葉を聞き弔と呼ばれた少年の顔が憎悪で歪

むがそれを気にする事はなく、悪意はただ言葉を紡いでいく。

「前回の件は残念だったね。だが……考えるんだ。前回の君はオールマイトを殺す、ただそれだけを考えて行動していた。周りの存在は塵芥と仮定し問題ないと考えてね」

その言葉で、甲の脳内に前回の一件が脳裏に浮かび上がる。不甲斐なく何も出来ず無力化された自分、気が付いたら何時もの場所で寝転がされていた。

オールマイトの苦痛に歪む顔すら見れず、ただのガキに無力化された。その事実が彼の心を蝕んでいく。湧き上がる殺意と怒り、それらはオールマイトと己を虚仮にした餓鬼に対してだ。

「だから失敗した。ならば次はどうする？ 敵を知れ、敵の持つ全ての力を理解するんだ。そして己の力を把握し作戦を練る、それだけで次は確実に勝てる」

彼を知り己を知れば百戦殆うからず。悪意はそう甲に告げた。そして、その為にうつつつけの舞台があると言葉を続けていく。

『雄英体育祭』甲、少し見に行ってみると良い。気晴らしついでに敵の力を見極めてくるんだ」

「……俺一人でか？」

胡乱とした視線でそう答えた甲の言葉を聞き、悪意は笑いながら言葉を返す。

「ああ……今回は僕も足を運ぼうかと思ってね。一緒に行こうか？」

その言葉に無言を貫いていた女性は声を上げる。

『僕』も行くのかい？ 僕もあの子の姿を見ようと思っっているんだが、それは困る。もしも『僕』がバレたらどうするつもりなんだ？」

本当に大丈夫か？ そう聞く女性に悪意は楽しそうな声をあげて返事を返す、

「大丈夫さ、姿を変える方法なんて幾らでもある。それに『僕』は一般人として入る。甲の面も割れていない、何一つ問題ないだろう？」

それに『僕』がいれば馬鹿共は『僕』でいっぱいになるだろう？と言葉を纏め、甲に言葉を掛けた。

「弔、アレの持つ力を良く知るんだ。そして考えろ、アレに対して自分が打てる手を。全ては君の為にある、成長するんだ」

闇の中で悪意は蠢く。その悪意の名はオールフオーワン、個性が人類に発現し混乱した世界の中で王として君臨した伝説の存在であり、ワンフオーオールを持つ者達の不倶戴天の存在。

彼こそが闇の王である。

「俺の……ターンッ！」

朝の教室、それはまだ生徒達があまり来ていない時間帯。そこに一人の少年の声が響き渡る。少年の対面にいる存在は無口ながらも、これから起こるであろう展開に予想しているのか、自分が握っているカードを確認し次を促した。

「8マナ発生！ 流星バルガライザー！ シールドブレイクする際に山札の上をチェックする！ さあ来い俺の最強ドラゴン！」

山札の1枚目が捲られる。そこに存在するカードを見て少年は笑い、場に出した。

「2枚目のバルガライザーをバトルゾーンに！ さあショートのシールドを吹き飛ばせ！ ブレイクだ！」

ショートと呼ばれた少年が机の上に置いていたカードを2枚自分の手元に入れる。

「……トリガーはなしだ」

「なら終わりだ！ 2体目のバルガライザーで『ニンジャストライクオロチを出す』……命拾いしたな。バルガライザーだろ？」

ショートの出したカードを見て、少年は先程出したカードを山札の一番下に置き、山札の一番上から捲っていく。何枚か捲り出たカードに溜息をつく。

「……ここでパルピイゴピイか、操作型連ドラの宿命だな。ターンエンド」

そのままショートと呼んだ少年に手番を譲り、少年は内心ほくそ笑む。勝った、ここから俺が負けるはずが無い。

「(馬鹿め……貴様のシールドはゼロ！ 手札は次に引くカードを含めて5枚！ それに比べて俺のシールドは5枚！ バトルゾーンにはブロッカーが一体いる！ バトルゾーン、シールドがない貴様に何が出来る！ ガハハ勝ったな！)」

そのドローが貴様の最後のドローだ。そう内心で笑う少年、そんな

少年の期待を裏切るようにショートは動き出した。

「俺のターン、5マナを使い超次元ボルシヤックホールを発動する。能力でブロッカーを破壊、そして時空の霊魔シユバルをバトルゾーンに。そして2マナでソルハバキを出す。能力でマナの母なる聖域と手札にある聖霊王アルファディオスを入れ替える」

黙々と行われるプレイング、それを見て少年は冷や汗を流す。あれ、この流れ前も見た覚えがあるぞ、というかこれ駄目な流れだ、だと。

「ん……う？ 嫌な予感しかしないんだが？」

「残った3マナで母なる聖域を発動する。ソルハバキをマナゾーンに、そしてアルファディオスをシユバルを下にして場に出す」

出されたカードを見て少年は諦めた顔をして言葉を発する。その声色は既に勝ち目を失ったと言わんばかりに失意が籠っており、顔に手を起き嘆いている。

「あつ……負けたわ」

「アルファディオスでバルライザーを破壊。ターンエンド、石は何か出来るか？」

石と呼ばれた少年は両手を上に上げ降参の構えを取る。そしてショートはそれに無言で頷いた。

「……水と火の混合デッキです。後は分かるな？」

「……なら毎ターン攻撃してダイレクトアタックだ」

何回かアルファディオスを縦横に動かし、石は諦めたように机に突っ伏す。そして地獄の底からの怨嗟を彷彿とさせる声で叫んだ。

「……浪漫デッキに負けるとか死ぬ程悔しいイイイッ！ ドルバルファバルカNEXデッキに負けるとか悔しくて……おおおおおう！ 次は水単フルモンで勝負じゃおらアアッ！」

ガバリと起き上がりカバンの中から別のカードを取り出した姿を見てショートは不思議そうに首を傾げた。

「……さつきから俺と相性悪くねえか？」

「まあ……相性も何も操作型連ドラって結構ガチなんですけどね？ というかなんでそんなデッキ回せるの？」

心底不思議そうに聞いてくる姿にショートは首を傾げ何を当たり前な事を聞くんだと言わんばかりに言葉を続けた。

「……引いたら好きなもんが来るだろ？」

その言葉を聞き石は口元を何度か引くつかせ言葉を発する。

「因みに、なんだけど……残った手札には何があつた？」

その言葉を聞き、残った手札を見せつけショートは言葉を発した。

「ドルバロムとハヤブサマルだな」

その現実を見て石は無言になり新たなデッキをシャッフルし、再度のデュエルを準備をする。それを見たショートが同じように準備を行い、両者の準備が終わり石はビシリと眼前の存在に指を刺し、叫んだ。

「……負けんぞリアルデイスティニードロー持ちめ！ 絶対にぶっ倒してやる！」

そしてその数分後、哀れな少年の悲痛な声が教室内に響き渡った。

「……んで、轟。何で引合の奴は死体になつてんの？」

喧騒で賑わい出した教室の中で死体のように机に突っ伏している哀れな少年、引合石。彼を見て不思議そうにショートに尋ねる存在がいた。その存在の名は上鳴電気、明るい黄色の髪を何度か掻き毟りそう言い放つ。それを聞き赤と白のコントラストの髪を持つ少年、轟焦凍。別名ショートは上鳴と同じように首を傾げ言葉を続けた。

「……バトルゾーンとマナを0にしてダイレクトしたら『見る遊戯イ！』これが敗者の姿だ！』って言いながら突っ伏した」

「……正直。お前がカードゲームやってる事に俺は今、驚愕を隠せずにいるわ」

そう言いながら机に散らばったカードを持ち上げ、上鳴は懐かしそうにカード眺めながら話し出す。

「いやー懐かしいなあ、俺もガキの頃はブイブイやってたぜ。遊○王もデュ○マも両方な。というかバトルゾーンとマナを0されたとか引合、お前どんだけ弱いんだよ」

笑いながらそう言い放つ上鳴の言葉を聞き、引合はガタリと立ち上がり上鳴に自分が座っていた席を譲る。困惑する上鳴の姿を見なが

ら引合は笑い、言葉が続けた。

「……シヨートに勝ったら昼飯奢ってやるよ」

「おっ！マジで!? 俺めっちゃ強かったからな！約束は守れよ！」

ウキウキで座り、机の上にあったカードを纏めシャッフルし始める上鳴に引合は言葉が続けた。

「その代わり……お前が五回やって五回とも負けたら、昼飯を奢る代わりに関節をキメてやる」

「良いぜ！ 絶対に1回は勝つから問題ねえ！」

ゲームの準備がお互いに終わり、引合はシヨートへとハンドシグナルを送る。それを見てシヨートが1度頷くと、勝負が始まった。

その後。五回中五回、つまり全試合全てでボコボコにされ、信じられないと言わんばかりに呆然としている上鳴を捕まえ関節技の実験台にしている少年の姿があった。

「というか、引合石だった。」

「ほーら中固め、そんでアバラ折り。まだまだ行けるがどうだ？」

「いででで！ 折れる折れる！ ストップ！ ストップ！」

「ダイジョーブ。オレ、ヤサシイ。オラナイ、イタクスルケド、オラナイ」

「片言で怖え事言ってるじゃ……ンギヤアア！」

教室内に上鳴の悲鳴が木霊する。入ってくるクラスメイトは彼等の姿を見ると何度かチラチラと見ると何も言わずに自分の席へと向かう。

「なあ……轟。アレ、何？」

やばいものを見たと言わんばかりに問うしようにゆ顔の少年、彼の名は瀬呂範太。彼が教室に入った瞬間目にしたのは関節をキメられ地面を何度も叩く上鳴と笑顔で関節をキメている引合の姿だった。

正直、やばいもの所ではない。下手すればイジメの現場そのものである。そう思い問いかけた。

そしてそれに対する答えはとても淡白で

「……賭けで負けてああなってる」

「あー……んじや半分上鳴の自業自得みたいなものか。頑張れよー上

鳴——！」

そして、それを聞いた瀬呂の反応もとても淡泊なものであった。助けを求める悲鳴を聞き流し瀬呂は朝の日常へと戻っていく。悲鳴がBGMの珍しい朝の日常、そして新たなクラスメイトが教室に入ってくる。

「おはよう……っつてええ!? 何でそんな事になってるの!?!」

教室に入りながら朝の挨拶をして、目の前の現実には仰天する。大きな目を見開き絶句するように立ち竦す少年、その名は緑谷出久、最近色々重い運命を背負わされたこのクラスの委員長だ。

「助けてくれえ緑谷ア! このままじゃ俺はこの鬼畜外道に殺されちまう——！」

「殺されるの!?!」

「失礼な、殺さんし骨も折らん。ただ間接をキメてるだけだ」

そう言いながらさらに関節技を掛け始める引合に緑谷は目を白黒させながら言い放つ。

「そつか。それなら……っつて! それでも駄目だよ!」

その言葉に引合は驚いたように目を開き緑谷をじつと見詰めた。いきなりの行為に困惑しながら見詰め返す緑谷、何秒かの逡巡の後、引合は驚いたように言葉を続ける。

「緑谷……お前、なんか吹っ切れたか? 最近のお前と目付きが全然違うぞ?」

「えっ……そうかな?」

その言葉に何度か悩んだような態度を取ると緑谷は笑いながら言葉を返した。

「……強いて言うなら自分がなりたいたいものを思い出した……っつて感じかな?」

「ほーん。まあ……いつか! 今回は委員長様の言葉もあるしコレで勘弁してやる! 精々お礼を言っておくんだな!」

そう言い残し引合は上鳴を解放し、自分の席へと戻る。すがりつくように感謝の言葉を掛け続ける上鳴の言葉を聞き緑谷も自分の席へと向かう。

「ありがとうクラス委員長！ あの鬼畜外道から俺を解放してくれて本っ当にありがとう！ 今日のお前は俺のヒーローだ！ よっ大統領！」

「……上鳴君。結構余裕あったんだ」

それからいつも通りの時間が流れ朝のHRになる。相澤が朝の連絡をした後、緑谷が挙手し、立ち上がった。

「……なんだ緑谷」

「先生……僕はオールマイトのような最高のヒーローになります！以上です！」

ただそれだけを言い緑谷は再び座る。いきなりの緑谷の発言に困惑するクラスメイト達、そんな中。爆豪だけが心底不機嫌と言わんばかりに舌打ちをして言い放った。

「……チツ！ 元に戻りやがって、死ねカス！」

「爆豪君！ クラスメイトに対してその暴言は些か限度が過ぎている！ 君はいい加減に優しい言葉遣いを」

「うっせ死ね糞メガネ」
そんな爆豪の言葉を聞いた後、相澤は深く溜息をつき言葉を発する。

「緑谷、放課後……体育館△に来い。話がある」

「はい！」

「……ハア。んじゃHR終わり」

そう言い気だるげに教室を出る相澤。そしてその日は引合石にとつては何も変わらない一日が過ぎた。

誰もが己を力を磨き、時間が流れた。

そして時は経ち、遂に雄英体育祭の日が訪れた。

ちよつとした間話

これは体育祭よりも前。彼等が自身の栄光を掴む為に修練を重ねていた2週間の内の一幕、とある少年が何時もの如く、思いつきと短絡的思考回路から産み出された発想を現実のものとする際のちよつとした小話である。

まあ、この時点で一つ言えるとするならば

「おつす心操。明日普通科の奴らに話したい事が出来てな、少し頼めるか？ ああ……なあに。俺にとってもお前らにとっても、楽しい楽しい話だよ」

大体引合石のせいである。

体育祭前日、ヒーロー科 1ーAにとある噂話が入り込んできた。英雄高校は複数の学科によって分けられている、ヒーローを目指す少年少女が日々、己を磨く。英雄高校の花形ヒーロー科。ヒーロー科から落ちた者達が入ると揶揄される普通科、己の技術力を磨き更なる発明の為に日夜研究に勤しむサポート科、そして経営戦略から経営学、様々な事を学び未来の経営者となるべく勉学と実務に励む経営科。

ヒーロー科 サポート科 普通科 経営科。これらの4つをもって学科は形成されている。何故この場をもって学科の説明をしたか、それに対する回答はある少年の一言をもって説明させてもらう。

『ドキドキ！体育祭順位トトカルチョ！』……んだそりや！ 誰が始めてんだよそんな事！」

教室に間の抜けた声が木霊する。明るく快活な声色が疑問1色に染まり、持ち前の優れた容姿は胡乱とした顔でその言葉の真意を問うた。そしてその声の主に対する回答はなんとも明瞭としておらず、自分にも詳しい事は分からないと匙をなげながら言葉を続けた。

「いや……俺もわかんねえだけどさあ、なんか普通科とか経営科とかサポート科の一部生徒達の中で流行っているらしいぜ？ こんな紙を渡されてな『お前に食券だいぶ掛けてんだ。だから勝てよ』って言われたわ」

しようゆ顔の少年はそう言いながら金髪の少年へと自分が持っていた紙を見せるように机の上へと置いた。

そこに書かれていたのはヒーロー科の生徒達の名前、彼等が持つ個性の概要、そして何らかの倍率。この紙を見ていた金髪の少年、上鳴電気は自分の倍率を見て目を見開き驚愕を隠せないと言わんばかりに叫んだ。

「んなつ！ 96倍イ!? しかも峰田に関しては180倍じゃねえか!?」

そんな上鳴の悲鳴にしようゆ顔の少年、瀬呂範太は肩を竦めながら話を続けた。

「ウチのクラスで一番倍率が高いのは青山の192倍だな。というか数人以外の倍率が凄い事になってやがる」

そう呑気に話す瀬呂の言葉を聞き上鳴は待ったを掛けるように声を荒らげた。

「ってかこんな事やっていいのかよ!? 先生に言うべきだろこんな事！」

賭け事なんかやつちや駄目だろ、そう声を大にする上鳴の言葉を聞き瀬呂は笑った。それは愉悦でも歓喜に満ちた笑みではない。疲れ果て、自分の手に負えないものに対する諦めの笑み。いわゆる死んだような顔というものであった。

「……俺だってこれを聞いた後、急いで相澤先生に話したさ。そしてらなんて言ったと思う？」

ゴクリ。そう自分の喉が鳴る音を聴き、上鳴はその言葉の続きを待った。神妙な態度の上鳴を見ながら瀬呂は言葉を続けた。

『校長先生からは……生徒の自主性に任す。が結論で、俺からはこれでお前らにやる気が出るなら幾らでもやれ、が結論だ。ルールもきつちりと定められ、掛けられる上限金……いや食券も子どもの小遣い程度。ぶっちゃけ遊びみたいなもんだ……だが、まあ。こういう遊びはあんま表沙汰にするなよ』だとさ」

「適当過ぎんだろ雄英高校！ どんだけ自由なんだ！ 生徒の自主性に任せ過ぎだ！ もう少しちゃんとさあ！」

「俺もそう思う。だけど……冷静に考えれば、ぶっちゃけこれ、色々と学べるシステムなんだわ」

ツッコミマシーンと化した上鳴に瀬呂が言葉を掛ける。そんなこんなで彼等が漫才に似た何かを繰り返していると、そんな彼等の様子が気になったのか、1人の少年が彼等の元へと近付いてきた。

「よつす二人とも！ 何やってんだ？」

「うえっ!? いやー……ちよつと2人でお話してたんだよ！ なあ瀬呂！」

「ん？ まあ……そうだな？」

重力に逆らうかのような幾重にも鋭利に尖らせた赤い髪がトレードマークの少年、切島鋭児郎。そんな彼が2人の様子を見て何やら楽しそうな事をしていると感じ取ったのか、自分も混ぜて欲しいと言わんばかりの態度で二人のもとへと駆け寄って来た。いきなりの登場に困惑し急いで誤魔化そうとする上鳴、彼の直感と良心が普遍的で善性である切島にこれを見せるのを躊躇わしたのだ。

「なんだよー！ 気になるじゃんか！ 少しくらい教えてくれたって良いだろ!？」

自分の肩に腕を回し、そう笑顔で問いかける切島に対して上鳴は瀬呂へと視線で助けを求める。そんな上鳴を見た瀬呂はヤレヤレ、と言わんばかりに先程隠した紙を切島にこれでもかと言わんばかりに見せつけながら話し出した。

「切島は見ての通り80倍、ついでに俺は56倍だ。まあ……今、1年全体で流行っているらしい遊びみたいなもんだよ」

「へえー……これって、やってもいいのか？」

「相澤先生から聞いたがOKらしい。後、これを見て精々をやる気を出せとも言ってたな」

真剣に紙を見る切島を見て、上鳴に疑問と怒りと困惑が混じった顔で見詰められた瀬呂は笑い、言葉を続けた。

「まあ……これを見る限り俺達が優勝する事はまずないと思われる、正直ムカつくな。絶対に優勝してやろうぜ」

「……だな！ どうやら俺が勝つって思っている奴も結構いるみたい

だし絶対に負けられんねえよ！」

紙から目を離しそう意気込む切島。その様子に安心したようにホツと胸を撫で下ろす上鳴、そして、瀬呂は冗談交じりに飯田には絶対に教えられないと笑いながら話し、彼等もそれに同意しながら紙に書かれてある倍率と名前を眺める。

「つてかさ……轟と夜嵐ヤバくね？ 倍率1倍切つてんだけど」

「爆豪は3.5倍か……というか引合の倍率が61倍なんだが、アイツが俺よりも倍率高いとか嘘だろおい。掛けられるなら今から俺と引合に掛けてえよ」

「食券は500円分の食券を最大10口。つまり10枚までか……後、賭けるのはもう締め切つてるみたいだ。皆が誰が勝つか予想しているのを見るのも案外面白いな！」

やんややんやと語り合う男3人。何やかんやいっても彼等も男の子、他人に決められた格付けでも案外楽しんで見れるのだ。爆豪のような他人の意見など知った事ではないという剛毅さは普通の人は持ち合わせていないのである。

「おはよう三人とも！ 今日も良い天気だな！」

「おつす飯「だアアアツ！」だ？」

そして、そんな話し合いは1人の少年の声によって掻き消される事となる。糞真面目が人の形を持って産まれてきた飯田天哉、彼にこの紙の存在を見られるのは少々不味い所の話ではない。ぶっちゃけた話、かなり不味い。これを知れば即座に怒り狂い先生へと上告し、それが駄目ならば教育委員会へと意見を出しに行くだろう。

そしてそれに気付いているのかいないのか、分からないが切島は平然と朝の挨拶を交わした。残った2人、上鳴と瀬呂の行動は余りにも素早いものであった。

「あああああ！」

瀬呂が紙を潰すように握り。紙で球体を作り出し、勢い良く遠くへと放り投げる。

「あああああ!？」

そしてそれを見た上鳴は紙に向かって駆け出し危なげなく掴み取

ると、そのまま教室の外へと姿を消す。

「ああああああ!?!」

そして彼等の様子から現状を理解した切島が驚愕を隠さない顔色で上鳴の後を着いて行くようにこの場から駆け出した。瀬呂も挨拶を済ますと駆け出すようにこの場を後にする。

いきなりの彼等の奇行に困惑を隠しきれない飯田。脳の処理が現実には追い付いた瞬間、大声で3人の名前を呼びながら彼等の後を追いつけた。

「三人とも! 校内で走るのは校則違反だぞ!」

そんな少しズレた事を言いながら教室を後にする飯田、教室に沈黙が訪れる。そして、そんな教室の中で今まで声を発していなかったのか、1人の少年が声をあげた。

「192倍……キラメキが止まらないね!☆」

その少年の言葉は優雅を常とする彼らしくなく、動揺と悲しみに揺れていたのをここに記しておく。

雄英体育祭 当日

朝、太陽が登り始める前。街がまだ目覚めておらず、耳を澄ませど都会の荒波に揉まれたタフな小鳥達の囁りと暑い熱気に包まれた人々の狂騒はまだ聞こえてこない。そんな時間の海岸公園にとある子ども達の声が響き渡っていた。

「どりやああつー！」

その声は威嚇というよりも自分に覇気を込める為の掛け声を思わせ、甲高い少女特有の声色を喉で鳴らし空気を震わせた。

ぎざめく波音を掻き消さんと言わんばかりの声色、そしてその声の持ち主である少女は眼前の存在目がけて振り上げた足を全力で振り下ろした。振り下ろした足はそのまま眼前の存在へと放たれる、少女はそう確信した。

やった。とった！ と内心で勝利を叫んだ瞬間、少女の視界がぐるりと回転しそのまま背中から砂浜へと落とされる。

振り下ろした自分の足を掴みそのまま身体ごと回転させられた、そう気付いた瞬間に少女は悔しさを隠さずに声を上げた。

「くっそおおっ！ もう一回や引合君！ ええやろ!? なあ!？」

引合。そう呼ばれた少年は少女の言葉を聞き少し悩んだのか顔に手を当て考え込むと、パツと顔を上げて少女に向かって笑いかけ言葉を発する。その言葉を聞き少女は不満そうな態度を顔に出し言葉を続けた。

「うっ……それを言われたらなんにも言えへん。でも、一つだけ、これだけは言っとくで！」

ビシリ。大仰に引合へと指を向け、麗日は瞳を決意で輝かせながらハッキリと言い放つ。

「引合君が強かろうが優勝するのはウチや！ いくら教えて貰った身だとしてもこれだけは譲れんから！」

言ってやったと言わんばかりの態度をとる麗日を見ていた引合は呵々、と愉快そうに笑い。拳を作り麗日へと向けながら語り掛ける。

「さつきまで延々と投げ飛ばされてた癖に……良い根性だ。ハンデな

ら幾らでもくれてやるから全力で掛かって来い」

「上等。ハンデやったから負けたとかいう言い訳は聞きたくないで？」

「」
その言葉を聞き麗日もニヤリと笑い、コツンと小さな音を立て拳闘士がぶつかり合う。そして、それを最後に2人は海岸公園を後にする。

彼等が家路に付き今日の準備をしている頃には。太陽が完全に登り、小鳥達が囀り声を出し、街は人々の狂騒で賑わい始める。今日は雄英高校体育祭当日、これから起こりうる全てが今日という日から始まる。そんな運命の日だ。

少し時間を戻そう。時は彼等が海岸公園である意味、青春している時、小鳥も街も目覚めていない。街のとある一軒家、他の家屋とは圧倒的とも言える面積を持ち、造りは古式の日本家屋を彷彿とさせた。そこはとあるトッププロヒーローが住まう一軒家。家主が己が持つ財をもってして造り上げた自宅兼修練場。その修練場の中で1人の男の感嘆の言葉が響き渡った。

「——良くぞ、良くぞ。ここまで……まだ未熟な部分は多々あるが前は今、完全なる俺の上位互換となった。俺の持つ力、その全てを叩き込んだ今のお前に敵う者などトッププロですらそうはいまい」

「ここに俺が認めよう。焦凍、お前こそがあらゆる全てのヒーローの頂点に立つべき存在だ」

その声色から感じるのは万感の想い。賞賛と歓喜、それに類する全て。全てが極まり涙を流しながらその声の主は眼前の存在を賞賛した。その声の主の名は轟炎司、No. 2ヒーロー エンデヴァーにして最強の炎系個性『ヘルフレイム』を操る益荒男。彼は、今この瞬間に己の悲願、己を超える存在を産み出す事に成功した。そして彼が造り上げた最強の存在はその賞賛を受け取らずギラギラと熱の籠った視線を持って炎司を睨み付けた。

「……まだだ、こんなんじゃないやねえ。こんなんじゃないやアイツを超えられねえ」

2週間程前だろうか、己の後継者たる我が子が発した言葉。超える

べき存在がいる。そう頭を下げられ、己が忌避していた力を使う決意した姿を見せられた炎司は歓喜した、遂に反抗期を終えたのだと。愛する我が子が己の力を受け入れる覚悟をしたのだと。

「……勘違いするな。俺はあんたが嫌いだ。だが、アンタは俺を育てたい、そして俺は力が欲しい。アイツが言うなら『Win Winの関係』何も不満はねえだろ」

その言葉に炎司の高揚は鳴りを収め疑問が産まれた。頑なに己の力を否定していた、それは妻を無碍に扱い我が息子を鍛え抜いた父である自分に対する憎悪からだった筈。故に問うた、何故？ 今になってお前はこの力を使う覚悟をした、お前にとって俺の力は憎悪の象徴そのものだろう？ と。

「……越えたい奴がいる、アイツには母さんの力だけじゃ追いつく事すらままならない。USJで痛感した、今の俺は弱い」

「一緒にスーパーヒーローになる。今のままじゃ無理なんだ」

拳を握り締めそう断言する息子を見て炎司は確信した。コイツは今、壁にぶつかっている。超えるべき壁の高さにぶつかっただと。自分はオールマイトという壁にぶつかり、最終的に絶望した。そして息子も、焦凍も同じ状況に陥りそうになっている。

ならばどうすべきか？ 答えは既に決まっている、己の全てを授ける時が今来たのだ。炎の最奥、自分が辿り着いた境地の全てをこの息子に授けよう。

そして……願わくば授けた力を持って眼前にあるであろう酷く強固で天より高い壁を打ち破って欲しいと。

お前こそが最強のヒーローになり俺の悲願を成し遂げる者なのだから。

炎司の中にある薄暗い自己投影の想いと父として、自分と同じ轍を踏ませたくないという願いが入り交じる。そして彼己が知りうる炎の極地、その最奥までをたった2週間という期間で叩き込んだ。己が数十年掛け辿り着いた境地を無理矢理2週間、日に直すならばたった14日という時間で息子にへと叩き込む、今まで行っただの訓練の比で

はない。文字通り毎日血反吐を吐き、気絶しても叩き起し繰り返す程の超高密度な地獄とも例えうるスケジュール。その地獄はどれだけ強い決意を抱いていても本来ならば泣き喚き中止を懇願しても可笑しくはなかった。

だが、焦凍はその全てを耐え切った。そして今日、体育祭当日を迎え彼は一応の形で完成を迎えた。まだまだ未熟な部分はある。だが、確かに炎司が歩んだ数十年を会得したのだ。

「焦凍……もう一度言っておくが今のお前に敵う者はトッププロですら少ない。経験と実力を加味しても、殆どのトッププロはお前以下だ。学生のみには絞ればお前こそ頂点にいるだろう」

だが、違うんだな？ 今のお前の上に立つ存在がいるのだな？ そう炎司が問うと焦凍は当然と言わんばかりに深く頷く。

「……俺が言える言葉ではない。が……経験者からの言葉だ。心して聞け」

「イメージしろ、己の中にある炎を。決して消えぬ炎がその胸にある限り、お前の炎は絶える事は決して有り得ぬ」

その言葉を最後に炎司は修練場を後にしようとする。扉を開き、廊下に出る瞬間。その背中に、か細く小さな声が掛けられた。

その声を聞き炎司は笑う。それは己の全てを授けた師としての笑みなのか、遂に己の代わりに悲願を成し遂げる存在を育て上げたNo.2ヒーロー エンデヴァーとしての笑みなのか、それとも息子の成長を喜ぶ父としての笑みなのか、それともそれら全てか、誰にも分からない。

修練場を後にした炎司は携帯電話を取り出し、とある場所へと電話を掛ける。それを複数回繰り返した後、炎司はドカドカと足音を立て目的の部屋の扉を開けた。

「冬美イイッ！」

その怒号とも呼べる声に何事かと言わんばかりに慌てふためきながら目覚める娘へと炎司は言葉を掛ける。

「お前は確か今日休みだったな？ 丁度良い、お前は冷と夏雄を連れて雄英に來い。案ずるな、全て話は通してある」

状況が理解できないと言わんばかりの態度をとる娘。そして言いたい事だけ言い残し、父親は台風の如くその場を後にした。安眠を妨害され、徐々に覚醒していく明瞭な頭脳が先程の言葉の意味を漸く理解しバタバタと慌てながら父の後を追う。

「……俺もそろそろ覚悟を決める時か」

登り始めた太陽。小さく、覚悟の決まった声が目覚め始めた街の声に掻き消された。

第一種目 開幕

蒼天。海中を彷彿とさせる大空、広々と地平の彼方まで遙か遠く続いている。それは頭上に広がる大海そのもの。太陽が燦々と輝き、世界を照らし今日というこの日を祝っているように感じられた。

『YEEEEEEEE! 盛り上がってるかりスナー共! 直に今日の一大イベントが始まるぜ! さっさと席を確保しなきゃ立ち見になっちまうぞ!』

校内中に設置された拡声器からプロヒーロー プレゼントマイクの声が木霊する。今日こそが日本の一大イベントである雄英体育祭当日、視聴率稼ぎの為のマスメディアに今日を心待ちにしていた観客、そして掻き入れ時と言わんばかりに様々な屋台が校内に立ち並び、人々は活気に満ちた声を上げた。立ち並ぶ屋台、祭りに相応しい商品がこれでもかと屋台で販売されており、人々は目的の場所へと足を進めていた。

「お母さん……人が多いけど、大丈夫? しんどくない?」

「私は大丈夫。それより焦凍がいる場所は何処だったかしら……?」

そんな人々の波の中にとある家族がいた。母と呼ばれた白髪が目立つ妙齢の女性、白と赤が入り交じった髪を持つ女性、そして白髪の少年。そんな3人がいた。家族での応援だろうか、彼等の姿を見た者達はそんな事を考えながら自分が向かうべき場所へと足を進めた。

「ふむ……甲、君は何か欲しいものはあるかい?」

「……どうでも良いからちゃんと杖を使って歩け」

まるで喪服を彷彿とさせる黒いスーツを身に纏い、顔を隠すように黒いシルクハットを深く被った老年の男性が隣にいる少年へと語り掛ける。声を掛けられた少年は呆れたような声色で男性へと返事を返す。

「おっと。これはこれは……」

それを聞いた男性はおどけたような声色で笑い、二人して先程の家族と同じ場所へと足を進めた。そうやって人々が自分が向かうべき

場所へと足を進め、人々の喧騒と賑わいがこの場所一帯を包み込んで
いる中、火薬が炸裂した音が彼等の耳朵を叩き、空に色鮮やかな花火
が上がる。

「……こうして僕も気にせず入れるなんて随分とザルな警備じゃない
か。 まあ……僕も楽しませて貰うよ？」

人波の中で小さく笑う黒髪の美女が流れに逆らわずに目的地へと
進んで行く。波が3つに別れ、学年毎で別れた競技場が人で溢れ体育
祭の始まりを今か今かと待ち構えている。熱気は既に最高潮、そんな
熱気の中、プレゼントマイクの開幕の宣言が拡声器を通じ、声高らかに
学園中に響き渡った。

『それじゃありスナー共！ 準備はOKか？ ポップコーンと
ジュースは買ったか？ 先にトイレは済ませてるな？ OK！ そ
れじゃあ始めよう！ 雄英体育祭の開幕だあつ！』

雄英体育祭 開幕

「それで……まあ、後はアイツら次第だろう。教えられる事は大体教
えた、俊典。アイツらはお前よりも教えがいがあつたぞ」
「この度は本当にご迷惑を……」

一年専用競技場。教員専用の席で2人の男性が談笑していた。い
や……それを談笑と表現するのは少し妙で、老人の言葉に痩せこけた
長身の男性が腰を低くして謝罪の言葉を紡いでいるのだ。その姿は
談笑とは真逆の何かだろう。だが、それが彼等の当たり前なのだろう
か、他の席に座っている教師達はその姿を気にしている様子はなく、
まるでここ最近で見慣れた光景と言わんばかりに対応していた。

「爆発小僧はセンスがあるが、ちと野生的に過ぎる。そしてお前の弟
子はセンスはお世辞にもあるとは言えんがそれをカバーするだけの
努力と分析能力がある。まあ……どっちもどっちだな」

老人はそう言葉を締め、隣にいる俊典と呼んだ長身の男性を睨み付
ける。その眼光に男性は竦み上がり、恐る恐るといった様子で言葉の
続きを待った。

「それで……私は参加させて貰えなかったので詳しくは分からないの
ですが、緑谷少年の完成度は如何程なものでしょうか？」

「ああ!? お前に任せてたら100年あっても足りん! 弟子の心情を放つたらかしくして暴れ回る阿呆に任せてみる、間違いなく口クな事にならん」

「ううっ……仰る通りで、全ては私の不徳の致す限りです」

その長身を小さく幻視してしまうほど萎縮した姿を見て、老人は深く溜息をつきボソリと、独り言のように呟いた。

「……現状、全身稼働の限界の限界が20%つて所か? それ以上は小僧の身体が持たん」

20%その言葉を聞き、男性は驚愕に満ちた目を見開いた。男性の想定では与えた力のコントロールが出来ておらず、20%まで辿り着くには相当な時間が掛かると踏んでいたのだ。

「もう20%……ッ!?」

「……理屈で理解する小僧に自分の経験談をそれっぽく話すだけのお前のやり方が合う訳がないだろうが。やり方を考えさせ身体に染み付くまで反復練習させる、それ込みで実践訓練をやれば……まあこのくらいはいける」

お前はセンスだけはあったから教えなくとも勝手に覚えていったがな、と老人は過去を懐かしむように笑った。自分の過去の話がされ気恥ずかしくなったのか、男性は上ずった声でやめて欲しいと懇願した。

「しっかし、相澤の奴はとんでもねえ条件を出てきやがったな……ぶっちゃけこの条件は小僧どころか俺ですらクリア出来るか分からん」

その言葉に先程までの空気は掻き消され、プレゼントマイクの声と同時に彼等の眼下に広がるスタジアムに生徒達が入場する。入場する生徒達、その中の1人の少年を見詰め、男性は確信に満ちた声色で言い切った。

「ええ……しかし。緑谷少年ならばきつと乗り越えられる筈です」

その言葉に老人は返事を返す事はなく、両者の会話はそこで終わった。そこから開幕式はつつがなく進められ、ついに選手宣誓の時となる。

『選手宣誓 一年代表！ 爆豪勝己！』

蠱惑的な衣装を着たプロヒーロー ミッドナイトが代表者を呼び出す。呼び出された少年は無表情で前へと進み、気だるげな声色をあげた

『せんせー』

一呼吸だけ間を置くと、鋭い目付きをさらに鋭くし、後ろを振り向き、言い放った。

『俺が頂点に立つ。精々首を洗って待っていやがれ』

その瞬間巻き起こるブーイング、会場にいる全ての生徒達の罵詈雑言が発言者へと放たれるが、それらを一切気にする様子はない。その鋭い視線に一切の揺らぎはなく1人の少年へと向けられていた。そして、そんな視線を向けられていた少年は。

「(やっぱ女神はなんでも似合うなあ……あつ可愛い。信仰しよ)」

彼の視線を全く気にすることなく別の事に夢中になっていた事をここに記しておく。そんな事実を露知らず傲慢不敵に宣言した少年は自分がいた場所へと戻り、司会進行であるミッドナイトが鞭を振るい、暴徒と化していた生徒達の視線を集めた。

『さーて、それじゃあ早速第一種目に行きましょう！いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲む！ さて運命の第一種目！ 今年……障害物競走！』

スクリーンに映し出された映像と共にミッドナイトは説明を始める。

『全員での総当りレースよ！ コースはこのスタジアムの外周、約4 km！ 我が校は自由が売り！「はい！ 質問があります！」……はい。何が知りたいのかしら？』

説明の腰を折られテンションの下がったミッドナイトに質問が投げ掛けられる。

「何をしても良いんですか!？」 本当になんでもありんですか!？」

「

『ええ！ 他の選手の妨害でもフィールドを破壊しても良いわ！

ぶつちやけもうなんでもありよ！』

「分かりました！　ありがとうございます！」

半ばやけくそ気味の対応に少年は満足そうに頷き、ミッドナイトは再度、説明の続きを始めた。

『つまりは計4kmの何でもありのチキンレース！　質問はもう受け付けないわ！　さっさと位置に付きまくりなさい！』

スタジアムのゲートが音を立てて開かれ、我先と生徒達がゾロゾロと向かっていく。誰もがスタート地点へと位置について行く中、1人だけ別行動をとる馬鹿がいた。

「先生。少し借ります」

『えっ……ちよつと？　いつの間にとったの!?』

突如、ミッドナイトが持っていたマイクが1人の少年に奪われたのだ。奪われた事実気付かなかったのか、困惑するミッドナイトを無視して少年は声を張り上げた

『レディースアーンドジェートルメン！　紳士淑女の皆様方！　私は、これからの1日間、貴方達を決して退屈させない試合をお届けする、今をときめくニューウェーブ！　引合石と申すものでございます！』

マイクを奪おうとするミッドナイトの攻撃を全て躲し馬鹿は揚々と語り始める、最早放送事故を超えた何かだ。そんな馬鹿はミッドナイトの近くにあった機材を何度か触る。するとレースの始まりを告げるスタートシグナルの明かりが1つ消えた。

『これから私が貴方様方にお見せするのは単純明快にして簡単なステージ！』

スタートランプがまた一つ消える。

『宣言致しましょう！　今回の障害物競走は今までとは一線を画す圧倒的混沌レース！』

突然の馬鹿の凶行に困惑する生徒達と教師陣を尻目に引合は宙へと浮かび上がりながら言葉を紡いだ。

『さあレースが始まる！　スタートランプが消えた瞬間、運命の1回戦が幕を開けるのだ！』

最後のスタートランプが消え、皆が走り出す。宙へと浮かび上がった

た引合はそのまま吹き抜けになっているスタジアムの上空を抜けて
大空へと飛び立つ。

『運命の女神は一体誰に微笑むのか、今年のレースはひと味違う！
障害物競走、スタート！』

その言葉を最後に引合はスタジアムから消える。開幕から混沌渦
巻く雄英体育祭が幕を開けたのだ。

第一種目

障害物競走

開幕

第一関門 1

『もうどうすりや良いんだこの状況！ でも盛り上がってるなら問題ねえな！ ついに始まった雄英体育祭！ 一年部門の解説は俺ことプレゼントマイク！ そして、解説役の……Hey！ イレイザー！ 白目むく暇はねえぞ！』

『……すまんマイク、どうやら悪い夢を見ていたようだ。まさか生徒が堂々と教師のマイクを奪ってあのような惨事……うっ腹が』

流星は自分のラジオ番組を持っているエンターテイナーと言ったところか、やけくそ気味でもしつかりと実況を始めるプロ意識の高いプレゼントマイク。そして何時もの気怠げな声色ではなく、現実逃避から来る、乾いた笑みから吐き出される言葉を紡ぐイレイザーヘッド。プレゼントマイクから押し付けられたであろう解説役を嫌々ながらも引き受けた結果がこれである。彼は今、ストレスからくる腹痛を味わい、半分現実から逃避していた。

『Hey Hey！ そんな調子じゃ今回の体育祭についていけないぜ？ 見てみるよ引合の奴！ 空をカツ飛んで誰よりも先にもう第一関門に到達してやがる！』

スタジアムに設置されてあるディスプレイに馬鹿が豪笑をあげ第一種目である仮想ヴィランの元へと向かっていく姿が映し出されるが、イレイザーはそれを見なかったフリをして機材を触り別の場所を映し出した。

『……嫌な光景が見えたからあえて無視する。取り敢えずあの馬鹿は放置として……第一関門に1番近付いているのは、順番で言うなら夜嵐、轟、爆豪。といった所か。』

ディスプレイに風を纏い空を飛翔をする夜嵐と自分の後方に氷塊を産み出し、それに押される形で高速移動を行う轟、そして両手の汗腺から溢れ出るニトロ口に似た液体を爆破し空中を滑空する爆豪の姿が映し出された。その後方から複数の生徒が追い掛け、更にその後方にいる生徒達は彼等の背を追わんと必死なつて駆け出していた。

『ぜんりよおおおつく！ 轟！ 今までは引き分け続きだが、今回は俺

が勝つからな！』

『……わりの負けてやるつもりはねえ』

『邪魔だモブ共！ テメエらはとつとと死ね！』

スクリーン上に熱血主人公的な事を言い出す夜嵐と主人公のライバル的ポジションみたいな事を言い出す轟、ついでにチンピラみたいな事を言い出す爆豪が音声つきで映し出された、ヒーローを目指す子ども達が集まる最高峰たる雄英高校ヒーロー科にただのチンピラがいるという事実。これには観客も苦笑いを零さざるを得ない。

『ウォー！ 言ってる事がチンピラじゃねえかバクゴー！ これには見ているリスナーもドン引きしちまうぜ！』

『……安心しろ。爆豪にドン引きするよりも先にあの馬鹿にドン引いてチャンネル変えてる』

『キビシイイッ！ リスナーの皆は頼むからチャンネルは変えずにそのまま頼むぜ！』

そうやってマイクの爆豪に対するイジりが終わり、再び司会進行へと戻ろうとした瞬間、スクリーン上に新たな変化が映し出された。馬鹿を除いた3人の上空をとある生徒が飛翔したのだ。

『おいおい誰か飛んで行ったぞ？ あれは……イレイザー。お前のクラスの子やねえか？』

スクリーン上に空を飛ぶ生徒が映し出される。両手足をバタつかせ、まるでこの状況は自分の本意ではないと言わんばかりの姿に、イレイザーは目を細め言葉を続けた。

『……ウチのクラスの障子目蔵だな。アイツの個性では空中移動は難しいと思っていたんだが』

そして、障子は第一関門である場所へと飛翔したかと思うと、そのまま引合の隣へと着地した。その光景を見ていた二人は無言でスクリーンの映像を再び3人へと変えた。

『しっかし今年の一年坊はやる事が違うな……なあイレイザー。あれ、全員お前の所の生徒だろ？ 何とかなんねえのか？』

『……一応の努力はしているんだがな』

真に迫ったイレイザーの独白に聞いていた者達は彼の気苦労を察

し、思わず哀れむ。彼を哀れでる間にも試合はドンドンと進み、ついに先頭の3人が第一関門へと辿り着く。その瞬間、3人に向かって巨大な鉄の塊が幾重にも襲いかかった。

『YEAHHHHH! 漸く辿り着いた3人に仮想ヴィランが襲い掛かるウウツ! 第一関門は仮想ヴィランを使った”ロボ インフェルノ!” 本来なら地上で屯しているロボットをぶっ飛ばして先に進んでいく筈なんだが……なんかロボが縦横無尽に空を飛んだりしてんな』

眼前のモニターに映る光景をマイクはそう表現した。様々な仮想ヴィランが宙を舞い先頭の3人目掛けて突撃してくる光景は彼にとって予想外だったのだろう、彼のトレードマークとも言えるサンダラスが半分ズレていた。

「上等じゃねえか……オラ! もつと寄越せや! 全部スクラップにしてやんよ!」

爆豪がそう吠えたたてた瞬間、宙を舞う仮想ヴィランが突然左右へと別れる。3人を中央として生まれた空間、そんな彼等の眼前の二人の少年が姿を現した。

「校長から許可を貰って司会進行から許可を貰えたので……ガチのマジで好きにやらせてもらうぜえ……!」

「……すまん。俺は勝ち馬に乗らさせてもらう」

今日をもって日本中に醜態を晒している少年、引合石と先程何故か宙を舞っていた障子目蔵がそこにはいた。左右に別れていた仮想ヴィランがまた宙を舞い、2人の姿を隠していく。先に進めずにいた3人達に追い付いたのか、複数の生徒達が第一関門まで辿り着き、眼前の光景に目を見開いた。

「……すいません。誰か現状を教えて下さりませんか?」

「追い付いた……ッ!?!」

「……八百万に緑谷か。気を付けろ、アレを操ってるのは石だ。恐らく……生半可な気持ちで突撃すれば」

3人に追い付いた緑谷と八百万、そんな2人に轟は現状説明を簡潔に行った。そんな状況に痺れを切らしたのか爆豪が舌打ちをすると

彼等を無視して前へと滑空した。

空を滑空し第一関門を抜けようとする爆豪の元へと膨大な量の仮想ヴィランが襲い掛かる。その光景は圧倒的質量から産み出される地獄そのもの、破壊しきれず、避けきれなかった爆豪は小さな仮想ヴィランに衝突したかと思うと、そのまま先程まで自分がいた場所まで叩き込まれた。

「……恐らくああなる。不用意に責め立てれば、爆豪の二の舞いだ」
「黙ってるや紅白野郎！」

阿修羅を彷彿とさせるほど目を鋭く尖らせて爆豪は吠えたてるが、八百万はその姿を見ることなく、少し考え込むような態度を取り、声を上げた。

「……何か対策をしなければいけませんね。取り敢えず皆さん、ここは一時休戦と致しませんか？」

「うん。恐らく僕達が単身で突撃したらあの質量で無理矢理押し返されるかもしれない」

八百万の言葉に緑谷が賛同するように声を上げると、その姿を見ていた轟が独り言を呟くように言葉を紡いだ、

「ああ。俺が言い出してなんだが、そうするのが一番確実なんだろうな」

「轟さん……？」

一体何を。と八百万が問い掛けようとした瞬間、轟の左手から炎が溢れ出した。

「……もしかしたら、爆豪も今の俺と同じような気持ちなのかもしれないね」

炎と呼応するように右手から凍えるような冷気が溢れ出す、そのまま駆け出していく轟に向かって巨大な仮想ヴィランが襲い掛かった。その仮想ヴィランを緑谷は良く知っている、それは嘗て自分が受験の際に吹き飛ばしたのと同じサイズのロボットだった。ビルよりも巨大、それと比べたら人間なんて蟻同然の圧倒的巨体、0点ヴィラン。それが轟目掛けて飛翔してきたのだ。

「石……あの時からずっと、俺はお前達の背中を追い続けた。だけど

……それじゃあ、お前の隣には立てないんだよな」

その瞬間、その巨体を超える大氷壁が轟の眼前に現れる。その大氷壁の中には圧倒的巨体を誇る0点ヴィランが封じ込められており、それを目視した轟は左半身から溢れ出す炎と共に拳を大氷壁目掛けて叩き込んだ。

それをスクリーン越しに見ていた観客の1人が、目を大きく見開き、震える声で呟く。

「あれって……お父さんの」

大氷壁が音を立てて砕け散っていく。当然、大氷壁の中に封じ込められていた仮想ヴィランも氷諸共砕け散った。

その光景を見ていた引合はゆっくりと轟の元へと歩き出しながら声を上げた。

「どんな心境の変化か知らんが、そつちを使う気になったんだな」

「ああ……お前のお陰だ」

「そつか……そつか。良かったよ、なら……お前に対して加減はいらないな」

感慨深く、何度も引合は頷く。そして歩みを止め、溢れんばかりの笑顔を轟にへと向けた。

「なあショート！力比べしようぜ！」

「……本気で行くぞ」

空を覆う圧倒的質量と自分の周りを歪ませる程の膨大な熱量が今、ぶつかり合った。

第一関門2 鼠の憂鬱

例年通りの体育祭、生徒達の奮闘を眺めながら1匹の鼠は溜息を吐いた。己の地位の高さとこの学園に続く恒例事項、この2つに初めて自分が苦しめられているという事実。それに鼠は、その聡明な頭脳を悩ませていたのだ。

「困ったね……3年の司会進行は校長の義務、僕だけの理由でそれを曲げる訳にはいかないのさ。引合君……彼は今どうしているんだろうか」

彼はちやんと自分が言った通りにしているだろうか？ 彼に対して鼠が言った要求はただ一つ、世間に対する己の主張。これは鼠の考える計画に於いて外せない最重要事項、出来れば自分が見守りたいのだが鼠には3年ステージの司会進行という務めがある。

出来るならば状況を己の目で確認していきたい、状況が悪いなら此方側でコントロールが可能だ。しかし自分では見に行けない、そして教師達、特に相澤消太と八木俊典。彼等にだけは自分の目的を悟られてはならない。

もし彼等が鼠の目的を知れば己が力を十全に振るい止めに掛かるだろう。特に相澤消太、彼にバレルのは不味い。もしも計画が彼に露見した瞬間、彼は己が持つ者全てを投げ捨ててでも自分を止めに掛かる、鼠はそう確信していた。

そうなるのは不味い、余りにも不味すぎる。下手すれば計画はご破算では済まない。オールマイトが来たことにより、この雄英高校の最高戦力は彼になったが、嘗ては相澤消太、イレイザーヘッドこそがこの雄英高校最高戦力だった。弱りきったとは言え、凡百のヒーローが幾ら集まろうが手も足も出ない存在。平和の象徴オールマイトと勝負の形に立てる存在、それを失う訳にはいかない。

計画も成就させたいが彼等に自分が動いてると察せられてはならない。

視界に映るモニターに全裸になりながらも他の生徒達の腹を殴打

しつつ全力疾走する生徒を眺め、今の自分ではどうする事も出来ない現状に鼠が内心で溜息を付いていると、顔を真っ青にした職員が鼠を呼ぶ。気が動転しているのか、手を震わしながら必死に出すハンドサイン。それが示す意味を即座に察し、内心で更に大きな溜息を吐きながら職員の元へと向かう。

ハンドサインが示すのは特別緊急事態。ヴィラン、テロリストに攻め込まれたのではないが別の用途により雄英に異常事態が発生しているというサインだった。

一体どうした事か。不祥事にならマスコミにバレる前に揉み消さなければならぬ、そう結論をつけた鼠は職員の元へと駆け寄り話を聞く。緊張と焦りで呂律が回り切っていない言葉を脳内で咀嚼し、言葉の意味を理解した鼠は、凡そ彼が生きてきた鼠生の中で出した事のないような声を上げた。

「……雄英のHPがアクセス過多でサーバーダウン？ ついでに1年ステージに観客が集中し過ぎて怪我人が出ている？ SNS上で1年ステージが大炎上？ え？ なんでそうなったのさ？」

彼の聡明な頭脳をもつてもこの展開は想定外だったのだろう。野生に帰る寸前まで追い詰められた鼠は、目の前の職員に更なる説明を要求する。その要求に職員はヤケクソ地味な態度でポケットから取り出した携帯をTV状態にして、とある番組を映し出す。

そこに映し出されたのは

『シヨオオオトオオオツツ！』

先程まで己の不安の対象だった少年が目を爛々と輝かせ叫ぶ姿。ついでに彼の周りには有りとも有らゆる仮想ヴィラン達が宙を舞い、様々な場所へと射出されていた。

『行けい！ ファンネル！』

少年……つまりは引合が手を大きく振り上げ、それに呼応するように空を覆う鉄の塊達がたった1人の少年の元へと襲い掛かる。このままでは、たとえプロヒーローであろうとも死は免れない絶対的絶望とも呼べる圧倒的な物量が間違いなくこの少年を殺すだろう。聡明な頭脳がそう結論を出したと同時に、少年が煌々と輝き出す。その

熱量で光景を映し出していたカメラロボットに限界が来たのか画面にジジッと波線が流れた。

『借りるぞ……クソ親父!』

少年が纏う熱量が更に増幅しその身が太陽を見間違えてしまうほど煌々と光

り、輝きを放つ。少年の眼前にまで近付いた鉄の塊、それを少年が見据えた瞬間、映像がブツリと切れ映像がそこで終わる。

「まつ……まただ……また壊れた。もうダメだ……おしまいだ……」

鼠の耳に絶望に支配された声が届くが、彼はそれどころではなかった。先程見た映像で大体の状況は理解出来た。理解出来たが、理解したくない。彼の心境を例えるならばこの一言に尽きる。

それと同時に、スタジアムがしんと静まり返り誰もがある一点を見詰めている事に鼠は気付いた。彼等が見詰める先は吹き抜けのスタジアムの先に存在する大空、巨大な熱線が空を割るように煌々と輝いていた。そして、その熱線を避けるように空を鉄の塊が縦横無尽に飛翔している。

「根津校長! 今年の1-A……というかあの二人は一体どうなってるのですか!」

涙声で抗議してくる声に構える余裕が鼠にはなかった、というか泣きたいのは彼も一緒だった。確かに目立てと言った、それは認めよう。だがそれにも限度と言うものがある。なんで怪獣大決戦を始めてるんだ、もつとこう普通に競技で圧勝して『この生徒は一体何者なんだ!』みたいな雰囲気を作って欲しかった。これじゃあ『この熱線出す紅白ゴジラと鉄の塊を操るキチガイ怪獣は誰だ!』にしかならない。

「根津校長! お話のところ申し訳ありません! 学園に電話が殺到しています! その全てが1年ステージで闘争を繰り返す生徒達についてです! 他の生徒の安否についての確認と先程から何度も映像が途切れてる事に関しての苦情が殆どです!」

「根津校長! 観客の数が1年ステージの許容人数は遥かに超えています! 超過密度により怪我人が続出!」

「根津校長！ 想像を超える観客人数のせいで雇ったプロヒーロー達の手が全く足りておりません！ これ以上の観客動員は不可能です！ 入場規制を早急に掛けるべきです！」

鼠が頭を悩ましている間にも状況は悪化する一方。やんやんやと他の職員達が絶望的な状況を伝えにやってくる。

だが。そんな状況下でも流石は雄英高校校長と言うべきか、鼠は人類を凌駕する知能を最大限に発揮し今行うべき事を職員達に手早く伝え初める。それを聞き、自分が何をすべきなのかを理解した職員達は即座に行動へと移し始める。

鼠も自分の計画云々は取り敢えず後回しにして、自体の沈静化に勤める為に脳をフル回転させる。そんな中、彼の人類を凌駕する鼠イヤーがある会話を耳にした。

「なあおい！ 今年の1年やべえんだって！ 滅茶苦茶盛り上がってるって！ 見に行こうぜ！」

「……なんかTitterにも今年の1年部門がヤバいって来てるわ。というかトレンド入りしてるんだけど。ウケる」

不味い、そう思い観客席に目を向けると既に観客席では席を立とうとする者達が続出している。彼等は間違いなく1年ステージに向かうつもりだ。

この瞬間、鼠は覚悟を決めた。

『おおっと！ 早くも雄英BIG3全員第2関門突破なのさ！ 例え友人であろうともこの場に於いては彼等は敵同士！ 勝利の栄光を掴む為、戦うのさ！』

『ここで通形ミリオ君！ また服が脱げたのさ！ サービスシーンはさっきしただろうに、サービス精神旺盛で何よりなのさ！ まあプロになつたらそれ必要さ！』

『あつ、でも過度なサービスはやり過ぎると、後々辛くなるから程々にしておくのがオススメさ！』

鼠の実況が3年ステージに響きたわる。熱意に溢れる実況、それを聞き観客達は立ち上がるうとした身体をゆっくりとおろしモニターへと目を向けた。

鼠、いや根津校長。この雄英高校での教師生活においてここまで熱く実況した事はない。彼は今、必死だった。これ以上1年ステージに人を集めないように、ここから観客を逃がさないように、正直もういっぱいいっぱいだった。

余談だが、今年の雄英高校体育祭の経済効果は過去随一を記録している。その影には、職員一同と校長の血の滲む努力があつた事をここに記しておく。

「彼はやりすぎなのさ！ 誰だい！彼にあそこまでやっていいと許可を出したヤツは！」

自分の事を棚に上げて内心で憤る鼠の心を知るものは誰もいない。

第一関門 3

雄英高校普通科、彼等にとってはこの体育祭はチャンスそのものだった。1度は落ちたヒーロー科への道、そこへ向かう為の唯一無二の切符。この体育祭で好成績を残せばヒーロー科編入もある、そう聞かされていたからこそ、彼等はこの時に全力を掛けていた。

自分達の目の前で女を侍らす畜生に妨害という名の復讐をする機会を捨ててでも、この切符を逃してはならないと分かっていた。

「ぜんりよおつくー！」

そんな呑気な掛け声と共に眼前で嵐が吹き荒れる。仮想ヴィラン達を飲み込む暴風が1人の少年を中心として発生しているのだ。巻き起こる暴風に巻き込まれた仮想ヴィラン達はぶつかり合いその身を崩壊させていく。

吹き荒れる暴風の中、暴風を掻き消さんとする爆風が縦横無尽に飛び回る仮想ヴィランを吹き飛ばした。遥か上空から回転しながら落下し、その反動を最大限に利用した爆発は爆発源の周りに存在していた仮想ヴィラン、その全てをスクラップにへと変貌させ、その爆風の発信源たる少年は彼従来の鋭い目付きを飛び回る仮想ヴィランに向けると大声で吠え立てた。

「退けやポンコツ！ テメエらスクラップにされてえか！」

その声を聞き嵐を生み出している少年は笑い、声を掛ける。その声を聞き少年は、最早三白眼を超える程の鋭過ぎる目付きと共にあらゆる罵声を持って返事を返した。

「やるな爆豪！ でも俺だって負けるつもりはないぞ！」

「黙れ暴風野郎！ テメエなんぞ眼中にないんだよ死ぬ！」

その罵声は意味を成さなかったのか、暴風を生み出す少年はあらゆる笑みを持って返事を返した。

「そういうな！ どっちが先にここを超えるか勝負だ！」

「知るか死ぬ！」

そして、また爆風と暴風が幾度となく生み出された。暴風と爆風が

支配する世界、地獄絵図とも呼べるその空間から視線を外す、そして別の方に視線を向けると。

「仮想ヴィラン……遠慮はいりません！ 緑谷さん！ もう一度一斉射撃致します！ 援護はお任せ下さい！」

1人の少女が産み出した黒い砲身から何発もの弾頭が仮想ヴィランの頭上へと突き進み、ある高度で弾頭の先端が割れた。幾つもの小さな黒球が先端から仮想ヴィランにへと降り注ぐ、黒球が対象に触れた瞬間、それは小さく爆ぜた。一個一個の黒球は連鎖するように誘爆し、降り注ぐ黒球の雨と共に仮想ヴィラン達は結合部分から崩壊して行った。黒球の雨から逃れた仮想ヴィランの数体が少女の元へと飛翔していく。

「緑谷さん！」

少女の声に答えるように1人の少年が仮想ヴィランの元へと駆け出していく。その少年を見下ろせる程の巨体、0点ヴィランと呼ばれる仮想ヴィラン程ではないがそれでも人間と比べると破格のサイズ。飛翔するスピードを含め、当たれば普通の人間ならば一溜りもないだろう。

だが。その少年は少女と仮想ヴィランの中心に辿り着くと、己を鼓舞するように声を張り上げ、拳を放った。

「SMASHASHASH！」

その声と共に放たれた拳は眼前の巨体を吹き飛ばし、後から追従していた仮想ヴィラン諸共粉碎した。常人では決して放てぬ絶対的な破壊力をもった拳、そして広範囲に破壊をもたらす兵器。そこもある種の地獄と呼べる光景だった。

自分達では到底入り込む事が出来ない領域、ヒーロー科の試験を落ちて再起を願った者達だがこの光景を見て、抱いたはずの決意は簡単にヘシ折られた。

「無理だ……あんなのどうしようもない、あの4人ですらあれなのに……どうやって超えるんだよ……アレに！」

4人が相対する光景を超える光景がその先に存在している。

それは等身大の太陽であり氷河そのものだった。全てを消し飛ば

す灼熱の化身であり、全てを凍り尽くす凍結の化身。

先程から彼等が何度も見た光が三度、大空を割くかのように遙か天まで伸びる。そして、それに呼応するように0点ヴィランすら鼻で笑ってしまいたくなる程の大氷壁が幾重にも産み出された。

自分達にあのような力はない。いやトッププロヒーローですらあのような力を持つ者は殆どいないだろう。N.O. 1とN.O. 2、トッププロの中で他を圧倒し頂点に属する者達にしかあれと相対する事は出来ない。呆然と見ていた者達は肌でそれを感じていた。

突如、大氷壁が浮上する。宙を覆う程の鉄の塊達と大氷壁が圧倒的速度を持って地面へと落下していく。それに呼応するように光は膨大し、落下する大氷壁を消し飛ばした。その熱線を避けた鉄の塊達は再び宙で縦横無尽に飛び回った。

「おいおい自分で武器を作ってくれるなんて優しすぎるだろショー卜。何？ 舐めプ？ やるじゃん」

「……やっぱ当たらねえか」

愉快そうに笑う声と、その声を聞きやつぱりそう言ったかと言わんばかりの声を聴力に優れた個性を持った生徒は聞き、掠れるような声で呟いた。

「……化け物かよ、何なんだよ……何だよコイツら！」

第一関門。それはヒーローを目指す物達を振るい落とす登竜門、力無き者は近づく事すら能わず、少しずつ、少しずつ前へと進み、第一関門の門番の如く全ての者達の道を塞ぐ存在を越えなえればここで全員が脱落する事になるだろう。

「どうしたどうしたどうした！ ここで全員終わらしてやろうかア!? 嫌ならちったあ根性見せろ！ ここまで辿り着いたのはショー卜くらいじゃねえか！」

馬鹿の雄叫びが第一関門に木霊する。その声を聞き、登竜門も掛け上がらんとする者は更なる力を放ち前へ前へと進み続ける。自分と1人、それ以外全てを敵し、少年は戦い続ける。

登竜門を超える者、未だ居らず。

『あー……うん。なるほどね？ OK OK、理解した。うん……うん？』

先程まで聞こえていた大熱狂は消えさり、全ての観客達がスクリーンに映し出されていた光景に釘付けだった。何度も何度も途切れた光景だが、それを加味しても目を離す事が出来ない戦いがそこにはあった。その光景を見ていた視界のプレゼントマイクが筆舌に尽くし難いと言わんばかりの歯切れの悪い言葉を発し、それをイレイザーヘッドは諫めた。

『やめろマイク、それ以上言うな』

『いやさあ！ だってさあ！ もうさあ！』

諫める言葉を聞きながらも、プレゼントマイクは叫ぶように声を上げた。

『4人はまだギリギリ分かるとして……なんだよあの二人！ チートとかそんなの鼻で笑うレベルのヤバさじゃん！ 俺アイツらに勝てる気が全くしねえよ!? なんでアイツらまだ生徒なんだよ！ 実はプロヒーローでしたーって言われても納得するレベルじゃねえか！』

『……あの6人に関しては実戦経験を積みば即プロヒーローの仲間入りだろうな。今年の1年は有望株が多くて何よりだ』

何処か他人事なイレイザーの言葉を聞きプレゼントマイクは糾弾するような声色でイレイザーにへと語り掛けた。

『イレイザー！ 言っとくがアイツら全員お前のところのクラスだからな！ お前マジでちゃんと教育しろよ！ 世界の平和はお前の教育スキルに掛かってるからな！』

『……任せておけ。俺の生命に代えてでも、それだけは必ず果たす』
重すぎるイレイザーの言葉を聞き、プレゼントマイクは大きく息を吐き言葉を続けた。

『……いやまあお前の事を信頼してない訳じゃねえよ？ というかこんな事言ってる場合じゃなかったな。ソーリーリスナー！ 実況に戻るぜ！ まあ実況もなにも第一関門は地獄絵図なんだがな！ この場にいるリスナーは天井見上げてみな！ ヤバいに見えるぜ！』

プレゼントマイクの言葉に反応し観客達は吹き抜け天井の先を見上げた。その先には熱線が天を貫き、鉄塊が空を黒色で支配していた。モニター越しの爆音と騒音をBGM代わりに、現実離れた光景を目に焼き付けた。

『サンキューリスナー！ そんじやあスクリーンの状況を説明しようか！ 現状はあのチンピラ爆豪と嵐を巻き起こしている夜嵐が共同戦線……？ を張って前へと進んでいるな！ そんでその逆側から八百万と緑谷が完璧な共同戦線を張って進んでいる！ とうるか爆豪、口悪すぎんだろ。ウケる』

『笑ってる場合か。そして1番前では引合と轟の一騎打ち……そして引合は仮想ヴィランを操り、隣にいる障子目蔵以外の全てを敵に回して戦っている……のか？ 引合の奴……何故障子を手元に置いた？』

イレイザーの視線がスクリーンに映し出されている障子に集中する。解せない。何故、障子を自分の手元に置いたのか、親交の深い轟と共に共同戦線を張れば圧倒的戦力の前に彼等は手も足も出ない。合理的に考えれば、手元に持つなら彼ではなく轟にする。なのに何故？

スクリーン上に映し出されている障子は個性である複製腕を幾重にも増やし続けその全てを目と耳にしている。それを見た瞬間、イレイザーはズルリと倒れ込むように椅子へと倒れ込み小さく笑った。『ハハッ……確かに、合理的だよ引合。お前の選択は正しい。お前ならそれで問題ないだろうな』

『おいおい何勝手に納得してんだよイレイザー！ 俺にも教えろよ！』
得心がいったように笑うイレイザーをプレゼントマイクは揶揄するように語り掛ける。その声を聞きイレイザーはスクリーンを指差し言葉を続けた。

『障子目蔵の個性は『複製腕』腕を増やし、それを好きな肉体の部位に変換する事が出来る。つまり……そういう事だ』

スクリーン上の光景と共にイレイザーはゆっくりと語り出す。そ

れを聞き理解したプレゼントマイクは、サングラスの奥にある目を見開き、張り上げるような声を上げた。

『あーっ！ 成程成程！ OK！OK！ そういう事か、つまり引合の奴は！』

「もう！ 何度も何度もキリがありませんわ！ 隙間を見つけようとも直ぐに塞がれます！ 引合さんは轟さんと一騎打ちをしている筈なのに！」

1歩を踏み出す事すら難しい戦場の中で、八百万は苛立ちを隠さずに声を荒らげた。それを聞きながら緑谷も内心同意しつつ眼前に放たれる鉄塊を拳で吹き飛ばし自分達が置かれた状況をゆっくりと確認し始めた。

「確かに可笑しい……轟君と引合君はあそこで一進一退の戦いを続けている。僕達に意識を向ける余裕があるようには思えない、何かがある……何処かに引合君がこの場を支配出来ている何かがある筈だ」

全身に個性を張り巡らせながら緑谷は辺りを見渡した。何度か辺りを見渡し、彼の観察眼は1つの異常を発見した。そして、その異常を理解した瞬間。彼の脳内が危険信号をガンガンと鳴らし始めた。

「障子君……ッ！ そうか！ この乱戦の中で気づかなかったけど、彼の個性なら！ だから引合君は彼を味方に引き込んだのか！」

複製碗を幾重にも出した障子の視線が緑谷にへと集中する。幾重にも存在する目が緑谷を捉え、1つの口が引合にへと語り掛けている。

「不味い！ 八百万さん！ ここを支配しているのは引合君だけじゃない！ 障子君だ！ 彼の目と耳がこの場にいる僕達を冷静に見渡して引合君に指示を出している！ 引合君は彼の指示した場所に仮想ヴィランをぶつけるだけで良い！ だから彼は僕達を相手にしながら轟君と戦う事が出来たんだ！」

緑谷の発見した事実、それは障子目蔵の存在。彼が司令塔になり引合へと指示を出す。乱戦の中で闘うことなく引合にただ指示を出す障子の存在を彼等は気にする事がなかった。何故なら引合という存

在が圧倒的過ぎたから、全対個で戦い押し返す怪物と言える存在、そんな彼で手一杯であり、此方側に何もしていなかった障子の存在を彼等は完全に忘れてしまっていたのだ。

「不味いぞ引合。恐らく緑谷にバレた」

「気にすんな障子、俺が守ってやるから安心しろ。お前はそうやって俺に指示を出してくれ。そうしてくれれば俺は約束は守る」

「分かってる。信じてるぞ」

今日で何度目か分からない程の障子と引合の会話。そんな中で引合と相對する轟は障子と引合が会話している事に疑問を感じるが、それを考える間もなく仮想ヴィラン達が鉄塊となり彼に襲い掛かる。

「おいおいショート。俺を目の前に考え事とは余裕だなあ！ そんな君には鉄の塊をプレゼントだ！」

大空から轟に向かって放たれた鉄の流星群。それを氷の高速移動で避ける轟は、先程の思考を頭から放棄し眼前の好敵手へと視線を向けた。

現状、引合と障子が徒党を組んで5人と相對している状況。このままでは間違いなく轟を除いた4人は数と圧倒的質量に押され切ってしまう。そう確信した緑谷は八百万に口早に声を掛けた。

「八百万さん！ 僕達だけじゃ押し切られてしまう！ 数が足りない！ だから後ろにいる皆を呼びたい！ けど……僕達が下がればそれだけ前線が下がる！ 何か下がらずに皆に伝える方法はないかな!?」

「……これを使ってください！ もう！ さつきから此方ばかり！」

鋼鉄が空を渦巻く。前線から遠く離れた第一関門の入口、そこで諦めるでもなく、ただ機を待つ者達がいた。

「糞ッ！ 俺はもう行くぜ！ 止めてくれるなよ！」

「バツカ！ やめろ切島！ いくらお前が頑丈でもあの地獄絵図に入れば一瞬で終わりだ！ 協力して計画を練って行かなきゃアレは突破出来ない！」

前線で闘う彼等と同じクラスメイトであるA組の生徒達。そして

「……計画はこれで行く。良いかい拳藤、鉄哲、骨拔？」

「おう！ 俺は馬鹿だからこんなのはお前に任せる！」

「まつ……しよーがない。それで行こうか、物間」

「まあ詳しくはケースバイケース……柔軟に行こう。鉄哲は……そこら辺が苦手そうだから俺が付いておくよ」

彼等と同じヒーロー科である1―B組。彼等は一丸となり1つの目的の為に着実に動き出そうとしていた。

登竜門たる第一関門。それが開く時が少しずつ、少しずつ近づいている。

「……行くのか。心操？」

「ああ、俺は夢を諦めたくないんだ」

普通科の中で小さな決意が動き始めた。

第一関門 4 今世紀最悪の職員席

「んだ、ありやあ……鷹が龍を産んだつてののか？」

教員席から鋼鉄に染まった空を見上げ、感嘆の息を吐き1人の老人がそう呟いた。何十年とプロヒーローとして活動して様々な修羅場を経験してきた彼からしてもこの光景に勝るものは記憶にない。鋼鉄の空。巨大な熱線が空を割るように天を突き、熱線と同時に大氷壁が幾重にも生み出されていく。この光景を見れば、世界の終わりがすぐ目の前に来ていると言われても違和感はない。

「轟少年……彼の個性は『半冷半燃』右から冷気を左から炎熱を発する個性、今まで左を振るう姿を見た事がなかったから実力を測りきれなかったが……まさかこれほどとは」

スクリーン上に映る光景を見ながら老人の言葉に追従するように、細身というより痩身瘦骨と言えるほど痩せこけた男性は呟いた。彼にとってスクリーン上に映る少年達は自分が想像してたよりも遙かに力を持っていた。隣で唾然とした表情で呟く己の師匠たる老人はスクリーン上に広がる光景から決して目を離さずに呟く。額から流れ落ちる汗、それは決して気温からくるものではない。精神的な動揺からくる汗、つまりは冷や汗。

「……空を覆う仮想ヴィラン。どれ程の出力があればあんな真似が出来る？」

「少なくとも……私の知る限り、紬と要にはあれほどの出力はありませんでした」

男性の言葉を最後に押し黙る両者。この大会を見世物として見て来ていた観客達はスクリーン上に広がる光景に夢中になり、画面に釘付けになっている。馬鹿が競技の前に言っていた言葉『貴方達を決して退屈させない』その言葉通りだと言わんばかりの姿だった。

「……俊典よ。個性とは一体なんなんだろうな？」

「……先生？」

男性が初めて見る老人の姿だった。視線はスクリーンを見詰めて

いるが視点が定まっていな、いや……この姿を一言で例えるならば現実を直視出来ていない。歴年の強者たる老人が見せる動揺、何十年の付き合ひの筈なのにこの姿を男性は見た事がなかった。

「お前が……志村が……代々の後継者達がここまで繋いできた個性『ワンフォーオール』その力は最早、神の力と言ってもおかしくない」「一振りで空が割れ、一振りで海が割れる……お前は天才だった。志村よりもあの力を使いこなしていたと言っても過言ではない」

「……一体何を言いたいのですか？」

ここまで饒舌に話す老人の姿を見た事がなかった。何を言いたい、それが理解出来ず困惑する男性へと老人は上ずった声で言葉を続けた。

『ワンフォーオール』が絶対の力ではいられない時代がすぐそこまで来ているって話だ。次の世代……お前の後継者が平和の象徴でいられるのか？」

スクリーン上に広がる光景、それはある種の神話の再現。業火と氷河が同時に暴れ狂い、宙を覆う鋼鉄の空と何度も何度もぶつかり合う。その力の持ち主である少年達は自分達以外の存在が立ち入る事を許さぬと言わんばかりに、その力のぶつけ合ひは苛烈を極めていく。

「時折思う……お前とアイツらが手を取り合ひ、今も共にいられたのなら、お前が突き放した手をアイツらが握り続けていられたのなら……少しは今が変わったんじゃないかってな」

その言葉を聞き、男性は想起する。共に背中を合わせた者達、そして彼等の輝かしい未来を奪ってしまった自分の力の足りなさを。

「……全ては私の力が足りなかったからなのです。これ以上、私の道に彼等を付き合わせる訳にはいきません」

背中を合わせられる唯一無二の存在だった。どんな時でも共に危機を乗り越え、時には泣き、笑いあった。

あの時の私達に打ち砕けない壁はない、傲慢にもそう思ってしまうほどの。

「……負の歴史は私が全て片付けます」

だが、これ以上私の道に彼等を付き合わせる訳にはいかない。人並みの幸せを得ている彼等に、これ以上強い事はあまりにも傲慢が過ぎる。

「彼等の未来も……その子どもの未来も、私が守ります」

何故なら私は平和の象徴、人々に安心と安寧をもたらすヒーローなのだから。ヒーローは負けない、血反吐を吐こうが身体を壊されようが、最後には笑ってスタンディングポーズをとる者と相場が決まっている。

「……一度は遅れを取ったが、例え敵がかつてのお師匠の姿を取つていようとも。私は絶対に負けない」

子ども達の未来は私が守る。それが私の最後の仕事、彼等の子に掛かる宿敵の魔の手からあの子を解放し、未来のバトンを渡す。その為ならば例え敵が嘗ての師匠の姿を取つていようとも、私は負けない。

そして、願わくば。

「緑谷少年にも……引合少年にも。私達の宿命とも呼べる存在には関わらずに未来へと突き進んで欲しいのものです」

万感の思いを持って男性はそう言葉を纏めた。その言葉聞き、老人は愉快そうに笑い言葉を続ける。

「……そうだな。かなり大変な仕事になるぞ？　恐らく……俺達の人生全てを懸けた戦いにな」

「勿論……えっ？　いや、これは私が背負うべき……」

老人の言葉に啞然とし、男性は口早に言葉を続けるが老人は聞く耳を持たないのか男性の言葉を無視して言葉を続けていく。

「乗りかかった船だ。どうせ老い先短い、最後まで乗らせてくれや。そのぼろ船に……」

何をつまらない事を話しているんだいオールマイト？　そんな

つまらない事を話すよりも、今は大切な事があるだろう？

瞬間、怖気が走る。昔ならばこの声に万感の安心感を覚えたのだろう。だが、今は違う。今のこの声の持ち主は魔王と呼ぶに相応しい存

在。

彼等が戦闘態勢を取るのは一瞬の時もいらなかった。周りにいた教師達も、その声の持ち主が突然現れたのか、声を上げるまで気付いていなかったのか、彼等が戦闘態勢を取った数瞬の後に戦闘態勢を取った。

「……飛んで火にいる夏の虫たまさにこの事か？　なんの真似だ？

オールフォーワン？」

老人、グラントリノの鋭い視線が眼前の女性を睨み付ける。その目を見たオールフォーワンと呼ばれた黒髪の美女は愉快そうに顔を歪ませながら笑った。

「そう硬い顔をしないでくれよグラントリノ。今日の僕はただ見物に来ただけだぜ？」

そう言いながら適当な席に座る女性。自分を囲んで臨戦態勢を取る教員達が脅威ではないと言わんばかりの態度でふてぶてしく、なお優雅に座り込んだ。

「……見物だあ？　何をだ？　テメエの新しい玩具でも探しに来たつてのか？　まあ何でも良い、テメエがこの場に来たのならここで捕えさせて……」

飛んでいる火にいる夏の虫とは正にこの事よと言わんばかりのこの状況。グラントリノとオールマイトが拳と足を振り被ろうとした瞬間。

「君達が僕に危害を与えようとした瞬間、第一関門にいる子ども達は全員死ぬ」

動きが止まった。正確には止めざるを得ないと言うべきか、眼前で止められた拳と足を見て女性は愉快そうに笑う。

「ハハッ。嘘だと思いうなら試して見ると良いよ？　13号？　スナイプ？　エクトプラズム？　君達が彼等の代わりに襲いかかっても良いんだよ？」

「貴様は……何処まで……ッ！」

唇から血を流し激昂するオールマイトを見て女性は笑う。愉快な物を見たと、その端正な顔を酷く歪ませ笑みを浮かべた。

出来る訳が無い。そんな事を言われて行動を取れる者が、ヒーローが存在する訳が無い。例えばブラフだとしても、眼前の存在は魔王、不可能すら可能にすらしてもおかしくない。

「何を怒るオールマイト？ 当然の事だろう？ 君達の目の前に行くのに僕がなんの用意もしていない訳がないだろう？」

「……………こなら席も空いてるし、見晴らしも最高だ。教員特権ってやつかい？ 羨ましいねえ」

そう言いながら女性はオールマイトへと自分の隣に座るように手で促し始める。当然それに従うつもりのないオールマイトは眼下で優雅に座る女性を憤怒の表情で睨み付けるが、

「……………どうしたんだい？ 君達は試合を見ないのかい？ 教員として、先生として、生徒の成長を見ないのは頂けないなあ」

「そうだなあ……………座らないなら一人殺そうか？」

まるで昼食を決める時のような気楽さで生命を奪うと宣言した女性の言葉を聞き、オールマイトは憤怒の表情のまま女性の隣へと座り込んだ。

「……………何故ここに来た？」

「何故？ そうだねえ……………今日は人が多くてねえ。 少しゆっくりと見学出来る場所を探してたんだ」

「あの子の晴れ舞台さ。僕が見ずに誰が観るって言うんだい？」

「しかし……………アレには僕も度肝を抜かれたよ、流星は僕の教えを受けた子だ。流れ全て自分の方へと持っていった。僕の教えも良かった……………『黙れ』つれないねえ」

ペラペラと話し続ける女性に対してオールマイトは修羅の眼光をもって言葉を黙らせ、言葉を発した。

「あの子達に手を出させない。緑谷少年に引合少年、これ以上彼等に手を出そうとしてみろ。その瞬間に貴様の生命を断つ」

「……………僕を殺す、本気だねオールマイト？」

だが、それがどうした？ と女性は嗤う。酷く愉快そうに、見た者を不快にさせる笑みで笑う。

「もう一度言おうか？ 僕は観戦しにきたただけだ。君達と遊ぶつもり

は毛頭ない」

一緒に観戦しようじゃないか。同じ弟子を持つ者同士、ね？

第一関門 5

『シヴィー！ 第一関門で結構な時間が経ったが誰一人超えた者なし！ 誰かあの怪物大決戦止めろよ！ また大氷壁が産み出されて消し飛ばされたぞ！』

『第一関門を超えるには最前線で戦う2人を何とかする必要があるからな……現状、最前線の轟と引合、その後方に爆豪に夜嵐、緑谷と八百万。更にその後方にその為大勢と言った所か……さて、これからどうなるか』

職員席が今世紀最大の危機を迎えていても時間は無慈悲にも進んでいく。スクリーン上に映る光景を見ながら実況を行うプレゼントマイクとイレイザーヘッドが眼前に広がるある種の地獄絵図を分析し、観客達はその声を聴きながら超弩級とも呼べる戦闘風景に目を焼かれ、只々彼等の姿を見詰めていた。

『飛び込めば地獄！ 飛び込まねばそこで終わり！ 超えるべき壁がそこにある！ さあさあ気張っていけ一年坊！ なんか勝手に壁になって盛り上がってる引合を超えろ！』

マイクの実況と共に最前線から遙か後方にいた集団が前へと走り出す。彼等は1年A組、前線で争い続ける彼等と同じクラスの者達だ。第一関門に対する新たな挑戦者にマイクは声を張り上げ、イレイザーが無言で見詰める。

『第一関門に新しい挑戦者達の登場！ さあ、この仮想ヴィランの群れにどう出るチャレンジャー！』

新たな登竜門へと挑戦者達に試練の壁は質量を持って襲い掛かる。サイズ的には人間台の仮想ヴィランが挑戦者達を迎え入れんと言わんばかりに放たれた。

「近接戦闘タイプは突っ込んでくるのをぶっ壊していくぞ！」

重力に逆らう赤髪のヘアスタイルの少年が闘いの声を上げ放たれる仮想ヴィランを硬化させた肉体を持って粉碎する。そして、その声に答えるように他の者達も何度も放たれる仮想ヴィランへと立ち向かい

「おうよ切島！ 行くぞ尾白！」

砂糖を飲み干し超パワーを得た拳と

「ああもう！やるしかない！ どうにでもなれ！」

鍛え抜かれた尾を振るい敵を蹴散らす。1人では太刀打ち出来ない質量だが、他者と協力すれば超えられない量ではないと仮想ヴィランを迎え撃つ3人。

だが、仮想ヴィランが襲い掛かるのは眼前だけではない。登竜門に踏み出せば、縦横無尽に飛び回る鋼鉄の群れが相手になる。流石は雄英高校が誇る財力と言えば良いのだろうか、宙を縦横無尽飛び回る鋼鉄の塊の数は正しく想像を絶する。小、中、大、特大と仮想ヴィランは選り取りみどり。それらが全て縦横無尽に宙を舞うのだ、この光景を地獄と呼ばずになんと呼ぶか。

己が肉体を持って進んでいく者達の眼前、左右、後方。これら全てから仮想ヴィラン、サイズ的には人間台の小と、それより少し大きい中程度のサイズだろうか、それらが彼等へと襲い掛かる。

固まって行動する彼等を一網打尽にすべく襲い掛かる鉄の群れ。だが、前へ前へと進んでいく3人はそれらに対応するつもりは毛頭ない。

「キラメキが止められないよ！☆」

左方から放たれる仮想ヴィランを青く煌めく光線が穿つ。腹部から光線を放ち、顔を青くしながらも軽やかに笑う少年の姿を確認した鳥頭の少年は、右方から襲い掛かる仮想ヴィランを見据え、己の影であり武器となる存在へと迎撃命令を出した。

「……迎え撃て、ダークシャドウ」

「アイヨ！」

ダークシャドウと呼ばれた影は眼前に存在する仮想ヴィランへと両腕を振り被り、立ち塞がる全てを文字通り粉碎していく、愛嬌のある声とは裏腹に、放たれる一撃は正しく凶悪そのもの。

「ヤツテヤツタゼ！」

「良くやった。そのまま左方を警戒しつつ迎撃しろ」

「フミカゲ！ マカセロ！」

前方、左方、右方とくれば勿論後方からも仮想ヴィランは襲い掛かる。そして、それに対応する者は

「あああああ！無理だつて！オイラだけじゃ無理無理無理！なんとかしろよ上鳴イ！」

泣きながら頭部から無限に生えてくるもぎもぎを投げ続けていた。

というか、峰田実だった。

「しゃーねーだろ!? 俺の個性じゃロボショートさせるだけでこの状況を打破出来ねーし！ ああ来たア！」

迫り来る仮想ヴィランを見て顔を絶望に染め上げ、間の抜けた悲鳴をあげる少年達。そんな少年達の元に救いの女神が現れる。

「危ないっ！」

その言葉と共に放たれる酸性の水撃。ドロリとした溶解液が仮想ヴィランの全身へとかかり、少年達の眼前で半分に溶けた仮想ヴィランが力尽きるように地面へと落ちた。

「瀬呂・梅雨ちゃん！ お願い！」

襲い掛かる仮想ヴィランへと溶解液を放ちながら声をあげる少女の声を聞き、両生類に似た顔の少女としようゆ顔の少年は同時に動き出す。

「瀬呂ちゃん。上鳴ちゃんを任せても良いかしら？」

「りょーかい！ 出来る男、瀬呂さんの良い所を見せる時が来たなつと！」

瞬間、峰田の身体は長い舌に絡め取ら蛙吹の元へと宙を舞う。それと同時に射出されたテープが上鳴の胴体に巻き付き瀬呂の元へと引き寄せられた。

「やべー！マジで助かった！ センキューな！ 瀬呂！」

「感謝より行動で示してくんね？ ほら、最前線のアイツらをお前の個性で！」

「あの場に俺一人で行ってか!? 死ぬ死ぬ死ぬ！」

漫才をしながらも先へ先へと走る瀬呂と上鳴。そして、蛙吹の胸を触ろうとして舌ビンタをかまされ足元に放り捨てられる峰田。後方から襲い掛かる仮想ヴィラン、それを溶解液でカバーする芦戸。

「やっぱ……これキツつい」

溶解液を掛けられれば問題ないのだが、ひっきりなしに宙を舞いながら襲い掛かる仮想ヴィラン達を一人で相手取るのは彼女には少々問題があるしく、顔を苦渋で歪めながら必死に後方へと溶解液を放ち続けていた。

「後方のカバーは任せてくれ！」

その言葉と共に、脹ら脛のトルクから煙を吹かす少年が仮想ヴィランの一体を一蹴する。トレードマークたる眼鏡がキラリと輝き、その姿を見た芦戸は溢れんばかりの笑みをもって言葉を放った。

「来てくれたんだ！ サンキュー飯田！」

「飯田君だけちゃうで！ ウチもおる！」

互いが互いをカバーし合い彼等は少しづつ前へ前へと進んでいく。そんなA組の姿を後方から眺めていた者達の内の1人が最期の確認をするべく声を上げた。

「ねえ物間。確認したいんだけど、あっちに向かってドガンとドギカゴンって感じでブツパなせば良いんだよね？」

「そうそう吹出、そんな感じで良いよ。使い方はさっき聞いたし僕の方も多分なんとかなるかな？」

それじゃあ手筈通りに。と物間と呼ばれた少年は会話を纏め、周りにいるクラスメイト達へと声を掛けた。

「あそこで大暴れしてる憎きA組の奴らに僕らの存在を見せ付けてやろうじゃないか！ 行こうB組！」

その言葉に肯定の意を示すクラスメイト達の先陣を切るべく物間は吹出と共に個性を発動する。

瞬間、戦場を割くように巨大な擬音が2列飛び出した。その擬音は0点ヴィラン、いや大氷壁すら凌駕する質量を持ち、宙を舞っていた仮想ヴィラン達を粉碎していく。

混迷を極める第一関門。A組とB組、彼等が登竜門へと足を踏み込む事で状況はどのように変貌していくのか。

「（あああああ！ ヤバイヤバイやばい！ 武器が足りん！ 一気に大半消し飛んだ！）」

「……余所見する余裕があんのか、石？」

「される方が悪いんじゃない？（おっほおおお！ らめえええ！

手数がたりないのおお！ 死んじゃう！ 武器が尽きちゃう！

）」

内心で悲鳴をあげる馬鹿の心知る者おらず、第一関門を超えるのも近いかも知れない。

第一関門6

宙に亀裂が走った。熱線も、大氷壁ですら壊しきれなかった鋼の空。それが一瞬にして半壊したのだ。第一関門にいた殆どがそれを見た、自分達をあれだけ苦しめていたあの地獄絵図がこうも簡単に崩される光景を。その光景をスクリーン越しに見ていた観客達も、その一撃に言葉を奪われた。最前線で圧倒的な戦いを繰り広げる二人、彼等と同等……いやそれを超える一撃を放つ者達の登場、超常とも呼べる戦いの中に新たな存在が入り込んだという事実には戦々恐々としながらもスクリーンから目を離せずにはいた。

『When absorbing it, s really mean by that!』

『やかましいぞマイク』

プレゼントマイクの悲鳴に似た絶叫がスタジアムに鈞響し、イレイザーヘッドがそれをばつさりと切り捨てるがその声を他の者達が聞く余裕はない。誰もがそれを見ていた、スクリーン上に映る少年達の姿を。

第一関門 ロボインフェルノを3つに分断する程の巨体を持つてあらゆる鉄塊を粉碎した。粉碎されていく仮想ヴィランは大きさに関わり無く、自らを圧倒する摩訶不思議な質量を持った文字の物体に轢き潰され、粉碎され、分断された。第一関門最奥、最前線とは真逆の場所からソレを放った少年の1人は彼独特の話し方でその一撃を評価した。

「うーん！ 流石僕！ ドガンって感じでドギバギベキゴーンッ！ ってかんじだ！」

何も知らない他人が彼の言葉を聞いたとしても理解は出来ないだろうが、彼と同じクラスの者達はこの一撃が会心の一撃である事を理解するだろう。

この少年の名は吹出 漫我。個性『コミック』漫画に存在する擬音を質量を持った文字として生み出す事の出来る個性を持つ。

そして吹出と同じように文字を生み出した少年は背を大きく仰げ反らせ、他者を見下しすぎて逆に見上げるような姿勢で大きく諸手を広げ笑う。

「アハハハ！ 見てよ吹出！ A組の奴ら、呆然としてるよ！ 僕達B組の一撃に恐れを成したのさ！ アハハハハ！」

端正な顔を愉悅に歪ませ笑う姿は、彼の周りにいた者達を思わず一步離れさせる。人が離れたのを感じて感じた少年は静かに背を伸ばしコホンと息を吐き、言葉を続けた。

「いやあ……それにしても吹出、君の個性は凄いな。圧倒的破壊力を持ち状況に応じて様々な擬音を使い分ければ、どんな相手のサポートだって簡単に出来る」

「まあ……そんな個性だつて使いこなせる僕の個性の方が凄いなけどね！」

金色の髪を靡かせ、溢れ出るナルシストオーラと共に声高々に笑う少年の名は物間寧人。彼の個性『コピー』触れた者の個性を一定時間だけ使う事の出来るコピー能力を持った少年だ。

「深淵に潜む……いざ向かわん、冥府の釜の奥へ」

「黒色殿の言う通りですぞ物間殿！ 我らも先に向かった者達と同じように先へと向かいましょう！」

獣の形相へと姿を変えたクラスメイトに触れた物間は、同じく獣へと姿を変え吹出を背に乗せ駆け出す。

この瞬間、登竜門のパワーバランスが著しく乱れ始めた。

「オラアアッ！ 数が足んねえぞ!? アアアッ！」

上空を舞い、地上へと大爆発を叩き込む少年、爆豪勝己は誰よりも早く異変を感じとった。彼を取り囲む仮想ヴィランの隙間が時間が経てば経つほど大きく広がり始めている、今までなら即座に穴は塞がれていたのだが、先程の爆音と共に現れた謎の物体。あれが第一関門を横断してから仮想ヴィラン達の動きに変化が生じたのだ。

「……気に食わねえ。誰だ、あの馬鹿デケエ物体を出した奴は」

爆豪勝己は己こそが頂点に立つべき男だと思っている。故に、自分を超える存在がいるのならば必ず討ち果たし己が頂点に立つと考え

ているのだ。

彼の他者より優れた視力と聴力がある存在を知覚し、理解する。その存在は自分達よりも遙か後方にいなながらも高笑いし、己を馬鹿にしたような事を抜かしていた。

「覚えたぞ……糞金髪野郎……ッ！ テメエとアイツら、全部ぶつ飛ばして俺が頂点に立つ！」

物間寧人に突然のヒットマークがついた瞬間であった。この事実を知れば彼は首を全力で横に振って遠慮するだろうがもう遅い。

「……思い出した。糞金髪野郎……確かあの時に……ッ！」

彼の頭脳がある記憶を再生し始める。それは自分が教室を出ようとした時の事であった。

——もう1回言って欲しいのかい!? さっきの事すら忘れるとかとんだ鶏頭だね！ その髪型は鶏のモノマネかい!?

脳裏に閃いた光景。己を小馬鹿にした事を抜かす愚か者の姿を彼の聡明な頭脳がこれでもかと克明に思い出してしまふ。

——もう一度言ってあげるよ！ 君みたいなヴィランを集める奴のせいで僕達まで被害を食らってしまったら堪らないって言ったのさ！

「——ッ！」

最早アレを生かしてはおけぬ。最前線で戦い続ける奴らは恐らくあそこで一進一退の争いを続けるだろう、時間的猶予は存在する。殺るなら今しかない。

「——殺す。完膚無きまでにズタボロにしてどっちが上かハッキリと理解させてやる」

「どうした爆豪！ ウンコか!?!」

「黙ってる爆風野郎！俺より先に行ったらぶつ殺す！精々前に行ってやがれ！」

「……………どういう事だ？」

頭を傾げ疑問の表情を浮かべる夜嵐を無視して爆豪は宙へと飛翔する。今までなら飛翔する事が出来なかった空も今の状況なら自由に行くことが可能だ。

「——ハハッ！なんだ……………邪魔が一切入らないなんて、A組は相当頭が悪いみたいだね吹出！」

宙を舞う彼の視線の先に存在するのは己を超える一撃を放った存在、決して油断はしない。今は己より上の存在として扱う、呑気にモブを載せて笑う存在へと意識を向けた爆豪はニヤリと笑いながら天高く飛翔する。高度を上げ、上へ上へと。

それに気付かず戦場を横断しようとしている哀れな子羊達は地獄への片道切符を握っていることも知らずに前へ前へと向かう。

最前線には引合石と轟焦凍が一進一退の戦いを続け、上からは爆豪勝己が仕留めんと飛翔している。最前線の争いに巻き込まれれば確実に塵一つ残らない。そして、それよりも先に爆豪が爆風を纏い彼等の頭上へと落下してくるのだ。

「うーん……………なんだろ物間。こうゾワゾワツツとして……………ゾクゾクつてするんだけど……………大丈夫かな。ほんとに？」

「ハハッ！大丈夫さ気にする必要はないよ！あの個性を振り回すしか出来ない馬鹿共だ。自分の事が手一杯でこっちまで手を向ける

余裕なんてある訳が……ウン？」

そんな他愛もない会話をしている2人だったが、獣の姿を取った物間の耳にある異音が届いた。

それは何かが連続して爆発している音だった、連続して続く爆音。その音が聞こえてくるのは自分達の遙か上空。

音に疑問を感じ物間が視界を上へと向けた瞬間。爆風を身に纏い、鋭い三白眼を此方へと向け修羅の形相で笑う存在がそこにいた。

「というか爆豪勝己だった。」

「ヤバ……ッ！ 吹出ッ！」

「こんなのアリ!? ヤバいつて！ ボヨヨンでズヒューンなやつ出すからさー！ 頼んだよ物間！」

その言葉と同時に吹出がボヨヨンという擬音を彼等の前方へと生み出す。ボヨヨンの擬音、それは弾力性を秘めた擬音。獣となった物間がその擬音を踏み込み、凄まじいスピードで前方へと滑空して行く。

だが、それを逃す爆豪勝己ではない。どれだけ前に行こうが彼の一撃の範囲内に彼等はいる。逃れる事は出来ない。

「し……」

後に、この一撃を後方から見ていた普通科の1人はこう語っている。

「いやあ……あれはヤバかったですね。最前線で暴れてる奴らとかデツカイ文字作り出したアレもヤバかったですけど自分の一番怖かったのが爆豪のあの一撃でした」

「え？ 轟や引合の方が危ない？ そりやそうですけど……なんて言うんでしようか。爆豪に関しては殺る気が違ったと言うべきかなんと言うか……」

あれは、まるで……紅い。巨大な彼岸花を思い浮かばせる一撃でした。直撃したら普通ならミンチですね、ハハッ。

「ねええええええッ！」

爆豪がここで放った一撃は、後に彼自身によって榴弾砲着弾と名づけられるものであった。

閃光が辺り一帯を支配し、爆風の余波は逃げようとしていた物間達を吹き飛ばし、ついでに爆豪の着弾点の近くにいた仮想ヴィラン達を粉微塵へと変えた。

「——チッ！ 生きてやがる！」

己が放った最高の一撃で仕留め切れなかった事実が悪態を吐くが、これが駄目でも第2種目で確実に仕留めると気を引き締め、爆豪は爆風と共にその場を後にした。着弾点の遙か前方、現状他の誰よりも最前線、地獄への片道切符へと足を突っ込んでしまった物間達は自分達が怪我一つなくこの場にいる事実にあ堵し、前へと進もうとした。

「ハハッ……ハハッ……生きてる……生きてる。やった……やった！」

ざまあないね爆豪の奴！ 彼のおかげでかなり先に進んだよ！」
悪態を吐きながらも、奇跡的に無傷で済んだ事実を笑い、近くで倒れている吹出を起こそうとする物間の耳に吹出の震える声が届く。

「ねえ物間……ヤバイよ。ここ、ヤバいって、ねえ……聞いている？ ヤバいって、マジで」

「何を言ってるんだい吹出？ 爆豪の奴はこっちに来てないし何一つ……「困ったなあ……どうするショート？」ん？」

魔王の声が物間の耳を穿つ。それは爆豪を除いて聞きたくない存在の声、正面から立ち向かったら間違いなく勝ち目のない存在の一人の声。

「わりいが……邪魔すんなら全力で行くぞ？」

滅相もない。むしろこの場から去ってさっさと第二関門に進みたいんです、とは言えなかった。言えば間違いなく現状ヤバい奴のツートップが襲いかかってくるのは目に見えている。ここは無言で彼等の視線から逃れる為に逃走すべき、吹出はそう思いながら物間へと視線を向けた。アイコンタクトで物間はそれを了承する。良かった、取り敢えずはこの場を離れて機を狙おう。そう考えていた吹出に物間の声が届く。

「……悪いけど、僕達B組はそこで思考停止チンパンジー宜しく馬鹿みたいに暴れてる君達を倒して先に進む気なんだよねえ！ 君達A組は大人しく僕達の覇道の礎へと……」

「物間アアアッ!? 嘘でしょ! 正気じゃない! 気でも触れてるの!?!」

慌てて止めに入った吹出だが、時既に遅しは正にこの事、前門の引合、後門の轟と状況は変化してしまった。

「……大丈夫だよ吹出。策はある」

「ほんと……? 一体どうする気なの?」

地獄の鬼に挟まれているような状況だが、これを乗り越える策とは一体どうするつもりなのだろうか? そう思った吹出が問うと、物間は笑いながら言葉を続ける。

「僕達の全力の一撃をもう一度お見舞いすれば良いのさ!」

「馬鹿でしょ物間! そんな簡単にアレを出せる訳ないじゃん! もう1回アレを出したら僕達確実に使い物にならないよ!」

先程放った一撃は時間を掛けたから放てたのであり、こんな短時間でポンポン出せる物ではない。そう吹出が説明すると、物間は突如滝のように汗を流し出す。現状を正しく理解したのだろう、何事もなかったかのようにその場を去ろうとする物間の元へ、引合がゆつくりと近付き始める。

「……知ってるか? 異形で脳がない人間以外は脳を揺さぶられただけで即、気を失うんだ。実体験だ、体験してみる?」

笑顔でそう言いながら近付いてくる引合から逃げ去るように物間は獣の姿となり吹出を背負いながらその場から逃走する。

「何だったんだ一体……?」

「さあ? んじゃ……やるか!」

三度、最前線で地獄の祭典が始まる。無事最前線から逃げ切った物間達は眼前で広がる地獄絵図を眺め眩く。

「漁夫の利狙うしか、ないか……」

「元から皆でそうするつもりだったじゃん……なんであんな事したの?」

「やるしかないと思った。あの一撃をもう1回放って僕達B組の強さを皆に思い知らしめよう……」

「怒りづらいから……そういうのやめよ?」

1歩進んで2歩下がるとは正にこれ、何やかんやで最前線に居たはずが既に後方へと下がってしまった。だが、物間と吹出。彼等2人のお陰で状況はドンドンと変化していく。

彼等が仮想ヴィランの大半を粉碎したお陰で引合の操っていた鉄の軍勢を超えて最前線へと、4人が進む事が出来たのだ。

『おいおいおい！ 見てるかりスナー共！ ついに最前線に爆豪、夜嵐、八百万、緑谷の4人が辿り着きやがったぞ！ こっから一体どうなりやがる!?!』

『あの乱戦に4人が乱入するのか……うっ。腹が……』

その光景を見ていたマイクとイレイザーが思い思いの感想を口にする。そして、全ての中心にいる馬鹿は地獄絵図が更なる混沌へと進化した現実を理解し、心の中で泣いた。

「不味いな……どうするつもりだ引合？」

「うーん……もう障子は先に行つて良いよ、こっからはカバーしきれないから。また宜しく」

その瞬間、障子の身体が宙を舞い第一関門の先へと飛び立つ。そして馬鹿は自分の頬を叩き眼前に存在する5人へと視線を向け声高々に吠えたてる。

「ッしゃア！ 来いやオラアアッ！ 誰を相手にしてるのか思い知らせたるわアアアン！ ここが第一関門最初にして最後の壁！ まとめてここでKOしたるわアアアッ！」

登竜門に5人の猛者が集う。

決着は近い。

第一関門 7

引合石は自身が置かれている状況をよく理解していた。最前線で轟焦凍と一対一の攻防を繰り返して、鋼鉄をも溶かす熱線と圧倒的質量を誇る大氷壁が自分に向かって幾重にも放たれる中で、優位に立っている様に見せかけながら、それらが薄氷の上で成り立っている事実を良く理解していた。

轟焦凍、引合石と第一関門の最前線で争い合う存在。簡単に言えば、彼は引合石に対して優位に立ち向かえるのだ。

鋼鉄すら溶かし尽くす熱線を放ち、圧倒的質量を秘める大氷壁を幾重にも放てる彼は、存在そのものが災害と例える事が可能だ。無論引合として災害並の威力を放つ事は出来るが、引合は触れられる物が必要不可欠。第一関門に於いて、仮想ヴィランを操り、全ての生徒を敵に回した引合ではあったが、轟焦凍はそれらを必要とせず、彼と同等の力を発揮する事が出来る。

引合に仮想ヴィランという武器が必要であるならば、轟焦凍にそれらは必要ない。その身から放たれる一撃が、仮想ヴィランを殲滅するに相応しい絶対的な力を秘めている。

鋼鉄を溶かし尽くす超高温の熱線、全てを取り込む大氷壁。それらを好き放題放てるとなれば、最早彼は無敵を通り越した何かだ。チートもチート、存在そのものが理不尽の権化だ。

そんな理不尽そのものと対等に争いながらも他の生徒達全てと相対する彼も理不尽を超越した何かなのだが、そんな彼にも限界はある。仮想ヴィランを操り、全ての存在へと喧嘩を売っている彼だが、最優先に争うべきは轟焦凍であり、もしも彼との争いで手を抜けば、確実に即殺されるのが目に見えている。故に彼へ攻撃の手を緩める事は出来ない。

隙あらば熱線、隙あらば大氷壁を放ってくる大災害の権化を無視すれば確実に死ぬ。故に、彼は優秀なサポート役として障子目蔵を自分の手元へと置いた。

障子目蔵 個性『複製腕』肩から生えた2対の触手の先端に、自身

の体の器官を複製できる。この個性に引合は目を付けた。幾重にも増やした複製腕に目と耳の機能を最大限に使わせ、自分が把握しきれない状況の把握に務めさせた。自分は眼前の存在に集中しなければならぬ故の、サポート役。効果は歴然だった。彼はその個性を最大限に発揮させ、第一関門で前へ前へと進んでくる挑戦者達の場所を把握し、引合へとその場所を伝えた。故に引合は全生徒の第一関門として君臨する事が出来た。

しかし、こう思う者もいるかもしれない。引合石の個性を使えば、A組など全て反発させてしまえば良いのではないのか？ と。これに関しては全く以てその通りとしか言えないのだが、それをしない理由が彼にはある。第一種目が始まる際に、彼は観客に向かってこう言い放っている。『貴方達を決して退屈させない』と。

そう言い放っておきながら、反発させて終わり等という結末はあまりにお粗末が過ぎる。故に引合は、己を律し枷を付けていた。

つまらないオチはなんと少しでも回避すると。

この体育祭に全身全霊を賭けている者達に対して、それは余りにも残酷で、酷く優しい愚行なのだが、彼は他者にそれを指摘されようとも全く気にする事はないだろう。彼の行いに激怒する者が現れようとも『手加減される方が悪い』と、ハッキリと切り捨てるだろう。それが彼だ。

ならば、手加減する必要のない轟焦凍に対して反発を使わない理由とは何か？ この答えも簡単だ。一言で答えるならば『反発させた所で熱線と大氷壁が止まる事はない。むしろ、右往左往に飛ばしてしまえば、今より手が付けられなくなる』だ。

轟焦凍の戦闘力は並のヒーローを遥かに凌駕している。そんな彼が反発で吹き飛ばされたらどうするのか、答えは簡単。

引合の反発によつて縦横無尽に轟が飛ばされた場合、超火力による熱線と圧倒的質量をもった大氷壁が轟の予想していた場所とは別の方向へと放たれる可能性がある。そうなれば第一関門が大惨事を超えた文字通りの地獄絵図となる。つまり死傷者が出る可能性がある。だから彼を反発させて終わり、とは出来ないのだ。むしろ真正面に向

き合う方が安全であり、対処の仕様がある。

正面から轟焦凍と向き合い、尚且つ他の生徒の相手もする。本来ならば不可能とも言える偉業だが、それらを可能としたのは、引合石の他と隔絶する実力と障子目蔵のサポート、そして雄英高校が誇る資金力によって生み出された仮想ヴィラン達である。

それら全てがあつたからこそ、彼は全生徒に対して立ち向かう事が出来た。一つでも欠ければ崩壊する砂上の楼閣の上で、彼は戦い続けた。

だが、ここで状況は一転する。吹出漫我、物間寧人の2人が放った一撃だ。この一撃によって仮想ヴィランの半数を失った彼は全生徒達を相手取る事が出来なくなる。唯でさえ眼前の大災害の化身に手一杯だと言うのに、戦力の半数を失った彼は轟焦凍以外に放てる仮想ヴィランを減らすしか出来なくなった。

戦況は一転する。圧倒的優位に立っているように見えていた引合の砂上の楼閣は完全に崩れさり、轟焦凍以外の最前線への侵入を許してしまう。

これにより、第一関門は超えられるだろう。見ていた誰もがそう思った。立ち向かっている引合ですら半分諦めていた。

だが、運命の女神は彼に微笑む。新たな乱入者達。それが引合の命運を大きく引き伸ばしたのだ。

『オイオイオイ！ どういう事だ！ ここまでくればもう第一関門は超えたも同然だろうが！ なんてこんな展開になるんだ!』

プレゼントマイクの声がスタジアムに響き渡る。スクリーン上に映し出されている光景は引合石対轟焦凍と他4名の構成となつている。五対一、こうなれば引合を超えるのは時間の問題の筈と、誰もが思っていた。

スクリーン上に映された光景に誰もが絶句する。引合石は五対一にも関わらず圧倒的優位を見せつけ、最前線を守り切っていた。その光景を眺めていたイレイザーヘッドは一つの事実に気付いたのか、ボソリと呟く。

『轟の奴……動きが鈍いな。さっきまでの力を出せていない。不味い

ぞ……他の奴らに気を使い、今までの超火力による牽制が出来なくなっついていやがる』

『アアン!? って事はあれか! 周りに他の奴らがいるから轟の本領を發揮出来ないって事か!?』

『ああ……不味い。轟が本領を發揮出来ずとも、引合にそれは関係ない。むしろ超火力による戦場の支配が消えた事により、今までよりも十全に動いている』

スクリーン上に映し出される光景、それは彼の独壇場そのものであった。爆破を放たれようが、竜巻が巻き起ころうが、殴りかかられようが、銃器を生み出すが、それら全てを引合はいなしきる。

爆破には仮想ヴィランの盾を以て対処し。

竜巻には同じく仮想ヴィランを巻き起こしている張本人へと放ち。

常人では耐えられぬ超常の力を持った拳の一撃は、無情にも躲され、そのまま腕を捕まれ投げ飛ばされる。

銃火器を生み出し転用する前に、それらを奪われ逆に使われてしまう。無常にも引合に武器を与えてしまう結果に陥る。

そして、先程まで引合と一進一退の戦いを繰り返していた少年は思うように動けなくなった状況に焦りを感じた。本来ならば熱線を放てた状況でも、周りにいる者達がそれを阻害し、大氷壁など放てば眼前の4人がどうなるか分からない。1度は逆転した筈の戦況が更に逆転する。

「やべえ……今俺輝いてる! ちょー輝いてる! やっぱ俺ってやれば出来る子だったんだ!」

もう一度言っておくが轟焦凍とは災害の化身とも呼べる程の実力を秘めた存在だ。だが、そんな彼が十全に戦うには、周りに気を使わずにいられる戦場が必要不可欠だ。先程までは最前線で引合と一進一退の激戦を繰り返されたのは、一重に彼等以外の存在がいなかった事に尽きる。

「……思うように動けねえ」

轟が一撃を放とうとすると、必ずと言ってても良いほど引合は他の4人の誰かを射線上に巻き込む位置を取る。故に放てない、故に思うよ

うな動きが取れない。強過ぎる個性が、逆に己の首を絞める事態に陥ったのだ。

「やはりド派手で強力な個性よりも地味で万能系な個性がナンバーワン！ つまり俺がナンバーワン！」

有頂天極まる引合だが、運命の女神とは気まぐれだ。女神は勝利を確信する者に苦難を与え、逆境の中にいる者達にこそ、勝利への切符を手渡す。

乱れきった仮想ヴィランの群れを乗り越え、A組、並びにB組の者達が最前線へと近付いて来ているのだ。これ以上の最前線の増員に引合石は耐えられるのか？

登竜門が少しずつ開き始めている。

「——ッ！ 舐めるのは大概にしやがれエエッ！」

鳴り響く爆音が世界を空気と大地を震わし、着弾点に存在する全てを塵芥へと変えていく。実力差は理解していた、だからこそ己の持たぬ力を持つ老獺へと頭も下げ、教えを乞い、2週間という短い時間の中で個性を磨き続けたのだ。速度、瞬間的爆発力、容量。それら全てが今までの己を凌駕している自信がある。

なのに

何故。

「テメエは……ッ！ これでも届かねえつてのか！」

眼前で笑う存在に届かない、それどころかこの場にいる全ての者達が情けを掛けられ続けている。眼前の存在が自分達を反発させればこの場にすら立てない、それを理解してしまえる自分の聡明さが、情けを掛けられて尚届かない己の力が情けなくて、激情を抑えきれず唇を噛み締めた。

「舐めんなや！ 俺はテメエを超える！ 全部の力を使えや！ テメエからすれば俺達は取るに足りないカスって言いたいんか!？」

ここに来るまで勝ち続けた生涯だった。初めて感じた挫折感を与えた存在を超える為に、ただそれだけの為にこの場にいる筈だった。他の有象無象とは違う、俺はお前を超える存在だと、頂点に経つ存在だとあの場で言い切ったのに。

「……危ねえぞ。爆豪」

瞬間、己の眼前に氷壁が立ち塞がる。此方を巻き込まないように威力を調整した一撃。先程まで繰り返した威力と比べれば天と地も離れている、その氷壁が今この場にいる自分に対する宣告そのものように感じ取れてしまう。

力不足

邪魔

雑魚はこの場から消えろ

「——ッ！ 糞が……テメエらは……何処まで俺を虚仮すれば……ッ！」

「駄目だかつちゃん！ 1人で立ち向かったらまた！」

「だあってろ糞デク！ 俺はお前らみたい雑魚宜しく群れる訳にはいかねえんだ！」

そうだ。俺は何れ頂点に立つ男、オールマイトも舐めプもあの糞女も全部ぶっ飛ばして俺こそ最強だと。

そして、その為には先ず眼前の存在の全力を上から叩き潰す必要がある。

片手で筒を作り、爆風の射出するのを最小限まで細め貫通力と射程距離に特化した構えを取る。サポートアイテムを抜きで放てば怪我をするのは必須の一撃、ここで放つのは得策ではない。まだ第一種目の第一関門、こんな所で怪我をする必要が何処にある？

「(あるに決まってるんだろが……ッ！ 俺が出せる力全てを出し切らずに何が全力を出せ！だ。元より実力差は歴然としてんだ。俺は出せる全ての力を使わねえと始まらねえ！)」

「当たって死ねやあ！」

彼が2週間の間に作り上げた必殺技の一つ。徹甲弾、彼の持つ爆発力を一点に集中させた一撃。広範囲に壊滅的な一撃を放つ威力が一点に集中する。それによって生み出された射程距離は轟焦凍が生み出す熱線と同等に近いものを持ち、貫通力に関しては熱線を遥かに凌駕していた。

そんな一撃が人間に当たれば死は免れない。放たれた一撃、圧倒的威力と引き換えに爆豪の手は、その一撃に耐えきれずに裂傷と火傷を引き起こした。

「……ッ！ どうだ……ッ！」

睨みつけるように着弾点を睨みつける。白煙が巻き起こり靄に隠れた場所から聞き覚えのある脳天気な声が響いた。

「やっべえ……当たったら確実に死んでた。うわ怖……マジで死ぬかと思った」

手から滴るように流れ落ちる血液、もしも今、もう一度同じ威力

の徹甲弾を放てば二度と手は使い物にならなくなる。もう徹甲弾は放てない。

そして、お返しと言わんばかりに空から鋼鉄の流星が自分に向かって流れ落ちる。呆然と空から降り落ちるソレを眺め心の中で悪態をついた。

「(ハッ……糞が。化け物かよ)」

頂点に立つ、その頂点がどれだけ高いのか。それを改めて感じ、爆豪は襲い掛かるであろう一撃へと身を委ねようと

「爆豪！ 何ボンヤリしてんだ！ 危ねえぞ！」

襲い掛かるであろう一撃はそんな声と共に粉碎された。声の主はそのまま襲いかかる仮想ヴィランを拳で殴り抜き粉碎する。その存在に見覚えがあった、同じクラスにいるモブの1人。自分に対してヤケに絡んでくる存在、赤い髪が重力に逆らうような髪型。

「クソ髪……」

「切島だ！ 頼む瀬呂！」

その声と共に爆豪にテープが巻き付き身体が宙を舞う。身体に巻き付いていたテープが外れ、先程いた場所から離れた。

「はいよつと。あのなあ……落ち着けて爆豪。というかお前……その手、大丈夫か？」

そう言いながらニヒルに笑う顔を見て爆豪は考える。これも自分のクラスにいたモブの一人だった筈、名前は知らないが。

「……しよう顔」

「瀬呂な！ つてやべえ！ 芦戸ヘルプ！」

「任せて！」

此方へと放たれた仮想ヴィランが鉄を溶かす溶解液によって半身を失い地面へた落ちる。その一撃を放った存在も自分と同じクラスのモブの一人、名前は知らない、覚える必要も無いと無視していた。

「……黒目」

「芦戸 三奈 ツ！ アンタ人の名前覚えてないの!? クラスメイトなんだけど！」

「知るか……テメエらなんで」

理解が出来ない、俺を助ける意味がない筈だ。これは競走、ならば俺を助けずにその隙を見てアイツを越えようとする、それが普通の考えの筈。

「なんでって！ そんな事当たり前じゃん！ 馬鹿なのバクゴー!?
ってヤバ！ 助けて青山！」

「フウツ☆ フウツ☆ ハウツ……ツ！☆ キラメキが……止められないよ☆」

コイツに関しては存在すら知らない。だが、黒目が名前を呼んでいたという事は同じクラスのモブなのだろう。それはどうでも良い、だが……何故。

「クラスメイトの危機、一つや二つなんとかしてこそヒーロー科って事だろうが！」

仮想ヴィランと立ち向かいながら切島が吠え立てる。その言葉に追従するように瀬呂は笑い言葉を続けた。

「まっ……平たく言えばそうだな。お前が俺達を気にしていなくても、俺達はお前の事を案外気にしてるって事」

「そーいうこと！ バクゴーって強いけどメンタル弱そうだしね！
案外隠れてメソメソしてそうないメージある！ バクゴーってガキ大将しててちゃんとした友達いないタイプでしょ！」

瀬呂の言葉を被せるようにバツサリ言い放つ芦戸の言葉を聞き、周りにいるクラスメイト達は笑い緑谷は何とも言えない顔で苦笑いをする。

「子犬……チワワみたいだよね☆ いつもキャンキャン吠え立てて威嚇してるみたい……キラメキが足りてないよ☆」

「チツチワワ！ 似合わねーっ！」

青山の恐れ知らずの一言がツボに入ったのか瀬呂と芦戸が笑い、啞然とする爆豪へと切島の言葉が掛けられた。

「……という訳で爆豪！ あんま無理すんなよ！ 引合を何とかするまで後ろに下がってて良いからな！」

「えっ？何、俺ハブ？ ズルいぞ！ 俺も仲間に入れてくれよ！」

謎の盛り上がりを見せる彼等を見て引合は文句を言うが、それをか

き消す程の大声でクラスメイト達の反論が響き渡った。

「だったらお前はそこを退け！」

「すまん！ それ無理！ 取り敢えず物理的に俺を乗り越えて行くんだな！ ハーツハツハツ！ 分かったか！」

高笑いを響かせる引合の声を聞き、芦戸と瀬呂はウンザリしたような声色で呟く。

「……引合って絶対行事で周りがドン引くくらい全力を尽くすタイプでしょ。なんかそんな気がする」

「……あーなんか分かるわ。文化祭とかアイツに全部任せたらスゴい事やらかしそう、なんかこう……学校全部を巻き込んだ一大イベントとか」

笑いながら仮想ヴィランへと立ち向かう彼等に酷く小さな声が掛けられた。

「……んで、行きやあ良いだろうが。テメエら勝ちたいんじゃないやねえのか？」

「そりゃ勝ちたいツ！ けど！ それよりもそんな顔してるクラスメイトを放って行ける訳ないじゃん！」

「俺も芦戸と同意見だな。自分を最優先して如何にも泣きそうな奴を放っておいたらヒーロー志望失格だろ……っつと！」

「……チーズ食べる？ ☆」

1人を除いて言ってる事は同じ。そして、切島の声が吠えるような叫び声が響き渡る。

「plus ultraだアアアツ！ ウオオオオツ……つてやべえ！

助けてくれ砂藤！」

「しまらねえな切島！ 手伝ってくれ尾白！」

「ほんとにしまらない……ねツ！」

気付けばA組の全員が最前線に集まり、近接戦闘が得意な者、遠距離戦が得意な者、そして我が道を行く轟の3パターンに別れ出す。

「チワゴ―！ さっさと動いてよ！ こっちだっていっぱいいっぱいなんだから！」

「――誰がチワゴ―だツ！ ぶっ殺されてえか黒目エ！」

その瞬間、爆破を放ちながら爆豪は眼前から突撃してくる仮想ヴィランを蹴り飛ばす。蹴り飛ばしながら爆破を放ち、一番柔らかい関節部分を粉碎した。

「おせえぞチワゴ―！」

「早くしてよチワゴ―！」

「壁とは！超えられる為に存在するが、そんな簡単に超えられる訳には行かねえんだよなあ！　ましてや、あのチワゴ―に負ける訳にはいかないよなあ！」

最前線で立ち向かうクラスメイトと引合の熱いチワゴ―コールに青筋を立てる爆豪だったが、舌打ちをした後。近くにいる者達へと声を掛ける。

「……引合まとめてぶっ飛ばされてえか teme ー！　……チツ！　まあ良い！　おい黒目！　しようゆ！　金髪モブ！　力を貸せや！　俺がお前らの個性を使ってやる！」

それは爆豪勝己にとって最大限の譲歩だった。決して誰とも群れない、だが現状、単独では決して勝てない。ならばどうする？　力を借りる？　論外。決して己は雑魚と一緒に群れるつもりはない。

ならばお前らを使ってやる、お前らの個性を使って俺がアイツを倒す。そう思い吐き捨てた言葉だった。

「えっ……やだ！　使ってやるって何様？　そんなんだからチワゴ―なんだよ？」

「同じく☆」

けんもほろろに否定されてしまう。その言葉に血管が切れたのを感じながら爆豪は吠えたてるが

「アア!?　ぶっ殺されてえか teme ー！」

「ほら☆　また吠えた☆」

青山の容赦ない一言で呻くような顔をしながら爆豪は悪態をつく。

「——ッ！糞がッ！」

「まあまあ……今回はこのコミュニケーション力の足りない可愛い可愛いチワゴ―君の意見を尊重しようぜ？」

「うーん……しようがないなあ！　今回だけだよチワゴ―！」

「仕方ないね☆ そこまで言われたら折れなきや優雅じゃない☆」
そんな爆豪の様子を見ていた瀬呂が助け舟を出し2人は納得したように返事を返す。彼の聡明な頭脳が3人に玩具にされた事実に関心、腸がねじくりかえる程苛立ち、両腕から爆破を発する。

「——テメエら……ッ！」

「ほら来いや愉快的チワゴ御一行！ 他の奴らはガンガンこっち来てるぞ！」

引合の容赦ないチワゴ煽りを聞き、

芦戸が声を上げる。

「だつてさ！ どうする!？」

「……力を使つてやるって言うくらいだから、策はあるんでしょ？ ☆」

「だな。ないなら頭脳派瀬呂さんが作戦立てて爆豪の個性を使つてやるよ」

これまでの人生ならここまでボロクソに言われた事はなかった。常勝、勝ち続けた人生。勝者は孤高であるべき、群れるなんて論外、それは今も変わらないが。

「ハッ！ テメエらの個性、俺が上手く使つてやる！」

今だけはそれを捨てよう。今の俺では奴を越えられない、ならば他の力を使うくらいの譲歩が必要だ。勝利に貪欲に、どんな手を使つても勝つ。

第一関門9 第二関門 開幕

「ヤバい……今俺、輝いてる！ こんな感覚初めて！ もう何も怖くない！」

「えっ……ちよ……まっつっ！」

評価員がこの場にいるとすれば即座に全員が満点の札をあげる、それほど美しい一撃だった。全身の筋肉を躍動させバネの如く地面を蹴り上げ対象の顎を撃ち抜く。アッパーカットと呼ばれるそれを放たれた哀れな少年は宙を舞い地面へと落下する。

「上鳴イイイツ！」

ドシヤアアと心地よい音を鳴らしながら地面へと落下したクラスメイトの安否を案じる悲鳴が第一関門最前線にて訝響した。

まあしただけなのだが。

「安心しろ！ 峰打ち……へエエイツ！」

「待て待て待て引アアアアアッ！」

嘆願の命乞いは最後まで言い残せず、哀れな次なる犠牲者は宙へと投げ飛ばされた。一般的な高校男児の身長を遥かに下回る彼は、身体を掴まれジャイアントスイングから大きく振りかぶられ大空へと飛翔した。悲鳴をあげながら大空を飛ぶ少年。このまま落下すれば脳漿をぶちまけ、さながら地面に叩きつけられたトマトを彷彿とさせる惨状を作り出すだろう。

だが、そこは天下の雄英学校ヒーロー科。哀れな峰田を助けられる者は当然存在している。疾風を身に纏い宙へと飛翔した少年は、危なげなく峰田を抱き抱えると何時もと変わらぬ満面の笑みを持って身の安全を伝えた。

「大丈夫か！」

「夜嵐イ……ありがてえけどお……ありがたいんだけどお……」

夜嵐イナサの快活な笑顔を見上げ、その腕に抱かれてる峰田はモゴモゴと口籠る。その様子に天真爛漫であり、空気読み人知らずなイナサは不思議そうに首を傾げながら言葉の続きを待つ。

「なんでお前は男なんだよおおおっ！ 男の胸板触っても嬉しくないし楽しくねえよおおおっ！ 胸筋発達しすぎだろお前さああっ！
今すぐ女体化してキレ目系爆乳美少女にフォームチェンジしろおおおっ！」

「……良く分からんがすまん！」

カツと目を見開きながら謝る夜嵐と泣きながら夜嵐の胸板を叩く峰田、状況だけ見れば意味不明である。そんな混沌渦巻く2人の様子を地上から見ていた蛙吹は夜嵐へと声を掛けた。

「気にしないで良いのよ夜嵐ちゃん。ソレはさっさと捨てても良いのよ？」

最早、峰田はソレ呼ばわりである。命の恩人に女体化して胸揉ませろと宣ったのだから仕方ないのかもしれない。因みにこの場に集まった女生徒全員が峰田の言葉を聞きドン引いてる。

「だってさあ！ そうだ引合！ お前ならオイラの気持ち分かってくれるよなあ!？」

自分を大空へと放り投げた存在へと助けを求めんと峰田は声を掛けた。因みに声を掛けられている馬鹿は脹脛のトルクから煙を吹かせながら蹴りかかってくる存在の一撃をバックステップで躲しながら眼前にある足を持ち、ハンマー投げの要領で放り投げている。放り投げた先にいたクラスメイト達を巻き込みながら倒れ込む飯田を見送った後、引合は嫌そうな顔をして峰田の言葉に対して返答した。

「ホモかよお前」

「そうだろ……っ!? ん……ホモ？」

同じ巨乳愛好家である彼ならばきつと分かってくれる筈、そう思っ

て声を掛けた峰田であったが突然のホモ認定に言葉を失う。

「女装癖があつてホモとかお前もう役満じゃねーか。頼むから俺の近くに近寄らないでくれ」

そう言いながらも引合は自分を越えようとする者をちぎっては投げちぎっては投げを繰り返す。放り投げられている者達からすれば会話のついでに投げ飛ばされているのでまったものではないが、そんな事を考える暇も与えられず文字通りポンポンと宙を舞った。

「大体なあ……身体が女になったからって中身が女になった訳じゃないだろ？ それに……身体だけなら俺もシヨートも女になった事あるわ」

後半は現在、眼前にいる轟以外に聞こえないような呟き声だったが。個性上、耳が他者の何倍も優れている耳郎はその言葉を聞き逃さなかった。女体化経験がある、その一言に呆気にとられ動けずにいるとは露知らず、彼等は彼女に聞かれている事実に気付く様子もなく言葉が続けた。

「……懐かしいな。2年の頃だったか？」

「そうそう。3人とも女になって大惨事凝山大戦が発生した時だな」

放たれた拳を1歩下がる事によって躲し、振り子の如く片足を振り上げ、振り抜かれた拳を蹴り上げる。そのまま残った片足で宙を舞い、頭部へと踵落としが放たれた。

「……この程度。当たるつもりはねえぞ」

が。先程された事を返すかのようにバックステップでその一撃は躲され、放たれた踵落としは地面を穿つだけの結果となる。

「……正直知ってた」

「(どうしよう……聞かなきゃ良かった)」

1人、耳郎が引合の爆弾発言に戦っていると、横から心配したような声が掛けられる。

「どうしたの耳郎ちゃん！ 顔が真っ青だよ！」

「ごめん透……ちよつと知りたくなかった現実から逃避してた」

「んん？ どういう事？」

クラスメイト、それも最強格の2人がTS経験者でしたなんて口が裂けても言えない耳郎とその様子に懐疑的な声色を出す葉隠。2人が謎の緊迫感に包まれている中でも時間は無情に、なお残酷に進んでいく。

『オイオイ峰田アアツ！ そりゃねえだろ！ Heyレイレイザー！ お前の教育方針どうなってんだ！ アイツとんでもねえ程アレじゃねえか！』

『なんで……アイツらは……全国放送だって分かってんのか……』

ぐっ』

スクリーン越しに彼等の姿を眺めていたマイクが峰田をネタにし始める。全国放送されている映像とは思えない惨事、まさかの坊主頭のクラスメイトに対する女体化希望宣言にスタジアムにドツと笑いが起こる。

キレキレのマイクとは対照的にイレイザーは顔を真っ青にして腹部を押さえていた。どうやら限界は近そうである。もしも彼が現在職員席に不倶戴天の怨敵たる魔王が偉そうに座り込んでいると知ればどうなるのか想像に難くない。

「ふん……下らん、雄英の質も落ちたものだ。あんな愚か者をヒーロー科に入れるなど、あれが焦凍と同じ科の存在とは断じて認めん。むしろ焦凍とアレを同じクラスにして貰っては困る、もしも……あんな愚物と共に過ごし朱に交われれば赤くなってしまふなんていう事態に……取り敢えず根津校長にはそれとなく言ってみよう」

一般席の片隅。ガヤガヤと盛り上がりを見せる中、一人の男性がスクリーン上に映っているド変態を心底見下したような顔で言葉を発した。

「……あんな変態でもアンタよりマシだろ」

自分でも流石にそれはないと思いつつも悪態を吐かずにはいられない青年が男性へと苦言を呈す。その言葉を聞き、言い返すでもなく、男性はただジツと青年を見詰めた。

「……なんだよ。文句あんのか？」

「……いや、お前の言葉通りだ。己の覇道の為に家族を……お前達を蔑ろにした俺は……永遠に許されるべきではない。ましてや妻を……冷を限界まで追い込んだのだ、この場にいる事すら許されない事は分かっている」

「分かっつてんなら「だが」……なんだよ」

隣合って座っている筈なのに、その間は果てしなく深い溝がある。彼等の周りにいた者達もその雰囲気には押され思わず口を閉ざし。彼等を見守る女性達は、一人は沈痛な面持ちで自分の膝を強く掴み、もう一人はそんな女性を励ますように肩を抱き締められている。

「今日だけは……共に見届けさせて欲しい。俺の最高傑作であり……お前達の弟が花開く、その瞬間を」

頼む。深々と頭を下げながら言われた言葉に青年、轟夏雄は困惑する。自分の知っているこの男はこんな事を決して言う男ではなかった。彼の弟が生まれ、今までナリを潜めていた欲望を隠さなくなった男は、母と弟に対して酷い行いを始めたと記憶している。自分達失敗作には目もくれず、ただ弟を……自分の最高傑作を完成させる為に一心を注いだ。

虐待なんて鼻で笑える程の訓練、それを庇う母を殴り飛ばす姿は隠れて弟の様子を見守っていた自分ですら恐怖を覚えるものだった。

「……んだよ、いきなりそんな殊勝な態度で」

故に、彼は眼前の男を許す訳にはいかない。例え弟がこの男を許しても、母がこの男を庇っても、姉が何を言おうとも、自分だけは許してはならないのだ。

「違うの夏……この人は、全部を背負って……」

「……母さんは優しすぎる。燈矢兄はコイツのせいで失踪した、それを分かっている癖に。コイツは焦凍に対してあんな無茶を……」

「……燈矢は惜しかった。俺の炎を超えていたが冷の体質をお前達の誰よりも濃く受け継いだ。だから……」

「だからってなんだ！ お前が……ッ！」

男の胸倉を掴みあげ、睨み付ける。脅せるなんてちっとも思っていない。だが、恐らく自分だけなのだ。焦凍はあの夜、間違いなく何かを悟った。どんな奴であろうともこの男は俺達の父親だと言った、きつと焦凍の中でコイツに対する憎悪は少しずつ薄れているのかもしれない。

それは良い事だ。弟がこの男に対して囚われなくなった、それは何よりも喜ばしい事だ。

「お前が……ッ！」

姉さんは昔からこの男を許していた。燈矢兄がいなくなってから自分が今、兄弟で一番上だと感じたのだろう。母もいなくなり日に日に荒んでいく焦凍の心を守る為に自分がしつかりしないと、母親の

代わりをした。

姉さんは昔から優しくかった。それこそ、あの男にも父親として何か焦凍に対して思いがあると、そんなある訳がない事を夢想する程に。

「お前が…ッ!!」

母さんは誰よりも穏やかで優しくかったから狂った。あの男によって荒んでいく焦凍と、日々あの男に暴力を振るわれたから。

「お前が…ッ!!!」

自分だけはこの男を許してはならない。皆は優しすぎる、皆が許しても自分だけはこの男に自分が犯した罪の深さを教えなければならぬ。

「……許されるつもりはない。それだけの事をしたと自覚している」
「だが……今だけで良い。共にこの場にいる事を許してくれ……たった一度で良い。お前達と共に今の焦凍の姿を……」

そう言いながら目を伏せる男は昔見た姿と違って酷く小さく見えた。例えるなら、まるで謝り方を知らない子どものような。

「夏……お願い……」

姉さんに背中を強く握られる。姉さんはずっと家族と一緒にいられれば良いと願っていた。姉さんは今ならきつと家族が仲良く出来るかもしれないと思っっているのだろう。

俺も譲れない。けど途中で逃げた俺よりも、焦凍をずっと傍で守ってきた姉さんの言葉の方がもっと譲れない。

だから手を離す。掴んでいた胸倉を離しスクリーンを見る作業に戻る。

「……姉さんが言うからだ。だからここにいるのは認めてやる」

スクリーンに映る光景に集中し、周りから聞こえてくる声を右から左へと受け流す。

「すまない……」

弱々しいその言葉は俺に聞こえていない。

スクリーン上の光景はドンドンと変化していく。引合という少年が立ち塞がる第一関門、そんな中で立ち向かう生徒達。最終的にA組

があと少しで超えられる、その瞬間に彼等は現われた。

『ハーハッハッハ！ これこそ！ 漁夫の利って奴さあ！ 君達みたいな思考停止猿共には分からないだろうけどねえ！ 人間には賢く立ち回る知恵つてのがあるのさあ！ それじゃあさよなら！ 君達のお陰で楽に突破出来たよ！アハハハハ！ アハハ……アハハ……』

地面から突如表れ、強襲を行った彼等は引合の身体の下半身を地面に埋め、なんとか地面から出てきた彼をキノコ塗れにしつつ、全身鉄の身体の少年2人が彼を弾き飛ばし、巨大化した鉄の両手で彼を掴むと、後方へと放り投げた。

『うつわあ……隙見てソレとかマジえげつねえ。ブラドがこの場にいたら問い詰めるレベルでえげつねえ……というか引合動かねえな。なんでだ？』

『……良く見ろ、口からキノコを吐き続けている。恐らく呼吸器官を菌糸類で満たされたのだろうな。知らない個性故に対策が取れなかった……か。まあ、こんな結末もありだろう』

解説の言葉を聞き良く見ると、確かに呻くようにキノコを吐き続ける姿がそこにはあった。立ち上がる事すら難しいと言わんばかりに蹲り吐き続ける姿は見ていて痛々しいものがある。

『おーつとお!? ここで轟が引合の元に行く!? 行くなら今だぜ！ さつさと行こうぜ！ Hey!』

『……苦しんでる友人を置いていけないと言う事だろう。これは競走なんだが……まあ、そんな姿は嫌いではない』

心配そうに駆け寄る焦凍へと吐きながら何かを語り掛ける引合。何秒間か会話すると、焦凍は凄まじい速度で前方へと移動を始める。それを追うようにA組も進み始め、ヒーロー科で第一関門にその場にいるのは彼だけになる。

『フッフッフ……フッフッフ。初めてですよ……俺をキノコまみれにして跳ね飛ばして……しかも放り投げたお馬鹿さんは』

スクリーン上から引合の声が響き渡る。今まで注目されていた故に、今も彼がスクリーンに映し出されていた。

『おいおい……イレイザー……アレ、大丈夫なのか？ こういうのも

なんだが。引合の奴、顔がヤベえぞ』

『……』

『ここで無言になるなよ！ 怖えーじゃねえーか！』

解説が突然無言になり司会が慌て始める。そして引合は立ち上がったかと思うと、徐に鉄板に乗り地面を高速移動し始める。

『……一方的に追われる恐怖を思い知らせてやるぜエツ！ 俺は壁になるより追う方が得意なんだよなアアアツ！』

そんな奇声を発しながら。

無言でスクリーン上の映像を変える司会と解説。何度かの呼吸音が聞こえ、そして司会のたった一言だけの小さな声が耳に届いた。

『俺……もう司会やめたい』

『逃げるな。お前よりも俺が逃げたい』

この瞬間、スタジアムの誰もがイレイザーヘッドに同情したのは語るまでもないだろう。

第一関門 ロボインフェルノ改め

怪獣大決戦くその他勇者を添えてく 突破

同時に第二関門

クレイジータクシー引合 開幕

第二関門 1

「アハハハハ！ やってやったよ！ 僕らB組こそがA組より遥かに優れていると日本中に見せ付けてやったんだ！ 誰一人必要じゃない存在はいなかった、皆が力を合わせたからこそ！ 僕達はあの思考停止猿共たる憎きA組を出し抜く事が出来たんだ！」

自分達と比べて協調性の欠片もないA組なんて烏合の衆も同然と、興奮したように息を荒らげ言葉を続けていく物間寧人をクラスメイ卜達は止めなかった。何故ならばあの第一関門を真つ先に乗り越えたのは自分達B組。そして、物間こそがそれを実現させた者の言葉だからだ。

結果論ではあったが物間は嘘を吐かなかった。作戦を伝えられる前に言われた言葉、不可能だと思っていたがまさか実現するとは思わなかった。だからこそ、何時も彼を止める少女も笑いながら彼の言葉を聞いていたのかもしれない。

「小森！ 骨拔！ 特に君達の活躍のお陰さ！ あの思考停止猿共のお山の大将に一泡吹かせたのは君達の機転あってこそ！」

特に活躍した者の名前を上げて賞賛の賛辞を送る物間の言葉を聞き、当事者達はそれぞれの態度を持ってその賛辞を受け取る。

「柔軟に対応するって、最初に言ったろ？」

物間の賞賛を軽く受け止める少年。全ての物質を柔らかくする個性の持ち主らしく、余裕を持って対応するその姿は正しく推薦入学者と言うべきか。彼の名は骨拔柔造、B組唯一の推薦入学者である。

「キノコの事なら何でも任せて欲しいノコ……でも。そうやって大きな声で言われるのは少し……恥ずかしいノコ」

獣の姿となり、走り続ける宍田の背中に乗る少女は物間の本心から浴びせられる賞賛に耐えられなくなり顔を隠すように宍田の背中へと突っ伏す、そんな彼女の名は小森希ノ子。背中で感じる感覚で少女の状況を理解したのだろう、宍田は物間を諫める為に声を上げた。

「……むっ物間殿。 婦女子を辱める行為は認められませぬぞ！」

「宍田！ 君の個性を活かした機動力は第一関門を超えるためにおい

て必要不可欠なものだった！」

「物間殿は、褒め上手でありますな……」

諫める為の言葉は賞賛によって掻き消される、困惑する穴田の声を掻き消すように物間は言葉を続けていく。

「それに鉄哲、やはり君はその身体を活かした突進が強い。硬さは強さ、単純だからこそ良い個性だよ！」

「おう！ サンキュー物間！」

ガチンと音を立て鋼鉄化した顔で笑みを作る者の名は鉄哲徹鐵。個性『鋼鉄』を持ち、全身を鋼鉄化させる事が出来る力を持った少年だ。

「……あたしはおこぼれ貰ったって感じかな？」

「ハイ……良い所、見せられマセンデシタ」

賞賛を浴びせられる者とは対照的に、彼等とは違い、自分達はそこまで活躍出来なかったと自嘲する少女達。少し落ち込みを見せる背中が、バチンと叩かれる。

「はいそこまで！ 取蔭も角取もそんな事言わない！ それに……あたしだって、個性を貸すくらいしか出来なかったんだからさ！」

背中への衝撃に前のめりになった少女達へと声が掛けられる。2人から視線を向けられた声の主は言葉を続けようとするも、耳聡い物間が彼等の会話を聞いたのか憤慨するように声を荒らげた。

「ハア!? 言っとくけどおこぼれなんてあげたつもりはないよ！ 皆で協力したからこそこの結果を掴めたんだ。これはB組全体の勝利って何度言わせれば気が済むんだい！ あーあー！ これだから暴力に支配されたゴリラとその取り巻きは」

「殴るよ。グーで」

巨大化した拳を見せ付けられ、突然の死刑宣告に等しい言葉に物間は口を閉ざす。入学してから大半の間、繰り返された光景に誰かが笑い声をあげた。

「ほんつと……物間って色々惜しいよな。なあ円場」

「だな。顔も良けりゃあ個性も良いんだがなあ……」

物間寧人とは敵意と同じくらいに好意を隠さない少年である、彼

と関わったのはまだ短い期間ではあるがクラスメイト達はその事実を良く理解していた。

「まあ……なんだかんだ言っても僕が一番活躍したかな！　アハハハハ！」

好意も敵意も隠さなければこんな自己主張もまるで隠さない。今までどんな人生を過ごせばこんな性格になるのかと言わんばかりの態度に、クラスメイト達は心底仕方なさそうに笑った。

「……何か変な事でも言ったかい？」

「自覚なしだもんなあ」

「だよなあ」

第一関門を乗り越え彼等は走り続ける。どんな困難だって自分達が協力すれば乗り越えられない事は存在しない。そう思いながら。

『Y E A A A A H！　遂に第一関門突破ア！　残る関門は後2つ！』

出来ればもう少しマトモに競走欲しいが無理なんだろうなあ！

これはちよつとした裏話なんだが俺達が想定していた第1種目の時間は今を持ってoverしたぜY E A A A A H！ウチが貰ってる時間枠ともう全て振り切りなア！　責任は全て校長が取ってくれ！　多分きつとMaybe！』

『……校長が野生に帰る日も遠くはないな』

あらゆる全ての責任を雄英高校校長　根津が背負う事となりつつあるアリーナ。司会は最早恐れる者など何も無いと言わんばかりの態度で振り切ったテンションのまま関わる全てを切り裂くレベルのキレキレトークを始める。

そんな司会を横目に。解説は後日、校長に襲い掛かるであろう責任を考え小さな溜息を吐いた。

『現時点で1番前を走ってるのは、引合でもなければ轟でもねえ！　まさかまさかの障子目蔵！　正直お前いたっけって感じ！　ごめんな！』

『おい』

その言葉と共に、スクリーン上に己のペースで走り続ける障子目蔵の姿が映し出される。その姿を見た観客達も「ああそういえばコイツ

が1番前だっけ」と言わんばかりの態度を示した。スクリーン上に映し出されている少年が走る姿を見ながら司会と解説は障子について語り始めた。

『いやだつてさあ！ 正直障子って引合のオマケって感じじゃねって感じでやってる事も正直あんま分かってない奴も多いと思う！ なので……イレイザー！』

司会の言葉に大半の観客達が内心同意する。彼等から見れば引合の金魚の糞の如く付き従い、1番を貰っただけの存在にしか見えな。そんな雰囲気を感じ取ったのだろう、解説のイレイザーヘッドは溜息を吐きながらゆっくりと話し始める。

『ハア……まあ良い。確かにアイツは目立つ行動を一切していないかった。だからオマケ程度に見えなかった者達もいるかも知れない。だが……ヒーローとして、障子の行動を観察すれば、ただのオマケではなかったという事が馬鹿でも理解出来る筈だ。例え、お前みたいな馬鹿でもな』

『シヴィーツ！ それじゃあそんな馬鹿の為に1つ解説を頼むぜ！』

徐に吐かれた毒に反応する司会のプレゼントマイクに相槌を返すように解説は話し始める、影の功労者である障子目蔵の働きぶりを。

『障子目蔵。個性『複製腕』異形型の個性であり、無尽蔵に伸ばし増やす事が出来る腕を肉体のあらゆる器官にする事が出来る力だ。今回、引合が障子に望んだのは恐らく2つ『第一関門の現状把握と他の生徒達の位置情報の伝達』だと思われる。ヒーロー共は今までの状況とこの情報だけでどれだけ障子が有用なのか理解しただろうが、横にいる馬鹿は分かっていると思われから話を続けるぞ』

『……あの、イレイザー？ もしかして無理矢理解説させたの怒ってる？』

『気の所為だ』

言葉の随所で吐かれる毒に流石に困惑する司会の言葉をすつとぼけるように解説の姿を見て『ヤベえ……これ結構キレてるパターンだ』と震えるように小さく呟いた司会の言葉を掻き消すように解説は

言葉を続けていく。

『戦闘能力があるのは当然として……戦闘に於いて最も必要なのは情報アドバンテージだ。これがなければ何も始まらない。』

何処に誰がいるのか、そして誰がどんな個性を使っているのか、これらを知る事で戦略を立てる事が出来る。第一関門に於いて引合は、障子を除き全ての生徒達を相手取った。第一関門のありとあらゆる場所から飛んでくる仮想ヴィラン、相対する者からすればこれ程恐ろしい事はない。

だが……引合は轟と殆ど正面張って戦っていた。他に構う余裕なんて殆どなかった筈だ。正面の轟に神経を使い、見てもいない近付いてくる存在へと仮想ヴィランを放つ。こんな事が出来るか？ 出来ると言いつ張れる馬鹿は今すぐオールマイトさんに弟子入りしてこい。お前が次代の平和の象徴だ』

話がそれたな、と解説は詫びながら言葉を続けていく。質問役である司会は既に聞き体勢に入っており、話す気配は微塵もない。

『あれだけの大暴れを見せた引合でも単独で全てを相手取るのは不可能だった。だからこそ、ここで障子が出てくる。無尽蔵に増やせる複製腕を視覚と聴覚に集中し集めた情報を纏めあげ引合へと伝えていく、場所毎に番号を決めたりしていたのかもしれない。障子は纏めあげた状況から仮想ヴィランを放つべき場所を引合へと伝え、引合はそれを行いながら轟と相対した』

『フウム……つまり、障子がいなければあの戦場は維持できなかった……と？』

司会の纏めの言葉に頷き解説は言葉を続けた。

『流石はヒーロー科と言うべきか、恐ろしい情報処理能力だ。サポート特化としてならこれ程頼れる存在はそうはいないぞ、分かったらヒーロー共はさっさと睡でもつけとけ。一部を除いて今年は使える奴らしかいないからな』

『……因みに、その一部は？』

『……俺に言わせるな』

ヒーロー達が座っている席がざわめき立つ。解説の言葉を予想だ

にしていなかったのだろうか、障子の有用さについて語り始めた。

「確かに……あの乱戦の中でそこまでのサポートが出来る存在なんてプロでもそうはいないぞ。サポートも出来れば、腕を増やして物理アタッカーも可能。強いな」

「器用万能タイプの個性か……誰と組んでも力を発揮出来る存在は何処でも輝ける。縁の下の力持ちタイプはどの事務所も欲しているし……こりや争奪戦になるかもしれないな」

「今年の1年は冗談抜きに選り取りみどりだなあ！ 取り敢えずウチは障子と引合に指名送るか！ あの二人はどんな場所でも動けるタイプみたいだし、何より第一関門の活躍がベネ！」

プロヒーロー達は雄英体育祭後に気に入った生徒に対して指名を送り、自分の事務所で職場体験を行わせる事が出来る。故に、プロヒーロー達にとってこの場はスカウト場そのもの。心底自分の事務所に欲しいと唸らせる生徒がいれば職場体験で猛アピールし、卒業後のサイドキック確保は良くある話だ。

『サポート云々に關してなら障子よりももつと使える人材がいるんだが……まあ、それは後で分かるだろう。マイク、取り敢えずスクリーン変えろ』

含みのある解説の言葉を聞き、司会が声をあげながらスクリーンの映像を変えた。

『OK！ それじゃアリスナー共！ お前らが気になって仕方ないであろう引合に映像を戻すぜ！ 何が映ってもビビるなよ！』

誰もが息を呑み次に映るであろう光景へと期待を高める。映像が一瞬だけ暗闇になり、移されるべき映像へと切り替わる。

『あー！ 待て待て待て引合！ 落ち着け！ 話せば分かる！』

『じゃかあしい！ 一撃必殺のガチガチ硬めの切島アターック！』

『ああああああああつ！』

そこには、鉄板の上で眼前の方向へと指を向け声を荒らげる引合と砲弾の如く宙を舞う切島の姿がそこにあった。

『甘いね！ ウチの鉄哲がそんなのに負ける訳がないだろ！』

『ウソだろおい！ 正気か物間アアツ！』

それに負けじと巨大化させた掌に鉄哲を包みあげた物間は、命乞いをする声を聞かず、放たれた切島へと放った。

ガオンツと音を立て両者は空中でぶつかり合う。切島はそのまま引合の手元へと戻り、落下する鉄哲を一人の少女がその巨大な両手でキャッチした。

『サンキュー拳藤！』

『どういたしました！ 良いから兎に角走って！』

両者が無事で済んだのを確認すると、地獄の底から鳴り響く、怨嗟の声を彷彿とさせるような呻き声を発する引合が次なる一撃の準備を始めた。

『シヤアアア……許さん……許さんぞオオオオ！ 第2波！ 上鳴ビ

リビリボンバー発射準備！』

『ウエエエエツ?! やめて！ 待って！ 俺はまだ死にた』――発射アアアアツ！』あああああああアツ！』

哀れにもB組目掛けて放たれた上鳴は、着弾点に到達する、その瞬間に身体を輝かせた。数える間もなくもう着弾する。誰もがそう確信した時、夥しい量の茨が上鳴を包み込んだ。

『皆さん！ 今の内に早く！』

『助かったよ塩崎！ 早く行こう！』

その声と同時に、茨の檻から抜け出した上鳴が宙を舞い引合の元へと戻る。そして、無力化された一撃を憤るかのように身体を震わせ引合は笑う。

『フヘツ。フヒヤヒヤヒヤヒヤ！ フベロブホバロゲハハハ！』

お前らの個性、これで大体理解したぞお！ 情報アドのせいでさつきは抜かれたんだから、今この時点でお前達の敗北は確定したア！ 爆豪！ 物間の個性は恐らく3つまでしかコピー出来ん！ そして今！ 奴の近くにいる奴らの個性では大した事は出来ん！ 柔らかくする奴も生きてる奴には発動出来ん！ 遠慮なく殺れイ！』

瞬間、遙か上空から落下する一人の少年の姿が映し出される。三白眼を更に鋭く尖らせ阿修羅の如き形相を見せつけると、着弾点である物間に向かって叫び声をあげた。

『——死ねエエツッ!』

『ボヨヨンボヨヨンっ! 山ほど出してるから任せた柳!』

『爆豪怖。お願い小大』

爆豪の眼下にボヨヨンの小さな文字がその下にいる物間の盾となるように立ち塞がった。

『ん』

その声と共に、小さなボヨヨンの文字達が巨大化する。突然の巨大化に距離感を掴み損ねた爆豪はボヨヨンの文字へとぶつかり、文字通りボヨヨンと宙を舞った。

『——ちっ!』

一撃を放ち損ねた爆豪は舌打ちと共に引合の元へと向かう。苛立ちを隠さず引合がいる場所へと辿り着いた爆豪の頭部がスパンツと心地よい音を立てて叩かれる。

『——良い度胸じゃねえか……ツッ! テメエ……あのクソ金髪より先に死ぬ覚悟は出来んだろうなあ!』

『チワワてめえ! あれだけやってそれとかばつつつかじゃねーの!? テメエが物間殺るって言うから特別に共同戦線張ってんだぞオラア!』

『アア!? 誰がチワワだ! ぶっ殺すぞオラア! テメエだって何も出来てねえだろうが死ね!』

互いに胸倉を掴み合いメンチを切り合う馬鹿二人、その姿にスタジアムにいる殆どの者達が絶句した。

冗談抜きに、まじで何やってんだコイツら……と。

『えーと……うん。Heyリスナー。只今、解説のイレイザーが席を立ったから少し解説抜きで行かせて貰うけど……許して?』

解説 イレイザーヘッド 一時脱落